

貴方だけの歌 ～ラブ
ライブ！ School idol IF
～

貫咲賢希

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

廃校阻止のために幼馴染に付き合ってスクールアイドルとなった少女、園田海未。

彼女はとある少年プロシンガーと出逢いを初めにプロのアイドルや未知の世界に触れて運命を変える。

——これは恋と夢の物語だ。

○新田色明（にった いろあ）というオリキャラが出ますが主人公はあくまで海未ちゃん。窮地を救うことはあってもメインは海未ちゃん。よってオリ主タグはつけません。なお、オリキャラはデレマスから新田美波の弟がいる設定を流用しています。

- デレマスはアニメのシンデレラプロジェクトが始まったあたり時期。
- アイカツは三期、いちご世代が高校二年。ことほのうみと同年代。

目次

1 話・勇気の Reason	1	8 話・葛藤	ハートラビリンス	167
2 話・交流 インパクト	26	9 話・挑戦	ステップ	199
3 話・奮闘するレディース	57	10 話・青春のハーモニー		222
4 話・籠鳥檻猿 Immaturing	79	11 話・遭遇 アンノウンマン		252
5 話・栄光なきファーストライブ	93	12 話・発生 It never rains but it pours		271
6 話・決意の Something new	120	13 話・彼女のフィーリング		292
7 話・日輪遭遇 I'll know	150	14 話・初会ガールと再会ガール		312
its meaning later.		15 話・躍進 シンデレラ		341
		16 話・跳躍には? A key is		
		that unexpected		

i r l .

361

17 話・氷を溶かすスターソング

378

18 話・過去を穿つストレートワード

396

19 話・不明ティアドロップ

413

20 話・責任ディザイア

439

21 話・二人のペールタイム

472

1話・勇気のReason

「こんなの無理ですっ！」

少女は先程まで眺めていた紙をぎゅつと握りつぶす。

ここは日本都内にある有名な観光地、秋葉原。

国内では渋谷、原宿、新宿——俗に言う三大副都心の方が有名だという声もあるが、秋葉原は電化製品が多く流通するため、多くの海外の人間が先進国の最新機器を求めてやってくる。

また、交通も利便性が高く、秋葉原駅に通っている山手線を使えば先の三大副都心に乗り換えなしで移動が可能だ。駅から浅草やスカイツリーに向かう直通バスもあり、観光と日常生活の両方で役立っていた。

更にアイドルやアニメのポップカルチャー文化が濃厚であるため、街中では到る場所に二次元、三次元のポスターや看板があり、それに連なる店やイベントも多い。

秋葉原を言葉で表現するなら、数多の人々が交差する色彩豊かな街と称えるべきか。

その音楽関係店、CDやDVDの販売区画にて、その少女は嘆いていた。

名を園田海未。そのだうみ

紺色のブレザーとチェック柄スカートの制服に身を包む花の女子高生。通う学校は国立音ノ木坂学院であり、学年は二年生である。

華奢な体に、腰まで伸ばした濡鳥ぬれがらすの黒髪。顔立ちは清楚で綺麗に整っており、慎ましい胸だが絵に描いたような美少女である。

本来、海未は落ち着いた佇まいが似合う大和撫子。本人も山奥のような静かな空気を好み、このような喧騒した場所には縁遠い人間である。

そんな彼女は先程から商品参考のために置いてある歌詞カードを、手にしては唸って握りつぶし、次のカードを手にとっては同じ事を繰り返していた。

このような奇行をしている原因は、彼女が通う国立音ノ木坂学院の問題から始まる。音ノ木坂学院は廃校の危機に直面していた。

少子化の影響で年々生徒数が減少。今年は一クラス分しか生徒が集まらなかった。

このままでは来年度の生徒募集は取止め。現生徒の卒業同時に廃校となる。

それを是としなかった海未の幼馴染たちが共にスクールアイドルをし、学校をアピールしないかと誘ってきたのだ。

スクールアイドル——プロのアイドルではなく、学生たちが個人で自由にアイドル活動、略してアイカツをする者たちだ。

昨今、人気や知名度は年々高くなっており、スクールアイドルの代表的存在である

A—R—I—S—Eは並のプロ以上に活躍している。

そのスクールアイドルを自分たちもやり、注目を浴びて音乃木坂に入学希望者を集めようと海未の幼馴染が提案した。

当初海未は甘くないと猛反対したが、紆余曲折の末、幼馴染たちと共にスクールアイドルをやることになる。

だが、やると言ってすぐできないのがスクールアイドル。

海未たちには足りないものが多かった。

まず、人数不足で正式な部活申請ができない。練習場所も他に空スペースがないため近所の神社と学校の屋上でやることになった。グループ名も決めれなかったから、生徒に募集をかけた。

そして、スクールアイドルとして歌う曲もないため——海未が作詞する羽目になる。

何故そのようになったかも説明すると、世間にアピールするならば既存曲ではなくオリジナルソングのほうが目立つ。そして、作詞ならば昔ポエムを綴った海未が適任だと言われたのだ。

本人にとって黒歴史（と言いつつ密かにまだ書き続けている）持ち出され、断固拒否した抵抗空しく、彼女は作詞作業を引き受けることになった。

幸い、作曲の方はスクールアイドルを提案した幼馴染に心当たりがあるらしいので、

海未は作詞をするだけでいい。

もつとも、簡単な話ではないのはご覧の通りだ。

「う、くう——」

苦悶の顔で海未がまた歌詞カードを眺めている。

作詞を承諾した後日の放課後、彼女は参考のため秋葉原に一人で赴いた。

様々な物と人が溢れる街、秋葉原。更にアイドル文化も強いため、彼女が求める店はすぐに見つかる。

やってきたのはアイドル専門店。何処もかしこもアイドルだから。店頭PVではプロのアイドルだけではなくスクールアイドルも流れていた。

当然、店内に並ぶCDは全てアイドルソング。

その幾つかを歌詞カードを見ながら視聴した海未の顔は——真っ赤だった。

「こんなの私には書けませんし、歌えません！」

アイドルソングの大半はラブソング。恋や愛を歌った曲が圧倒的に多い。

程度に差はあれ、未だ恋愛経験がゼロの海未にこのような曲は過酷だった。

他には愛らしく弾けて明るい元気な曲もあるが、これも海未には難しい。

彼女と共にスクールアイドルをする幼馴染たちなら得意そうだが、自分も歌うとなると苦虫を噛んだ気分になる。

そもそも、海未は恥かしがり屋なのだ。人前で歌うこと考えると逃げ出したい気分になる。最初に海未がスクールアイドルをやりたくないと思つた一番の理由もそれだつた。

もつとも、嫌だと言いつつ、可愛いものに憧れてるゆえ、そんな自分を妄想してしまふ娘でもある。

現に今も――。

星の輝きのようなスポットライト。

海未は笑顔を振りまきながら、フリルのスカートでひらりと舞つて、ウイंकを観客に向ける。

ずっとキスしてほしい3

貴方が大好きなの♡ その気持ちをか・ん・じ・て☆

だから、このまま抱きしめて！ 朝がやって来ても、ずっと！

――と妄想。

「きゃあああ！ 恥かしい！ 恥かしい！ 恥かしい！」

『!?!』

ゴロゴロと床にのたうち回る海未。

流石にここまですると周囲からの視線は逃れられない。

「はっ!? し、失礼しました!」

醜態を晒したことに気づいた海未は脱兎のごとく店内を出るのである。

▼ 「何をしているのでしょうか、私は……」

店から出て落ち着きを取り戻した海未は、人気の少ない場所で落ち込んでいる。

そこは目の前には川。中にはベンチと木しかない小さな公園であり、今は海未以外誰もいない。賑わいの絶えない秋葉原だが、人通りが多い場所から外ればこういった場所もあるのだ。

『みんな応援ありがとう!』

綺麗な声が聞こえた。

海未は顔を上げると、少し先にある大型ビルのスクリーンに見覚えのある少女が映っていた。

赤いリボンがトレードマーク。ふわふわとした髪を漂わせ、一つ一つの仕草が可憐。そこにいるだけで誰もが視線を奪われる偶像の象徴。

彼女こそ現在アイドルランキングトップ《ほしみや星宮いちご》。芸能界に疎い海未でもニュースや雑誌で知っている。あの映像はライブ中継でもしているのだろう。

ああ、なんて眩しいのだろうか……。

大観衆の前で飛びつきりの笑顔を見せるプロのアイドル。その頂点。スクールアイドルすらまだ成り切れていない海未には何処までも遠い存在である。

海未は以前から星宮いちごの愛らしさに憧れていた。

作り物の笑顔ではなく、素直な微笑みに敬意を抱く。彼女は自分と同じ年なのだが、別世界の住人過ぎて実感が湧かない。

(いけませんね……)

そこで海未を思考を振り払うよう首を横に振った。

誰かを感心するもの結構だが、それで自分を疎かにしてはいけないうことを彼女は既に知っている。

己が今やるべきことはどうすれば星宮いちごのようになれるかではなく、自分たちがアイカツするための歌を書き上げること。

気持ちを切り替えることに成功した海未は、思い立ったら吉日の精神で鞆から紙とペンを取り出しその場で作詞を始めた。

とにかく思ったことを書き下ろす。

先程の店で聴いた曲や耳覚えのあるフレーズ。あるいは今まで読んだことある本の言葉をパズルのように繋ぎ合わせた。整合性は後回しで思うが仮ペンを走らせた。

一通り書いてみた後、海未は己が綴った言葉を眺める。

(これ歌詞なのでしょいか? いつも気まぐれ書いた詩とあまり変わりないような)

少しの間だけ悩んだが初めからできたら苦勞はしないと割り切り、次なる言葉を書き綴るため新しい紙取り出そうとした。

そこで唐突に一陣の風が吹く。

「きゃあつ——」

海未が小さい悲鳴を上げるくらいには強い風。

彼女は長い髪が乱れぬように抑えてると、その指先から先程書き綴った紙が吹き飛ばぶ。

「あつ!?!」

ひらひらと風に攫われた紙。あのままでは公園の目の前にある川に落ちてしまうと、慌てて立ち上がり摘み取ろうと走りかけた、その時である。

空から一人の人間が地面に降り立つ。

少なくとも海未にはそう見えた。

その者は何故か公園の木から抜け出すようにして現れたのだが、彼女の瞳には突然上から人間が落ちてきたにしか映らなかつたのだ。

少年と言つてもいい年頃の青年。木の葉が舞い落ちる中、彼は海未が手放してしまつた紙を素早く掴み取る。

「ほれ。これオタクのдарろ？」

超然とした笑みを浮かべながら彼は海未に紙を差し出す。

「あ、貴方、何処から来たのですか？」

ここで受け取つていれば話が終つていたのだが、海未は怪訝そうに彼を窺う。

だが無理もない。突然、空から人間が降り立てば怪しむのは当然だろう。

「あん？ ……ああ、そういうことね。その木で隠れてたらアンタの荷物が風で飛ぶのを見かけてね。思わず体が動いちまったわけ。紳士的な行動だろ？」

海未の様子を察した彼はニヒルな微笑みで説明した。

見れば彼は端正な顔立ちである。身長も海未より頭一個分ほど高く、体つきも引き締まつている。彼の微笑みを見れば大抵の女性は頬を赤くしそうだが、海未は前状況もあつて呆氣に取られるだけである。

微妙な顔で啞然としたままの海未。それを見かねてた彼がとうとう顰めた顔を浮かべた。

「なんだよ。いきなり現れて驚かせたとは思うけど、そろそろ礼くらいは言つてくれてもいいんじゃないか？」

「うっ。すみません」

海未も失礼な態度だと気づいたため謝罪する。

しかし、次に海未が礼を言う前に彼はある行動に移っていた。

「だいたい何の紙だよ、これ？ 作文？ ときめきを隠せないこの気持ち。でも気づいて欲しい乙女心なの——」

「ひゃあああ!?! な、なにを勝手に読み上げてるのですか!?!」

奪い取ろうとした海未がったが、彼はまっすぐ突っ込んで来た彼女をひらりと回避して続きを読む。

「気づいている？ 知っている？ 気づかないふりなの？ でも解つていても暴かないで複雑な私の心——。これはこれは随分と甘い言葉たちだな。自作ポエム？」

「貴方には関係ないことです！ 返してください！」

「見られて恥かしいなら書かなければ良かっただろうに……」

「そんなの私の勝手でしょう！」

呆れた様子の彼に海未は我慢の限界が達し、羞恥よりも怒りを露にする。

「人のものを不躰に読むなんて最低です！ いい加減、返しなさい！」

「はいはい。ちよつとした役得と思つたが、善なる行動は無償という教えもあつたな。悪かつたよ。返すから落ち着けて」

溜息交じりで彼はようやく紙を海未に手渡そうとした。

だが、事態は再び急転する。

「いたっ！」

数十メートル離れた場所にて現れた一人の少女が、こちらを指差しながら大きく叫んだ。

その後方には別の少女たちが次々とやって来る。

「げえっ!!」

それを見た彼は信じられなさそうに顔を歪めた。

「しつこ過ぎだろ！ 完全にやり過ぎごしたと思つたのに執念やばくないか!」

「犯罪でもしたのですか？ それで木に隠れたのですか？ 警察でも呼びますか?」

「アンタはアンタで物騒なこと言ってるな！ むしろ呼んで欲しいのはコツチのほうだ

！ ああ、もう！ いつから日本の女性には慎みがなくなつたんだよ!」

狼狽する様子を見た海未が冷ややかな言葉を投げたので、彼は益々声を荒げて叫ぶ。

「あつ！ こつちにいたよ!」

その声に反応し、また別方向から違う集団も現れる。

「新手かよ。人気者は辛いね!」

その言葉を最後に残し、彼は迅速に走り去った。

「待つてください!」

「少しだけでいいからお話を!」

「サインだけ！ サインだけいいですからください！」

逃げ出した彼を追い、新たに現れた少女たちは海未の前を通り過ぎていく。

しばらくすると遠ざかっていく足音が聞こえなくなり、海未は疲れを表すように息を吐き捨てた。

「なんだったのですか、いったい……」

状況から察するに彼は芸能人か何かで、追っていた彼女たちはそのファンだろうか。

海未は見覚えがないが、本当に芸能人か何かならば大層な人気である。

もつとも、都内だけあって芸能人が出歩いているのは不思議ではないが、怒濤の展開で海未はかなり気疲れをしていた。

もう今日は家に帰ろうかと思つた矢先、海未はあることに気づく。

「あつ！ わ、私の歌詞（仮）をまだ返してもらつてません！」

彼女はすぐに荷物も纏めて、彼らが去っていた方角に向かって自分も走り出した。

川に落ちたのなら諦められるが、あの文章が他人の手中にあると思うと血の気が引く。

ゴミとして処理されるかもしれないが、心配性である海未は万が一を恐れて後を追つた。

——だが、出足が遅ければ見つけるのが困難であるのは当然である。

しばらく走っても、彼を追った少女たちの背中すら見つからない。

そもそも、海未の目的である彼は少女たちとは比べ物にもならないくらいに速度だった。

身体能力に多少自信のある海未だが、同時にスタートしてもアチラの方が速くゴールに着くだろう。

更にはこの街秋葉原はとにかく人が多い。そこからあまり知らない人間を追うのとはとも困難だ。むしろ無謀と言ってもよいレベルである。

もはや諦めかけたその時、海未一際騒がしい場所へ目が奪われた。

「謝って済むなら警察いらなくて言葉を知らないのか？」

「そんな……」

「お前たちがぶつかってきたんだぜ？ 悪いと思うなら大人しく言うこと聞けよ！」

何やら複数の男たちが三人の少女を取り囲んでいた。

少女たちの顔には見覚えがあり、あの彼を追っていた一部だと海未は察する。

状況を考えると急いでいた彼女たちが彼らにぶつかったようだが、どうも過剰な難癖を突きつけられているようだ。

周りの人間は見てみぬ振りがほとんど。面倒ごとには誰も嫌うことだ。既に警察へ連絡した者はいたのだが、彼らが到着するまでに問題が起きない保証はない。

「お止めなさい」

颯爽と海未は男たちと少女たちの間に立ちほだかった。

悩む素振りすら見せなかつた行動。

彼女は誠実であり清廉で正義感のある乙女なのだ。誰かが困っていたら見過ごす精神構造をしていない。

「なんだてめえは!？」

「通りすがりの者です。往來の場で見つとも無いですよ。彼女たちが最初に迷惑かけたとしても、すぐに許すのが男の度量ではないのですか？」

「お前には関係ないだろ？ それともお前が変わりに相手してくれるのか？」

下品な笑いを浮かべる男たちを海未は内心で陋劣だと吐き捨てる。

自身の美貌や友人たちに寄つて来るため、この手の類は初めてではない。

その度に軽くあしらつてきたのだが、さて今回はどう対処するべきか。

「黙つてないで何とか言えよ」

男の一人が海未の腕を掴みかかろうとした。

彼女はそのまま向かつてくる腕を逆に掴み捻り上げようとした、が。

「やれやれ、面倒なことになつてるな。今日は厄日かよ」

その腕は突然現れた新手によつて振り払われた。

一瞬の内で目の前に現れた大きな背中に驚く海未だったが、声で誰なのか把握した。

「ようやくタクシー捕まえたと思つたら男が女を虐めてるしよお。それが自分を追いかけて回した相手とはいえ、ファンなら見捨てるわけにはいかないっしょ」

海未と少女たちが追いかけていた少年は難儀な顔をしながら溜息を吐く。

「新田さん！」

キヤー、と黄色い叫び声を上げたのは海未が庇っていた少女たちである。

先程まで不安そうにしていたのは嘘のように歓喜に満ちた顔で瞳を輝かせていた。

「誰ですか？」

「貴方知らないの？」

思わず尋ねた海未に対し少女たちは驚いた。

「新田色明さん！にったいろあ 超有名人じゃないの!？」

「はあ、そうなのですか……。生憎と芸能には疎いもので」

「——おいおい、芸能人が喧嘩しても大丈夫なのかよ？」

現れた青年——新田色明に対して男たちは最初驚いたものの強気な姿勢で凄む。どうやら、この場で彼を知らないのは海未だけのようだ。

「喧嘩したらスキヤンダルになるんじゃないか？」

「スキヤンダルが怖くて女を守るかよ。師匠の言葉で例えるなら『小さい物事を気に

して動けない男は根性なしと一緒だ』ってどこかね」

威勢の良い言葉にまたも少女たちが嬉しそうに叫び、逆に男たちは面白くなさそうに顔を歪めた。

「……随分格好をつけるじゃないか。調子に乗るなよ！」

男の一人が徐に拳を放ったが、色明はそれを涼しく掌で受け止めた。

「そりゃあ調子に乗るだろ。逃え向き小悪党だ。ファンサービスには打って付けだねえ」

「ぐあっ!?!」

拳を止められた男が

「拳を通して解る。今まで弱いもの虐めしかしてこなかっただろ?」

「な、なんだと?」

「覚えとけよ。殴るなら殴り返されても文句は言えねえぜ?」

ぱつと、男の拳を手放した。

瞬時、色明が挙動する。

空気を切り裂いた。目の間の男に拳を放ち、続けて周りの男たちにも拳と蹴りを眼前に振るい、彼らは揃いも揃って地べたに尻餅をつく。

「どうやら小悪党ですらなかつたな。全員寸止めで腰抜かすとかダサ過ぎだろ」

『おおおー！』

感動的な声が上がる中、海未は冷静に色明の動きを分析していた。

海未には武道の心得があり、そんな彼女の目線から見ると彼の活躍は単なる喧嘩なれしたものではなかった。切れのある動作で全員寸前で止めで戦意喪失させる。

「もしかして、彼は何かしらの格闘家ですか？」

「違うわよ。本当に貴方、新田さんのことを知らないのね！」

海未に眩きに一人の少女が反応した。

真つ先に彼女達を助けたのは海未なのだが、そのことを忘れていいのか睥睨した目を向けている。

「歌手よ、歌手！ 346プロダクション所属の若き有名シンガーソングライター！」

それがあの新田色明さんよ！」

「騒ぎを聞きつけてやって来たがコレは？」

そこでようやく警察官が数人現場へ駆けつけて来た。

警察官は地面に腰を這いづくばった複数の男たちを見た後、彼らが怯えた視線を向けている色明に目を向ける。

「君か。騒ぎを起こしたのは？」

「ええ、そうなるわけ？」

「待つてください！ この人は其処の人たちから私たち助けてくれただけです！」

色明がげんなりした様に顔を引き攣らせて、少女たちが悲痛な声を上げた。

「ふむ……。とにかく騒ぎを起こしたのは事実だな。署まで同行をしてくれ」

「ええと、悪いけど今からリハーサルがあるんで簡便してくれませんか？」

「そうです！ この人は今日ライブあるんですから、そんな時間なんて——」

「こつちも仕事なんだ。悪いが公務を優先させて貰うよ」

「……何が、仕事ですか」

それまで成り行きを眺めていた海未がぼそりと呟く。

「うん？ なんだね、き——」

警察の言葉は海未の瞳を見たことで止まった。

氷のように冷たい視線。只事ではない空気を周囲も感じ取り、色明以外の人間が思わず息を呑んだ。

「仕事というならば彼が彼女たちを助ける前にやって来て下さい。それが出来ないなら少しは融通を効かしたらどうですか？」

「いや、そんな都合良く——」

「それに仕事というなら逃げようとする彼らも取り押えたらどうなんです？」

『!?』

海未の言葉を聞いて警察たちは離脱しようとした男達に気づき、慌てて逃げ出そうとした彼らを急いで捕まえようとする。

「貴女たちもです」

『ひゃあ!』

抵抗をする男たちを大人しくさせようと警察が勤しむ中、海未は少女たちを睨んだ。

ぎろりと鋭い眼光に悲鳴を上げられたが、構わず海未は口舌を紡いだ。

「彼が忙しい身と知っているなら追いかけて回すのは迷惑だと解らないのですか? そもそも、貴女たちが慎みを持っていればこのような事態になりませんでした。反省しなさい」

『ごめんなさい……』

説教に何も言い返せず揃って謝る少女たち。海未は呆れながら彼女達を眺めた後、傍に神妙な顔をしていた色明に目を向ける。

すると彼女は冷たい瞳を溶かし、柔らかに微笑んだ。

「急いでいるのでしょうか? 後は私が何とかしますから早く行つたらどうですか?」

「いいのか? 時間がないから悪いが遠慮はしないぜ?」

「かまいません。私も貴女に助けられた身ですから、そのお礼のようなものです」

「そっか。ならば後は頼んだぞ」

そう言つて彼はその場を立ち去ろうとしたが、何か思い出したように海未に振り返つて懐から一枚の小さな紙を彼女に差し出した。

「? これは何?」

「これからやるチケットだ。営業用に常備してあるんだよ」

「何故、私に?」

首をかき上げて不思議そうにする海未に色明は不敵な笑みを見せた。

「俺を知らないようだからな。ちよつとプライドが傷ついたんで、アンタの心の中に存在を刻もうと思つたわけ。暇なら見に来てくれよ」

▼

結局、海未は警察からの事情徴収が終わつた後、貰つたチケットを片手にライブに向かつた。

理由の一つは作詞の参考になるかもしれないと考えたからだ。彼女が作りたい歌はアイドルソングだが、多少なりとも勉強になるかもしれない。

もう一つの理由は、折角誘つてもらつた手前無下にするのは気が引けるからである。

開始直前だったが、なんとか間に合つた。

暗い会場の中、今か今かと待ち侘びる観客に紛れながら、海未は小さく呟いた。

「貴方——とても立派な人なんですわね」

ワア———！！

会場がステージライトが照らされると、刹那の時間で万雷の歓声が響き渡る。



包み込むような歌声。ハスキーボイスで奏でられた曲と共に、彼はステージに顕れた。

新田色明。346プロ所属のシンガーソングライターであり、デビューは彼が中学一年生の頃。CDを出せばオリコンの上位で、去年はシングル・アルバム共に年間ランキング一位を記録。優れた容姿に抜群な歌唱力。紅白出場経験もある実力派アーティスト。これらは全て、とある紹介ページで知ったものだ。

他にも様々な業績を上げているのだが、今の海未には関係なかった。魅入られる。

こんな気分になったのは何時だろう。

初めて、母の舞を見たときか？

幼馴染と共に見た、あの大きな夕暮れか？

どれも鮮明な記憶として、海未の心の中に焼きついている。

しかし、それはどれも穏やかなものであり、こんなにも身が震えていたのだろうか？
初めてライブ経験故の興奮か。想像以上の盛り上がりで驚いているのか。

——解っていることは、海未は感動していた。

(すげー……………!!)

響き渡る言葉が素敵だった。

曲と共に流れる歌声が綺麗だった。

いつの間にか曲が終わり、ステージ上で色明が挨拶をしているが、最初の歌に絆されたままの海未の頭にはあまり入ってこない。

何か喋っているなと思った矢先に、次の曲。

初めはポップな曲だったが、今度は激しいロック。

最初とは全然曲種が違うが、これも海未は気に入った。

爽快でテンポが良く、聴いてとても高揚する。

次の曲はテクノ調な面白い曲。次は疾走感がある奮い立つような熱い歌。

流れるように色んな曲が続々と奏でられていき、明るく元気になる歌が終わった後に再びトークを挟み、急に静かな間が空くとピアノの音が響いた。

ゆっくりとした、ラブソングのバラード……………。

切ない思いを語りかけた歌は、胸が苦しくなる。

会場には啜り泣きがぼつぼつと聞こえ、海未も瞳が潤んでしまった。だが、次の曲で憂鬱な空気が吹き飛ぶ。

周りの観客がペンライトで盛り上がる中、海未は両手を胸の前で握り合っていた。

ああ、この曲は好きだ。

辛いくとも諦めず、前を進む激励の言葉に、心が躍動する。

絶対に忘れられない歌になると海未は確信した。

次はポップで意欲的な歌が始まり、徐々にテンションを上げながら、海未も聞き覚えのある有名な曲が流れる。この曲は彼が歌っていたのかと思っただけの曲の終盤だった。

これでライブが終了と想いきや、会場から当然のようにアンコールが流れた。

二分以上アンコールが響いたところで再びステージに色明が登場する。

仕方ないと言いつつ彼は再び熱唱して、今度こそライブは幕を下ろした。

▼

ライブの熱が冷めない観客たちと共に退場しながら、海未もまだ興奮している。

自分と同じ年の人間がこんなにも人を魅了させるのかと。

そんな人間と偶然街に出会い、本人から直接チケットを貰ったと言ったところで何人の人間が信じるだろうか？

仮にこの会場の人間が信じれば、皆が羨望の念を海末に向けてくるだろう。更に学んだこともあった。

(いろいろな曲を歌ってましたね)

歌い手の持ち味はありつつも、多種多様な曲を唄っていた。

夢の詩。友の唄。愛の歌。

同じような歌ばかりでは聴く人間も飽きてしまうのだろうが、一人だけでこれほど種類豊富な曲を歌い切れるとは驚きだ。

色彩豊かな音楽に海末の創作意欲が刺激された。

(なら、別に私も拘る必要はないかもしれない)

海末は歌詞作りにおいてアイドルらしいラブソングを作ろうとしていた。

だが考えを改める。色明が様々な曲を歌ったようにアイドルもラブソング多いだけで、そればかりではない。

ならば慣れぬものよりも自分が感じたものを綴ってみよう。

歌詞作りに乗気ではなかった海末であったが、このライブに参加したことで火が点いた。

(あの人には感謝しないといけませんね……)

海末は自分をここに誘ってくれた相手を頭の中で浮かべる。

新田色明。海未と彼が街角で出会ったのは本当に偶然。

二人は住む世界が違うので、もう直接相まみえる機会など訪れないはずだ。けれどせめて、手紙ぐらい出してみようと思う。

多くのファンレターに紛れて、見向きもされないかもしれない。

しかし、伝える気持ちが大切だと海未は思った。

歌詞の次は、彼にどんな言葉を贈るかも考えなければ……。

海未は、そう想っていたのだ。

▼ それは翌日の講堂で行われた朝礼のことである。

『本日から音ノ木坂に見本生として通うことになった新田色明です。皆様よろしく』
「は？」

開いた口が閉じれない海未。

その日より、プロの男性アーティストが女子高に通うことになった。

2話・交流 インパクト

国立音乃木坂学園にプロのシンガーソングライター新田色明が通う。

伝統ある女子高に、あろうことか男子がだ。

突然の出来事に、講堂に集まった生徒たちが戸惑うのも無理がないだろう。

彼が言った見本生という聞きなれない言葉はなんなのかと益々混乱していた。

『はいはい。皆様お静かに〜』

啾然とする構内で、緩やかな声が響く。

若々しい女性だった。彼女は音乃木坂の理事長である。

『皆さんの驚きは当然だと思います。ですからまずは見本生というものから説明しますね』

ざわ、と再びざわめく生徒たち。構わず理事長は話しを進める。

『昨今、女子高生上がりの人たちが社会に出る際、異性との触れ合いが少なかつたせいで社会に馴染めない問題が多く発生しています。』

実際問題、この世に男女が存在する以上、異性との接触は最低限あります。だからと

いって安易に共学化はしません。男女間のトラブルを避けるため女子高を選んだ方もいるでしょう』

異性間の問題。主な例えならば男女差別。過激なものといえば、力に劣る女子へ一歩的な暴行を男子が行う。そんな問題は小さい年頃からあり、成長するとつれてエスカレートする。

それを危惧した本人、または親が安全為に女子高に通わせるのは在り来たりな理由である。

『しかしその結果、社会に馴染めない方が増えるのも事実。よって、市政からの要請により最低限異性との交遊に慣れるため、我が学園は男子生徒を迎えることになりました。

すなわち、見本生とは貴女たちが異性に慣れるための文字通り見本。結果次第では、学校が存続した場合でもこの制度は残ると考えてください。ちなみに保護者の方には既に了承を得ています』

不思議な制度ではあるが、理に適っている内容でもあるので反論の声は今のところ聞こえない。

しかし、何故、この人選なのか？

見本生の男子生徒、新田色明はテレビにも出ている超芸能人。

彼が選ばれたのは偶然なのか？

その理由も理事長は続けて説明する。

『さて、次に見本生として何故、新田君なのかという疑問ですね。』

皆様のご察しのとおり、彼は芸能人。有名な歌手です。それが大きな理由の一つですね。

仮に彼が我が校で問題を起こした場合、社会的責任は普通の人に比べるまでもありません』

普通の未成年が煙草を吸ったり飲酒をしようが嚴重注意で済む話でも、芸能人の未成年が同じことをした場合の問題追及は非常に重い。

最悪で仕事を失い芸能生活が無くなる。芸能界を引退後も一度テレビの世界に出た以上、その問題は今後の人生にずっと残る。

それを承知の上で後ろ暗いことに手を染める芸能人も後を絶たないが、多少なりとも堅実な者ならば芸能人ゆえ普通の人間以上に気をつけてるものだ。

そういった意味で歌手の新田色明は異性間の問題を起こす対象としては比較的になんか全だと言えるだろう。

『別に見本生の条件が芸能人だかという訳ではありませんが、そういった事情があるので新田君は火遊びをしたらどんなお仕置きが待っているのか十分理解していると思います』

一瞬、理事長の横にいる色明が心外そうにしていたが、彼女は素知らぬ様子で話しを続ける。

『新田君とは事前に面談をし、人間性、生活面に問題なしと判断した為、彼を見本生として迎えることになりました。突然のことで思うことは多いでしょうが皆様、仲良くしてくださいね』



「凄いことだよね！　うちにプロの歌手が通うことになるなんて！」

全校集会が終えた教室にて、海未の席から右後ろ、窓際に座る女子生徒が面白そうに話す。

「私は大変驚きました。しかし、これでは女子高とはもはや呼べませんね。共学とも呼べませんが」

「ははは、そうだね」

愉快そうにする少女と違い憂鬱そうに溜息を零す海未。

「ところで、こころはこの事は知っていましたか？」

海未は自分の後ろに座る少女に声をかけると、その少女は首を横に振った。

「ううん。私もお母さんから何も聞いてないよ」

溶けそうなくらい甘い声。声の主の名前は南ことり。

ふわふわとした印象であり、海末同様腰まである長い髪は独特な結び方をしたサイドテールになっている。おっとりとした性質で、見るからに愛らしい少女。彼女はこの理事長の娘だ。

海末とつて大切な幼馴染である彼女も今朝の一件は知らされてなかったようである。

以前も、廃校の情報を知ることが知るのは他の生徒と同じタイミングだったので、親子でも守秘義務はちゃんと守っているようだ。

「けど、勿体無いよね。あの人のこと色んな人に教えてあげれば、入学希望者も増えると思うのに」

そうやって、残念そうにしてるのは最初はこの話題を出した少女。

名前は高坂穂乃果。

笑顔がとても眩しく、見て通り裏表がない天真爛漫な少女。彼女もサイドテールだが、こちらは普通に纏めている。明るい声は内面の良さがよく現れている。

彼女も海末の大切な幼馴染の一人であり、確かに穂乃果の言葉通り、新田色明が通う高校と唄えば入学希望者が増えるかもしれないが、海末はそれが間違いだと彼女に指摘する。

「穂乃果、別に彼は音乃木坂に生徒を集めるために呼ばれたわけではありません。なに

より、あまり意味がありませんよ」

「え？ どうして？」

「彼は私たちと同じ年、つまり二年生。次の新入生が彼と会えるのは、彼が三年になってからのたつた一年間。学年も違う上に、仕事で授業を抜けることもあるでしょうね」

すなわち、と海未は言葉が続ける。

「新入生が接触する機会は少ない。人生の大事な高校入学を、会えるかも解らない芸能人のために選択をするのは賢くありません。少しは効果があるかもしれませんが期待するのは駄目です」

「んん？ つまり、廃校問題であの芸能人くんに頼むことはできない、ってことだね」

海未の長い解説を半分も理解してない穂乃果はそう言った後で、おもむろにガッツポーズをする。

「ならやつぱり、私たちがスクールアイドルをして、音乃木坂に注目を集めるしかないね！」

そう言うって意気込む穂乃果を見て、海未は困った顔になりつつも、口では微笑んでいた。

——この高坂穂乃果こそが廃校を阻止するため、スクールアイドルを提案した張本人。

彼女と海未、そしてことりを合わせた三人で《μ^{ミュー}s^ズ》という名のアイドルグループを結成した。名前は生徒たちに募集した結果、唯一匿名で届けられたものである。

穂乃果という少女は猪突猛進の塊であり思い立ったからすぐ行動する娘だ。

その後で彼女に足りなかつた考えを補うのが海未の役目である。

役目というよりは尻拭いだが、いつも文句を言いつつも、結局は見捨てることをしなのが彼女である。穂乃果自身も行動したら努力は惜しまず、海未が考えたトレーニングを筋肉痛になりも毎日ことりと共にこなしている。

正直、途中で挫折するかもと思つていた海未からすれば、その情熱は尊敬の粹までに達しているが、褒めるとすぐに調子に乗るので簡単に口にはしない。

「やる気は結構ですが、そろそろ静かにしたほうがいいですよ。そろそろ一時間目が始まります」

「うん、そうだね」

「ところで、海未ちゃん」

ことりが同意したのにも関わらず、穂乃果は話を止めない。

人の話を聞いてたのかと問いただしい海未だったが、仕方なしに対応をする。

「なんですか、穂乃果。もうすぐ授業ですよ」

「芸能人くんって、うちのクラスになるかな?」

やはり、その話題かと海未は半ば呆れつつ、周りの生徒たちも授業が始まる間際にまだその話題をひそひそと話しているので、仕方ないかと諦念する。

新田色明は海未たちと同じ年であるので、すなわち二年生で通うことになる。

二年生のクラスは二つしかない。

よって、新田色明が海未たちのクラスになる確率は五分五分だ。

「そんなこと、私を知るわけないじゃないですか」

「じゃあ、ことりちゃん!」

「私も解らないかな」

「だいたい、そんなことは授業が始まれば解ることです。少しは落ち着きなさい」

「そりゃあ、そうだけどさあ……」

ことりが申し訳なさそうになると、穂乃果はつまらなさそうに口をすぼめた。

「穂乃果ちゃんは新田くんに興味あるの?」

「いや、サインでも貰ったら高く売れるかなって」

「現金ですねえ……。そういうものは転売防止のために、名前入りにするらしいですよ」

「おお、海未ちゃん詳しい! もしかして、アイドルとしての自覚が芽生えたとか!」

「違います。何故そうなるのですか……」

穂乃果の勝手な思い込みに海未が呆れていると、教室の扉ががらりと開いた。

入ってきたのは見慣れた大人の女性——このクラスの担任の先生のみである。それを見て落胆する生徒の数は少なくない。

「おいおい、がっかり顔の奴が多いな。何だ、お前ら。見本生のファンだったのか？」
青いジャージ姿の担任である山田博子にはやりと笑った。

「そんな奴らに朗報だ。新田、入って来い」

『キヤア——！！』

新田色明が入室すると同時に黄色い声援が響き渡る。

無理もないだろう。芸能人というのに差し引いても、彼の見た目はかなり良い。

整った顔に高身長。女子高に通ったものの、異性の出逢いが欲しくなってきた青春真つ盛りな乙女にとって、色明の存在はアイドルそのものだ。

「お前ら五月蠅い！ 隣のクラスは授業中なんだから、静かにしろ！」

と、担任が注意するが、その実、隣のクラスは壁越しから聞こえてくる喜びの声に、自分たちは当たりを引けなかったと落胆している。

そんなことだとお構いなしに、クラスの中のテンションはどんどんアップする。

「黙らないと、全員反省文書させるぞ？」

慌しいままの教室に苛立った担任がそう呟くと、急に静まり返った。誰しも面倒ごとは避けたいものなので、利口な行動である。

「——こっほん。では、授業を始める前に軽く自己紹介をしてもらおう。新田」
「はっ」

担任に促され、新田色明は一步前に入る。

数々の視線を目の当たりしても、動揺した様子は一切見当たらない。流石、単独でドーム公演とした経験があるプロのアーティストだ。

「改めて自己紹介を。この度、見本生として通うことになりました新田色明です。僕の存在に色々と考える方は多いと思いますが、どうかよろしくお願いします。出来ない点があれば、ご指導を」

丁寧な物腰で挨拶をする色明だったが、次の瞬間には態度を崩した自然体で周りを見渡す。

「後は、そうだな。力仕事があつたら言ってくれ。男の俺が解りやすく役立つことなんざ、そんなもんだからな。無駄にこき使われるのは御免だが、時の場合が合えば可能な限り力になるぜ」

『ふわあ……』

最後の砕けた言葉に、数人の女子が頬を赤らめる。

もしかしたら、既に恋に落ちたものがあるかもしれない。

そして、海未はというと——顔を引き攣らないようにと堪え、堪え切れず変な顔になっていた。

(まるで漫画にでも出てきそうな子だよね、つて海未ちゃん変な顔したけどどうしたの!?)

「ここそと隣の席のことに耳打ちをしよとした穂乃果だったが、海未の様子に気付いて驚く。

(失礼な。変な顔なんてしません。というか、目立ちますよ。しっかりと前を向きなさい)

そんな穂乃果に言葉こそは平静な海未だったが、顔は相変わらず引き攣っていた。

穂乃果はそのような海未の様子を不思議そうにしたが、すぐ自分で納得する。

(なるほど! 真面目な海未ちゃんはあるな歯が浮きそうな台詞が苦手なんだね!)

穂乃果の推理は半分正解だった。

確かに、あのような台詞を言われるのは苦手だが、自分だけに言われてなければ、そこまで意識するものでもない。

海未が顔を引き攣っていたのは、色明が教室に入ってきてからだ。

だつてそうだろう。

先日街端で出会った少年がプロのアーティストで、そのライブに本人から直接招待さ

れ、その少年が数日後同じ学校に通い、自分の同じクラスになるのだ。

そんな偶然、穂乃果の言葉を借りるならば、まさに漫画にでも出てきそうな状況である。

しかも、だ。

向こうもこの状況に気づいてる。

色明は教室に入った途端、海未の存在に気付いていた。

顔を引き攣るほど驚いている海未とは違い、色明は彼女と視線があつた突端、嗤っていた。

その顔はどういう意味ですか!? と怒鳴りたかったが、叫んでしまえば流石に面倒なことになるのを解っていたため、海未は渦巻く感情を堪えるしかなかったのである。

「さてと、次の授業の先生を待たせてるし、質問は休憩時間にしとけよ。新田、好きな席に座りな」

担任の山田の言葉で色明は教室を見渡す。

この学校の生徒数が少ないだけあって、一クラスの総数も少なく、人気のある窓際や、海未の席の列は満席だが、空いている席は疎らにある。生徒の数と席を合わせない理由は、いざ新しく席が何かの理由で欲しいときに準備するのが面倒だからだ。

なお、空席は海未の隣にもある。

それに気付いた、海未は嫌な予感がした。

「じゃあ、適当に。どれにしようかな——」

と、次々と空席に指差していく色明。明らかに悪戯しろような笑みに、海未は冷や汗を浮かべた。

彼が隣に来て欲しい少女たちは自分の隣にと祈り、何故自分の近辺は何処も埋まってるのだと嘆く中、ぴたりと色明の指が止まる。

それは、海未の予感的中した瞬間でもあった。

「——神様の言うとおり、と。あそこになります」

「解った。それじゃあ、もしも解らないことがあったら何時でも聞いてこい。あと、お前ら！ 新田に夢中になって、授業をおろそかにするなよ！」

そう言い残して、担任の山田が教室から出て行く。

入れ替わりで今から始める授業の担当教師が入室し、色明は自分が指差した席に向かった。

「改めて、新田色明だ。よろしく」

「ええ、よろしく、お願いします」

席に座った色明に、海未は引き攣った笑みで挨拶をした。

「それで？」

「……………なにか？」

「俺、直に名乗ったんですけど。おたくの名前は？」

「……………園田海未です」

後で、おお！ と何やら感激してる幼馴染たちを無視し、海未は仕方なしに名乗った。海未の名前を聞いた色明は、一瞬驚き、すぐ愉しげな笑みを浮かべる。

「ウミ、海、うみねえ。これまた偶然だ」

「何がですか？」

「いや、こつちの話。聞きたいなら、次の機会。今は授業に集中つと。で、あの人、なんの先生？」

「……………古文です」

「ありがとう、古文ね」

そう言って色明は手、に持っていた鞆から真新しいノートと筆記用具、そして海未たちが使ってるものと同じ教科書を取り出した。

教科書がないから机をくっつけて見させる展開はないようだ。海未はそのことに少しだけ安堵し、今は授業に集中しようと思いを向く。

せめて授業の間だけは静かに過ごしたいと、これから訪れる騒ぎに不安を抱える海未であった。



授業が終わってからの僅かな休憩時間。いつもよりも人口密度が高い自分の教室に海未は眉を寄せている。

「新田君て前の学校は何処だったの？」

「東雲学院だ」

「彼女いる？」

「おいおい、いきなりスキヤンダルもの質問だな。まあ、いないけど」

「そうなんだ！ 私もフリーだから仕事ない日は何時でも遊んでね♪」

「あ、私もいないから！ で、その子とあの子はいるから」

「ちよつと、何でわざわざ話すのよ！」

「あ、あもう、曲聞いてます。さ、サインくださいっ！」

「いいぜ。つて色紙つて随分と用意がいいな」

「東京にいますので、何時如何なる時でもアイドルに遭遇してもいいよう常備してるんですー！」

「そ、それは何ともすごい心意気で。けど、俺はアイドルというカテゴリーじゃないと思うけど」

「そ、そうですね！ で、でも、歌が好きなのは本当なので」

「おう、ありがとう。ほれ、サインこれでいいか？」

「うわあ、ありがとうございます！」

数人の女子たちに囲まれる新田色明。

この教室の生徒である海未たちにも見覚えのない生徒が混じってるので、十分しかない休憩時間にわざわざ違う学年の生徒まで訪れているのだろう。

そんな、わいわいとにぎやかな光景に「ほええ」と穂乃果が感心した。

「休憩時間になる度に人が集まるね。すごい！ 流石、芸能人！」

「穂乃果、興味があるなら席を替わりますか？」

隣に聞こえない小さな声で言ったのは、穂乃果に立っている海未だった。

今日は授業が終わる度に色明の周りに人が集まるので、彼の隣席である海未は毎度穂乃果の近くまで退避してるのである。

「駄目だよ！ 争奪戦で手にした大人気、窓際の席は穂乃果のものなんだから！」

「なら、ことり」

同じく、休憩の合間に同じく穂乃果の傍に避難してきたことりに声をかける海未。

「ことりはうーんと困ったように考えた。」

「別にいいけど、あまり意味がないかと……」

当然だ。海未の席の後ろ、すなわち比較的到新田の席が近いことりも人だかりが押し寄せてきたので穂乃果の傍に避難していりる。

当然、人波から逃れるために席を替わるのならば、ほとんど意味がない。

「それに、いきなり席替わつたら、新田くん気を悪くするんじゃないかな？」

「……そうですよ。なら、諦めるしかありません」

毎回自分の席を巻き込んだ人だかりに正直鬱陶しいと感じてた海未だったが、それを利用して席を移動するのは印象の良くない行動だろう。

幸い、ここの生徒数も少ないので、こんな騒ぎは数日もしない内に落ち着くはずだ。

そうやって自分に言い聞かせる海未。

「けど、本当にすごい人気だね」

「うん。芸能人ていうのもあるけど、さっきの英語やその前の古文の問題もすんなり答えてたし、見た目もいいからきつとどんどん人気が出るね」

「つまり、これ以上になるということですか」

海未は騒がしいことが苦手だ。それを除いても自分の席が侵略されてることは快くない。

更には有名人の隣席ゆえに他の生徒から何かと質問攻めにされた。

唯でさえスクールアイドルという注目を浴びなければならいこととする羽目になった

のに、別のことで浴びたくもない注目を浴びることになっている。

(まったく、なんですか！　そもそも何故、私の隣なんですか！)

明らかな故意で自分の隣席を選んだ色明に、海未はご立腹だった。

そんな不機嫌な彼女に、昼休みにはジューズでも奢ってあげようと二人の幼馴染は苦笑し合うと、

次の授業の開始を知らせる鐘が鳴った。

▼ 訪れた昼休み。

新田色明を目的とした人の群れて予想通り増大した為、開始早々教室から出て行った海未、穂乃果、ことりの三人は中庭に赴き、仲良く昼食を食べていた。

「では、私はこれで失礼します」

「あれ？　海未ちゃんもう食べたの？」

食べ終わった弁当箱を袋に纏めて立ち上がる海未に、穂乃果が驚く。

普段は海未は急いで食べる印象がないため、ことりは不思議そうに訊ねた。

「何か急ぎの用事？」

「ええ。作詞の参考で借りた本を、昼休みのうちに図書室に返そうと思ひまして。放課後は一秒でも長くライブへの練習がしたいですね。既に返す本はここに持ってきて

ます」

「ああ、その本、そのために持ってきたんだ。まあ、わざわざ教室に戻るのも面倒だもんね」

「そうやって納得してることりの横で、何やら穂乃果が目を潤ませながら海未を見つめてきた。」

「……なんですか？」

「あんだだけ嫌がってた海未ちゃんが、わざわざ作詞のために本を借りたり、一秒でも長くライブへの練習がしたいとか！　そこまでアイカツに取り込んでくれるなんて、穂乃果は感動だよ！」

「大げさな……。やるからには真剣に取り組みたいだけです。とにかく、二人はごゆっくり。穂乃果、デザートに菓子パンを分けてもらってありがとうございます。ことりもジュース、ありがとうございます」

「やだなあ、それこそ大げさだよ。穂乃果たちの仲だもん、改まってお礼はいいよ」

「そうだよ。それじゃ海未ちゃん行ってらっしゃい」

「はい、行ってまいります」

手を振る二人に同じく手を振った海未は、そのまま荷物を持って図書室に向かった。やや早歩きでいそいそと図書室に向かう海未。

目的は本の返却なのだが、時間があるなら参考になる別の本も探そうと思っ
ている。今後、アイカツを続けるならば歌は一つだけは駄目だろう。

ならば、新たな歌の作詞もしないといけない。トレーニングの専門書もあるか
もしれないので、それも探すつもりだ。海未は運動慣れしているため、既に彼女が特訓メ
ニューは存在するのだが改良の余地があるならした方がいいだろう。

ここまで考えていると、そんな自分自身に海未は驚いた。
当初は反対だったアイカツも自主的に行動を起こしてる。

不思議と口元が柔らかくなった。

何だかんだ言っても、切な幼馴染と三人で何かをするのを楽しんでるのだろう。

そう思っている内に図書室へと到着する。

図書室では静かにと全学校の原則に従って扉を開く海未だったが、受付に図書委員ら
いしき生徒が一人いる他には誰もいないようだ。

海未はそ図書委員に借りた本を返却すると、そのまま図書室の奥に足を踏み入れた。

音乃木坂の図書室は広く、歴史があるだけあって本の数も豊富だ。探せば古い書籍も
見つかりそうである。携帯やパソコンで調べれば大抵なことは解る便利な世の中だが、
こうやって自分の足で本を探せば、思いも知らない発見があるかもしれない。

そういつた意味で、基本的には静かな場所なこともあり、海未にとって図書館は比較的

に好ましい場所であった。

そんな思いを、一時撤回したくなるもの、人を見つける。

「何故、貴方がここにいますのですか？」

気分よくしていた海未は、思わず恨めしげに声を出す。

しかし、不満の念を向けられた相手は、海未のことに気付かず、頬を片手でついて座りながら、奥に設置されたテーブルに視線を落としていた。

無視ですか!? と一瞬苛立った海未だったが、すぐに相手が何やらイヤホンをしてるのに気付き、単純に気付かなかったのだと認識を変える。

このまま立ち去れば向こうも海未に気付かなかったかもしれないが、視線を感じたのか不意に彼は顔を上げる。

「園田? なにしてんの?」

色明はアイホンを操作して何かの曲を止めると、イヤホンを外し、まっすぐと海未を見つめてきた。

「いえ、ただ本を探していただけです。貴方こそ、何してるのですか?」

海未の言葉に偽りなく、彼女も質問も違和感がないものだった。

本来、図書館ですることは本を読むことなのだが、色明の前にはノートと海未たちも使っている数学の教科書が広げてあった。

「……勉強」

「……ですか？」

何やらばつの悪そうにしてる色明を見て、海未は不思議に思う。

別に図書室で勉強をすること自体は不思議ではないが、テスト期間でもなく、今日学校に来たばかりの色明に宿題があるはずもない。何より、わざわざこんな場所で勉強をしているのが解せない。

「教室はうるさいだろ」

「それは自業自得でしょう」

教室が五月蠅いのは今の場合、色明目的の生徒がやって来るからである。

海未からすれば何を言ってるんだと思う発言だが、当の本人は不満そうにしていた。

「別に俺が人を集めるために呼びかけたわけじゃない」

「おや、迷惑だったのですか？ 随分と楽しそうでしたが」

「迷惑、とかまで思ってたんですか。一人でいたいときは困るな」

「そうですか。即ち、私が目の前にいることも迷惑と、そう言いたいのですね？」

「はあ？ 誰もそんなこと言ってるんですか？」

「言っているようなものです」

「つ————— なんか、俺に不満があるわけ」

怒鳴りかけた色明だったが、寸前で思い止まり、替わりに静かな声でそんなことを海未に訊ねる。

それに対し、海未は笑って答えた。

「心当たりがないとでも？」

そう言われて少し考えた色明だったが、なにか納得したように神妙な面持ちになる。

「なるほど。休憩の度に自分の席から追い出されたら、そりゃあ迷惑だな」

「理解してくれて助かります」

「でも、嫌なら別に席を譲る必要は——」

「自分の近くで興味もない、先ほども別の人が聞いた内容を繰り返し聞かされる方が嫌ですね」

「——ご尤もだな」

脳内で同じ状況に自分を置き換えて考えたのか、色明は嫌そうな顔をして認める。

「でも、さつきも言ったが、俺もわざと集めてるわけじゃないぞ」

「でも、私の隣を選んだのはわざとですよね？」

そう言われてしまい、色明は何も言えず、しばらくすると頭を海未に向かって下げた。

「迷惑かけて、すみませんでした」

「解ってくれるならいいです」

素直に謝ってくれたので海未は、これ以上この件で彼を責めることは止めにした。

それでも、言っておくべきことがまだあるので、彼女はそのまま言っておく。

「しかし、謝罪なら他の近くにいる人にもしてください。私の後ろの席にいる友人も、貴方目的の人だからのせいで、毎回避難してるのですからね」

「解った。後で謝っておく」

「ええ、お願いします」

そう言った後で、海未は良い機会なので次の質問をした。

「で、それはそうとして、何故私の隣を選んだのですか？」

「いや、あの日。街のど真ん中で急に通うことになった音乃木坂の生徒に逢ったことも驚いてただけで、そいつが同じクラスだったからな。つい、面白そうだったから」

「何がつい、面白そうだったからですか……。そのせいで私がどれほど迷惑を——まあ、そのことに関しては先ほど謝ってくれたのでこれ以上言いませんが」

しかし、どうやらあの日、海未と色明が出会ったのは本当に偶然らしい。

変な意図による仕組みられた巡り合わせではないようなので、少しだけ海未は安心する。

もし、誰かによつて彼と引き合わせられたのなら、とりあえずその者には一言文句を言つてやりたい。あまりにも偶然が重なつてるので、海未は何かの陰謀なかと疑い、心

劣が溜まっていたからだ。

ほっと胸を撫で下ろし海未だったが、その様子を見た色明が何やら深刻な顔つきになる。

「……本気で迷惑だったら、先生に言っただけの個人教室でも作ってもらおうか？」

「はっ？」

何故そんな言葉が出るのだろうかと海未が訝しむ。

「園田以外にも迷惑かけてるらしいし、男子見本生は異性に慣れない女子への慣らしが主な目的なのだから、別に俺だけのクラスを作ってもらってもいいはずだ」

「いや、少し待つてください。快く思っていない人もいるかもしれませんが、歓迎してる人も当然いますよ。あの人だから何よりの証拠じゃないですか」

物珍しさが大半であるが、確かに色明の存在を快く思っている生徒はいる。

それが一日も経たないうちに自分たちのクラスからいなくなれば、気落ちする人も多
いだろう。

「確かに、迷惑と私が言いましたけど、そうですね。其処まで追い詰めたのならば言い方が悪すぎましたのでしよう」

表面上、飄々とした態度が目立つが、海未と出会ったときといい、彼は何かと責任感がある。

そう考えると、海未は彼にそこまで言わせた自分の言動を反省する。

「……少し、私も意地が悪すぎました。謝罪を」

頭を下げようとした海未だが、それを押し止める様に色明が片手を突き出す。

「謝る必要ないって。俺が性急過ぎだ」

そう言ってから、色明は苦笑する。

「実際、本当に作ってもらえるか解らんしな。といてもいいなら、今のクラスにいさせてもらおうよ」

それを聞いて、ほっと海未は胸を撫で下ろした。孤立する事態は避けられたようで、安心する。

「ええ、そうしてください」

「しばらくは迷惑をかけるかもしれないがな」

「私は覚悟を決めましたので大丈夫です。ですが、あくまで私は、ですのぞ」

そう言いながら、海未は言葉を次々と重ねた。

「先ほども言ったように、迷惑してる人もいるのですから、その人たちにも一言くらい謝ってください。それに根本的な解決として、貴方に集まる人たちにも周りが迷惑していると注意してくださいね。貴方が意図的に集めてる訳ではないのでしようけど、原因は間違いなく貴方なので、対処するのは義務です。周りの人に迷惑をかけてると思っ

のならば、それぐらいの配慮は当然ですよ」

くどくどと喋る海未。

見る見るうちに色明の顔色が何とも言えないものに変わるが、彼女の言葉は止まらない。

海未が小言が多いのは、普段から色々とやらかす穂乃果を叱ったりする影響だろう。正論ではあるが、絶え間なく言われる側にしてみれば堪ったものではない。

まるでやんちゃな子供を諭す厳しい母のようであり、それは目の前の少年も感じた。

「母さんみたい」

よって、ぼろりと本音が零れる。

「何か言いましたか？」

「いや、気のせいにしてくれ」

色明が言い逃れしようとした矢先、キーンコーンと、昼休み終了の予鈴が鳴った。

「ちっ、終わりか。くそ、終わるまでに解りたかつたんだが」

悪態を吐きながら、広げていた勉強道具を直す色明を見て、海未は申し訳なそうにする。

「私と話してて勉強の邪魔したようですね、すみません」

「いや、気にするな。どうせ、一人だと解らず仕舞いだった。観念して先生に聞けばよかったよ」

「……………なんの勉強をしてたんですか？」

「数学。前のところよりも進んでたから、予習を——って何で泣きそうになるんだ？」

「とある幼馴染の一人に貴方の爪の垢を煎じて飲ましたくなっただけです」

毎回テストの度に赤点をとり、補習で泣きついてくる友人を思い出してしまふ。

来年は受験生なのだから、今からでも矯正した方がいいかと海未が考えた直後、自分のクラスに戻っていたとある幼馴染がくしゃみをした。

そんなことは知らない海未は色明と共に図書室から出る。

「しかし、予習をするのは感心ですね」

「編入早々、授業について来られなかったら恥ずかしいだろ」

それを聞いた海未は真面目だと感心し、次に不貞腐れたような色明の顔に気づいて、見栄っ張りなのかなと可笑しく思った。

「何、笑ってんの？」

「別に貴方に許可ないと表情を変えないといけないわけではないでしょう」

軽口を叩き、内心、海未は驚いていた。

同年代の異性と事務的以外で会話するなど、生まれて初めてではなからうか？

解きほぐされていた自分を実感し、これが大衆を魅了する実力なのかと不思議に思う。

「ほら、早く行かないと遅れますよ」

海未はそんな内心を漏らさずに、何故か歩みを遅くする色明を急かした。

「いや、園田は少し先に行けよ。俺は後から行く」

「? 何故ですか?」

「何故って、一緒に教室に戻ったら変な噂されるかもしれないだろう?」

なるほど、彼なりの配慮なのだ。海未は理解した。

確かに注目を浴びている人間と一緒に教室に戻るのを目立つだろう。

偶然だとしても、話の種になる可能性は高い。噂好きの女子高生には美味しいネタだ。

だから、彼女は言った。

「それようとも疚しいことなど一つもしてません。ならば堂々とするべきです」

凜とした声に、色明は一瞬黙る。

「……………、なんかカッコいい園田」

「そのような言葉が出なのか解りかねますが、素直に褒められたと思っておきましょう」

二人が教室に戻ると色明の予想通り周りから注目を浴びた。

しかし、海未は前言どおり偶然会ったから一緒に戻っただけだと答え、色明もそれに合わず。

そんな味気のない返事で周りの興味は瞬く間に薄れたのため、少年の心配は杞憂に終わった。

ただ図書館であつた些細な会話は、何となく気恥ずかしさを感じたので、二人の幼馴染も話さなかつた海未であつた。

▼
いつもよりも長い一日を体感した放課後。

朝から様々な出来事が続々と発生したので、これ以上は流石にないだろう。

そう考えた自分が甘かつたと、それを目撃してしまった海未は後で嘆く。

彼女がスクールアイドルの練習前に飲みものを買おうと自販機に向かうと、外で数人の女子に囲まれてる色明を見つけたのだ。

本当に彼とよく遭遇すると思ひながら、海未は何となく色明に集まる生徒たちを観察した。

（あのリボンの色、一年生ですか………………。本当に人気なんですね）

向こうは気づいてないようだが、特に声をかける理由もない海未はそのまま立ち去ろうとした。

だが、次の瞬間、一人の少女の言葉にその足を止めてしまう。

「海未先輩に近寄らないでくださいっ！」

『はっ?』

戸惑いの声を、海未と色明は同時に鳴らす。

どうやら園田海未の受難はまだ続くようだ。

3話・奮闘するレディース

海未は顔を引きつりながら、その光景を見つめた。

今日から自分が通う女子高に異例として通う少年、新田色明^{いろあ}。

その彼はプロシンガー。よって女生徒たちに囲まれたのを目撃した瞬間は、またファ
ンに囲まれてるのだと思った矢先、自分の名前が出てきるのである。

しかも「海未先輩に近寄らないでくださいっ！」という激しい内容。

寝耳に水どころの話ではない。寝耳に落雷の気分だ。

驚愕している海未に気づかず女生徒たちは色明を睨んでいる。

「ああ……、確認するが君らの海未先輩っていうのは、俺の隣の席の園田であつてる？」

計五人の女子に囲まれた色明は戸惑いながら絞った声で確認した。

彼も、呼びさされた内容が今日隣になった少女についてなど思いもしなかったのである。

「そうです！ 今日通った貴方は知らないかもしれませんが、あの人はすごい人なんですよ！」

「なに？ 園田ってお嬢様か何か？」

誇らしげに口に出した少女の言葉に色明が目を丸くする。

「ええっ！ 家柄も由緒正しき道場を開いてて、大看板は日舞！ 他にも薙刀、弓や剣道、古武術なんかも指導してるすごいところ。海未先輩はその跡取り娘なのです！」

女生徒が語ったことは事実だった。

園田家は地元では知るものは知る大家であり、海未は将来家を継ぐことを期待され、彼女自身も望んでおり、日々、日舞や武道を励んでいる。

だからといって何故、彼女たちが色明と自分の接触を拒むのか海未には理解できない。

もしかして、彼女たちは園田の門下生かと、海未が考えると色明がその質問をする。

「園田が凄いのは解った。じゃあ、君たちはその門下生か何かで内のお嬢様に近づくとか、そんなやつか？」

「いえ、私たちは門下生ではありません」

仮に彼女たちが園田の門下生たちならば、百歩譲って海未は納得できた。大それたことに揃いも揃って自分をお嬢様と呼ぶ人間たちが、要らぬ心配をしたと考えられた。

では、そんな門下生たちでないのなら、海未との接触を拒む理由はいったいどういったものか？ そのことを彼女たちは続けて語る。

「ですが皆、海未先輩と同じ中学で、この音乃木坂にも海未先輩を追っかけてきました。

既に海未先輩と同じ弓道部に入ってる子もいます」

更なる衝撃の事実には海未は驚きつつ、そういえば身の覚えのある顔ばかりだと納得した。

しかし、何故自分を追っかけてきたのか？

悪いと思うが、海未にとって彼女たちは記憶の片隅くらいしか残っていない薄いものである。

けれども、彼女たちは違った。

「私たち全員、海未先輩に憧れてるんです。先輩は覚えていないでしょうけど、何度も助けてくれたありました」

頷きあう女子たち。彼女たちは自分たちが海未の記憶に残っていないと自覚しつつも、感謝の気持ちを含め今日まで忘れなかった。

海未は幼い頃から武道に励んできたゆえか、正義感が強く、困っている人間を見過ごせない。少女たちはそんな彼女に助けられた一部である。

時と場所が違えば自分が知らない場所で尊敬されていたことに海未は恥らいつつも悪い気はしなかっただろう。だからこそ、彼女の思いの丈は時と場所が悪かった。

「海未先輩、迷惑をかける人がいたら私たちは許しません。貴方が特待生やプロの歌手だとしても、そんなちゃらちゃらとした人が先輩に変なことをしたら承知しませんから

「！」

「なるほど、話はわかりました」

『!?』

女子生徒たちの背後からいつの間にか近づいてきた海未にその場の全員が驚く。

「海未先輩！　いつからそこに」

「先ほどからです。聞いてて大方の事情が解りました。貴女方の気持ちは嬉しく思いますが、独断と偏見で妙な言いがかりをするのは感心しませんね」

「え、でも、先輩はこの人が隣になったことで迷惑してたんじゃあ………」

「どうやら、彼女たちは色明の席に集まる人だからによって、海未が困っている姿を見ていたようだ。」

「確かに彼を目的をした人たちには困ったものです」

「やっぱり！」

「しかしそれは彼が先導して行ったことではありません。彼個人が私に対して不埒を働いたわけでもないのに、文句を言うのは筋違いでしょう」

「え……………」

硬直する少女たちを海未は容赦なく睨む。

「私が言っていること、何か反論ありますか？」

海末の言葉通り、別に色明自身が人を集めたわけではない。

しかし、尊敬する先輩のクラスに芸能人が来たと知り、気になって様子を見に行つた少女たちは海末が己の席を人波に追いやられていくに憤慨してため、他の事情など気にも留めなかつた。

今このときでも、自分たちは何故怒られているのか少女たちには理解できない。

ただ、敬愛する人の厳しい顔に少女たちは顔色を青白く染める。

「す、すみません」

「謝る相手が違うのでは？」

「っー」

今にも泣きそうになる少女たちを見て、海末は溜息を零す。

「後は私が謝っておきますから、貴女方はもう行きなさい」

これ以上責め立てても何もならないと判断した海末はそう言った。

「え、けど……………」

ちらりと色明に視線を向ける少女たち。

海末の言葉で罪悪感を感じたのだろうか、申し訳なさが瞳に宿っていた。その感情が宿っただけでも、海末として重畳である。

「ここで貴女たちが彼に謝っても、私に言われたようなものです。もう一度良く考え、謝罪する気持ちが芽生えたのなら、後日改めてしなさい」

「……………、わかりました。失礼します」

少女たちは海未に頭を下げた後、色明にも頭を下げてからそくさと去っていった。

彼女たちの背中が完全に消えたのを見送ると、海未は色明の方を振り返った途端、彼女は怪訝な顔をする。

「何を笑ってるんですか？」

「いやはや、この状況って普通逆じゃね？」

眉間に皺を寄せてく海未などお構いなしに、色明はにやけ顔だった。

「漫画だと学園のアイドルのファンたちに主人公が追い詰められたところをその学園のアイドル——いわゆるヒーローが助けるわけだけど」

心底愉快そうに色明は片目を瞑りながら吐露する。

「そんな経験をまさか助けられる側ですとは思わなかったなあ、学園のアイドルさん」
「誰が学園のアイドルですか」

海未が幼馴染たちと共にスクールアイドルをしているが、その知名度は本格的にアイカツをしてないので低いはずだ。

それに、この学園のアイドルというならばあの眉目秀麗のクォーターである生徒会長

であろうと海未は思い浮かべたが、わざわざ出す話題でもないだろう。

「のわりには随分と慕われていたじゃねえか、園田先輩よ」

「気持ち悪い言い方止めてください。あの子達は、偶然の産物というか何といたしますか、まさか音乃木坂まで追ってきた人がいるなんて、私もさつき初めて知ったんですよ」

「ほうほう、それはまた罪作りなことです」

「プロの歌手である貴方に言われても嫌味でしかありません」

呆れる様に言った後、海未は気を引き締めた表情で色明を見つめる。

「けど、先ほどの件。発端は私にあるようです。すみません、貴方にご迷惑を」

「いや、謝ってくれるなよ」

頭を下げとした海未だったが、真面目な顔になった色明が止めた。

「別に何かされたわけでもないし、芸能界にいたら嫌味のつや千個聞き慣れてる」

そう言いながら、色明は苦笑する。

「教室で俺が集めてしまった人ばかりを園田が許してくれてると同様、こつちも気にしちやあいないさ」

「……………そう言ってくれると助かります」

「ともかく、今回も助けられたわけだが、今回は礼になるものが手持ちにない」

その言葉に、まったく律儀な人だと海未は再度思いながら首を横に振るう。

「かまいません。先ほども伝えたとおり、原因は私にみたいなものですからね。自分が巻いた種を摘んだだけです」

「と言つてもな………男の矜持としては借りを返せないのは辛いもんだぞ」

そう言いながら色明は両腕を組んで悩むように顔を顰める。

「そもそも、続けざま女に絡まれて同じ女に助けられること知り合いに知られた日にはいい笑い者だよ」

「言わなければいいじゃないですか」

「無理だな。こんな話、自然と口が滑つてちまうよ。面白くて大した女がいたってな」

「おやおや、その面白くて大した女とは誰のことですか？」

「そりゃあ、お前つて——何機嫌損ねてんだよ。褒めてるんだぞ？」

「そう感じられなかったから、不機嫌になったのだと気づきませんか？」

海末がぎろり睨むが、そこで十六時を知らせるチャイムが鳴り響いた。

その音で、海末はは穂乃果とことりを待たせていると思ひ出し、瞬く間に慌てた。

「悪いですけど人を待たせてるので、これで失礼します！」

「おう。俺も今から仕事だから、また明日」

仕事——目の前で話していると実感が薄れるが、目の前の少年はプロの有名歌手である。

自分たちのアイカツに比べるまでもなく、多忙なはずだ。

やはり、この少年は凄いい人なのだ、改めて尊敬の念を抱く。

「わかりました。では、明日。お仕事、頑張ってください」

微笑みながらそう言い残し、海未は走り去った。

さて、自分もアイカツを頑張ろう。



時間が流れ、夕暮れの音乃木坂。

海未は穂乃果とことりと共に校門前にいた。

「ここなら平気でしょう?」

「まあ、ここなら………」

三人の手には大量のチラシ。

今から海未たち三人は下校中の生徒たち相手に初ライブの宣伝を行うつもりである。

——この発端は今日の登校した時だった。

いつものように三人一緒に登校してきた海未たちの前に、彼女たちのアイカツに興味の持った生徒たちが現れた。

そこで一曲歌ってほしいと言われたのである。

快く引き受けた穂乃果とことりだったが——あることか海未は逃げ出したのだ。後に穂乃果たちが問い詰めたところ、いわく、まだ人前で歌うのは恥ずかしいのと。

既に日舞の舞台上上がった経験もある海未なのだが、それこれとは話が別らしい。海未は武家の生まれゆえに勇ましく、度胸があるのだが、羞恥を煽る行動は人並み以上に臆病になってしまふのである。つまり恥ずかしがり屋だ。

そのことは昔から知っていた幼馴染たちであるが、このままでは三人でライブができないと穂乃果が考えた末がチラシ配りなのである。

最初は秋葉原の街で配ろうとしたのだが、人の多さに海未が撃沈。次は場所を変えて音乃木坂に戻ってきたわけだ。

もつとも、街中で配ったところで、初ライブをするのは新入生観劇会の後に学校の講堂なので、学外の人間を校内に入れるときにまた面倒事になっていただろうが。

「なら、始めるよ！　μ s ファーストライブやります！　よろしくお願いします」夕焼け色に染まる空の下、校舎の中から次々と下校する生徒たちが増えていく。

早速、穂乃果は走り出して下校中の生徒にチラシを配り始めた。

「よろしくお願いします。ありがとうございます！」

続いてことりも下校中の生徒にチラシ配りを行う。

「……………、よし」

そんな二人を呆然と眺めかけた海未だったが、気合を入れてチラシの束を片手に道行く生徒たちに声をかけ始めた。

「ライブをやりませう！ よろしくお願いします！」

今朝や街で醜態を曝した海未だったが、今度ばかりは声を張ってチラシを配る。

仮に、ここで怖気づけば何処かで見てるかもしれない。

あるいは今まさに通り過ぎるかもしれない自分を慕ってるらしき後輩たちに格好がつかない。それが少し前に、自分が叱咤した少女たちであったのなら最悪だ。

更に今頃、今日クラスメートになった少年は大人たちに囲まれて仕事をしているはず。

男女の違いはあれど、同い年の人間がそこまでしているのだ。ならば、慣れた場所ですら、いまでも動けないでどうする。

これ以上の無様は武士の名折れ。

海未は通りかかった小柄な少女にいらなそうとつぶやかれたが、それでめげずに次の生徒に声をかけ続ける。

「μ sです！ ライブをやりませう！ よろしくお願いします！」

「おお、いいね海未ちゃん！ その意気だよ！」

「ふふ、私もやればできるんです！」

少し様子を見ていた穂乃果に、知らない人にチラシなんて配れませんかと崩れていた海未は得意げに笑った。

そうだ、慣れてしまえば問題ない。

一歩動きだせば、あとはやるしかないのだから余計なことなど感じる暇などないのだ。

最初、日舞の舞台上に上がるときも、同じように羞恥で気後れしたが、今では舞える。

ならば、ライブもきつとできるだろうと、海未は少しだけ勇気を持てた。

「これなら休日に出ちの宣伝も手伝ってもらっても大丈夫だね」

「それは遠慮します」

穂乃果の軽い提案を海未は迅速に断わる。

穂乃果の家は老舗の和菓子屋であり、幼馴染な為、海未はことりと共に店の手伝い自体は何度もしたことがある。

だが、昔から続いているだけあって店の愛好者は多いものの、住宅街付近にあるため人通りは基本少ない。更に、二時間以上店前で声出しをしたけど誰も通らなかつたという穂乃果の愚痴も聞けば、人通りが多い街中で宣伝するとは違う意味合いで勘弁したい。

「それだけ声を出せば大丈夫だつて！ 今度の日曜日、穂乃果とことりちゃんと一緒に

に人が全然来ない道に向かって叫ぼう！ 三人なら虚しくないよ！」

「それが嫌だから遠慮してるんですよっ！」

「あの——」

不意に、言い合ってた二人の耳に控えめの声が届く。

海未と穂乃果が揃って視線を向けると眼鏡をかけた大人しそうな少女いた。

「あ、貴女は！」

「知ってるのですか、穂乃果？」

「うん、前に一年生の教室に行ったときにね。それで何かな？」

「えっと、ライブ。見に行きます」

聴いた瞬間、海未と穂乃果の顔が同時に輝く。

ライブの宣伝を行ってから、初めて自分たちを見にきてくれと言われた。

チラシを配ってもよくって受け取ってくれるだけ。ライブのことを話しても、行けたら行くなど曖昧な返事ばかりだったので、その言葉は海未たちにとって何よりも励みである。

「ありがとう！ えっと、お名前は？」

いつの間にかことりも海未たちの傍にやって来ていた。

ことりも来てくれるという言葉を耳にして嬉しかったのだろう。高揚した笑みで彼

女は少女に名前を尋ねる。

「あつ、はい、小泉^{こいずみ}、花陽^{はなよ}です」

急に聞かれて驚きつつも、少女——小泉花陽は名乗った。

「『こいずみはなよ』ちゃんだね。なんていう字を書くの？」

「小さな泉で小泉、お花の花に太陽の陽で花陽です」

「へえ、可愛い名前だね」

「あ、ありがとうございます。南先輩のことという名前も可愛いと思いますよ」

「そう？　ありがとうございます！　あれ、私の名前って教えたっけ？」

「えっと、スクールアイドルの4sのページに名前と顔写真があったので。だから、高

坂先輩も園田先輩のことも覚えてます」

「ああ、そんなの作ったね」

花陽に言われて穂乃果はその存在を思い出した。

スクールアイドルに登録する際、簡単なプロフィールを作成できるのだが、最初の内なので単にメンバーの顔写真と名前、あとは所属学校と活動理由の『廃校阻止』しか記載されていない。初ライブ後でも、すっかりとしたものを作ったほうがいいだろう。

穂乃果がそんなことを考えている中、海未は花陽の言葉で別のことが気になった。

「わざわざそれぞれの名前を覚えてくれてるほど私たちに感心？」

「自分が通う学校にスクールアイドルができたのが気になって。アップされてる歌もいいと思います。曲もまるでプロが作ったのように凄いし、歌詞も勇気が出そうで好きです」

「あ、ありがとうございます」

現在、μ'sのページにアップされているものは、作曲家による仮歌のものと改めて海未たちの三人で歌ったものだ。

その中で、自分が担当した歌詞も褒められたので、海未は口に出した言葉よりも感謝と気恥ずかしさで胸が一杯になっていた。

「歌詞を考えたのはこの海未ちゃんなんだよ!」

「ほ、穂乃果! わざわざ言う必要ありません!」

「わわ、凄いですね。じゃあ、曲も他の二人のどつちらかが作ったのですか?」

「それは一応匿名だから勝手に話したらいけないんだ。ごめんね」

「? はい、わかりました」

「かよちーん! お待たせにゃ!」

花陽が不思議そうに首を傾げた丁度その時、彼女の背中から別の少女が現れる。

ショートヘアに元気な声。大人しそうな花陽とは対照的に、活気に満ちた明るい子だった。

「わっ！ 凜ちゃんびつくりさせないでよ……」

「かよちゃん、ごめんじゃ！」

ふんにやりと謝る。かよちゃんとは花陽のあだ名なのだろう。

凜と呼ばれた少女は反省しているのかわからないが、悪気があったようにはみえない素直な笑みを見せる。喋り方から身の振り方からして、正に自由な猫のような少女であった。

そんな凜は海未たち三人に気づくと、花陽にそつと耳打ちする。

「先輩たちと何かお話？」

「うん。この人たちはこの学校のスクールアイドルで、つて前に一度一年生のクラスにも来たよ。覚えてない？」

「ああ、そんなこともあったにや」

「ああ、そんなこともありましたね」

言われて凜は思い出し、言われて思い出された海未は項垂れた。

あれは穂乃果が見つけた作曲ができそうな人材が一年生に在るとのことで、三人は一年生との教室に赴いたのである。

まだ曲すらアップしてない頃なのに、堂々とスクールアイドルと穂乃果が名乗ったので海未は恥ずかしかった。

そういえば、あの中に自分を慕ってるらしい後輩たちはいただろうか？

あの時はあまり人がいなかったのも、もしかしたらいなかったかもしれないが、もし、あの後輩たちが自分がアイカツをしているのを知ればどんな反応をするか。海未は想像がつかない。

ちなみに探していた一年生には作曲を断わられたものの、しばらく経ってから穂乃果の家に匿名で曲が入ったCDが投函されていた。

誰なのか、語らずとも解る。

「もう、凜ちゃん。ちよつと前のことだよ」

「ごめん、印象が薄くて」

『印象が薄い……………』

海未たち三人は項垂れた。確かに目立ったアイカツはしてないため、仕方ないといえよう。そんなのだが、面と云われると心が沈む。

「し、失礼だよ、凜ちゃん！」

「いい、いいよ。私たち、あの時別に何もしなかったし。あつ、そうだ！」

ははは、と乾いた笑みでそう言った穂乃果だったが、すぐににこやかな声と共に凜を見つめた。

「よかつたら今度ライブするから見に来ない？」

「ライブですか？」

流石に先輩対しては猫のような話し方をしないらしい。

きよつとんとする凜に穂乃果は笑顔で何度もうなづく。

「今度、新入生歓迎会する日にやるから、その日に改めて覚えてくれたらいいよ」

「かよちゃんは行くの？」

「うん、見に行くよ」

「なら、凜もいくにゃあー！」

『おおっ！』

二人目確保したことに海未たちが喜ぶ中、花陽が少しだけ不安そうな顔で凜を見つめる。

「凜ちゃんいいの？ 運動部とか色々見たいって言ってたけど……………」

「時間も遅くだし、最初のほうに回れば大丈夫だよ」

そう言つて凜は海未たちに向き直り、にこりと笑う。

「先輩、かよちゃんと一緒に絶対、見に行きますね！ 今から応援してます！」

『あ、ありがとうございます（ごさいます）！』



そして、そんなアイカツに勤しむ三人を昇降口から見つめる一人の女生徒がいた。

一目したら誰もが目を奪われる金髪を後ろに束ね、青い瞳は宝石のように美しい。

造形もモデル雑誌に載っているような出るところは出て、引き締まるところは引き締まってるという同性が憧れる肢体。日本には不釣り合いな異国の少女であり、実際、彼女の血の四分の一が外国のもの、すなわちクォーター。少女は氷像のように冷めた雰囲気醸し出し、それが彼女の美しさを際出せていた。

彼女はここの生徒会長である。生徒会長は海未や穂乃果、ことりたちを冷やかな視線で見つめた後、校舎の中に踵返す。

「やっぱり、彼女たちが気になる?」

生徒会長を待っていたかのように、長い髪を後ろで二束に分けて結っている少女、生徒会副会長である東條希とうじょうのぞみが、壁を背中つけながら声をかける。

呆れた顔を副会長に向けた後、生徒会長——あやせ繪里は冷めた吐息と共に頷いた。

「ええ。スクールアイドル——アイカツなんて無駄なこと一刻でも早く止めてほしいわ」



花陽と凜を見送った海未たち三人が改めてチラシ配りを再開すると、穂乃果がとある少女を見つけて、走り出す。

「真姫まきちゃ——ん!」

「ヴェエエ!」

突然やって来た穂乃果に少女は奇声を上げて驚いた後、むっとした顔で睨む。

「ちよつと、いきなり突撃しないでくれますか?」

彼女の名前は西木野真姫。ウエーブがかかったミディウムヘアにつり目の、見るからに強気な少女。品位と知性によつて磨かれた美少女なのは一目で解る。きつい眼差しも凄みはあつても嫌味を感じさせない凜然さ。只人ならば、彼女が放つ圧力に気後れるだろ。

「ごめんごめん」

しかし、穂乃果はまったく怖気た様子なく、暢気な笑顔で真姫に話しかけた。

思つたら行動する。猪突猛進は穂乃果の短所であり、また長所でもある。

「是非真姫ちゃんにもライブを見てほしくてね」

「ライブ?」

「そうだよ! 真姫ちゃんが折角素敵な曲作ってくれたし、人前でも歌わないとねつ!」

ある日、穂乃果が音楽室で一人、ピアノを弾きながら歌う真姫を見かけた。

心に響く奏。僅かな時間だが、穂乃果はその音に心底惚れ込んだ。

だからスクールアイドルとしてアイカツをする際、真姫に作曲を依頼したのである。

「は、はあ? 私、曲なんて作ってないですけど。先輩の勘違いじゃないですか?」

だが、真姫は興味がないと撥ね退けて断わっていた。

のだが、しばらく経った日、穂乃果の家に匿名のCDが入っており、その中に入っていた曲の歌声を穂乃果は聞いたことがあった。

間違いなく、この目の前にいる西木野真姫のもの。

しかし、素直じゃない真姫は認めないので穂乃果は合わせる。

「うん、そうだね。今はそういうことにしてるんだよね」

「意味わかんない！」

全てが解ったかのような慈愛の笑みを浮かべる穂乃果を拒絶するようにそっぽを向く真姫。普通なら表情一つ変えるところだが、穂乃果は笑ったままだ。

「だ、だいたい、あんなピアノだけの曲で歌うつもりですか？」

「あれ？ 駄目かな？」

「静かに聴くだけならともかく、ピアノだけ流して歌うなんて華やかさが欠けるに決まってるじゃないですか！」

馬鹿にしたように鼻で嗤うと、真姫は穂乃果の手からチラシを一枚抜き取り歩き出す。

「まあ、精々、寂しい音楽だけで頑張ってください。それじゃあ」

「あつ。うん、ばいばい！ 気が向いたらライブ見に来てね！」

急ぎ足で校門に向かう真姫に、穂乃果が大きく手を振って見送った。

二日後、穂乃果の家に以前の投函されていた曲を編曲した匿名のCDが届けられたとか。

4話・籠鳥檻猿 Immature girl

新入生歓迎会——μ，s初ライブの日がやってきた。

各部活のデモンストレーションや委員会による軽い催し物をして新入生歓迎会が終えると、生徒たちは散り散りに講堂から出て行く。

部活動を行っている生徒たちはここからが本番だ。委員会は半ば強制的に何処かへ所属されるが、部活は選んで貰わなければ入部してもらえない。

デモンストレーションを行った部活やそうでない部活も、周りの新入生に呼びかけて勧誘を行う。今年の一年生は一クラスしかない為、今後の活動のため新入生獲得は何処も必死である。

同じく、海未たちμ，sの三人もチラシを配ってライブの宣伝をした。

「初ライブやります！」

「この後、午後四時からです！」

「よろしくお願ひします！」

講堂から出て行く生徒たちに海未、穂乃果、ことりの三人は手当たり次第チラシを配ろうとしているが、色よい反応はほとんどない。

ほとんどが既存の部活に足を向けており、彼女たちの声は雑多にかき消されていた。

「うう、他の部活に負けてられないね」

「そうだね」

「時間はまだあります。とりあえず講堂から完全に人気がなくなるまで宣伝しましょう」

苦い顔を浮かべる海未たちだったが、すぐに笑顔を浮かべてチラシ配りを再開する。

「この後、午後四時から初ライブやります！」

最初にあつたぎこちなさはなくなり、自然な笑顔で海未はチラシを配っていく。

「ム、sです！ ライブをやります！ お願ひします！」

流れように笑顔を振りまきチラシを配る様は、歌つてと言われて逃げ出した少女には見えない。正しくアイドル活動、アイカツをしているアイドルの姿だった。

「ライブします！ 是非きてください！」

「ライブ？」

「!? はい、午後四時から——」

久しぶりにライブに興味ありげな反応が聞こえたため、海未が声が出た方へ振り向いた途端、彼女は笑顔を引きつらせた。

「なに、園田って軽音部でも所属してたの？ 意外だな」

「うっ、貴方ですか……」

そこには音乃木坂唯一の男子生徒、新田色明がいた。

仕事の関係で早々に学校を抜け海未たちのチラシ配りを見なかったり、校内での活動を目撃しなかったりしたため、今の今まで海未たちのアイカツを知らなかったのだ。

隣の席の海未も、相手がプロであることの畏縮と気恥ずかしさから、自分から話すことはなかった。そもそも、面と向かって話すのも久しぶりである。

しかし、知られたからには隠す必要もないので、海未は仕方なく説明した。

「いえ、軽音部ではなくスクールアイドルです」

「スクール、アイドル？ あの学生が自主的にアイカツするやつか？」

「ええ、そうです」

首肯する海未にますます色明は驚いたように目を丸くした。

「………………。ほんと、意外だな」

心底、予想外だったのだろう。しばらく沈黙してから、色明はそう呟いた。

その反応には海未自身も同意見である。

「ええ、私自身も思いますよ」

「新田君も初ライブ来ない？」

「ほ、穂乃果!？」

二人が話しているのに気づき割って入ってきた穂乃果の誘いに、海未が狼狽した。

「か、彼も誘うのですか!？」

「いや、海未ちゃん。穂乃果にはこの流れで誘わないほうが解らないんだけど?」

「彼はプロですよ!？」 私たちを見てもらうなんて痴がましいです!」

「ええ、大げさだよ……」

「大げさなものですか!」 そもそも、同性ならともかく、あんな短いスカートで殿方の前に出るなど私は嫌ですよ!」

最終的には認めしたが、海未はことが作った衣装に不満だった。

別に出来が悪いわけでない。むしろ、ここ数日で可愛い衣装を三着も作ってくれたことには感謝し切れないほどだ。

だが、スカートの丈が如何せん短い。少なくとも海未はそう感じた。他の二人の説得がなければ自分だけ制服で踊りたいほど、彼女は乗気ではない。

あれを色明の前で着ることを想像すると、抑えていた羞恥心が再び溢れそうになる。

そんな海未を見て、穂乃果は呆れた顔を浮かべる。

「何を今更。そもそも、初ライブの様子はネットで公開するんだから新田君一人を気に

しても仕方ないよ」

「は？ 何ですかそれは？」

「だから、新田君一人に気にしても——」

「その前です！ ネットで公開するなんて私聞いてませんよっ！」

「さつき決まったからね。実はね、ヒデコ、フミコ、ミカたちが穂乃果たちのライブを手伝ってくれるって言ってくれたんだ」

ヒデコ、フミコ、ミカというのは穂乃果たちのクラスメートだ。

昔からの幼馴染である海未とことりほどではないが、穂乃果はその三人と仲が良い。

彼女達三人は学校存続のため、穂乃果たちのアイカツの成功を思い、進んで協力を申し出たのである。

「ヒデコいわく、講堂って記録のために吹奏楽の演奏や演説を撮影するカメラが設置してあるんだって。で、せっかくならそれを使って初ライブの様子を撮ろうってなったんだ」

「そ、そんな！」

「ちなみにことりちゃんは賛成してくれました」

「くっ！ また相談もなしに二人して私を貶めましたねっ！」

「人聞き悪いなあ。海未ちゃんもいつまでも歌だけじゃ見栄え悪いし、他のスクールア

アイドルたちみたいにPVも必要だっと思うでしょう?」

「それは、まあ……………」

「思い出にもなるし。海未ちゃんが嫌って言うんだったらネットには公開しないからね?」

「うう、それなら、わかりました」

「やった!」

項垂れて渋々了承した海未の横で穂乃果が嬉しそうに両手を上げる。

「あ、置いてけぼりでごめんね、新田君」

「いや、別に。初ライブということは、スクールアイドルを結成してまもないのか?」

それまで二人の様子を黙っていた色明が静かな声で穂乃果に訊ねた。

「うん! 私と海未ちゃん、あとことりちゃんって子の三人でね! 学校のためにアイ

カツを始めたんだ!」

「学校のため?」

「そうだよ。スクールアイドルって最近目立ってるよね? 私たちもアイカツして注目

を浴びたら、人も集まって廃校も阻止されるっと思ってるね」

「ふーん、学校のためにねえ」

それを聞いた色明は一瞬両目を瞑る。

この学園が廃校の危機であることは彼も知っている。男である己が女子高に通うことになった一旦であるのだから当然だ。

色明は閉じられて目を見開くと、軽く微笑んだ。

「いいんじゃないか？ 学校のために頑張るなんて悪くないと思うぜ」

「ほんと？ ありがとう！」

「ああ。……さてと、俺は色々とお呼ばれてるんでこれで失礼するぜ」

色明は唯一の男子生徒であり、プロの歌手。ルックスもいい。あわよくば自分たちの部活に引き込めないかと様々な部活から誘いがあつても不思議ではなかった。

「うん。解った」

「お忙しい中、足を止めてすみません」

「気にするな。んじゃあ、精々頑張れよ」

そう言い残して色明が去った後、海未が気を落とすように「はあ……………」と溜息を零し、そんな彼女を見て穂乃果は呆れ顔を浮かべた。

「いい加減元気を出しなよ。さっきまでの笑顔の海未ちゃんはどうしたのさ？」

「見も知らない誰かに自分が歌っているところをいきなり曝すことになったら、気の二つも落ちますよ」

「アイカツをすれば遅かれ早かれ通る道なんだから、しっかしして」

「そうですけど。はあ、私はそろそろ弓道部に顔出すので後はよろしくお願いします」
元々、海未は弓道部に所属しており、スクールアイドルを始めてからも止めずに掛け持ちをしている。

最近はいかづに集中しているが、今日は新入生勧誘のため一立ち披露することになつてた。

「うん、わかった！ 弓道頑張つてね！ 残りのチラシはことりちゃんたちと配るよ！」
「はい、お願いします」

海未は残つていたチラシを穂乃果に預けて、弓道着に着替えるために更衣室に向かう。

その様子を物陰から誰かが見ていたことに、彼女達は気づかなかつた。

▼ 弦から解き放たれた一矢が静かな音と共に的を射抜く。

四射中四射共的中——見事、皆中させた海未に周りものは敬意を持って表し送つた。

弓道において四射目を当てるのは難しく、ある指導者いわく「一射目は技術、二射目は体力、三射目は精神力で中る。最後の矢は人格者でなければ中らない」と述べていることからどれだけ困難であるか解るだろう。

残心を済ませた海未は一礼した後、後は弓道部の先輩に任し、静かに弓道場から去った。海未は幼い頃から家柄ゆえ弓も励んでおり、腕前も先ほどのように達者であるため弓道部では当然主戦力だ。本来ならば、スクールアイドルの両立など反対されるところなのだが、心優しい先輩や顧問は彼女の掛持ちを許し、また応援してくれている。そんな先人者に感謝しつつ、海未は着替えのため更衣室に向かった。一部の部活を除き、ジャージやユニフォームに着替える場合は共用の更衣室で着替えるのが決まりである。それを煩わしく思う者は物陰で着替えたりするのだが、新田色明という男子生徒が通つてからはあまり見かけなくなった。

海未はこれから一度更衣室で制服に着替えてから、その後で講堂に向かう。講堂で再び着替えをするわけだが、後々のことや気持ちを切り替える上で面倒承知の行動である。

「あの、すみません」

「？」

あと数歩で更衣室がある校舎へ入る間際、海未は呼び止められた。

振り向くとジャージ姿の女子生徒がおり、彼女は暗い顔で海未を見つめている。

「使わなくなつたからこれを体育倉庫に戻してきてと言われたんですけど、場所教えてもらえませんか？」

見ると彼女は両腕で沢山の赤いカラーコーンやバーを抱えた。

今にも零れて落としてしまいそうな様子、体育倉庫がまだ解らない即ち新入生一人にこれほどの荷物を任せることへの苛立ちを内心に秘め、海未は優しげに微笑む。

「かまいません。なんなら私が半分持ち案内します」

海未の提案を聞き、少女はびくりと体を震わせ、見る見るうちに申し訳なさそうな顔を浮かべる。

「いいんですか？」

「ええ、勿論」

ライブまでまだ時間がある。少しくらいの寄り道など問題ないと海未は判断した。

「……………それじゃあ、お願いします」

「はい。では、こちらです」

手伝って貰う事に気後れしてるのか顔色悪い少女に苦笑しつつ、海未は半分よりも多めに彼女が抱えたものを受け取ったから案内する。

体育倉庫はグラウンドから離れた場所、学園内の人気がない片隅にあった。道具を出し入れるに不便だが、少しでも自由なスペースを作るための配慮である。

「ここです。鍵がかかっているみたいですね。受け取ってますか？」

「あ、はい。ここに！」

錠前で施錠されている扉を見て海未が振り向くと、少女は抱えたものを一旦その場を下ろし、ジャージのポケットから一本の鍵を取り出した。

彼女はそのまま錠前の鍵を開けると、海未は埃が漂う体育倉庫の中に入る。

「後のことを考えて私が整理しながら置くので、貴女は道具を渡してください」
「は、はい！」

少女は海未に言われたとおり、地面にあつた道具を渡し、海未は慣れた様子でそれらを定位置に戻す。

数秒もかからず、片づけが終わると少女は海未に向かって頭を下げた。

「あ、ありがとうございます！」

「かまいませんよ」

そう言いつつ海未は体育倉庫から出ようとし、

「それと、ごめんなさいっ！」

いきなり閉められた扉に思考が停止する。

「え？ な!? 貴女、何を!？」

暗闇の中、数秒呆然とした海未は我に返り、急いで扉を開こうとするが既に施錠されており、ぐらぐらと揺らすだけだった。

「くっ！ ふざけてるのですか！ 早く開けなさい！」

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！」

怒鳴る海未に対し、扉の向こう側から少女の悲痛な叫びが聞こえてた。

嗚咽交じりに、の声に海未は益々訳が解らなくなる。

泣きたいのはこつちだと海未が思った矢先、少女の声が彼女の耳に響く。

「あとで必ず開けます！ あとで幾らでも怒られます！ でも、どうか、しばらくここにいてください！」

「何故ですか!? 今から私は——」

「——ライブ、ですよ海未先輩」

それは先ほど海未といたものとは別の少女の声。

いきなり扉を閉められたことを考えれば、声の主は何処かに潜んでいたのだろう。

新たに現れた少女は、冷ややかな口調で海未に語りかけた。

「高坂先輩や南先輩と一緒にライブするんですよ」

「解ってるなら早く開けなさい！」

「嫌です」

その一言で胸の奥から熱くなるように激昂した海未が怒鳴り散らそうとした瞬間、新たに現れた声の主は悲しげに言った。

「だって、私たちは海未先輩に嫌な思いをさせたくない」

「え？」

「スクールアイドルで廃校阻止する、でしたね。立派だと思います。でも、それで海未先輩に無理強いをするのは幾ら幼馴染だからと言つて身勝手すぎます」

「あ、貴女は何を——」

「さつきだつて、海未先輩に選択肢なんて与えずにライブ映像をネットにアップしようとしてたじゃないですか。先輩、あんなに嫌がつてたのにつ！」

講堂での一件を言っているのだと解つた海未は、徐々に彼女たちの行動理由を察していき、顔色を青白く染める。

彼女たちは自分を『海未先輩』と敬称していた。

ならば、先ほど会つた子の姿や今聞こえる声に覚えがなくとも、素性は簡単に突き止められる。以前新田色明を取り込んだ者と同様、園田海未という人間を慕っている者たち。

目的は、海未にライブをさせないこと。

「自分たちが無茶苦茶なことをしているのは解つてます。でも、海未先輩が見知らぬ大勢の誰かに恥を曝すくらいなら、私たちは幾らでも悪者になります」

こつこつと足音が聞こえる。

遠ざかる足音に気づいた海未は止まっていた両腕を何度も扉に叩き付けた。

「待ちなさい、話を！ うっ、誰か!! 誰かここを開けれください!!」
海未の必死の叫びは誰も聞こえず、ただ虚しく響くだけだった」

5話・栄光なきファーストライブ

「うーん、出ないなあ……」

講堂の控え室で穂乃果は海未に電話しているのだが、携帯はコール音しか響かない。来れると海未が言った時間は少し前に過ぎていく。彼女が遅刻とは珍しいと穂乃果は思った。

「もしかしたら、引き止められてるかもね」

「あり得るね」

ことりの言葉に穂乃果も同意する。

「海未ちゃん、中学入ってから年下の子に人気だったし、今頃カッコいい姿にハートを射抜かれた女の子たちに囲まれてるかも」

「ふふふ、目に浮かぶね。でも、それが本当なら迎えに行ったほうがいいのかも」

「はは、そうだね」

穂乃果も想像したのでろう、あわふためく海未が微笑ましい。

いつも真面目な分、狼狽する姿は面白く思うのだ。

「でも、準備しないといけない時間になったら直接弓道場まで迎えに行こっか。それま

で二人でできることしよ」

「うん！」

穂乃果とことりは和やかな空気でライブの準備を始める。

待ち人の大切な幼馴染が暗い場所で閉じ込められてるなど、楽しげに作業をする二人には知る由もなかった。

▼

ダン！ ダン！ ダン！ 海未は数え切れないほど扉を叩く。

薄暗い体育倉庫の中は扉の隙間から僅かに光が差し込むのみ。

幼い頃、海未は習い事を嫌がり、それが原因で家の倉に閉じ込められたことがある。

何処かでそのことを知った穂乃果が怒ってこじ開けるまで、ずっと暗闇と孤独に苦しみ、泣いていた。

今は暗闇や孤独よりも、焦りで恐怖に心が震えている。

早くしなければ、ライブに間に合わないっ！

「誰か！ 誰かいませんっかっ！」

必死に叫びながら、何故こんなことになってしまったのかと、自問を繰り返していた。自分を慕っているらしき少女たち。

彼女達はライブによって海未が醜態を曝すのを防ぐため、ここに自分を閉じ込めた。

言葉ぶりから後に責を負うことは承知の上の所業。それだけ海未を慕っているのだと言えば聞こえがいいが、当の本人にしてみれば迷惑以外何物でもない。

いったい、何がいけなかったのか？

閉じ込めた少女たちの怒りは疲弊と困惑に変わり、両腕を扉で引き摺る。

困っている少女を助けたのがいけなかつたのか？

彼女たちに慕われるような行動をしたのが悪かつたのか？

それとも、大衆に艶姿を晒すほどの度胸がなかつた、己の弱さが原因か？

彼女には分からなかつた。

「う、うう、穂乃果……こひとり……」

等々、崩れ落ちるように膝をつき、助けを呼ぶ叫びは静かな嗚咽に変わった。

友の名を呼ぶが、いつも見せてくれる笑顔は何処にもない。

そして、大好きな笑顔が悲しみ変わるのが怖い。

理由は何にせよ、自分は共に歌はなかつた。土壇場で裏切る形になる自分が許せない。

少女は泣く。昔、泣いたように。あの時以上の悲哀を持って、涙を落す。

もはや、耳を澄まさなければ聞こえない、啜り泣き。

「誰かいるのか？」

その声を——涙が枯れる前に聞き取った人間がいた。

「え？」

最初、聞き間違いかと海未は疑う。

「誰かそこにいるのか？」

しかし、再び聞こえた自分以外の声に沈んでいた精神が一気に持ち上がった。

「います！ ここにいます！」

「その声は、園田か」

海未も聞こえ覚えのある声だった。

あの少年、新田色明だ。

「はい、そうです！ 私です！」

「何でそんなところに？」

「事情は後で話します！ 今は先生方にこのことを話して、鍵を開けてもらってください」

「い！」

「そうか、わかった」

「ああ、よかった！ これでライブに間に合う！」

喜ぶ海未だったが、色明は倉庫の前から一步も動かず、じつと扉を見つめる。

「……………離れる前に一つ聞いてくが、これは誰かに閉じ込められたのか？」

「え、それは——」

口を濁した海未の反応を色明は肯定として受け取った。

「なら、ライブは今のうちに諦めろ」

「え——？」

「一つ。閉めた奴がご丁寧に鍵を返してなければ、都合よく予備の鍵ない限り時間が掛かる」

戸惑う海未を他所に、色明は淡々と告げる。

「そして、これが故意でなかったとしても、閉じ込められたことは教師は見過ごせない。

即刻、事を洗い出さなきゃ保護者に顔向けできない。開けられた瞬間、事情を聞くために園田は拘束されるだろうな。当然、ライブには参加できない」

「そ、そんな！」

衝撃を受ける海未に、色明は更なるおいうちをかけた。

「更にこれが故意であった場合、最悪ライブそのものが中止になる」

「な、なぜですかっ!？」

「メンバーの一人がこんなところに閉じ込められたんだ。事件以外何もんでもねえよ。穩便のため、とりあえず中止させられても不思議じゃない。そうなると、今後の活動にも

支障が出るな」

色明の言葉を聞きながら、海未はどんどん顔色を青白く染めた。

救済の福音と思つた少年の声は、今は悲嘆を奏でる晩鐘のように響く。

等々、言葉を失つてしまった海未に、色明は扉越しに溜息を吐いた。

「まあ、これはあくまで最悪だ。アンタ抜きでも残りの二人でライブはできるかもしれない。けど、園田は今の内に覚悟しとけよ。俺は職員室行くから——」

「——いえ、その必要はもうありません」

D A A A N N !!

「!?!」

倉庫の扉が轟音と共に揺れる。海未が先ほど両腕で叩いてたよりも強力な衝撃。

それもそのはず、海未は扉に向かって体当たりしたからだ。

打ち付けた少女は瘦躯をふらつかせるが、倒れることなく片足で踏ん張る。もう片方の足で勢いをつけ、再び海未は扉に向かって体当たりする。

「おい、何をしてる!?!」

「決まつてるじゃないですか」

轟音に戸惑う色明へ、海未は静かに返す。

先ほどまで涙に暮れた少女の姿はなく、彼女は真っ直ぐな瞳で扉（障害）を見据えて

いた。

「扉を壊して、ここを出ます」

「はあっ!？」

「このまま先生方に知られればライブが中止になる。その言葉は理解できました」
体を叩きつけながら、海未は静かに言う。

身体中が痺れるが、少女は再び己の体を扉に激突させた。

「でも、それは絶対見過ごせない」

「ちよつと、待てよ、おい！ なにしてんだよ!？」

扉の向こう側にいる少女が乱暴に押し開けようとする様に色明は動揺を隠せない。

激しく揺れる扉を見れば中で無茶をしているのは明らかだ。

「そもそもなあ、仮にお前が駆けつけたとしても、誰も来ないかもしれないライブだぞ
!」

「どういう意味ですか?」

「俺はここに来る前に、色んなどころを回った」

男子である色明が女子高の特待生なのは、女子ばかりの場所に混じらせることで異性への免疫をつけさせるため。ゆえに、可能な限り、色んな場所に顔を出すようにと学校側から言われている。

今日はここに来るまで部活動を見て回っていた。

そして、彼は出会った生徒たちにあることを聞いてたのだ。

「そこにいた連中に聞いたよ、お前らのライブはどうするかつて。口そろえてみんな言つてたさ。廃校阻止するため頑張つてのは知つてる、けど行くほど興味はないてなあ！」

その後で自分のライブなら行くと言われたが、そこは区切つて色明は叫ぶ。

これで相手の心が傷つき、自分が嫌われようが構わない。

「無駄なんだよー！」

怪我するよりマシだと、彼は罵る。

そして、己の不満もぶちまけた。

「そもそも、歌つて踊つて愛想振りまいて目立つて学校を守ること自体楽観的過ぎる！趣味程度なら思い出作りで笑えるが、そんな大層な目的を果たせるほどこっちは甘くない、笑えねえ！」

止めるために吐き出した乱暴な言葉だったが、これは色明の本心である。

色明は歌の世界で生きる住人。例えそれが部活動の範疇だとしても、人を惹きつけることがどれだけ難しいか知っているのだ。

「……………なるほど、貴方が言うなら事実なんでしょう」

色明の言葉に海未はすんなりと納得した。相手はプロの歌手であり説得力が違う。言い返す気力すら湧かず、そもそも海未だって最初は無謀だと思っていたのだ。

「悔しいですが、人生甘くないですね」

そうやって海未は落胆した声を呟くも、先ほどよりも強烈に扉へ体当たりした。

「!?」

再び耳にする轟音と、ぐらぐらと揺れる扉を見た色明は唸りながら頭を搔く。

「静かに話を聞けよ!」

一向に静止の気配を見せない海未に色明は苛立ち、自らも握り締めた手を扉に叩きつけた。

「ていうか、何で必死なわけ? 人前で歌う姿見せるのあんなに嫌がってたじゃねえかっ!!」

ライブ映像をネット公開することに反対していたのを言っているのだろう。

確かに、今この時でも、海未は見知らぬ誰かへと、自分が歌ってる姿を晒すことに抵抗がある。

「羞恥は残ってます。けど、二人を悲しませるくらいなら幾らでも恥辱は耐えましょう」

「なに?」

「二人を。穂乃果やことりを悲しませるくらいなら、どんなことにも耐えると言ったのです！」

叫びながら、またも体を扉に叩きつける。

体が痛い。肩には痣ができてるかもしれない。

それでも構わず、海未は己の体をぶつけた。

自分が痛いのは嫌だが我慢できる。

辛い目にあうことも、最後には自分が未熟だと諦められる。

しかし、あの二人が傷つくのならば話は別だ。

「無理だと言われても、穂乃果はスクールアイドルに可能性を感じ、一人でもやろうとした！」

一緒にやろうと言った穂乃果に海未は最初、拒絶した。

だけど、彼女は挫けずに学校の片隅で一人で練習していた。

後で生徒会の人間に認められなくても、彼女は諦めなかった。

「ことりは私たちのために寝る間も惜しんで衣装を仕立ててくれました！」

元々、ことりは可愛いものが好きだ。衣装も最初は趣味の一環で引き受けたのかもしれない。

でも、三着分の服を一から作るの簡単ではない。

毎日睡眠時間を削り、学校で少しでも空いた時間があれば、針を通していたのを海未は見た。

「二人とも、運動が苦手のはずなのに、最後まで投げ出さず今日まで頑張ってきたんです！」

そんな二人の姿を見たらこそ、海未は忌避した行為に身を任せたのである。

自分が作った歌詞が、一目に触れるのが恥ずかしい。

短いスカートで踊るなど、逃げ出したいくらい御免だ。

「己の弱さは、甘んじて受け入れましょう」

それでも海未がアイカツしようと思えたのは、大切な幼馴染がいたからである。

彼女達は海未だけでは思いつくことができない世界を導き、魅せてくれる。

海未は、そんな二人が大好きだ。

「けどー！ 二人が今日までやってきたことが、なかったことになるなんて我慢できませぬ！」

色明が語った最悪の結末は、μ sがこの件で活動が制限されるかもしれない。

悪い予感を飛躍し、μ sは何もできず活動を終える、そんな暗い未来を連想させた。

認めるわけにはいかない。自分の大切な二人が頑張った。

己も、今日まで何もしなかったわけではない。

「なにより、私は！」

何も始まらず終わることなど、誰が認められようか。海未は己の気持ちを叫ぶ。

「恥ずかしくても、誰も見て、聞いてくれなくても！　今の私は、二人と歌たいのです！」

「そうか——」

短い眩きは、穏やかだった。

ガキン！　と金属音がした。扉を叩くのは別の音。

海未がその正体を考える前に、彼女の暗かった視界に明かりが広がる。

気付けば、倉庫の扉が開かれおり、目の前に色明が立っていた。

「え——」

「おいおい、急ぐんじゃないのかよ？」

事態を理解できてきかない海未に色明は苦笑を見せる。

「ど、どうやって……………？」

急がなければならぬことは理解してるが、突然のことに海未は呆然としている。

色明が倉庫の鍵を持っている様子はない。

倉庫の鍵を持ってきた新しい人物も見当たらない。

ならば、どうやって目の前の少年は扉を開けたのか？

と、彼女は戸惑っていると色明は地面を指差したので海未は視線を下ろす。

そこには、留め金が何か切られた錠前が無造作に転がっていた。

「扉を壊すなんてことなんて俺にはできないが、鍵ぐらいならこの通り」

「ど、どうやって……………?」

「同じ台詞を吐くとは随分と余裕だな。話すのはかまわねえが、本当にライブいけなくなるぞ?」

「!?!」

視線を上げると青い空に赤い光が差しており、あと少し経てば夕焼け頃。

もうすぐ、ライブが始まる時間である。

だが、今から走れば間に合う。

「ほら、行けよ」

ポンと肩を叩かれた海未はようやく我に返り、色明を見る。

「ありがとうございます!」

そのとき、少年がどんな顔をしたか解らない。

言いたいことはお礼ひとつでは足りない。

ただ、海未は全力で走り出した。

目指すべき場所は、大切な幼馴染たちがいる場所。

「すみません、遅くなりました！」

「あつ、海未ちゃんやつと来たつて——！」

「海未ちゃん？」

講堂の控え室に駆け込んできた海未に穂乃果とことりは驚く。

彼女たちが心配するのも当然だ。

海未の顔は泣き腫らしており、倉庫で暴れたことで着ている弓道着も薄汚れている。

「ど、どうしたの？」

「恥ずかしながら地面に強く転びました」

訊ねてくることに、海未は走りながら考えていた言い訳を告げる。

後でばれるかも知れぬし、無理があるかもしれないが、この場はそれで押し通す。

「だ、大丈夫？」

海未の言葉を信じてくれた穂乃果は心配そうに彼女を見つめる。

己を案じてくれる幼馴染に、海未は強気な笑みを浮かべた。

「泣いてしまうぐらい痛かったですが、ライブに支障はありません。けど、多分酷い顔だと思うので濡れたタオル拭いた後、ことりにはメイクをお願いしていいですか？」

「う、うん。わかった」

そのまま海未はその場で汚れた弓胴衣を脱ぎ捨てた。

本来は簡易脱衣所で着替えるところのだが、時間は一刻も惜しく、幸いここにいるのは裸の付き合いなど今更な幼馴染二人だけなので、羞恥は感じない。

案の定、海未が扉を破るためにぶつけていた肩が腫れていた。

「う、海未ちゃん肩が腫れてるよ!」

「大丈夫です。動けますので」

悲鳴のように叫ぶことりを安心させるように海未が腕を回してみせる。

痛むが、動けるのは本当であり、ダンスをするのに問題はない。

しかし、ことりは沈痛な視線を海未に向けたままだった。

「保健室にいく?」

「私のせいですが時間がありません。今ははアンダーシオンを縫って誤魔化しましょう」

ことりが作った衣装はノースリーブなので、このままでは目立ってしまう。

湿布を張るわけにもいかないので、海未がそう提案したがこりの顔は浮かぬままである。

「ライブが終わったら、ちゃんと保健室に行きますから」

「わかった………」

漸く頷いたことは、自前のメイクボックスから海未に合う色を探して、彼女の肌を重ねる。

「後でちゃんと教えてね？」

ぼそりと、耳元で囁かれた言葉に海未は何も堪えない。

どうやら、ことりに嘘はお見通しのようである。もしかしたら、穂乃果も気付いて海未に合わせてるかもしれない。

本当にあったことをどう二人に説明するか。

それは、ライブが終わった後で悩もうと、気持ちを切り替えて準備する海未であった。

▼

海未の準備が整えて、軽く打ち合わせを済ました後、三人は講堂の壇上に向かう。

「二人に、お願いがあります」

下りてる幕を見つめながら、海未は二人に声をかけた。

「なに、海未ちゃん？」

手を繋いだ穂乃果と反対側にいることりに見つめられて、海未は迷いつつも不安を吐露する。

「本番直前に言うのは心苦しいですが、もしかすると幕の向こう側には誰もいないかも

しれません」

二人の表情が凍りついたように固まるのを感じながら、海未は言葉を続ける。

「来る途中で席を覗いてみましたが、誰もいませんでした。今も、いないかもしません」
海未は控え室に向かう前。気になったので座席の様子を見たのだが、薄暗い空間には人の気配を感じなかった。

色明に言われたことが蘇る。

あのときは気持ちが高ぶったため耐えれたが、改めて思うと胸が押しつぶされそうで苦しくなる。

だからこそ、海未は二人に乞う。

「それでも、幕が上がったら最後まで一緒に歌ってくださいませんか？」

「勿論！」

真っ先に反応したのは穂乃果である。

彼女は不安な気持ちを隠せていないが、口端を吊り上げて、無理やり笑顔を作り出す。
あれだけ頑張ったのに、誰もいなかったら悔しい。

けれど、あれほどアイカツに反対してた幼馴染の口からそんな言葉が出たのならば、それ以外の選択肢など穂乃果にはない。

「どうせ、ライブ映像は録画すしね。もしも、お客さんいなかった失敗しても撮りなおせ

るよ」

「……………穂乃果、やる前から後ろ向きな姿勢はいただけませんね」

「海未ちゃんが先に言ったじゃない!？」

「歌や踊りの失敗を気にしたことは言ってますよ。それは甘えです」

「ええ〜」

「ふふっ！ 私も、二人となら一緒に歌える！」

笑いながら、ことりも同意した。

彼女も不安だ。自分ひとりだけならとても歌えない。

でも、一人ではないから歌える。だから、彼女は綺麗な笑みを浮かべられた。

「でも、そろそろ始まるけど、こんなときどうすればいいのかな？」

「μ's、ファイオー！」

それはことりが場を和ますための何気ない質問だったのだが、穂乃果が元気高らかに

叫んだため、海未は思わず苦笑した。

「それでは運動部みたいですよ？」

「だよね〜」

「あはは」

「あつ、思い出した。番号言うんだよ、みんなで」

「面白そう！」

「よし！ いやあ、いくよ、一つ！」

「二つ！」

「三つ！」

『……………う、うふふ、あははあはっ！』

さつきまでの緊張や不安はどこに行ったのか、三人は揃って笑い出した。

もはや、彼女たちの顔に陰りはない。

あるとすれば、今を楽しもうとする少女の眩しい輝きである。

「ム、sのファーストライブ、最高のものにしよう！」

「うん！」

「勿論です！」

そして、幕開けのブザーが鳴った。

広がるのは、暗い座席の列。

沸き上がる拍手も聞こえず、底なしの闇が広がるばかり。

—— いない。

—— 人がいない。

—— あるだけは、静寂な空間のみ。

そう、思っていた。

「始まった！」

「にやう、いるのが凜たちだけだからほんとにやるのか不安だよ」

「凜ちゃん静かにつ！」

「ごめん、かよちゃん！」

そこに、いてくれた。

列の真ん中に、ぼつんと。

以前、校門の前であつた大人しそうな眼鏡の少女と、猫のような元気な子。たつた二人だけど、だからこそ直ぐに見つけた。

嗚呼——、自分たちを待ってくれた人がいた。

何故、自分たちは不安で忘れてしまったのだろうか？

来てくれると、二人の少女は約束してくれたではないか。

感極まった三人が涙でメイクを汚す前に、互いを握り合う。

三人の心は一つだった。

これじゃあ、失敗できないね。

ええ、私たちを見に来てくれた人のために。

うん、最高のライブをしよう！

【Music start——START：DASH!!】

静かにピアノのイントロが流れ、高らかに乙女たちが叫ぶ。

ことりが歌い、海未が歌い、穂乃果が歌い、三人が歌う。

何度も練習した踊りを、全力で披露した。

彼女たちはテレビで流れるプロのアイドルなど比べるまでもなく、同じスクールアイドルと比べても拙いところが目立つ。見るものが見れば、素人丸出しの演技だ。

だけど、彼女達は全力で舞い踊る。精一杯の笑顔を浮かべながら、声の限り歌った。

ゆえに、輝いている。

多く者を魅了するトップアイドルの眩しきとは違い、すぐにも見落とした小さな光だが、眺めた者の心に灯すものがあつた。

最初からライブに来ていた二人の少女は目を輝かせ、心から楽しんでおり、彼女たち

以外にも人が徐々に増える。

ある少女は、人目を避けながら入り、椅子の背に隠れながら見つめた。

ある少女は、中に入らず、壁越しに耳を傾けていた。

ある少女は、気恥ずかしさで中に入らなかつたが、入り口から様子を覗う。

ある少女は、音響と録画しているヒデコの元に現れ、静かに三人のライブを遠くから眺める。

ある少年は、背中に数人の少女たちを引き連れて、三人の歌を見守つた。

最初は二人しかいなかった講堂も、数人であるが増えた。

だが、ライブをする三人はそれに気づかない。

彼女達は今、自分の演技に夢中である。

曲が終わり、人が増えたことに気づいたのは、演奏が終わつた後であつた。

三人は人が増えることに驚きつつも、揃つてお辞儀すると小さな拍手が響く。

彼女たちは顔を上げ、改めて周りを見渡す。

花陽と凜は笑顔で拍手してくれていた。ライブの手伝いをしたヒデコ、フミカ、ミカ

もいつの間にか講堂に訪れ、拍手で三人を労う。入り口まで来ていた真姫も中に入り、

静かに拍手していた。

更に、片隅で苦笑しながら拍手をする色明を海末が見つめ、彼の後ろにいるのが自分

を閉じ込めた少女たちだと気づいた。

少女たちは申し訳なきように泣きながら、小さく拍手をしている。

それだけで、海未は彼女たちを許してしまった。

勿論、言いたいことはあるが、自分たちのライブで何かを感じ取ってくれたのだ嬉しかったのだ。

今はそれだけで海未は満足した。

充実した気持ちで海未の胸で満たされたとき、こつこつと彼女たちに近づいてきた少女に穂乃果が気づく。

「生徒会長……」

「どうするつもり?」

生徒会長、絢瀬絵里。アイスブルーの美しくも冷たい瞳が、三人を射抜く。

彼女は三人のアイカツに反対的であり、今回やってきたのも、単なる様子見である。

結果は言うまでもなく、失敗。絵里としてはここまでと判断していた。

「続けます」

だが、穂乃果が叫んだ。

「何故? これ以上続けても、意味があるとは思えないけど」

「やりたいからです!」

再び穂乃果が叫ぶ。

彼女は今湧き上がってる思いの丈を言葉にする。

「今、私もつともつと歌いたい踊りたいと思つてます。きつと海未ちゃんもことりちゃんも！」

同意するように海未とことりが微笑む。

穂乃果は二人を笑つて見た後、改めて絢瀬絵里に瞳を向けた。

「こんな気持ち初めてなんです！ やつてよかつたつて本気で思つたんです！」
練習して、身体全部を出し切つた爽快感。今にも倒れそうな体を、貰つた拍手で支える。

全部が、初めて経験したことだった。

「今はこの気持ちを大事にしたい。このまま誰も見向きしれないかもしれない。応援なんて全然してもらえないかもしれない。」

でも、一生懸命頑張つて、私たちがとにかく頑張つて、届けたい。
今、私たちがここにいて、この思いをつ！」

穂乃果が言葉にした全ては海未の気持ちを同じだった。

それは、ことりも同様であり、三人は互いに握り合う。

「いつか、いつか私たち必ず、ここを満員してみせます！」

「なるほどね……」

すると絵里は穂乃果たちから目を逸らし、講堂の片隅に視線を向ける。

「丁度いい所にいたわね、新田君」

絵里の言葉を聞き、そこでようやく穂乃果をことりはその存在に気づき、呼ばれた色明は怪訝そうな顔を浮かべる。

絵里は生徒会長という立場だけあって、特待生である色明とは既に最低限の面識があった。

当然ながら、彼の素性も知っている。

「プロの貴方から見て、彼女たちのライブはどうだった？　ここを満員にできそう？」

「……………、初めてのライブにしては悪くないと思いますよ。ここの満員も、頑張ればできるとは思わないですかね」

色明の言葉に、海未たち三人は安堵したように微笑む。

何故なら彼は有名のプロの歌手である。その言葉ならば、かなりの説得力があるろう。

「そう。じゃあ……………」

聞いた絵里は特に感じるものがなかった様に、次の質問をする。

「彼女たちのアイカツで、廃校を阻止できるほどの人が集まると思う？」

先ほどよりも重い問いだった。

場が一瞬で緊張したものに変わる。

誰もが色明に目を向けてる中、彼は考える素振りの間もなく、答えた。

「いや、無理でしょ」

ガラスが割れた時のように、周りの空気が静まる。

色明の後ろにいた少女たちが、何か言いたげに睨んでるが構わず彼は話を続けた。

「俺も詳しくは知らないですけど、人を増やすのは数十人そこらじゃあ足りないですよね？」

「そうよ。少なくとも、学校存続のためには百人を軽く超えなければ駄目ね」

「なら、やっぱり無理すね。足りないものが多すぎる。奇跡でも起きないかぎりね」

「だったら、その奇跡を起こしてみせましょう」

口を挟んだのは海未である。

『海未ちゃん……』

心配そうに二人の幼馴染が彼女を見つめた。先ほど豪語した穂乃果も、流石に玄人である色明の否定に堪えたのだろう覇気を感じられない。

海未はそんな二人に微笑んだ後、色明に真っ直ぐな視線を向ける。

彼女の瞳を見た色明は、苦笑しながら彼女に尋ねた。

「奇跡っていうのは、起きないから奇跡なんだぜ？」

「違います。起きるから奇跡なのです。でなければ、奇跡という言葉すらこの世に存在しなかった」

凜とした揺ぎ無い言葉に、色明は目を丸くして驚く。

そして、彼はにやりと笑った。

「ならば、奇跡を起ここしてみせると言ったその覚悟。証明してもらおうか」

「望むところです」



「愚者のカード」

外の壁に背を預けて講堂の会話を聞きながら、生徒会副会長、東條希は一枚のカードを懐から抜き取った。

「敗北からの始まり。そこからの未知。ふふ、面白いことになりそうやん」

6話・決意のSomething necessary

「穂乃果ちゃん、こつちこつち！」

「ことりちゃん！ 海末ちゃん！ お待たせっ！」

「ギリギリですが、約束の時間には間に合いましたね」

土曜日の昼過ぎ。週休二日制である社会人や部活動をしていない学生にとって、この日は日曜日同様に休日と等しく、外出する人の多さも必然である。

海末、穂乃果、ことりの三人たちもある場所に向かうため、駅で待ち合わせをしていた。

三人とも制服ではなく外出用の装いであり、普段とは違う魅力をそれぞれ醸し出している。

何人かの通行者は、目に麗しい彼女たちに気づいて、視線を変えているが、反応はそこまで。

あのファーストライブはネットで公開しており、評判は概ね一応良好であり、スクールアイドル公式ページでのランキングも徐々に上がっている。

だが、まだ上には上がっているのが今の現状であり、通行中に呼び止められるまでには至

らない。

まだまだアイカツが必要な彼女たちμ sであるが、今日は練習はせずに遠出する。ただし、彼女達は目的地を知らない。

「新田くんは？」

「もうすぐ着くそうです」

きよろきよろと周りを見渡す穂乃果に海未が答えた。

彼女たちをここに呼び出したのは、本来女子高である音乃木坂に現状唯一通う男子生徒、有名シンガーソングライターの新田色明である。

プロの歌手である色明は、μ sの目的である廃校阻止の覚悟を試すため、この場所に集まるよう彼女たちに言い渡した。

当然ながら、拒否することもできたが、プロである彼に認められたら自分たちのアイカツにも拍車が掛かると考えた上、一度三人で相談した後、その提案を受け取ったのである。

「仕事終わってからすぐにここに来るんだよね。大変だね」

「本来なら私たちとは比べにもならないほど忙しい身。私たちを試すとはいえ、時間を作ってくれたことを考えれば、申し訳なく感じますね」

「いや、元々今日は午後からオフにしてたし気にする必要ないぞ」

ことりの言葉に海未が考えさせられたところで、声が聞こえた。

三人が振り向くと、見知らぬ男が立っている。

明るい金髪に色つきのサングラスの青年。

外見では誰も見覚えなかった。だが、先ほどの声と文脈で海未は何者かと悟る。

「一応確認しますが、新田さんですか？」

「おう、正解」

海未の言葉に男、色明は愉快そうに笑う。

「ていうか、初めて園田に名前で呼ばれたな」

「そうでしたか？ それよりも……………それは変装ですか？」

「ああ。普段はここまでしないが、今日は徒歩と新幹線で人が多いとこにいくからな。

念と為」

「人が多い場所ですか。結局、私たちを何処に連れて行くつもりですか？」

「それは行ってからのお楽しみという事です。心配しなくても身売りまがいなことはないぞ」

「誰もそんなことは心配してません」

「ことりちゃん、『みうり』ってなに？」

「悪い人のところに連れて行かれるの。穂乃果ちゃんがそうだったら、ことりが助ける

からね」

「ありがとう！　なら、穂乃果もことりちゃんや海未ちゃんはそうだったら、絶対助けるね！」

「うん！」

「……………、随分と仲良いんだな」

『幼馴染だからね！』

ふわふわな空気に色明が何とも言えなさそうな顔を浮かべる。

「ほら、二人ともじゃれてないで行きますよ」



仲良し幼馴染三人組と少年歌手の一行は、新幹線に揺られながら目的地に向かう。

「？」

座席でこの前のライブのことを話している穂乃果とことりを正面から海未が眺めていると、携帯が震えたので確認してみると、隣に座る色明からのメッセージが届いていた。

すぐに海未は自分の横に立つ少年に顔を向けるが、色明は携帯を見たままでこちらを向かない。

不思議に思いながらも、海未は色明から届いたメッセージを確認する。

『あれから、あのお嬢さんたちとはどうだ？』

それを見て、内緒話だと解った海未はほそく笑みながら、メッセージを返す。

『特にこれといって問題はありません。平和なものです』

ファーストライブした後日、海未は自分を閉じ込めた少女たちに会った。

驚くことに実行犯二人以外にも、企てた人間が多くいたのである。

考えてみれば、自分が弓道場から出たタイミングも合いすぎており、首尾よく体育倉庫の鍵を入手しててことを考えれば他に人がいても不思議ではない。

その中には以前、色明に文句を言った少女たちもいたのは今でも驚きである。

彼女たちに話を聞くと、以前から海未がアイカツしてることに反対だったらしい。

理由は海未がスクールアイドルに乘気でなかったこと。高坂穂乃果に無理やりつき合わされてるだけだと、不満を抱えていたのである。

最初の頃は本当のことなので、海未はそのことに関しては何も言わなかった。

だからと言って、彼女たちのやったことが認められるわけではない。

自分たちの考えだけで海未の意思を反し、事が明るみになれば大問題に所業を起こしたのは事実である。

けれども、海未は彼女たちを罰さなかった。

許したわけではない。

公になれば、sの今後に響くという打算もあるが、何よりこれは自分の弱さが招い

たこと。

入り口はどうあれ、海未はスクールアイドルをすると決めたのだ。

高坂穂乃果の無鉄砲な行動に迷惑してるのは事実だが、周りから見ても解るように真摯な態度でアイカツを初めからしていたら、彼女たちもあのような真似をしなかったかもしれない。

彼女達なりに自分を思っただけ行動をしてくれた。

よって海未は「仏の顔も三度まで、次は許さない」とだけ言った。

甘いと馬鹿にされても仕方ない判断だ。

だが、当の本人がそう言った以上、加害者が求めても応じるわけにはいかない。

閉じ込められたときは本気で相手を憎んだが、自分たちのライブを見て涙する姿に憤りが消えたのも事実である。

罪を憎んで人を憎まず、その言葉を体現した海未に少女たちの心は打ち震えたのだ。た。

『今後は私たちのアイカツも応援すると言ってくれましたし、一人一人からお手紙も貰いました。ファンレター、とは違うかもしれませんがライブのことも褒められてたので嬉しかったです』

『雨降って地固まる、というわけかねえ。無理に険悪になるよりかはマシだな』

『私もそう思います』

そうメッセージを送ったあとで、海未は隣を見た後、再び携帯の画面に視線を落とす。

『貴方には、本当に感謝してます』

『おいおい、いきなりどうしたんだ？』

『貴方が助けてくれたから、私たち三人でライブができました』

迷いつつも、そのまま海未はメッセージを送り続ける。

『あの日歌えなかったら、私は彼女たちと自分を一生恨むことになったでしょう』

本当は声に出して届けたかった言葉の数々。

何度か言おうとしたのだが彼は仕事で頻繁に学校からいなくなる。

だから、ずっと機会がなかった。今日のために海未は連絡先を交換していたが、できれば面と向かってと思っていたところでのこのような形になったしまった。

本意ではないが、このまま気持ちを伝える。

『ありがとうございます。どれほどお礼を重ねていいのか、解らないほど』

再び海未は色明の顔を覗いた。彼女の視線に気づいてないのか、彼は視線を携帯に向けたままにやりと笑っていた。

次の瞬間、携帯に反応があったので海未は視線を下ろし、色明から届いたメッセージを見る。

『俺が何もしくなくても、園田は土壇場で間に合ってたさ』

ふざけたようにデフォルメされた鳥が「やれやれ」と呆れるスタンプが流れた。

『そうだったら、後でぶっ壊れた倉庫の扉をどうやって言い訳するか慌ててだろうよ』

『なんですか、それは。茶化さないでください』

『茶化してないさ。実際、倉庫の扉をぶっ壊してでもライブしようとしたのは事実だろう』

『確かに、そうですが』

何やら釈然しない海未はぶくくと頬を膨らませた。目の前にいる穂乃果とことりが気づけば、何事かと驚いてたに違いない。

『つまり、大それた感謝なんざ必要ないってことさ。礼一つ言われたら、それで終わりだよ』

そのメッセージを見て、海未の体が少し固まり、次に苦笑を浮かべる。

この人は、憎まれ口を言いながら随分と相手を気遣う。

出会ったときから変わらない在り方に、海未の気持ちしが和らいだ。

『やっぱり、貴方は優しいんですね』

今度は色明が固まるほうだった。

海未のメッセージを見た色はしかめっ面を浮かべて、即座に携帯を操作する。

『おいおい、随分と評価してくれてるな。これからアンタらに厳しい現実を直視させる相手によ』

『何を見せるかは解りませんが、貴方のことだから受け入れるべきものなのでしょうね』
『短い付き合いで信用されたもんだな、俺』

「さて、時間だな」

再び呆れた鳥のスタンプが流れると同時に、色明の声が三人に届けられる。

「次だ。そろそろ降りる準備しろよ」



電車から降りた瞬間から人が多かった。

ここが終点なのかと思ひ違いを抱くほど、ホームに人が流れる。

改作口から出ると、更に人波が目立ち、ほとんどの人間が一つの方向に向かっていった。

「何かのイベントかな？」

「もしかして、スクールアイドルの？」

当然の感想を口にしたことりの後に、穂乃果が思いつきの言葉を出す。

しかし、それを海未がすぐに否定した。

「いえ、それにしても人が多すぎます」

スクールアイドルは確かに人気であり注目されているが、ほとんどが只の学生だ。余

程の資産家の子息か学校からの支援がない限り大規模なイベントは起こせない。

現在、スクールアイドルの頂点である《A—R—I—S—E》というグループならば、プロアイドルに匹敵する実力と所属する学校側の援助で大規模なイベントも引き起こせるが、尋常ではない人の増加を目の当たりに、彼女たちの可能性すら消えた。

ならば、これらだけの人を集めた存在は、常軌より遥か高みに域いる。

「あつー！ もしかしてー！」

先に気づいたのはことりだった。

ことりは周りの人が抱えてる手荷物や服装から、その存在を察する。彼女はライブ衣装を作る際に、『彼女たち』が着たものを参考にしたのだ。

いや、そんなことをしなくとも、その星はテレビを見たことあるものならば誰もが知っている。

「ま、まさか——」

次に解つたのは海未だった。

彼女は弓道で養われた視力を持って、遠くの看板にあった名前を見たのである。

海未はあまりテレビを見ないが、ニュースや新聞で頻繁に取り上げられてるので、意識せずとも既知となる。最近では歌詞作りの参考ため調べたこともあった。

彼女たちことは乙女たちが夢見る、尊き偶像の象徴。

結成して三年あまり。

短い期間ではあるが数多の芸術家を凌駕し、魅了し、赫耀たる活躍はとどまることを知らず、マイクを棄てようとしたアイドルたちに、今一度の希望すら与える暖かき天日。幼き少女たちが憧れ、けして認められずとも自分たちの力でアイドルになろうとしたのは、彼女たちの憧れだった。スクールアイドルになった理由が、その夢を忘れられなかった者も多い。

アイドルの世界において知らぬものなどいない。新しい伝説を作り手。

尊きも眩しき光——『太陽』を意とする、其の名は。

「Soleil」



芸能事務所と教育機関が複合したスターライト学園に所属する霧矢あおい。

同じくスターライト学園に所属し、トップモデルとして活躍する紫吹蘭。

そして、アイドルランキング一位、名実のトップアイドル。

二人と同じく、スターライト学園所属の星宮いちご。

Soleilとはこの三人で構成されたユニットだ。

結成して約三年ではあるが、活動期間は更に短い。

メンバーである星宮いちごが一年間アメリカ留学した空白期間があり、活動再開当初

もトップアイドルグループとはまだ言い難かった。

しかし、メンバーである星宮いちごが去年アイドルランキング一位になったことや他の二人の活躍もあり、グループとしても注目が卓越するほど高まった。

現在は全国五大ドームのライブツアー、《ソレイユ アワードリーム》を行っている。

その一つである名古屋ドーム開催ライブに、μ's 一行は新田色明に連れて来られたのだ。

「二時間以上新幹線を乗せられて何処に向かうかと思いましたが、予想外です」

「すごい！ す〜すごいっ！」

驚きを通り越して呆然とする海未と違い、穂乃果は賑やかにはしゃいでいた。

μ's の三人と色明がいる場所はVIP用の個室である。

大きな窓から会場の様子が一望でき、公演が始まれば近くに設置されてるモニターで近距離からの様子も見れるのだ。

「見て見て、ことりちゃん、海未ちゃん！ ここから他のお客さんも見れるよ！」

「もう、穂乃果っ！ 少しは落ち着いてください、はしたないですよ！」

「まあ、まあ、海未ちゃん。こんな凄い場所なんて普通は来れないから、穂乃果ちゃんの反応も無理ないよ」

「それはそうかもしれませんが、物事には限度があります。今は私たちだけです、新田

さんがいる前でそういった態度は——」

「俺がどうしたんだ？」

そこで、一旦席を外していた色明が戻ってくる。

「おかえり！　ねえねえ新田君！　そこにある冷蔵庫の飲み物って飲んでいいの？」

「かまわねえよ。それ込みのこの席だし」

「やった！　海未ちゃんことりちゃんはなに飲む？」

「えっと、何があるのかな？」

「もう、二人たら………」

興奮が留まらない穂乃果とそれを楽しそうに眺めることり。海未は溜息を零しながら、ちらりと色明に視線を向ける。

「すみません、身内がお恥ずかしいところを………」

「別に普通だろ。ライブは楽しむ場所だし、開始前は落ち着かないのも当たり前だ」

「そう言ってくれると助かります。しかし、よいのですか？　私たちにこんな席を。新幹線代も」

色明が準備したこの席を用意するには、相応の金額が必要のはずである。

道中の交通費も色明持ちであり、本人が言い出したこととはいえ、海未は気が引ける思いで一杯だった。

そんな海末に対して、色明は苦笑しながら肩を竦める。

「いや、元々家族と行くつもりだったが、無理になったしな……………」

「ご家族と、来るつもりだったのですか？」

「ああ。姉がいるんだけど、最近急に忙しくなったから来れなくなったんだよ」

苦笑したまま色明は溜息を吐き、話を続けた。

「で、それなら他の友達でも連れて行けって両親に言われてね。お父上殿とお母上殿は、姉を除け者にして自分たちだけ楽しめないそうだ」

「それは貴方もじゃないですか？」

「あっ?」

思わぬ言葉に色明が顔を顰めると、海末は面白そうにくすりど笑った。

「だって、お姉さまが行けなくなつたと言つたとき、とても残念そうな顔してましたよ?」

「はいはい、そうですか。どーせ、俺はシスコンですよ」

よく言われてるのか、色明は不貞腐れたように顔そむけると、海末はまたくすりと笑う。

「誰も馬鹿にしてませんよ。家族思いでとても良いと私は思います」

「そうですか。それは、ありがとうございます」

「何ですか、その言い方？」

極端に冷めた丁寧語を聞いたため、海未は思わず首を傾げる。

「別に。ていうか園田は普段からこんな喋り方だろうが……」

「私はそのように適当な態度をしてません」

「悪かったな。話は戻すが、家族と来れなくなつたからといって転売するのもマナー違反だし、都合がいい友人がいなかつたんだ。で、丁度有効利用できることになつたから万々歳なわけよ」

そうやって、色明は探るような目で海未を見つめた。

「気にせず楽しんでくれるとこっちも楽だ。Soleilのライブには興味ないかい？」

「いえ、そんなことはありません」

少し前の海未であれば有名なアイドルグループのライブだとしても、興味がなかつたので気は乗らなかつただろう。

だが、己がアイカツすることで、それまで関わってこなつたアイドルというものから触れ始めてる。

今の海未なら、このSoleilのライブはとても良い経験になる。そう確信していた。

「アイカツを始める前からメンバーの星宮いちごさんには興味ありましたし」
「……」

「楽しむと同時に勉強もさせていただきます」

「勉強、ねえ」

海末の言葉を聞いた色明はニヒルな笑みを浮かべた。

「なら、余計に都合がいい」

「ん？ どう言った意味ですか？」

「いや、特になにもないね。とりあえず、純粹に楽しんでくれるなら助かるよ」

「ええ。折角ですし楽しみましょう」

ここで海末も本腰を入れてライブを満喫することにした。

「ついでに貴女のお姉さんの分まで。一番ライブに行きたかったのはお姉さまでしょうし、代わりに行った者がライブを心から味わなければ、お姉さまも浮かばれませんよ」
「死んだような言い方止めてくれ。それに、家族で一番ライブに行きたかったのは俺なんだからよ」

「おや？」

「親が姉も興味がないわけじゃないが、そもそもライブに誘ったのは俺だし」

「ほう……」

確かに、このVIP席を準備するのは相応の資金が必要であり、有名な歌手である色明ならばかなりに稼いでるはずだ。

そして、自分が行きたいから、こんな席を準備したのは筋が通る。

彼は有名人。万が一、見בלれたときのことを考えると、当然の配慮である。

しかし、海未には意外だった。

「ほう……」

新田色明という少年は、本人が有名であること以外にルックスも良いので学校では人氣である。

しかし、回りの少女たちに笑顔は振りまくも、基本は営業スマイル。

踏み込んできた者にたちしては、慣れた様子で流していることを隣席である海未は知っていた。

だが、そんな彼でもアイドルのファン、つまり、年頃の少女に少なからず興味があるわけだ。

流石に恋愛方面まで飛躍させないが、何かしらの感心があることに、海未は驚きつつ理解する。

Soleilのメンバーの顔は雑誌や映像で知っている。

そこいらの娘に比べるまでもなく可愛いし、綺麗だ。年頃の少年が夢中になるのも仕

方ない。

「貴方も男性なんですね……」

「なんだ、その目は。誤解されてる気がするぞ」

「大丈夫です。殿方ならば普通であると理解してますとも。偏見は持ちません」

「既に偏見持つてますよねっ！」

「ほら、そろそろライブが始まる時間ですよ。貴方が大好きなアイドルを席に座つて見ましようね」

「いや、先に誤解を解いてだな——」

「新田君、静かにつ！ もうライブが始まるよっ！」

「……………、わかったよ」

先ほどまで一番騒がしかった穂乃果に注意されたので、色明は消沈し、とぼとぼと席に座る。

それを見届けた海未は思わず微笑み、自分も決められた席に座る。

数十秒後——、ライブが始まった。

【Music start——ダイヤモンドハッピー】

軽快なドラムと共にスモークが吹き上げ、三人の少女がステージの下から飛び上がつて現れる。

観客は喝采と共にライトを振り上げ、それを眺めることり、穂乃果、海未も目を輝かせた。一瞬で盛り上がった会場の空気はガラス越しにも伝わってくるが、それは瑣末なこと。三人は体の熱を上げて、Soleilのライブに見惚れていた。

星宮いちご、霧矢あおい、紫吹蘭の三人がステージで輝く。

微笑みは名の如く太陽に温かく輝き、歌声は大きな会場全体に広がり、感動は感動を伝播させた。動きの一つ一つが可憐で、目を離すことができない。

これがアイドルなのか。これがプロなのか。そんな言葉は下賤である。

これがSoleilなのだ。これが星宮いちご、霧矢あおい、紫吹蘭なのだと刮目せざるえない。

絢爛な演出は散りばめられた宝石、あるいは流転する星々の天空の如き輝き。滄桑之變の演奏は歌に更なる色彩を与える。身に纏うドレスはどれもトップデザイナーが縫い合わせた芸術の数々。どれ一つとっても見事としか言えず、それら全てが三人に花を添えていた。

譬え、彼女たちが各々一人になったとしても、ライブの盛り上がりは変わりない。三人三色、各々の魅力を十二分に引き出して、会場の熱に拍車を掛ける。

ファンにとって祝福の時は光の速さのように駆け巡り、ライブが終わる頃だと気づいたときには必死でアンコールを叫んだ。

それは、VIP席にいた者たちも例外なく、今一度彼女たちを観客が求め、それに応えたSoleilがステージに再臨する。

『みんな、ありがとうっ!』

真正正銘、最後の一曲が終わるとSoleilの三人は会場にいる全ての人間に心からの感謝を伝えた。それは見てくれた観客だけではなく、協力したスタッフや演奏者にも送られた真心である。

約三時間ほどのライブは瞬間に終わり、Soleilの三人が完全にステージ上から姿を消し、スタッフに退去を命じられた頃になっても熱気は収まっていなかった。

当然、VIP席にいた三人の少女たちもライブの興奮が残ったままだった。

「うわあああ、すごかったよおおお!」

「穂乃果たら、今日はそればかりですね」

「でも、すごかったものはすごかったもん! 海未ちゃんもそう思うでしょう?」

「それは、はい。圧倒されました」

「ことりも! 歌や踊りもそうだけど、お洋服もキラキラで可愛かった!」

「楽しんでくれたようで、何よりだ」

感想を言い合う三人へ色明が割って言葉を紡ぐ。

「あれが大勢に注目させるアイドルだ」

『?』

色明は静かな瞳で彼女たちを見つめる。急変した様子に、三人は戸惑いを隠せない。先ほどまで感じた興奮がそれによって完全に冷めた頃、再び色明が口を開いた。

「つまり、大衆に注目されるアイドルをするならば、アレくらいを指さないとけない」

「え? でも、穂乃果たちはスクールアイドルでSoleilはプロの——」
「関係ないな」

切り裂くように断じた色明の言葉に、三人の少女たちの顔が強張る。

「甲子園目指して励む野球する奴らは、みんなプロになりたいから必死に努力する。だから、応援されて関心を抱かれる。それと一緒にだよ」

そこで、海未は色明言いたいことが全て解った。

「スクールアイドルというのはプロを目指してる奴らが殆だ。目立つ奴は尚更な。廃校を阻止するほどの興味を人に持たせたいなら、そいつらを出し抜かないと無理だぜ」

それは以前、海未が穂乃果に言ったことでもある。

スクールアイドルを本気で取り組んでいるものは、アイドルというものに憧れを抱いてるから。

中には遊び半分でやっているものもいるだろうが、いつかはプロのアイドルを夢見て

努力する者がいる。そのような者こそが、他人に感動され、声援を受け取り、賞賛を浴びるのだ。

「同じスクールアイドルだけを見てるならば、一生そいつらの後ろだよ。学校救うために切磋琢磨励むなら、まずはSoleilほどの頂点目指す気概が必要だぜ？」

誰も言い返すことはできない。

色明が言っていることは事実である。

既に生徒数が少ない学校をこれからも存続させるためには、よほどの注目を集めなければならぬ。単にスクールアイドルするだけでは足りないのだ。

学校を選ぶということは、ライブに一度出かけるとは違う。

高校三年間という歳月と今後の人生を左右する大事な分岐点。

それを多くの誰かに選ばせるほどの魅力を持たなければならぬということは、自分たちが最初に歌った講堂を満員にするだけでは不十分なのである。

それこそ、先ほど見たSoleilのような大勢を魅了する輝きが必要なのだ。

普通に考えて、殆ど素人の人間が並大抵以上の実力を身に付けるのは非常に困難。

時間をかければ、叶うかもしれないが既に廃校が目前の今、その時間すらない。

ゆえに、奇跡が起きないかぎり不可能だと、色明はファーストライブの後で言ったのだ。

実際、今いる μ 、sの三人だけでは、どれだけ努力を重ねても不可能である。突きけられる現実。

海未は拳をぎゅつと握り締め、ことりは口を引き締め、穂乃果はじつと色明を見つめた。

「新田君……………」

「なんだ？」

「ありがとう！」

花が咲いたような笑みだった。

一瞬、色明は一言葉を失い、思考停止に陥る。正常に戻った彼の精神は驚愕と混乱である。

どう反応すべきか口籠る色明の前に、穂乃果はやる気に満ちた顔で両脇を締めた

「そうだよね！　すごいスクールアイドルたちはSoleilみたいなトップアイドルを見て頑張ってるんだから、私たちも同じ——ううん、それ以上に頑張らないと！」
「……………解ってるのか？　それがどれだけ無茶で無謀で無理なことか？」

「そんな言葉はスクールアイドルを始める前から言われてるよ」

スクールアイドルを提案したときは、いまメンバーである海未にも否定された。生徒会も快く思っていない。

「でも、やるって決めたんだ。やるったらやるっ！ だから、解りやすい目標ができて嬉しい！ あのSoieikiくらい沢山の人を感動させることができたなら、学校を救えるぐらいの人も必ず集まるよ！」

「無茶苦茶だなあ……」

「でも、意気込みは認めてくれるでしょう？」

呆然とする色明にそう言ったのは海未だった。

「私も同じ覚悟です。当然、ことりもですよね？」

「うん！ 穂乃果ちゃんと海未ちゃんとなら何処まででも！」

「お前ら……」

色明はSoieikiのライブを見せ、廃校阻止にはどれだけの力が必要なのか知らしめたかった。

意気消沈して、彼女たちが折れることになっても構わない。

歌の世界にいる色明は、彼女たちと同じような人を見てきた。

頑張っても報われず、挫ける姿は痛ましい。

だからこそ、最後に絶望するくらいであれば、傷が浅いうちに終わってほしかったのである

しかし、今の彼女達はどうか？ 失意のどん底に落ちるところか、燃えているではな

「——ははは、それはそうだなっ！ ああ、本当に俺の完敗だ！」

心の其処から愉快そうに少年の笑顔に、少女たちは茫然とする。

年相応よりも子供っぽい無邪気な笑い顔は、メディアや学校でも見せたことない、彼の素顔の一つだった。

「うん、解かったよ。お前たちの決意。必要なら奇跡すら起こしてみせようって覚悟、しっかり伝わった。頑張れよ、応援してるぜ！」

破顔する色明に、μsの三人は声を出して歓喜し、安堵を抱く。

プロからの、社交辞令や気遣いではなく、真正正銘の声援。

それは歩き始めたアイドルたちにとって、掛け替えのない激励であつた。

「でも、実際どうするんだ？ 今のままだアイカツするだけなら、結果は目に見えてるぜ？」

気持ちだけで旨いかないのは、あのファーストライブで痛いほど身にしてみた。

もしも、二人の少女が最初から見に来てくれなかつたら。予め、海未が忠告していなかつたら。自分たちは幕が上がった途端、誰もいない場所で挫けていたかもしれない。

Soleilのライブ、脚光を浴びる存在、多くの人々から賞賛を貰うにはどうしたらよいか。

まず最初の近道を示したのは、一人の少女だった。

「なら、新田くんだ歌を教えてくださいませんか？」

「ことりちゃん？」

「ことり!?!」

驚く他の二人を余所に、ことりは新田を見つめて言う。

「応援してくれるんだよね？　だったら、新田くんが歌を教えてください。テレビとかでしか聴いたことないけど、新田くんの歌がとても凄いつて、みんな知ってるよ」

「ことり、それは……………」

ことりの提案に、苦渋の色を顔に出したのは海未だった。

海未も色明の歌は知っている。妙な縁で、直接聴く機会もあった。

彼の歌は、心から素晴らしいものと認めている。

プロの中でも実力派。そんな彼に歌の指導を受けられることができたらならばと、海未も一瞬考えはしたが、相手は自分たちとは違いプロなのだ。

学校を仕事で抜けるほどの多忙な人間に、他人を指導する余裕があるとは思えない。

「彼はプロですよ？　私たちに歌を教える暇など」

「いや、かまわない」

「え!?!」

ことりを諭そうとしていた海未は、色明の言葉に耳を疑う。

「い、いま何と言いましたか？」

「だから、かまわないって。歌の指導だろ？ それくらいなら、手伝っても問題ない」

「本当に！ やったね、ことりちゃん！」

「うん！」

喜び合う穂乃果とことりだったが、海未は不安げな顔で色明を覗つた。

「大丈夫なんですか？ よく学校を抜け出して、お忙しそうに見えますけど」

「最近はな。けど、今日みたいに休みがとれるくらいの余裕はこれからはできるのさ。

仕事がないわけじゃねえが、お前らのアイカツは手伝つてやるよ」

「貴方がそう言うならば、よろしいですが………」

「なんだ？ 園田は俺が歌を教えるのは不服か？」

「そ、そんな訳ありません！」

海未もできたら彼に教わりたいたいと考えていたのだ。

本人が承諾するのは正しく望むところなのである。

「貴方のご教授を受けられるならば、私たちのアイカツは更なる飛躍を遂げるでしょう。何卒、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いします！」

「かったくるしいなあ……。同い年なんだしよ、そこまで謙るのは勘弁してくれ」

「わ、わかました。善処します」

「もつとも、指導を緩める気はないがな。やるからには、俺も廃校阻止を目指す」
少年の意気込みに、少女たちは目を見開き、感動した。

色明としても自分が助力して、駄目だったとは後味が悪い。

彼にとつて音ノ木坂はただ籍を置くだけの思い入れもないにもない場所だった。

しかし、彼女たちを手伝うと決めた以上、自分も同じ覚悟、同じ場所を目指すことにした。

ならば、できることは何でもしよう。

歌だけではない。可能な限り、己が行動できることは何でもする。

「他のことをも口出しするし、キツイことも要求する。さて、これでも俺の指導が欲しいか？ 取り消すなら今の内だぜ？」

「望むとこだよ！ ガミガミ言われてるのはもう海未ちゃんで慣れてるし」

「ほう、そうですか」

跳ね除けるように言った穂乃果の言葉だったが、それが海未の感に触った。

「私に言われてるのは慣れてると、そう言いましたか？」

「う、海未ちゃん？」

ぎろり、と睨む海未に怯える穂乃果。そんな彼女に海未は淡々とした口調で語りかける。

「私に言われ慣れてるならば、どうして練習のときは文句ばかり言うんですかね？」

「い、いや。でも、最終的にはやって——」

「注意されてやるのは当然です。それでも、毎度毎度注意されるのは何故ですか？ ア

イカツ以外は注意してもできてない。遅刻宿題忘れ物。何時になつたら直るのです？

それとも慣れてるから、私の言葉では何も感じないのですか？ だいたい、穂乃果は

——

「ひいひい！ 海未ちゃんがお説教モードだあ！ 助けて、ことりちゃん！」

「また、ことりに助けを求めて、情けない！ 先ほどの勇ましさはどこにいったのですか

！」

「ははは………まあ、まあ海未ちゃん落ち着いて」

「……………」

いつの間にか置いてけぼりにされた色明は、三人のやり取りに呆然する。

これから先、何度も見ることになる光景を前に、やれやれと色明は溜息をした。

せつかく落ち着いてきたのに、これからしばらくも忙しくなりそうだ。

しかし、悲嘆することはなく、彼は期待に満ちた顔で彼女たちに告げた。

「なんであれ、これからよろしく頼むわ、μ sの諸君よ」

7話・日輪遭遇 I, I'll know its meaning later.

「さてと、そろそろ帰るぞ」

トップアイドルグループの一つである、Soleilのライブが終えた後のVIP席。

音ノ木坂のスクールアイドル、*M* *S*をここ招き、彼女たちの協力者になったの少年、新田色明は帰りを促す。

「新幹線の時間は決まってるんだ。おちおちしてたら、車内で駅弁が夕飯になるぞ。せつかく、名古屋まで来たんだから、俺としては御当地ならではの食事がしたいだが」

「はいはい！ 穂乃果、味噌カツとひつばぶしが食べたい！」

「ことりはいろいろなと鬼まんじゅうが食べたい！ 駅のお土産屋さんにあるかな？」
両手を上げた穂乃果の主張に続き、ことりも自身の要望を声に出す。

それを聞いた穂乃果が不思議そうにする。

「ういろいろは知ってるけど、鬼まんじゅう？ すごい名前だね。鬼さんの形でもしてるの？」

「穂乃果ちゃん。鬼まんじゅうのはね、芋まんじゅうとも呼ばれてて、簡単に説明するとさつま芋を蒸したお菓子のことだよ」

「なるほど。海未ちゃんは何か食べたのがある?」

穂乃果がそう訊ねると、海未は微妙な顔になった。

「私は食べ物よりも、観光がしたかったのですが……」

名古屋に来ると知ったとき、海未は様々な観光名所を思い浮かべた。

代表的な名古屋城を初めとした岩崎城に桃巖寺の名古屋大仏。他にも名古屋には見所がある寺院や神社があり、海未は能楽堂にも興味を持つ。

古風な家で育った海未が、古い日本文化が好きなのはむしろ当然だろう。色明に連れてかれる場所が Soleil のライブだとは知らなかった彼女は、用事を済ませた後、できることなら観光したいと僅かに期待していたのだった。

「ですが、そんな時間はなさそうですね」

現在の時間を考えると、夕飯を済ませて他を見て回る余裕はない。

勿論、Soleil のライブは観光を犠牲にしても赴く価値はあった。

観光地はその気になれば行くことは可能だが、人気アイドルのライブは行こう願っても、抽選落ちや日取りが合わないなので行くことができない悲惨な末路がある。

そして、多くの人が己こそが赴くと願った Soleil のライブに来れたのだ。僥倖

以外何ものでもない。

だが、それとは別に、あの場所は見れないと、残念な気持ちが少し残っている海未だったが。

「いや、名古屋城ぐらいなら行けるだろ」

「本当ですか!?!」

しょんぼりしていた海未が、色明の言葉で表情を輝かせた。

名古屋城は誰もが知る一番有名な場所である。

それだけでも見れたならば、今回思い残すことはなにもないと海未は期待を膨らませた。

「ああ。ここからなら、一時間程度か。帰りの新幹線は少し余裕を持たせてるし、高坂や南が食べたいメジャーな御当地ものは、道中幾らでもあるだろう。食べ歩きながら向かう手のもありだ」

「いいねですね! それで、行きましよう!」

「ははは、いきなり元気になったね。よし、Soleilのグッズを買ってから、名古屋駅を目指そうか」

上機嫌になった海未を乾いた笑みで眺めながら、穂乃果が今からの行動を決める。

しかし、それを聞いた色明が厳しい顔つきになった。

「高坂。流石に物販まで覗く暇はない。そもそも、もうグッズは完売してるかもしれない」

「ええ!? さつきライブが終わったあとだよ!」

「そういうもんだよ。グッズ販売は大抵ライブ開始前に並んでた人が買い占めて、残りも席が悪かった後列の人が買い占める。仮に残っていたとしても、そこは長蛇の列。並ぶだけ時間の無駄だ」

「ううう、せつかくSoleilライブに着たんだし、シャツとかポスターとか色々欲しかったのに……」

「なら、穂乃果ちゃん。東京に戻ったら、明日にでもアイドルショップを一緒に行こう」
今度は気落ちする穂乃果に、ことりが誘う。

「秋葉だったらライブ限定グッズも置いてあるお店もあるし、その方がゆっくり見れるよ」

「……うん、わかった! これかは目線を高くするんだから、勉強のためにも行こう!

ちなみに、こどりの言葉どおり、秋葉には特定のイベントでしか購入できない限定商品が置いてある専門店があるが、その場合は通常価格よりかなり値上がりしているのだ。

「よし、決定! 海未ちゃんも来るよね?」

そのことをまだ知らない穂乃果は、当然のように海末も誘う。

「明日ならば、昼からなら。新田さんもどうですか？」

「悪いが日曜出勤だ」

「それはそれは。お勤めご苦労様です」

「いや、慣れたものだよ」

海末が気の毒そうな顔をしたので、色明は平気そうに軽快な笑みを作る。

実際、何度かやっつてるうちに感覚が麻痺してしまい、日曜日が休日であることを時々忘れてしまうのは業界ではよくあることだ。

「んじゃあ、明日の予定も決まったし、早速名古屋城に向かおうー」

そう言いながら、勢いよく穂乃果が扉から出て行くと、色明が苦笑した。

「まあ、入り口に着いたら、三人には少し待ってもらうがな」

「何か用事が残ってるのですか？」

ゆっくり歩き始めながら色明がそう呟いたので、海末が訊ねた。

「楽屋挨拶。他の人はステージ前にしてて、俺は後でするんだよ。ライブ前に抜けていたのは、挨拶の順番を決めてたわけな」

「つまり、Soleilに会うのですか」

海末がそう口にした途端、色明が訝しむ。

「おっと、お客が業界人以外を出演者に会わせるのはマナー違反だから遠慮してくれよ」
「流石に我慢しますよ。いえ、期待してなかったのは嘘ですが」

海未が色明にそう言った、次の瞬間。

「ああああああああっ!？」

廊下から、大きな叫び声が聞こえた。

声の主は、一足先に部屋から出た穂乃果のものである。

『穂乃果（ちゃん）っ!？』

幼馴染の叫びに即座に反応した海未とことりは、慌てて廊下に出て行った。

「穂乃果、何が——」

「穂乃果ちゃん、どうしたの——」

何かの事故かと不安を抱いたが、二人は廊下立ち尽くす穂乃果を見つけて、一先ず安堵する。

次に穂乃果の目線の先にいる者たちを目撃し、石化したように硬直した。

「え、嘘?」

「まさか」

「おい、どうした?」

最後に色明が出てくると、彼は其処にいた人物たちを怪訝そうに見つめた。

「星宮……それにあおい。紫吹さんもいるか。何で、ここにいるんだ？」
「あつ、新田くんだ。こんにちはー」

そこには、にこやかに手を振るう頭の赤いリボンを付けた少女、星宮いちごがいた。彼女の後ろには、サイドテールをした利発そうな少女、霧矢あおい。

その傍らには、腰までのぼした長い髪を持つ少女、紫吹蘭までもいる。

『そ、Soleil——ツ!?!』

数分前までライブをしたアイドルたちに、ことり、穂乃果、海未の三人は絶叫した。「はいー！ Soleilの星宮いちごです！　こんにちはー！」

大きな反応に慣れているのか、星宮いちごは海未たち三人の挙動にまったく動じず、にこやかに挨拶をする。

『あ、こ、こんにちは……』

「じゃあ、私も。Soleilの霧矢あおいです。よろしく！」
『よ、よろしく、お願いします』

続いて霧矢あおいが自己紹介した彼女は、未だ狼狽中の海未たちの横をすつと通り過ぎる。

「で、この可愛い子ちゃんたちは誰かな？」

そのままあおいは、傍に立っていた色明に近づき、彼の体を肘で小突いた。

「痛っ！ ただのクラスメートだよ」

「家族と来るって聞いてたのに、可愛い子を三人も連れて来るなんて。このこの！」

「だから、クラスメートって言ってるだろ！ やめろ！」

「またまた、色明がこれぐらいで痛いわけないじゃん」

「同じ場所を的確に狙われたら痛いに決まってるだろが！」

迷惑そうにしてる色明だが、あおいは一向に離れる気配がない。

それに気づいた μ 、sの三人は、狼狽から抜け出したものの、代わりにそれを見て困惑した。

妙に近い距離で行われてる男女のやり取りに、乙女たちの妄想が発揮される。

(ねえねえ、何だかすごく仲良くない?)

(もしかしたら、そういう関係なのかもしれません……)

(そうか！ Soleilの霧矢あおいさんとお友達なんてすごいね！)

(穂乃果ちゃん……、海未ちゃんが言ってるのはそういうのじゃなくて)

「おいおい、あおい。それ以上は迷惑だぞ」

「(そそ)そと詮索する μ 、sたちの横で、未だ小突かれてる色明に紫吹蘭が助け舟を出す。」

「二人は昔からの知り合いと聞いているが、親しき仲にも礼儀ありだ」

「いや、これくらい私たちの間ではいつもことだから」

「それでもだ。それに、アイドルが人前で異性と接近すると変な誤解を生むぞ。その彼女たちにもみたいにな」

「まあ、そうだね。一旦これくらいで」

蘭の言葉でようやくあおいは色明から離れ、自分を凝視する海未たち三人に笑いかける。

「ちよつとからかい過ぎたかな。色明とは昔、一緒のお稽古をやつて、それで仲いいの。でも、スキャンダルになるような仲でもないから、誤解しないでね。いちごも」

『は、はあ……』

「あれ？ 何で私も？」

とりあえず返事をする海未たちに、不思議そうに首を傾げるいちご。

「えつと、それは——」

「それよりも、何で三人はここにいるんだ？」

「いちごが帰って行くお客さんを少し見送りたいと言い出して、外が眺めれる場所に向かつてた途中なんですよ」

「そうなんですか。星宮らしいですね」

蘭の丁寧な説明に対して、色明も同じように返す。

あおいとの後なので、妙に余所余所しい態度に見えるが、これが普通の対応なのだ。誰に対しても遠慮なしで振舞うことが許されるのは、余程の大物だけである。

「今更な名乗るのも完全に出遅れだが、紫吹蘭だ」

「に、新田くんののクラスメートの高坂穂乃果です！」

蘭が、sの三人を見つめてきたので、今度は自分たちの番だと慌てて穂乃果が名乗った。

「お、同じく、クラスメートの南ことりです」

「わ、私もクラスメートで、名は園田海未と申します……………。この度は、ご都合が悪くなった新田さんのご家族の変わりに、此度のライブへ同行させてもらいました」

「なるほど」

続けて二人の自己紹介と、事情を聞いた蘭は、あることを訊ねた。

「今日のライブ、楽しんでくれたか？」

『!? は、はい、もちろん!』

「——そうか。なら、よかった」

息の合った大きな返事に、蘭は一瞬驚きつつ、ふっと、満足げに笑う。

蘭は、元々来る予定ではなかった者の反応を少しだけ気になったのだが、彼女たちの笑顔見て、杞憂だと悟る。そして、その三人はいうと。

(COOOOL!)

典麗な蘭の微笑みに三人は感動していた。

気取った笑みが嫌味に感じず、人の心を掴とる表情。

流石トップモデルで、人気アイドルの一人。自然な笑顔一つで、人を魅了するのも簡単らしい。

「遅れながら、ライブお疲れ様」

三人が蘭に魅了されている中、色明が遅れながら労いの言葉を送る。

「うんー」

それに反応したのは星宮いちごだった。

彼女は色明に近づくと、改めて彼に喋りかける。

「お花ありがとう！ 差し入れのお菓子も美味しかったよ」

「……………、贈ったものは好きにしていいいが。もう食べたのか？」

「ライブ開始前、他の差し入れ同様、見た途端にペロリとね」

「だって、美味しそうだったもん！」

呆れる色明へあおいが苦笑で説明し、いちごが子供のように頬を膨らませる。

食い意地が張ってる言動だが、それすらも愛らしい。

アイドルゆえそう思うのかとかと、穂乃果が考えていたが、その横で彼女の幼馴染た

ちは別の感想を抱いていた。

『穂乃果（ちゃん）みたい（ですね）……』

『……………』

思わず口に出た二人の言葉に、周りが沈黙する。

あつ、と彼女たちが失言かと思つた矢先、あおいが面白そうににやりと笑う。

「へえ、穂乃果ちゃんはうちのいちごと一緒で食いしん坊さんなんだ」

「ち、違が、でも、いちごさんが食いしん坊つてわけじゃなくて、もう、二人とも何言つてるのさー！」

「すみません、思わず本音が零れました」

混乱しながら憤慨する穂乃果に海未がさりと謝罪し、「ですが」と付け加える。

「貴女は何か食べ物があれば、その場でひょうひよいと食べてしまうでしょう」

「そんなお行儀悪くないよ」

「この前、ことが練習後に食べるため作つてきてくれたマフィンを、一人で先に食べたのは何処の誰でしたか？」

「……だって、美味しそうだったもん！」

『ぶっ！』

穂乃果の言い訳にならない言い訳に、あおいと蘭が噴出して笑う。

「さつき、いちごが言ったことと同じことを言ってる」

「ああ。確かに二人は似てるかもな」

「これくらい普通だよ！」

愉快そうにしていたあおいと蘭だったが、そんな二人に言葉をぶつけてきたのはいちごだった。

「女の子なんだから美味しいものは目がないのは当然だよ！　ね、穂乃果ちゃん！」

「え!?　あ、はい！　私もそう思います！」

いきなり呼ばれて驚きつつも、元気よく同意する。

「だよね、だよね！」

その態度に好感を抱いたのか、いちごがにこやかな顔で穂乃果に近づいていった。

「駄目だ駄目だと思っても。できたてのお饅頭とか、美味しそうなクッキーがそこにあると自然と手が伸びちゃうものだよね」

「はい！　あと、出来立てが一番美味しい時つてありますよね？　さつき海未ちゃんが言っていたことりちゃんも、まだ熱が冷め切つてなくて、いい香りかしてたから。」

だから、食べたんです！　今が一番美味しいときだから、今食べないと駄目だつて！　よつて穂乃果は悪くありません！」

「うんうん！ 穂乃果ちゃんは悪くない！ 私も差し入れも貰った時に食べないと、くれた相手に悪いと思うんだよ。感謝の気持ちを後回しにしたら駄目だって。」

だから、食べたの！ 本番前だからこそ、貰った食べ物差し入れは全部食べて、力付けないと！ よって、私も悪くない！」

「そうです！ いちごさんは正しい！」

「いちご」。意気投合してるとこ悪いけど、そろそろ行かないとファンの見送る時間が無くなるよ？」

「穂乃果。これ以上引き止めるのは失礼ですよ」

何かの一斉蜂起でもするのかと疑うくらい興奮する穂乃果といちごに、それぞれの保護者役である海未とあおいが忠告した。

「あ、そうだね。それじゃあ、四人とも今夜はライブ見に来てくれてありがとう！ バイバイ！」

先に我に返ったいちごが、穂乃果たち四人にそう告げた途端、彼女は走り出した。

「え？ ちょっと、いちご！？ 待って——！」

急に走り出したいちごをあおいが追いかけて、蘭がやれやれと溜息を吐いた。

「帰り際に引き止めて悪かったな。では、よい夢を」

そう言い残した後、蘭も二人の後を追って走り去った。

Soleilの怒涛なる退散に呆氣をとられる四人。

一番、最初に我に返ったのは穂乃果だった。

「はっ！ Soleilの皆さん、おやすみなさい！」

「穂乃果。きつと、もう聞えませんかよ」

「ははは、なんだか嵐みたいだったね」

「そうだな。では、俺たちも帰るぞ」

苦笑することりの言葉に色明が首肯すると、我先にとSoleilが去った方向とは反対側に向かって歩き始めた。

「ほら、穂乃果行きますよ」

「……………」

「穂乃果？」

自分たちも行こうとする海未だったが、一向に動き出さない穂乃果に怪訝する。

「穂乃果、どうかしたんですか？」

「私たち、Soleilとお話してたんだよね。すごいね」

「まあ、そうですけど」

「Soleil……………」

まだSoleilが去った場所を眺めてる穂乃果の様子を見て、海未は納得した。

確かに Soleil との邂逅は、普通では想像もつかない衝撃的な出来事である。

海未自身も未だ信じられず、色明が動かなければ、彼女も少しの間、穂乃果のように呆けていたかもしれない。もつとも、穂乃果か日頃からよく呆けているが。

「ことり。穂乃果を連れてきてください。私は新田君を追いかけます」

「うん。解った」

諦めた海未はことりに穂乃果を任せ、一人先を進み色明を追いかけた。

「二人はどうした？」

先を歩いていた色明が、後ろからやってきた海未に気づいた後、残りの二人がいないことを問いたただす。

「後でできます。ところで」

「ん？」

「霧矢さんとは昔、同じ稽古事をしてたらしいですけど、星宮さんとも仲が良いのですか？」

海未にとっては、ちよつとした質問だった。単なる道中の会話の種。

色明の Soleil たちに対する呼び方が、蘭が『紫吹さん』、あおいが『あおい』と呼び捨てで、いちごに関しては『星宮』と苗字だった。

互いに軽口を言い合える霧矢あおいほどではなくとも、業務的やりとりをした紫吹蘭

以上よりは親しいのだろうかという些細な疑問。

それを海未が訊ねると、色明は目を細める。

「小中、同じ学校だった。もつとも、接点ができたのは小学校5、6年からだ。それもあおいを通してだし、中学校もあの二人は途中でスターライト学園に編入したから、星宮とは知り合い程度だ」

「なるほど」

さりとてした説明に海未は納得する。

その後で穂乃果とことりがやってきたので、その話は終わった。

8話・葛藤 ハートラビリンス

「おい、どうした！ ぜんぜん声が出てないぞ！」

』

Soleilのライブの日から二日後の月曜日、国立音ノ木坂学院。

「腹か声を出せ。こんなの、小学校授業レベルだぞ！」

』

まだ殆どの生徒たちが登校していない早朝の音楽室にて、少女たちの声が木霊する。

色明にそこへ呼び出された^々 sの三人は、彼の指導の下、ボイストレーニングを行っていた。

「南、声が小さい！高坂、姿勢が崩れてきてる！ 園田、音程が雑になった。周りに流されるな！」

』 ツ!! 』

色明はプロのシンガーだけあって、歌には峻峭だ。

普段の飄々とした態度などまったく感じさせず、鬼気迫る威圧で少女たちを律する。間違えば何度もやり直しをさせ、僅かなミスも許さない。

裏を返せば、それだけ色明が真剣な証拠なのだ。しかし、初めての本格的なボイストレーニングは少女たちにとって過酷だった。

三人は歌の特訓だと聞いたとき、音楽の授業のようなものかと思ひ浮かべた。

そんな過去の自分たちの浅ましさに嘆く。もつとも、事前の気持ちを変えたところで、いま感じている厳しさが変わったわけではないのだが。

身体中の空気は搾り出され、正しい姿勢を矯正されてる。

慣れぬことで神経が徐々に削れるが、気を抜くことは許されず、更なる心の磨耗を加速させた。

「よし、そこまで！一旦、休憩だ！」

一通りやったので色明がそういうと、少女たちは大きく息を吐いた。

体力的にはランニングするよりも楽だが、精神的なものが辛い。三人共疲労困憊である。

「うう……。もう一生分歌った気がするよ。二人は大丈夫？」

「……………」

「私は何とか。ですが、ことりは声が出せそうにありませんね。のど飴食べます？」

「(くり)……………」

海未は頷いたことりにのど飴を渡すと、自分も準備した水を飲み干す。

すると穂乃果が、離れた場所で何かの紙と睨めっこしている色明を眺めると、小さく呟く。

「新田君きついね。想像と全然違ってたよ」

「何事も鍛錬は厳しいものですが、想像外なのは同意見です」

「なんか、あれだね。あんな体育会系のノリみたい」

「ああ。聞いたところによると、昔、武道を習ってたそうですよ。その影響じゃないですか？」

それは何気なく海未が色明のことを調べたときに、見つけたインタビュー記事の情報である。

記事によると、色明は小学生の頃、知人の格闘家から武道を習っていたようだ。今でも身体作りのために昔習ったことを日々繰り返し返しているらしい。

色明が武術を習ったことがあると知ったとき、親近感を覚えた。彼女は日舞の他に武道も日々研鑽している。

そして、以前自分を助けるため、体育倉庫の鍵を壊したのはそれが理由かと納得しかけた。

だが、幾ら古びていたとはいえ、人の手のみで錠前を壊せるものなのか？

ガラス瓶を手刀で叩き切る人間ならば見たことある。

しかし、素手で金属を破壊できる人間はどれだけののだろうか？

生憎と、記事では色明がどんな武道を習ったのか書いてない。

底が知れない。と海未が思い返していると、何やら穂乃果が納得した様子で頷いていた。

「なるほど。どおりで海未ちゃんみたい酷いと」

「何が私みたいに酷いのですか？」

「は!? それは——」

「お前たち、そのまま聞け」

穂乃果の失言を助けたのは、いつの間にか近くに来てきた色明だ。

何を話すのかと三人が身構えて、彼は少女たちの視線が集まってから口を再び開いた。

「何度も言うが、お前たちは足りないものが多い」

それは色明が言ってきた言葉だった。

海未たちも解っている。廃校阻止を目指すのに対し、実力は未熟なのは自覚している。

しかし、何度も言われているが、別に平気というわけでもない。

悔しさで彼女たちが顔を暗くする中、色明は言った。

「だが、光るものがあるのも事実だ。これは世辞じゃないぞ」

そもそも見込みがまったくなければ、色明も彼女たちに付き合わない。

突然の賛辞に驚く少女たちを余所に、平然とした態度で色明は語った。

高坂穂乃果の歌は安定性あり、全体の支柱になる。

南ことり甘く蕩けるような声は、欲しくても手に入れることができない宝石。

園田海未の透き通った歌声は自身の生真面目さと、日本舞踊で身に付けた感性による賜物だ。

ライブの時に感じたものを、今日改めてボイストレーニングすることで色明は再認識した。

更に色明は、他の強みを説明する。

まずは手作りの衣装と歌。

特にアイドルの衣装は、下手な代物では人目で安っぽく感じてしまう。

だが、μ'sの衣装は今まで色明が見たことがあるアイドルたちのドレスと同等に感じた。

愛らしく、花がある。これを数日で作ったの言うのだから、ことりの手芸技術は驚愕に尽きる。

また海未が手がけた詩は、素直な気持ちに響くようだった。

単純に言葉を並べるだけでは、あのような歌詞は作れない。それこそ天性のセンスが必須である。

叶うならば、いつかその調べを、自身も歌ってみようかと色明は思っているのだ。

最後に、不屈の精神。

観客がほとんどいなかった、講堂ライブ。

廃校を救える目安として見せた、Soleilのライブ。

彼女たちはどれも挫けなかった。挫折や大きな壁を前にして、抱いた意思に陰りを見せない。

諦めが悪いのは確かだが、その負けん気を色明は賞賛する。

特にすぐ意思表示をした穂乃果の情熱は、尊敬に近い念すら抱いていた。

「えへへ……………」

「うふふ……………」

そこまで言われてしまったら、彼女たちも満更でもない

先ほどの疲労は何処かに吹き飛び、照れ笑いを浮かべる。

「あ……………」

ただ、海末には過剰だったようで、彼女は顔を真っ赤にして俯いていた。

「以上を踏まえて、これかを持ち味を生かしながら足りないものを補おうと考えている」

愛らしい少女の仕草に目を瞑りつつ、色明は今後の方針を語る。

「けど、俺はあくまで手助けをするだけだ。これはお前たちのアイカツ。ならば、お前たちなりにどうすればいいかのかも考えとけよ」

「うん。そうだね!」

真つ先に色明の言葉に応じたのは、穂乃果だった。

「新田君に頼るだけじゃなくて、私たちも練習以外で何かできることを考えてやってみるよ」

「それは結構ですが、行動する前に相談してください。前の動画撮影みたいなことは許しません」

「大丈夫、大丈夫」

調子の良さそうに笑う穂乃果を、海未はじつとりとした目で見つめた。

「その言葉に私が何度裏切られたのか、数えられます?」

「……………十回くらい?」

「少なくとも、もう一桁上なのは確実ですよ」

「そんな大げさなあ…………」

「では、私が覚えてる限りの穂乃果の所業を、己の身で改めて刻んで貰いましょうか」

「とても不安だよ!」

「高坂の折檻は後にして——」

「酷さが増した!？」

「俺としては、早急に行動したいことが一つある」

「行動したいこと?」

ようやく喉が回復したことりの反応に、色明は首肯する。

「勧誘だ」



「だから、その話はお断りするって言ってるじゃないですかっ!」

一年生が使う教室の前で、甲高い声が響く。

声の主は、(本人的に)陰ながら、sの作曲をした西木野真姫であり、彼女の目の前に立つのは色明だった。

「そうなのか? 生憎と聞いてなかったよ」

真姫の勧誘は既に断られていてと聞いている色明。

そんな彼は、白々しく初耳かのような反応を示したので、念の為に様子を見に来た海未が、遠い廊下の脇で狼狽する。

真姫に気づかれないよう、離れた位置で様子を覗ってる為、海未には会話の全部は聞き取れない。しかし、あの様子からして単刀直入に要件を切り出したのは明白である。

いったい何を考えているのか？

色明の目的は、見ての通り、真姫を本格的にμ、sへ引き込むことだ。

海未としても影ながら作曲してくれた真姫には感謝してる。

本音を言えば、真姫がμ、sに参加してくれたら心強い。

仮歌で聴いた声も綺麗だった。更に気品を感じさせるあの外見は、今のμ、sにはない魅力である。

一度拒絶したのにも関わらず、密かに曲を提供してくれたことで内面の良さも感じ取れた。

だからと言って、真姫を無理やり自分たちのアイカツに巻き込む気もない。

スクールアイドルというのは、簡単にできるものでもない。様々な問題も付き纏ってる。

既に海未は覚悟をしているが（できるとは言っていない）、人前で艶姿を晒すような真似を強要するしないし、したくない。

海未は色明という少年を少なからず評価している。

だが、色明が強引に真姫を引き込むものなら、彼女は叩いても彼を止めるつもりだった。

「興味があると想ったから声をかけたが、違ったか？」

そんな海未の心配を余所に、色明は平然とした様子で真姫に話しかける。

本来訪れることもない一年生の教室の前なので、有名人である色明はいつも以上に注目の視線を集めていた。その張本人は慣れた様子でまったく気にした素振りを見せない。

だが、もう一人注目されてる真姫の方は、勝手に集まる視線が当然不愉快だった。

地味に過ごしたいわけでもないが、変に目立ちたいわけでもない。

「き、興味ありません！」

よって自然と声も荒げる。しかし、それに臆する色明でもなかった。

「なら、何で作曲をした？」

「っ!? 勘違いじゃないですか？」

「高坂のところが届いたCDで、今もサイトにある曲はお前の声なんだけど？」

「聞き間違いじゃないですか？」

「おいおい、プロ相手にその言葉はないぜ」

「むう……」

目の前の相手が音楽の世界で生きる人間だと思い出し、思わず口籠る。

色明のことは解っている。この学校にいれば、そこまで興味なくとも嫌でも知る。

真姫の場合、彼自身の曲をしつかり聴いたことはない。

それでも、音楽関連のニュースで色明のことは前々から知っていた。

自分の一つしか違わないのに、音楽の世界で輝かしい業績を上げる歌い手。

その事実は、音楽に思い入れがある者として、尊敬よりも違う感情が勝っていた。

「仮にあれを作曲したのが私だったとしても……」

一瞬、言いよどんだが、真姫はその言葉の口に出す。

「プロの貴方があの人たちに協力してるなら、私なんて必要ないじゃないですかっ」

「それはない」

即座に色明は否定した。意外な反応に真姫も目を丸くした。

「少なくとも、俺は短期間であれだけのクオリティの曲を作ることはできない」

「……………へえ、そうなんですか」

「ああ、悔しいがな。作詞作曲演奏は一通りできても、あくまで俺はシンガー。歌唱が本

業だ」

本当に悔しそうに。

けれど、どこか楽しそうに色明は顔を緩ませる。

「短時間であの曲を作るのは、正直天才の部類だ。趣味で留まらせるのは勿体無いほど

に」

「……………」

真姫は言葉を失う。

プロが自分が作った曲を認めた。内心、驚きを隠せない。

胸の奥から、懐かしい感情が湧き出る。

自分のピアノを聴いて、綺麗だと言われたことは何度もあった。

けれど、本気で音楽に身を置いてる人間からの賛辞は、どれだけ久しぶりだろう。

「あ——」

思わず出かけた言葉が、途中で止まる。

替わりに、真姫は別の言葉を色明に伝えた。

「——だからといって、私が先輩たちに協力する理由はありません」

「協力、というよりやってみないかと誘ってるだが。作曲以外にも、スクールアイドルと

して」

「余計にお断りです」

「けど、音楽は好きだろ？ 作曲だけじゃなくて、演奏も。でなければ、あの音は奏でれ

ない」

「……………」

そう言われた真姫が無言で色明を睨んでいると、予鈴のチャイムが鳴り響く。

「……………これから授業ですのぞ」

「ああ、それじゃあ」

それと共に素っ気無く立ち去ろうとする真姫に、色明はすんなりと引き下がった。

色明は背中を向けながら、彼をまだ見ている真姫に手を振るい、一年生の教室から離れた場所で海未と合流する。

何か言いたそうな海未に対し、色明はにやりと笑った。

「あともう一息だ」

「どこがですかっ」

呆れたように溜息を吐きながら、海未は色明の隣を歩く。

当然、彼女たちも授業がある。このまま立ち話をするわけにはいかない。

「確かにあの子が、sに入ってくれたら喜ばしいですが、強引に引きこむのは関心しません」

「別に無理やり引き込みたいわけじゃないけどな。けど、もつたないじゃないか？」
途端、海未は顔を顰めた。

熱が籠った瞳で、哀愁が漂うような薄い笑み。

色明が女性を気に入ってる姿は、前にもSolielのライブで見たことがある。

しかし、その時は弄りがいある照れ。今回のそれは何処となく、海未は気に入らなかった。

「随分とご執心ですね。音楽の才能もそうですが、あのような子が好みなんですか？」
「あん？ ……ああ。そういつた意味で言ったんじゃないよ」

邪推されたと気づいた色明はすぐに弁明した。

「やりたいことを我慢してるなんて、もったいない。そう言いたかったんだよ」

「まるで、西木野さんが本当はスクールアイドルをやりたいみたいなの言い振りですね」

「スクールアイドルというか、音楽と誰かと一緒に何かしたい、て気持ちかな？」

「……益々解りません。何故、そう思うのです？」

「解るさ。あの歌、音を聴けばなあ……」

「音を聴けば、解る？」

怪訝そうに眉間を寄せる海未。

色明は内緒事でも話すように、目の前に指先一本指しながら笑う。

「俺は音を通して心情がある程度察せれるんだ。拳を通さなくてもね」

意味不明の言葉である。

海未が問いたただそうとしたが、丁度に二人は教室に辿り着く。

到着早々、クラスメートに声をかけながら色明は己の席に向っていた。

また彼に対する謎が増えたと、海未は内心で嘆息しつつ、自分の席に向かう。

隣の席にいる男子生徒を覗き見つつ、真面目な海未は今から始まる授業に集中するの

であった。

▼ 時間は少し遡り、色明が立ち去った直後。

真姫は自分の席に座った途端、今まで話かけられたことのないクラスメートたちに取り囲まれた。

「西木野さん、μ sに入るの!」

真姫が驚く前に一人がそう叫んだので、すぐに彼女たちの用件を悟り、溜息を零した。「入らないわ」

彼女たちが何処まで聞いたが知らないが、盗み聞きを咎める前に、真姫は先の質問に答える。

真姫がそういうと、周りの女子たちは揃いも揃って残念そうな顔を浮かべた。

「そうなんだ。もしも、入ったら海未先輩のサインをお願いしようと思ったのに」

「海未先輩?」

「そう、海未先輩よ! 弓道部のエースで今はμ sでアイカツもしてる!」

聞き覚えのない名前に真姫が眉間を寄せていると、彼女達は勝手に海未のことを語り始めた。

「最初はスクールアイドルを高坂先輩たちに付き合っただけで無理しているかと思っただけ、

「ご本人も納得の上でアイカツしてるから、私たちも本気で応援すると決めたのよ！」

「弓道の姿も凛々しくて素敵だけど、歌って踊る姿も可愛くて良かったわ！　もう、私なんて動画を1000回再生したわよ」

「あまいわね、私は2000よ」

「二人とも愛が足りないじゃない？　私は300回よ。海未先輩のそこは何度もキャプたわ」

「それは誰でもしてるよ」

「ですな」

「……貴方たちがその海未先輩て人を好きなのは解ったわ」

内心引きながら、真姫は海未先輩なる人物がμ sのメンバーだと理解した。

ここで真姫は自分に絡んでくる高坂穂乃果のことは、彼女の実家にCDを届けられるくらいには知ってるものの、他のμ sのメンバーは姿しか把握してなかったことに気づく。

そして、彼女たちの言葉から考えると、海未という名の少女はあの黒い髪先輩だと確信した。

もう一人の先輩は、お世辞にも弓道などいうスポーツには無縁に見える。

実際、真姫が気になってμ sの練習を見た時も、その人は高坂穂乃果と共に海未先

輩と思わしき人物にしごかれていた。

しかし、その海未先輩なる人物は、弓道部のエースがスクールアイドルと掛け持ちしてるらしい。どちらも簡単にできるものでもないだろうに、と真姫は感心した。

「弓道部をスクールアイドルを両立するなんて、すごいわね」

「それだけじゃないわ！ 海未先輩はあの園田道場の跡取り娘なのよ！」

思わず真姫が本音を零すと、周りの女子が更なる海未の個人情報を漏らす。

園田道場という名前は、真姫も聞き覚えがあった。

地元人間ならば知る有名な日本舞踊の大御所。道場では日本舞踊以外にも剣道、弓道、薙刀などの武術も指導しているという、古き日本文化技術を継承する場所だ。

その跡取り娘ということが真実ならば、多忙どころの話ではない。

「それ、本当なの？」

「なに？ 信じられないの？」

思わず疑ってしまった真姫。周りの生徒たちは揃って不満そうな顔を浮かべた。

「だって、貴方たちの話が本当ならば、家でもやっている弓道はともかくとして、スクールのアイドルをしている余裕なんてないでしょう？」 跡取り娘なら家を継ぐために普通は

習い事の毎日じゃない」

「それは私たちも心配で訊ねてみたんだけど、家の稽古は朝と夜にやってるから、両親に

もスクールアイドルのアイカツは認めてもらってるそうよ」

「両親に、認めてもらっている……」

「はーい、授業をしますので席に着く様に」

そこで教師が教室にやって来た。

真姫の周りに居た女子たちは慌てて散開し、真姫も机の中から授業の準備を取り出す。

ただ、授業の内容はあまり頭に入って来なかった。

▼ 西木野真姫は勉強よりもピアノが好きだった。

子供の頃の将来の夢は、ピアニストになること——だった。

ある日、コンクールで賞を取った。

コンクールで賞を取るとは初めてではなかった。

毎回一番の成績を取っていた。

けれど、その時のコンクールでは一番ではなかった。

だが、悲しかったわけではない。

自分ではない一番の人間を褒め称え、自身のピアノも認めて貰えたので嬉しかった。

しかし、その時、彼女の両親はこう言ったのだ。

『あら、一番じゃなかったのね。でも、大丈夫！ 真姫ちゃんは勉強では一番だから！』

『真姫はえらいな、勉強ができて』

『勉強ができるなんて、ピアノができるよりずっとずっとすごいわ』

それは、最初は慰めだったかもしれない。

いつも一番であつた娘が悲しまぬように、別のことで気を持たせようとした。

『毎回一番なんてすごいぞ。これなら、西木野総合病院の名女医さんだな』

だが、いつしか、慰めは期待にすり替わつていた。

疎らにコンクールで賞を取るピアノよりも、常に一番である勉強の才に目を付けたのだ。

西木野家は地元でも大きな病院を経営しており、当然、一人娘の真姫は将来を期待される。

——徐々に真姫の心が変わつた。

音楽が好きのままだ。

親の期待が重かつたわけではない。

医者である父親のことを尊敬している。

人を救う家を誇りに思つていた。

「おおきくなったら、おいしやさんになるの」

真姫がそう言うのと、大好きな両親が自分の頭を嬉しそうに撫でてくれたことを覚えて
いる。

だから、自分の夢が、親と同じであつた素敵だと思つたのだ。

ゆえに、彼女の将来は医者になること。

勉強ができるからといって、簡単に通れる道ではない。

他のことなどをする余裕はない。スクールアイドルなど、もつての外だ。

でも——、気がつくのと、彼女の指先はピアノの鍵盤を求めてる。

▼

昼休み。早々に昼食を済ませた真姫は音楽室に向かおうとした。

悩み事。考えても解らない時、真姫はピアノに没頭する。

悪い言い方をすれば音楽に逃避してるのであり、本人も自覚している。だが、未成年
で煙草酒などでストレスを解消するよりは健全な発散方法だろうと、見えない誰かに言
い訳した。

しかし、職員室に鍵を借りにいこうとすると、既に貸し出し中と言われて機嫌を悪く
する。

更に、先に音楽室の鍵を借りに来てたのが新田色明だと知り、彼女の機嫌は益々悪く

なった。

だが、音楽室を借りることを責めることはできない。

聞く話によると、今朝もスクールアイドルの活動のため音楽室の鍵を借りたようだ。気晴らしにピアノを触るよりも、建前が上である。

それでも、真姫は自分の『楽しみ』が奪われた気分で大満だった。

面と話したのは、今日が初めてであるが、真姫は新田色明のことが気に入らない。女子高に男子生徒が通うのも、理由は解れど場違いだと思っている。

一度断っているのに勧誘するしつこさや、態々教室までやってくる凶々しい行い。真姫は色明に腹を立てている。

いや——、と真姫は歩きながら否定した。

そういった気持ちがないわけではないが、本当は色明に嫉妬しているのだ。

ただ、単純に自分の好きなことだけをやる人間が羨ましい。

音楽を自由にできる人間。そんな者が、自由に音楽ができない自分を追い立てる。何故、音楽をしないのかと？

色明は自分の事情も知らない。単純に技量を買って声をかけてるのだと、真姫は理解している。

プロに自分の音楽を認めて貰えたのは嬉しい。

だけど、それ以上は余計なお世話。

自分の音楽は終わったのだ。作曲をしたのも、単なるお節介。

これは医者になるために時間を費やすのである。

だからきつと、自分が音楽室に来たのは未練ではなく、新田色明にはつきりと断るためである。

廊下から見える窓の向こう側では、音楽室のピアノに色明が座っていた。

真姫は扉を睨み、手を伸ばした。

「
」
だが、聞こえた歌声にその動きを止まる。

微動だにできなかつた。

顔を上げて確認するまでもない、これは新田色明の歌声。

色明はピアノを弾かずに、自分の歌声だけで奏でていた。

——初めて聴くその歌声は、真姫にとって圧倒的だった。

音量が違った。高らかに響くこの声ならば、遥かな外まで届くようだ。

技量が違った。水のように透き通る旋律は、耳の中に自然と流れ込んでくる。

感動が違った。多くの音楽を聴いてきた真姫だが、歌声だけで心がここまで震えたこ

とは少ない。

何より、声を聴いてるだけで、『音』を『楽』しんでいると伝わってくる。プロだから、という枠組みだけでは計り知れない、音楽がそこにあった。

自分の些細な動きでこの音楽を壊してしまわないように、真姫はゆつくりと顔を上げる。

一人の少年が、柔らかな表情で歌う。

瞬間、間違いなく真姫はその姿に見惚れていた。

けして神秘的な光景だったわけではなく、ましてや異性としての興味ではない。

ただ、色明が歌う姿が眩しくて見えて、眺めていたのだ。

しばらく、歌のみで音楽を奏でていた色明が、そつと両手ピアノに伸ばす。

『~~~~~♪』

「うっ……………」

「むっ……………」

一節、色明の歌声とピアノの音が交じり合うと、真姫と色明は同時に顰め面を浮かべた。

真姫は拍子抜けしたように肩を崩し、色明も演奏を中断する。

別に色明のピアノが下手だったわけではない。最低限弾けていた。

だが、最低限弾けるだけでは彼自身の歌声と差があり過ぎて噛み合わなかったの

だ。

例えるなら、ピアノの演奏中におもちやの楽器があられたような陳腐さ。

聞き手であつた真姫はそう感じ、奏者である色明も同様の感想である。

仕方なさそうに色明はピアノだけで奏でてみると、先ほどよりは良い音が響く。

それでも、真姫が奏でるピアノに比べると、数段格落ちであつた。

真姫は、歌唱が本業だと言つた色明の言葉を思い出す。

確かに歌は素晴らしいが、他は自分が上なのではないかと少し優越感に浸る。

「けど、何で一人でピアノを弾いてるの？　自分がスクールアイドルをするわけでもないのに」

それで余裕を取り戻した真姫は、思わず独り言で愚痴る。

これが、sの活動に関係ないことならば、別の場所ですてほしい。

真姫の家にもピアノはあるが、両親の目が気になつて集中できないのである。だから、真姫は誰も使っていない学校の音楽室でピアノを弾いていたのだ。

「私たちの課題曲のために練習してるそうです。声なしの曲は、見つからなかつたそうなので」

「ひゃー！」

思わず声を出し、驚く真姫。

自分以外誰もいないと思っていた廊下には、視線を向けると教室でクラスメートたちに半強制的に教えられた園田海未が立っていた。

「い、いつから!? ……い、いたんですか?」

「少し前からですね」

相手が上級生だと思い出し、最後にそう付け加えて訊ねる。

挙動不審の仕草だが、海未は気にした様子もなく答えた。

「丁度、彼が歌いだしたときに来て、邪魔しないよう待つてました。今は何故か歌は止めて、ピアノだけを弾いてますけどね」

「それは——あの歌声とピアノのレベルに差があり過ぎるからです。歌は流石プロって感じでしたけど、ピアノの方はただ弾けてるだけ。それなら、歌わないほうがまだ良く聴こえますよ」

どこか残念そうに語った海未に真姫は説明する。

それを聞いた海未は納得した顔で頷く。

「なるほど。私は気にならなかつたのですが、流石ですね」

「まあ、音楽を色々聴いてると嫌でも気づきます」

海未の微笑み、真姫は髪を弄りながら顔を背けた。

昼休みに二人きりの廊下。色明のピアノだけが静かに鳴り響く。

「入らないんですか？」

何故かその場から動こうとしない海未。

気まづくなつた真姫は思わず訊ねた。

「いえ……。邪魔をしないほうがいいでしょう。貴女が拙い演奏だと感じてゐるなら、あの人もそう感じてゐるでしょうし……」

そうやって苦笑しつつ、海未は音楽室に視線に向ける。

中では未だ廊下にいる海未たちに気づかず、真剣な顔でピアノを弾き続ける色明。

「格好付けたがりなので。私たちのために不慣れなことをする時ぐらい、見栄を張らしてあげます」

くすりと笑う海未。

それを見た真姫は何故だか恥ずかしくなり、またも顔を背ける。

すると、今度は海未が真姫の方に顔を向け、不思議そうな目で彼女を見つめた。

「ところで西木野さんは、何故此方に？」

「!? た、偶々通りかかっただけです！ 人がいなかったら、ピアノでも弾こうと思つただけで」

「ああ……。それは、なんだかすみません」

「別に謝ることはないです。早いもの勝ちですし。何より、練習に必要な課題曲の準備

なんですから、気にする必要もありません」

課題曲というのは、新田色明が加入するに在ったって、*Ms*の歌唱力を高めるためのものだろうと真姫は理解していた。

それは正解であり、技術の向上で自力を高めるならばプロの模倣は常套手段である。

武術ならば熟練者の動きを真似る。料理ならば店の料理を真似る。音楽ならばプロの演奏を真似たり、過去にあつた名作を奏でることによって技術を高めるのだ。無論、真姫も経験がある。

「そう言ってくれると助かります。正直申しますと……。あの人も忙しい中、態々時間を作ってやってるので、ご理解頂けたほうが助かりました」

「忙しい……」

「今日も放課後が終えた後も、仕事があるようです。今日は宿題も沢山出たので大変でしょうね」

「フアンの子たちに見せてもらえばいいんじゃないやあ……」

「彼、意外と真面目なので。解らないところがあれば、ギリギリまで自分で考えるのですよ？ 穂乃果も少しは見習ってほしいですね」

聞き覚えのある名前が出て、思わず噴出すのを堪えながら、真姫は納得する。

確かに、あの自由奔放な先輩は普段あまり宿題をせず、この先輩に??られてそうだ。

しかし、すぐ真姫はぼつの悪そうな顔になった。

新田色明のことを好き勝手に自由に音楽ができると羨んでいた。

けど、彼は人の何倍も苦勞しているようである。

彼は自分たちと違い、既に社会に身を置いている。

ならば、恵まれた家庭でバイト一つもしたことない真姫には想像もできない苦勞があるはずだ。

そして、海末の言葉を聴く限り、学業も疎かにしていない。

一部の天才たちは、その才能を免罪符に他のことを疎かにしても許されている。

真姫からすれば、それは単なる甘えにしか感じなかったが、どうやら新田色明はそのような人種ではないようだ。

更に、どんな心境かは解らないが、彼はμsに協力もしている。

何が好き勝手に音楽をしているだ。相手の苦勞も考えみない己を、真姫は恥じた。

「……忙しい、といえば。聞きたいことがあるんですけど」

「? はい、なんですか?」

自分勝手な認識を反省すると、もう一つ気になっていたことを思い出す。

真姫は海末に訊ねる。

「先輩が、あの園田道場の跡取り娘という話は本当ですか?」

「えっと……。本当ではありますが、何故それを？」

「クラスの人たちが話していたので」

「ああ……」

真姫がそういうと、海未は乾いた笑みになる。

「どうやら、あの熱狂的信者たちは当人に認識されているようだ、目の前の先輩を気の毒に思いつつ、真姫は更なる質問を投げかける。

「大丈夫なんですか？ 聞いた話だけでも厳しい家柄みたいです。スクールアイドルなんて浮ついたもの、よく御家族が許してますね」

「昔から付き合っている幼馴染と一緒に大丈夫、と。穂乃果のことなんですけど、家の両親は実の娘よりも穂乃果に甘いですから」

困ったものと苦笑する海未。

自分の両親が穂乃果に甘いことに、不思議と嫉妬を感じたことはない。

普段厳しく接していても、海未自身穂乃果には甘いことがある。つまり、そういう血筋なのだと思うていた。

「それに稽古も朝、夜共にやっていますし、今のところ、問題はありません」

「……辛くないのですか？」

小さな声で、真姫は質問を続ける。

その答えに海未は、少し間を置き、口開く。

「まったく辛くないと言えば、嘘になりますね。自由な時間も減りましたし、日舞とアイドルの勝手が違うのにまだ慣れません。露出が多い衣装を着て、人前で歌って踊ることも平気とはいえませんが」

そう言いつつ、まったく辛さを感じさせない笑みで、ですが——、と海未は続けた。

「今はしないほうが辛い。廃校阻止という目的もありますし、誰かと共に一つのことをやり遂げる達成感は、日舞や武道をする時にはありませんでした。何だかんだ、アイカツを楽しんでますしね」

「しないほうが、辛いですか……」

「その我侷を通すためにも、日々精進あるのみです」

力強い言葉に、真姫は何も言えなかった。

自分はここまで言えるだろうか？

辛いと承知の上、両親の期待も裏切らず、自分の好きなことをできるだろうか？

「……、すみません。次、体育なんでこれで」

答えが見つからない真姫は、その場にいるのが辛くなり、逃げるように立ち去ろうとする。

「あ、すみません！ 私からも一ついいですか？」

そんな真姫を海未が急に呼び止める。

「……………、何か？」

「素敵な曲を作ってくれて、ありがとうございます」

「だから、あれを作ったのは私じゃあ——」

「いや、もういいじゃないですか。何貴女もばれていないとは思ってないでしょう？」

「うう〜…………」

「以前、穂乃果からはお礼がありました、私からも一言と伝えたくて」

「……………」

「ありがとうございます。貴女のおかげで、私たちはアイカツを始めることができました」

深々と頭を下げる海未を真姫はじつと見つめる。

「…………、終わりましたか？ それじゃあ、本当にこれで」

「ええ。呼び止めて、すみません」

「……………」

そのまま真姫は今度こそ立ち去ろうとした。

しかし、少し歩いたところで何故か真姫は立ち止まる。

それに気づいた海未も不思議そうに彼女を見つめた。

「私も——」

「？」

「先輩がああの歌詞を作ってなければ、曲なんて作ってなかった」

以前、穂乃果に歌詞を強引に渡された時に聞いた、作詞者の名前を思い出した。

だから、真姫も伝えることにする。

「先輩の歌詞も、素敵だと思えます」

そう言い残して、真姫はその場を走り出す。

面を食らった海未だったが、すぐに嬉しそうに微笑んだ。

きつと顔を赤くしてるのだろう思いながら、小さくなる背中を彼女は眺め続けるので

あった。

9話・挑戦 ステップ

音乃木坂学院では珍しい動物をしている。

白い体毛と茶色の体毛が二頭。四足歩行で首が長く、独特の愛嬌がある顔立ち。

原産は南アメリカ大陸。ラクダ科ビーニャ属、またはラマ属の生き物。

名をアルパカと呼ぶ。

「うわあ、ほえ〜」

そのアルパカに魅了させる少女が一人。蕩けた声で蕩けた顔をするのは、μ sの衣装担当である南ことりであった。

「ことりちゃん、最近毎日来るよね」

そんな幼馴染を、高坂穂乃果が呆れながら眺めてる。

「ねえ、チラシ配りに行くよ」

「あと、ちよつと——」

「もう！ 五人にして申請しないと、ちゃんとした部活として活動できないんだよ！」
昼休み。穂乃果とことりは昼食を終えた後、μ sの新メンバー勧誘のため行動した。

もう一人のμ、sのメンバーである海未は、放課後の練習を音楽室で準備をしている。色明の様子を見に行っている。

彼女曰く、μ、sに曲を提供してくれた西木野真姫の勧誘を、色明が強引にしないかと心配らしい。

真姫はよく一人で誰もいない音楽室でピアノを弾く。

即ち、二人が鉢合わせて問題が起きないかと彼女は危惧しのだが、それが杞憂に終わったのがつい先程である。

話は戻るが、μ、sのメンバーでないしろ、新田色明は彼女たちの仲間になったのは事実。

よって、あと一人でも勧誘できれば正式な部として認められるのだ。

だかこそ、昼休みに勧誘活動をしようとしたのだが、こどりの希望でアルパカ小屋に寄り道してから、既に数分経過していた。

「うくん、そうだよね〜」

一向にアルパカから離れる気配のないこどりに、穂乃果は頭を抱える。

これがアルパカに戯れているのが穂乃果であり、相方が海未であったならば腕でも掴んで強引に引き剥がすところだ。その逆も然りである。

しかし、こどりは幼馴染三人組の中で、守ってあげたい、絶対庇護対象という立場に

いる。

そのためか、穂乃果や海未も無理やり彼女を引き摺るような真似はしない。どうしたものかと悩んだ穂乃果はアルパカをじっと見つめる。

「……可愛いのかな？」

ことりが昔から可愛いものが好きなのは解ってる。

だが、穂乃果はアルパカを見てもその魅力が理解できなかった。

「え？　可愛いと思うけどなあ。首の辺りもふさふさしてるし。ほら、穂乃果ちゃんも触ってみて」

「ええ!?　大丈夫？　噛まれたりしない？」

「大丈夫だよ。前に舐められたことはあったけど、それは遊んでるだけだからね」
「穂乃果は舐められるもの嫌なんだけど」

そうやって穂乃果が二頭のアルパカを再度観察する。すると、何故かことりが撫でいる白いアルパカではない、茶色のアルパカがじつと彼女を見つめきた。

まるで、触れても良いのだぞ、とでも言いたげな堂々とした佇まい。

「そーと、そーと」

「ごくり、と、穂乃果はそつと手を伸ばし、アルパカの首を両手で触れる。

「……お？　おお。　うふおおおおおっ！」

「ね？ いいでしょ？」

「すごいよ、ことりちゃん！ もさもさ。いや、もふもふだよ！ もふもふ！ 気持ちいいー！」

「駄目だよ、穂乃果ちゃん。あまり大きな声を出すとアルパカさんが驚いちゃうよ」

「ああ、そうだね。ごめんね、アルパカさん」

アルパカが人間の言葉を理解してるか定かではないが、二頭のアルパカは静かに少女たちに撫でられまくる。その落ち着いたアルパカの様子に「気にするな（イケボ）」と言われたような気がしたとは後の穂乃果の弁である。

「これは……夢中になるわけだ。こうやって撫でてると愛着も湧くね」

「でしょう？」

「うん、病み付きになるよ」

「だよね」

穂乃果まで籠絡したアルパカ。

アルパカたちはマツサージでも受けてるかの如く身を任せ、彼女たちもまた二頭の獣に癒されることで一つの互恵関係が生まれていた。

「そういえば、ほのかちゃん——」

「ん——」

「ことりの気の抜けた声に、気の抜けた返答する穂乃果。アルパカの毛を布団代わりに埋め、気持ちの良い日差しもあつてか穂乃果は半ば睡眠状態になっている。」

「最近のうみちゃん、どう思う?」

「にゅ——、色々とお疲れ様つて感じだね——」

「——つ」

まどろみの中、穂乃果は思ったことを口にした。

海末が大変なのは重々承知している。

元から家の稽古に加え弓道部の活動。今はそこにアイカツも合わさっている状態だ。家業ならば、穂乃果も店の手伝いをしているが、海末の多忙に比べると見劣りするだろう。

「うみちゃんも——アルパカさんに癒されると、リフレッシュできかも」

「そうだね——。でも、ことりが聞きたかったのは、そう言うことじゃなくて」

「——つ!」

「じゃなくて?」

「ええ、なんだつけ? わすれちゃった。えへへ」

「ははは、わすれたらむりだね」

「えへへ——」

「ははは——」

「あのおっ!!!」

『ひゃあ?!?!』

大きな声が蕩けきつた穂乃果たちの脳を揺さぶる。

驚いた二人が慌てて振り返ると、そこには見覚えのある少女の姿があった。

「あー！ 貴女は花陽ちゃん！」

「ど、どうも。ライブ以来です」

μ's のファーストライブにきた眼鏡をかけた少女、小泉花陽が丁寧にお辞儀をする。次の授業が体育なのか、体操着に身を包んでいた。

「えっと、お水替えたいのでどいてもらえると、ありがたいです」

「あつ、ごめんね。飼育委員なんだ」

「は、はい。そうです」

穂乃果とことりが離れると、花陽はアルパカの前に設置された水が入ったボトルを慣れた様子で取り替えた。

ついでに、二頭のアルパカを花陽が撫でると、アルパカたちは気持ちよさそうに鳴き声を漏らした。自分たちのときよりも、安らいでるアルパカの様子を見て穂乃果は感心

する。

「おお、アルパカ使いだ」

「ふえ!? これぐらい普通じゃあ。先輩たちだって、さつき撫でてたし……」

「いやいや、穂乃果たちが撫でた時はそんな嬉しそうに鳴かなかったよ」

「そうだね。考えれば、ことりたちは自分たちばかり気持ちよくなって、アルパカさんのことをあまり考えてなかったのかもしれない。凄いよ、花陽ちゃん」

「えつと……、それほど」

思いもしなかった褒め言葉で、花陽が困ったように笑う。すると何を思ったのか、穂乃果が花陽の両手を掴み取った。

「ねえ、花陽ちゃん。アイドルやりませんか?」

「はい?」

「穂乃果ちゃん、いきなり過ぎ……」

唐突の勧誘にことりも呆れるが、構わず穂乃果は花陽に迫る。

「君は光ってる! 大丈夫! 悪いようにはしないから!」

「えつと、私なんか、スクールアイドルは無理ですよ。西木野さんとは、違います」

「西木野さん?」

何故、その名前が出てくるのかと首を傾げる穂乃果。

花陽は顔を俯かせる。

「今朝、新田先輩が西木野さんが勧誘してたのを見ました。確かに、西木野さんは綺麗で、ピアノの上手で。あんな人がスクールアイドルになったら、凄いだろうなって……」
今朝、突然一年生の教室に来訪してきた新田色明が真姫を呼び出したため、クラス中は騒然。誰もが覗き見る中、花陽も気になって様子を窺った。

そして、プロの歌手である色明がμ'sの活動に協力していることに驚く。

同時に真姫を直接勧誘したのは納得する。

誰から見ても目立ち、音楽の経験がある才女。

真姫がスクールアイドルになれば注目されるだろうと花陽は確信した。

自分と違ってと、卑下しながら。

「でも、私は、地味だし。人前で上手く話せないし。プロの歌手である新田先輩が関わったのなら、余計私なんかじゃ駄目だし。西木野さんなら、先輩たちの期待に応えられると思います」

「確かに、西木野さんは凄いよね」

「はい。だから——」

「けど、それと花陽ちゃんがスクールアイドルをやらないうことに関係はないと思うけど」

「？」

「えっ?」

驚く花陽が俯いていた顔を上げる。

すると、穂乃果が不思議そうに彼女を見つめていた。

「花陽ちゃん。まだ全然知られてない私たちのことを、ライブする前から知っててくれるくらい、スクールアイドルに興味が。ううん、アイドルが好きなんだよね?」

「は、はい……」

「だったら、自分もやってみたいと思わなかったの?」

思わなかったことは、ない。

花陽は小さな頃から、テレビの中に居るアイドルが好きだった。

自分もあなりたいと夢見たことも少くない。そうでなければ、アマチュアであるスクールアイドルにまで興味を示さなかったろう。

しかし、偶に思い馳せるだけで、行動に移したことは一度もなかった。

自分でも解ってることだが、意気地なしなのである。

「それは、あの……」

どう答えれば良いのか、花陽が口籠った。その時である。

「……!」 かよちんを虐めるな!

当然、素早く走ってきた体操着の少女が二人の間に割り込む。

少女は花陽を庇うように穂乃果の前に立ち塞がり、両手を広げた。

「り、凜ちゃん!?!」

「かよちん、今のうちに逃げて!　ここは凜が——」

「凜ちゃん、何か誤解しているよ!　ただ、先輩の質問に私が答えなかったただけだから

!」

「え?」

颯爽と現れた星空凜は花陽の叫びに静止すると、改めて自分の前に立つ二人に目を向ける。

呆然としている穂乃果とことり。

今一度、後ろで困っている花陽を一瞥して、自分が早とちりしたの気づいた。

「ご、ごめんなさい。凜の、——私の勘違いみたい、でした」

「あはは、別に気にしてないよ。花陽ちゃんを困らせてたし」

笑って流した穂乃果は、凜を見つめる。

「凜ちゃんだよ。ライブ以来だ」

「えっと、スクールアイドルの高坂先輩と、南先輩ですよね?」

「そうだよ。覚えててくれて、ありがとう」

「あの……、スクールアイドルの先輩たちがかよちゃんに話して……」
「うん。ちよつと、花陽ちゃんにスクールアイドルと一緒にやらないかって誘っていたんだけど」

穂乃果がそう口にした途端、凜は顔を輝かせて、くるりと回って後ろにいた花陽に向き直る。

「かよちゃん、やりなよー！」

「ふえ!? 凜ちゃん！」

「だって、ずっと気になってたじゃん！ かよちゃん、そんなに可愛いだから絶対人気出るよー！」

「ええええええ!?」

「ほら、私もスクールアイドルをやりますって、自分からも言おう！ さあさあー！」

「待って、待って凜ちゃん！」

背後に回った凜が花陽の背中を押すが、彼女はその場で踏ん張り拒絶する。

流石にこれ以上押ししたら花陽が転ぶだろうと、凜が背中を押すのを止めると、今度は花陽が凜のほうを振り向いた。

「あの、一つ我仮言っていいかな？」

「うん？ しょうがないなあ。なあに？」

「あのね、私がアイドルをやりたいっていったら、一緒にやってくれる？」

「え？ 凜が？」

「うん」

余程意外だったのだろう。

花陽の言葉に凜はしばらく硬直すると、困ったように苦笑した。

「無理無理、凜なんてアイドルは似合わないよ。女の子ぽくないし、髪だつてこんなに短いし」

「そんな——」

「そんなことないよー」

凜の幼馴染である花陽より先に、大きな声で彼女の言葉を否定したものがいた。

二人の会話をそれまで黙って聞いていた、ことりである。

「髪が短いからつて、女の子ぽくないとかそんなこと関係ない！」

突然のことりの張り上げた声に、凜と花陽、それに穂乃果も驚いていた。

見るからに温和だった彼女は、鋭い剣幕を凜に向けていた。

「凜ちゃん。ことりと比べると花陽ちゃんの髪は短いほうだけど、それでも可愛いと思つてるよね？ 花陽ちゃんがアイドルをやれば人気でるつて言ったのは、凜ちゃんのこと正直な感想だよな？」

「は、はい。そうです」

「そんな花陽ちゃんが自分の可愛さに自信を持つてくれなかったら、凜ちゃんは悲しい？」

「当然にやあ！」

敬語が外れた素の言葉に、ことりは満足しつつ、事実を突きつける。

「凜ちゃんは同じことを、花陽ちゃんにしてるんだよ」

「え!？」

「ねえ、凜ちゃんと花陽ちゃんてどれ位の付き合いなの？」

「……………」

「えっと、小学校入る前からの幼馴染です」

衝撃を受けて声が出ない凜の代わりに、花陽が答えた。

だが、衝撃を受けてるのは花陽も同じである。

ことりの言葉は、花陽も凜を悲しませていると言っているようなものだったからだ。

「そうなんだ。私と穂乃果ちゃん、それと海未ちゃんと一緒だね」

ことりは微笑みながら、静かな瞳で二人を見つめる。

「それくらい前から、二人は一緒だったんだよね。だったら、ずっと傍で見てくれた幼馴染の言葉を信じてあげてもいいんじゃないかな？」

「……………」

「スクールアイドルのことはとりあえず置いて、まずは二人とも自分のことをもつと好きになるうよ。じゃないと、隣にいる大切な友達に悲しい思いをさせたままだよ？」

キーンコーン、とそこで昼休みが終える予鈴が鳴り響く。すると、ことりは目のまで暗い顔をする二人に気づき、我に返ったように慌て出した。

「ごめんね！ 偉そうなこと言っちゃって！ 全然、話したことないことりなんか、説教みたいなことされて嫌だったよね？」

「え？ そんなことは……………」

「先輩の言葉は、考えさせられたので……………」

「うん。凜も……………ありがとう、ごさいます」

「やだなあ……………お礼を言われることはないんだけど……………」

「よし！ 話はこれで一旦お終い！」

ぎこちない空気が漂う中、大きな声でそれを掻き消したのは穂乃果である。

「花陽ちゃんたち、次体育でしょう？ 予鈴鳴つたし、早く行かないと遅れちゃうよ？」

「あつ、はい……………」

「じゃあ、失礼します」

花陽と凜は頭を下げると、急ぎ足でその場か離れた。

だが、途中で凜が何故か立ち止まると、穂乃果たちがいる方に振り向いた。

「あの！ 本当に！ さっき言ってくれた言葉！ ありがとうございました！」

そう叫んだ凜は待っていた花陽と共に、今度こそ授業のためグラウンドに走っていった。

「だって。だから、ことりちゃんも気にする必要ないよ」

「……うん」

「さてと、私たちも教室に戻ろうか！ 授業に遅れちゃうと、先生の前に海未ちゃんが怒るからね」

「ははは、そうだね」

ようやく元気を取り戻したことりと共に、穂乃果は急ぎ足で校舎に戻る。

「けど、いきなりことりちゃんが大声を上げたのは驚いたな」

「ええ、ぶり返しちゃうの？ あれは、ちよつと昔のことを思い出しちゃって」

恥かしかる顔を赤くすることり。穂乃果とはいうと首を傾げていた。

「昔のこと？」

「ほら、小学校のとき。穂乃果ちゃんもことりや海未ちゃんみたいに髪が長くないから可愛くないって言ったの覚えてる？」

「……………。ううん、そんなこと、あつたけ？」

「あつたよ。クラスの子たちからかわれて、落ち込んだた」

昔から穂乃果は澆刺とした子であり、よく男の子に混じって遊んでいたりした。

服装は動きやすいようによくズボンをはいていた。髪の毛の長さも、今と同様、腰まで伸ばしていることりたちとは違い、精々セミロング程度。泥だらけで走り回ることとはよく見られる光景。

髪の毛の結わなければ男の子と間違われることもあり、それでからかわれることも少なくなかった。

「ううくん。男の子みたいだって言われたことを覚えてるけど、落ち込んだりしたかな」

「…………穂乃果ちゃんが覚えてないなら、もういいよ」

眉間を寄せて唸る穂乃果を見て、ことりはそれ以上追求することを止める。

正直、綺麗な思い出ではない。ことり自身もあまり思い返したくはないことだった。

昔の穂乃果が自分が可愛くないと落ち込んでいた時、当時のことりは先程の花陽たちとは比べ物にならないほど怒鳴ってしまったのだ。

仮に、穂乃果が過去と同じようなことを口に出せば、ことりも同じ反応をしてしまうかもしれない。

しかし、それは彼女の杞憂だった。

「大丈夫だよ」

「え？」

「だって、私は自分を可愛いって思ってるよ」

傲慢な言葉を、照れくさそうに笑いながら穂乃果は言った。

「じゃないと、流石にスクールアイドルなんてやろうとなんて言い出さないよ」

「……そつか。そうだね」

今でも、綺麗な思い出ではないと思う。

悩み苦しむ穂乃果に自分勝手な思いをぶちまけた、汚い過去。

それでも、あの時の言葉は。友達が忘れていようとも、確かにその中に残っているのだから。

良かったと、ことりは思えたのだ。



本日の授業がすべて終わると、大半の生徒が部活動に向かう者と帰宅する者に分かれる。残りのものは委員会の仕事やその場に残留者であり、花陽は最後の後者だった。

「はあ……」

帰り支度をしながら、重いため息を吐き出す。

ただ、彼女は席を離れることなく思い悩んでいた。

彼女の心中は、スクールアイドルのこと。

本心では、やってみたい気持ちはあった。

オーディションなので選ばれた人間にしかなれないプロのアイドルではなく、意思があれば誰でもなれるスクールアイドルならば自分でもできるのではと。

しかし、それは甘い考えだと既に悟っている。

なることは簡単だろう。

極論で言えば、今から自分がスクールアイドルだと宣言すれば、それでなってしまう。ただし、勤まるかは別問題なのだ。

花陽は人前で話すことが苦手だ。幼馴染の凛のように、運動が得意なわけでもない。今朝も勧誘されていた西木野真姫のように音楽の才があるわけでもない。

μ'sのリーダーである高坂穂乃果のような行動力もない。園田海未のように詩も書けなければ、後輩たちに慕われてもしない。南ことりのように衣装を作る技術もない。

新田色明のお眼鏡に適う自信もない。プロミュージシャンがμ'sに関わっている以上、生半端な存在など不要だろうと、花陽は慄いていた。

ないもの尽くしで、たじろいでる。

「かよちん、一緒に帰ろう?」

机の上で俯く花陽に、凜が声をかけた。

ただ、どこのなくいつもの快活な元気が足りない。

「凜ちゃん?」

もしかしたら、昼休みに言われたことを気にしているかもしれない。

そう思った花陽がなんと声をかければいいのか迷っていると、先に凜が新たな言葉を投げかけた。

「それと、帰る前に先輩たちの練習見に行かない?」

「え?」

「あつ! 違うよ! 見に行くだけで、強引に入らせようとかそんなこと考えてないから!」

ぶんぶん手を振って誤解を招かないようアピールすると、凜は困ったような笑みを浮かべる。

「でもね。一度見たら、かよちんの気持ちも踏ん切りつくかなって思ってる」

「凜ちゃん……」

「色々考えたけどね、かよちんが本当はスクールアイドルをやりたいのには自分に自信がないからだよね?」

こくりと頷く、花陽。そんな彼女の両手を、凧は自分の手でやさしく包み込んだ。

可愛いから大丈夫だよ、と昼にも言ったような言葉は出せなかった。

凧はお世辞抜きで花陽のことを可愛いと思っている。

けれど、いまそれを言ってしまうとまた否定されるのが解る。

言われて自信をつけるなら、これほど不安にはならないだろう。〔自分自身〕も、そうなのだから。

「ならさ、普段どんなことしてるか見てみようよ。ほら、凧たちってライブは見たけど、どんな練習してるか見たことないし。見てみたら、かよちゃんも頑張れるかな思えるかもしれないしね」

無論、想像以上の練習風景で心が折れるかもしれない。

凧は知らない。アイドルをするために普段どんなことをしているのか。

そんなことは、目の前の花陽のほうに詳しいだろう。

けど、ここまま苦悶するよりも、一歩行動した方がいい。それは凧にも解ることだ。「当たって砕けるだよ、かよちゃん！ 砕けちゃったら、凧がかき集めるから！」

「うふふ、なにそれ」

可笑しそうに花陽が笑い、凧もそれを見て笑った。

「じゃあ、ちよつとだけ覗こうかな。そしたら、少しは気持ちの整理がつくだろうし」

「うん！ 凜も付いて行くから安心して！」

「うん。ありがとう、凜ちゃん」

「よし、善は急げにやあ！ さっそく、レッツゴー！」

「わわわ!? 引つ張らないでよ、凜ちゃ——ん！」

花陽は慌てて鞆を担ぐ。そのまま、凜の腕を引かれながら、教室を出ようとした。

「わぶー！」

だが、出口のところまで急に凜が立ち止まったため、彼女の背中に鼻をぶつけてしまう。

「あ、ごめん、かよちゃん！ 大丈夫!？」

「うんうん。別にどうもないよ。それよりどうしたの？」

「えっと、ほら、あそこ」

凜の視線の先を花陽も見してみると、廊下にある掲示板の前でクラスメートの真姫を見つけた。

元から注目を浴びていたが、今朝、色明に勧誘されていた一件で余計に意識するようになり、自然と二人は真姫の様子を窺う。

真姫は掲示板の前に設置してあるチラシを一枚取ると、花陽たちがいる方にやって来た。

すると、花陽が慌てて凜を連れて教室の中に戻る。

「何で隠れるの?」

「えっと、何となくでも見られてたの知られたら嫌かなって思ったから」

そんなやり取りをしている間に真姫は通り過ぎた。

彼女の姿が見えなくなると、花陽たちは改めて廊下のお出で行き、自然と真姫がいた場所に目を向ける。真姫がいた場所は、丁度 μ sの勧誘ポスターが貼られていた掲示板の前である。

「あれ? あれって」

「かよちゃん」

何かに気づいた花陽がその場まで近づき、小さな手帳を拾い上げた。

「それって、生徒手帳?」

「うん。西木野さんのだね」

「なら、届けに——ってもういないね」

凜が振り向いて真姫の姿を確認するが、もうその姿はどこにも見当たらなかった。

「どうしよつか。明日、学校で渡す? それとも先生に預ける?」

「一応、個人情報だし、早く届けてあげたほうが困らないと思うの」

「かよちゃんは優しいにゃあ」

「急いで昇降口に行つて、いなかったらそのまま家まで届けよう。 μ sの見学は明日

でもいいし」

「ええ、駄目だよ。見学は今日じゃないと。明日になったら、気が変わっちゃうかもしれないよ」

「あう……」

そんなことないよと、言い返せない自分に花陽は内心落ち込む。

「あつ！ 昇降口の前に、あそこ行ってみようよ！ 帰ってなかったら、西木野さんきつといるよ」

「あそこ？」

「西木野さんといえば音楽室！」

「ああ、そうだね」

真姫がよく音楽室でピアノを弾いていることは、既にクラスメートならば誰でも知っていることだ。

「なら、行ってみようか」

「よし！ 早く届けてあげて、先輩たちの見学に行こう！」

10話・青春のハーモニー

真姫が落とした生徒手帳を届けるため、彼女が行きそうな音楽室に向かった花陽と凜。

結果として、真姫は音楽室にいた。

より正確には音楽室の扉の前で、ここそそと中の様子を覗きいる。

不審な行動をしている彼女を思わず花陽たち怪しんでしまったなは仕方ないことだろう。

「何をしているのですか？」

突然、後方から声。

花陽たちが振り向くと、μsのメンバーである海未が数枚の紙を胸に抱き、不思議そうに三人を眺めていた。

彼女の傍には同じように眺めているプロアーティストの色明もいる。

「えっ、っ、これは——!?」

おろおろとする真姫だったが、彼女はここで近くに花陽たちがいることに気づいた。

「ヴェ!? あ、貴女たちはクラスの!? な、なんでここに？」

「えっと、私たちは……」

「西木野さんが生徒手帳を落ちてたから、ここに着たら渡せるかなって」

花陽の後に凜が説明する。

差し出した生徒手帳を見て己のポケットを探り、真姫はばつの悪い顔を浮かべた。

「わざわざ、届けにくれるなんて。あ、ありがとう」

「いえ」

恥かしそうに生徒手帳を受け取る真姫を見て、思わず顔を緩める花陽。

教室では何処か俯瞰した様子で近寄り辛かったが、こんな愛らしい顔もするのかなと思わず微笑んでしまった。

「なに笑ってるのよ」

「え？　ご、ごめん！」

「別に謝ることないわよ」

「それで？　西木野の方は何でここにいるんだ？」

話の合間を見切った色明が質問を投げかける。

「別に。偶々通りかかっただけよ」

「いや、嘘だよね」

真姫は誰から見ても分かる嘘に凜がツツコミをいれた。

「西木野さん、さつきからジロジロと覗いてたよね？」

「!? 何時から見てたのよ! て、ていうかそんなことしてないし!」

「ええ、してたよ」

「してない!」

「してた!」

「二人ともそれくらいに。廊下では静かにですよ」

熱が上がる前に海未が二人の間に入り、諫める。

流石に先輩からの注意で、興奮してきた二人も一旦落ち着きを取り戻した。

のだが。

「それで西木野ちゃんは何で音楽室を覗いてたのかな？」

その隙に、真姫が気になった色明が意地悪そうな笑みで彼女に這い寄っていた。

声も上げる間もなく驚く真姫に、色明は遠慮なく問いかけを続ける。

「中には先に行つてもらつていた高阪たちしかいないはずだけど? あれれ? もしか

して気になつてんのかい?」

「貴方は何を煽つてるのですか?」

「パッシ! と手に持っていた紙を丸めて色明の頭を小突く。

きよんとする一年生三人に、海未はにこりと微笑んだ。

「この人は気にしないでください」

『はあ……』

「いや、叩くのはどうかと——」

「ああ、そうです。これから私たち練習を見てもらえませんか？」

文句を言う色明を無視して、海未は三人を誘う。

「練習？」

「はい。今回は歌の特訓ですね」

「あの、園田？」

「アイドルは人前で歌うもの。ですので、人目に慣れておこうかと」

「園田さ——ん？ お——い？」

「恥ずかしながら、私はまだ人前が不慣れです。ですから貴方たちにご協力いただけると助かります。もちろん、無理にはと言いませんけど」

「私たちは——」

「別にいいですけど」

答えたのは花陽と凜である。

元々、彼女たちは真姫に生徒手帳を届ければ、*μ's*の練習を見学するつもりだったのだ。

よつて、海未の誘いは手間が省けたので幸いであり、二人は残った真姫に視線を向ける。

同じように海未も見つめ、三人の視線を受けた真姫は観念したように溜息を吐き出した。

「わかりました。私も聞かせてもらいます」

「西木野さん、ありがとうございます。小泉さんも星空さんも」

『い、いえ……』

「はあ。いいんですよ。俺は所詮女子高にとつて異物ですからね。風当たり辛いのは覚悟の上だ」

「まだ訳のわからないこと言つて拗ねてるんですか？ 行きますよ」

無視されて不貞腐れていた色明の腕を、ぐいっと海未が引つ張る。

「一応注意しますが、練習中、後輩たちをからかったら駄目ですからね」

めつ！ と海未は指を色明の鼻先に突き立てから音楽室の扉を開いて中に入る。

一瞬、色明の顔が形容しがたい表情を浮かべたが、すぐに気を取り直して、彼も入室した。

「お待たせしました」

「海未ちゃん！ あれ？ 新田君の後ろにいるのは？」

「西木野さんに……花陽ちゃんと凜ちゃん？」

「三人とも偶々ここを通りかかったので、私が練習を見てくれるように頼みました」

不思議そうに一年生たちを見つめる二人に、海未が説明する。

「どうも……」

「お邪魔します……」

「……」

花陽と凜は軽く会釈し、真姫は恥かしそうにそっぽを向いていた。

薄い反応のする三人だったが、穂乃果はう嬉しそうに破顔する。

「大歓迎だよ〜！ ささ、お客様席に座って。あ、これ。ことりちゃんが持ってきてくれ

たお菓子だけど食べる？」

「穂乃果。嬉しいのは解りますがしつかりしてください。下手な真似をして後輩たちに

恥を重ねるところを見せたいのですか？」

「いや、ちよつと優しくしただけ——ちよつと待つて海未ちゃん。今の言い分だと

既に穂乃果が恥をかいてるみたいになってるんだけど!？」

「おや、穂乃果にしては敏いですね。感心です」

「えへへ、褒められ——いや、馬鹿にしてない!？」

「あ〜。穂乃果ちゃんに海未ちゃん？ そろそろ、練習したほうがいいじゃないかな

「？」

いつもの調子でじゃれ合いに見かねたことりが、二人の間に入って止める。

普段の彼女ならばもう少し様子を眺めているのだが、今は後輩たちがいる手前。更には時間にも余裕があるわけではないのだ。

「五時には新田君も仕事に行くんだし早くしようよ」

「ああ、そうだね。ごめんごめん」

「うっ！ 私としたことが、申し訳ありません」

色明は正真正銘のプロアーティストであり、本人曰く今は忙しくないと云ってるが仕事がないわけでない。海未たちの歌の特訓が終えたら、急いで仕事先に向かう予定だ。

「俺ことなんざ気にするな。それより、さっさと始めちまおう」

多忙にも関わらず涼しい顔でそう云つてのけた色明。

μ s の三人は一瞬驚きつつも、すぐに頷き合う。

同時に花陽と凜が小さく声を上げながら色明を賞賛した。

「さーつとあんな事言うなんて凄いにや。芸能人はみんなあーなの？ それとも男の人だから？」

「やっぱり芸能人だから周囲には弱気な顔を見せたら駄目なのかもしれないね」

「貴方たち。先輩たちがそろそろ歌うんだから、おしゃべりはそれまでにしなさい」

『(い、い)めんなさい』

真姫に注意された二人が改めて先輩四人の様子を見てみると、既に壇上には楽譜を握ったμ、sの三人が並んでいる。

ピアノの椅子には色明が座っている。

凜と花陽はピアノも弾けるのかと感嘆したが、既に彼の腕を知っている真姫は微妙な顔を浮かべた。

一瞬の沈黙の後、ピアノの音が鳴る。

少年が奏でる調べに、少女たち三人の歌声が重なり合わさった。

落ち着いた旋律が音楽室に響き渡る。

意外なことに、μ、sの三人が歌っているのは異国のメロディーだった。

(!? え!? これって英語かな!? 外国の歌を先輩たちは歌っちゃうの!?)

(ふええ。練習でこんな歌を歌っちゃうなんて、やっぱり私には。あれ? でもこの曲、どこかで?)

(昼に練習してた曲ね。歌の方も一応上達してるわ。基礎を無理やり叩き込んだ感じだけど……)

予想外の歌に驚く凜。神妙な顔になる花陽。冷静に聴いて評価を下す真姫。

三者三様の反応と共に、一つの曲が終わる。

「ふふくん、どうだった？」

「す、すごいじゃあ！」

自慢げに胸を張って笑う穂乃果に、パチパチと凜が拍手を送る。

「英語？ の曲を歌えるなんて先輩たち凄い！」

「まあ、それほどでも——」

「はい、それほどでもないですよ。海外の曲で歌えるのは今のところこれだけですしね。

一通り歌えるのがやっとです。穂乃果は歌詞にフリガナを書いてますし」

「ちよつと、海未ちゃん！ また穂乃果だけ馬鹿にするの!？」

「い、いえ、馬鹿にしたわけでは。敬遠されるぬよう勤めたまでです」

「もう難しいこと言って誤魔化さないでよ」

「え？ 私、難しいこと言いましたか？」

「ははは。えつと、花陽ちゃんはどうかだったかな？」

「は、はい！ 英語の歌を練習するのは凄いと思いました」

いつもの海未と穂乃果の絡みを尻目にことりが花陽に感想を求めると、彼女は興奮していた。

だが、そこから花陽は神妙な顔つきに変化する。

「……質問なんですけど、なんとなくさっきの曲聴いたことあるんですが、いったい？」

「Shall We Gather at the Riverだ。西木野なら分かるだろ」

「当然です。1864年にアメリカで発表された賛美歌でしょ?」

色明の言葉に補足を付けて答える真姫。それを聞いた花陽は不思議そうに眉を顰める。

「あれ? 何で私、そんな曲に聞き覚えがあつたのかな? 授業とかでやった、かな」

「もしかしたらやつてるかもしれないが、この曲は東京にいたら聴いたことあるかもしれない」

「東京にいたら?」

「この曲は池袋にある家電量販店のテーマソングなんだよ」

花陽の疑問に答えるため、色明が説明を始めた。

「もつとも、仮に池袋に行ったことがなくても、この曲は替え歌で多く知れ渡っているぜ」

「替え歌?」

「たんだんだぬきの………て聴いたことないか?」

「あつ!」

そのフレーズを聞き、ようやく花陽は思い出す。

地域ごとで歌詞が違うが、子供の頃に口ずさんだ遊び歌の一つだ。

「誰が最初に替え歌にしたから分らないが、これの原点は *Shall We Get her at the River*——日本版だと『まもなくかなたの』という歌でな。西木野が答えてくれた通り、これは元々は賛美歌だ」

『まもなくかなたの』はアメリカの聖職者、ロバート・ローリーが作詞、作曲したものである。内容は新約聖書ヨハネの黙示録第二十二章で予言されている神の都で再会に期待するもの。

葬儀の場で歌われることもあるこの曲は、日本の歌謡曲のモチーフになり、そこから替え歌へと発展したのだ。色明が説明した家電量販店のテーマソングも、正確には『まもなくかなたの』をモチーフにした歌謡曲のことである。

作詞したロバート氏も、まさか異国の地で遊び歌になるとは思ってもいなかっただろう。

「替え歌として既知してある曲ならば、ある程度歌えるだろうと課題曲にしたわけだ。本来聖歌隊が歌う賛美歌を真面目に取り組めば気持ちも引き締まるし、普段言い慣れない英語の歌に練習することは今後のステップアップに繋がる」

「な、なるほど」

やはり、この人はプロなんだ。

課題曲一つでも此処まで考えているのは流石であると花陽は感心する。

「さてと、さっきの歌に対して俺からの評価だが——」

瞬間、μ sの三人が緊張した面構えた。

色明の歌に関する情熱は本物。

些細なことでも厳しく駄目出しされるので、海末、穂乃果、ことりは何を言われるのかと身構える。自然と、一年生たちにも緊迫した空気が伝染した。

色明の口が、開かれる。

「悪い。ピアノを弾くのに夢中でお前たちの歌まともに聴いてなかったわ」

『なんでやねんっ!!』

某副会長のようなツツコミを爆発させるμ s三人。

凜と花陽もこれには顔を引きつらせて、真姫に関しては呆れた視線を色明に向けた。

「ちよつと新田くん！ 穂乃果たち少しでも注意されないように授業の合間でも練習してたの知ってるよね？ なのにそれは駄目だよ！ アウトだよ！」

「ごもつともだ。面目ない」

「しかし、どうしますか？」

海末も最初は驚いたものの、色明なりに準備していたことを知っている彼女はこれ以上言及はせず、先の展開を求めた。

「歌なしの原曲が手に入らなかつたから今回は貴方がピアノを弾くという話でしたが、ピアノを弾けば私たちを評価できないとなると歌の練習は……………」

「それなんだが、偶然にもそこに丁度いい人材が」

ちらりと色明が視線をとある方向に向けたので、 μ 、 s の三人も同じ場所に目を向ける。

その場所には真姫がいた。

「西木野真姫ちゃんよ、俺の代わりにピアノを弾いてくれない?」

「はあ!? 何で、私が!」

茶化した口調で色明が頼むと、真姫が驚いたように叫ぶ。

「いや、頼むよ。歌の練習は防音整備されてる音楽室しかできないし、ここも正規の部活が利用するなら迅速に去らないといけねえから何時でも使えるわけじゃない」

本来は正規部活である吹奏楽部が団体練習で使うのだが、今は個人パートを練習する時期なので今は空いている時間を使わせてもらっている。

だが、吹奏楽部の誰かが個人練習でもここを使いたいと言えば、 μ 、 s 一行は文句を言わず立ち去らないといけない。

未だ μ 、 s は学校非公認の正式な部活ではないのだる。

正式な部活になれば、第二音楽室を使用している軽音部のように防音整備が整ってい

る専用の場所を提供して貰えるかもしれないが、貰えないものを強請っても仕方ない。

「今日みたいに使える日でも俺が仕事入ってたら無理だしな。俺がいて、音楽室が使える日は少しでも音のクオリティを上げたんだよ。今度で何か奢ってやるからさ、な？」

「奢るって………言っておきますけど私は安い女じゃないですよ？」

「上等だ。伊達に歌手で稼いでない。なんなら、その一年生たちまとめてご馳走してやるよ」

「ええ!? 凜たちもいいんですか!？」

「ええ!? ずるい穂乃果たちにもご馳走してよ!」

「穂乃果。私たちはこの前、新田さんに名古屋まで連れてってくれたんですから遠慮しなさい」

「な、名古屋? いったい名古屋で何を?」

「それはまた話すと長くなっちゃうから、また今度ね花陽ちゃん」

「ああ、もう! 誰かが一度話し出すと喧しいわね! 新田先輩、ピアノ弾きますからするなら速くしましょう。ただし、自分で言ったんですからちゃんとその子たちの分まで奢ってもらいますからね!」

「おお、よろしく」

真姫が新田からピアノの席を譲ると、花陽が申し訳なさそうな目線を彼女に向けた。

「えっと、西木野さん。私たちまで奢ってもらっていいのかな？」

真姫がピアノを弾く報酬として色明から何かを奢ってもらうことは納得できるが、ついでに自分たちまで奢ってもらえることに花陽は腑が落ちなかつた。

「別に気にする必要ないじゃないの。私が払うわけじゃないし。どうしても気になるんだつたら、生徒手帳を届けてくれたお礼で自分たちもついでに、とか思つときなさい」

「西木野さん……ありがとう」

「お礼を言われることなんて言つてないわよ」

「あつ、そうだ！ 今度は花陽ちゃんたちも一緒に歌わない？」

『ええええ?!』

穂乃果がした突然の申し出に思わず驚愕の叫びを上げる花陽と凜。

「また突拍子もないことを。二人も迷惑でしように」

「いや、別に良いじゃないか？」

呆れながら嘆息する海未だったが、色明は賛同した。

「その二人が良ければ俺は構わない。普段と違つた人間と一緒に歌つてもペースが乱れないかチェックできるしな。勿論、無理強いで歌わせる気はないが」

「私は無理強いピアノを弾かされようとしてるんですけど」

「交渉しただろ。何なら西木野も歌つてみるか？ それともピアノ以外は駄目だったり

？」

「馬鹿にしないでください。何処の誰さんかと違って、両方できます」

「厳しい言葉が胸に染みるよ。さてと、結局そちらさんの二人は歌うのかい？」

改めて聞かれて、花陽と凜は互いに視線を見合わせる。

「凜ちゃんは どうする？」

「かよちゃんがするなら凜も歌うよ」

「では……、少しだけお邪魔させていただきます」

「じゃあ、花陽ちゃんはことりとこつちで楽譜を見よう」

「よ、よろしくお願いします」

「なら、凜ちゃんは穂乃果と一緒に見ようか？」

「お願いします。ああ、本当にフリガナ書いてるから凜でも歌えるかも」

「さてと、実際に歌う前に軽く発声させて声を合わせてみようかねえ。西木野」

「わかりましたよ」

真姫がポーンと鍵盤を弾くと同時に、彼女とμ'sの三人が『あ——』と声を出す。

花陽と凜は突然のことで、着いてこれてなかった。

「ほら、その二人も声を出して」

『は、はい』

次にピアノの音が響くと、今度は凜と花陽も発声した。すると、色明は真剣な顔立ちで彼女たちを見る。

「眼鏡の子はもつと声を大きく。お隣の友達は少し周りを意識してみな」

「わ、わかりました」

「は、はいっ!」

「では、もう一度だ」

『あ——♪』

三度ピアノの音が響くと、今度は五人の声が綺麗に合わさっていた。

それを聞いた色明は納得顔で頷く。

「まずはこれでいいだろ。西木野、さっきの曲を弾いてくれ。楽譜は立てかけてある」

余計な間など挟まず、言われたとおり真姫は鍵盤を指先で叩く。

真姫にとって久しく弾いてなかった曲だったが、譜面を見れば問題なく弾けた、

少女たちの歌声が重なり合う。

(あれ?)

最初にその感覚に気づいたのは真姫だった。

ピアノの演奏と平行する同時に、そつなく歌う真姫。

技術だけならば、本格的な歌唱指導を受けて間もないが、s三人よりも上である。

しかし、この中で最も優れた音を響かせているものの、けして他が雑音に成り下がっているわけではない。

むしろ、溶け合った音は確かな調和を生み出していた。

何も真姫は他人と音を合わせた経験が皆無ではない。ほとんどの人間は学校の授業で合わせたことがあるだろう。

ただ、それよりも真姫は一人で音楽に没頭することを好んだだけ。

他人ろ音を合わせることに煩わしさはないが、一人で音楽をやっていた方が気が楽だった。

——けれど、今はどうだ？

己と他人の交わりに、不思議な感覚に囚われてる。

誰かと一緒に音を広げていること実感していた。

同じ感覚を、花陽も囚われていた。

花陽も誰かと一緒に歌うのはこれが初めてではない。

けれども、その度に声を大きくするようにと、先程の色明にされたように注意を受けてきた。

花陽は自分に自信がない。

もしも自分のせいで他人に迷惑とかけてしまつたら。

あるいは間違えてしまつたらどうするか。

そのような様々な悩みが彼女を畏縮させ、普段の発言にまで影響を及ぼしている。

今も、高らかな声が出てるとは言えない。

でも。

(私、ちゃんと歌えてる?)

始まるまでの不安が嘘のように消えて、彼女なりに声を出せていた。

周りに引つ張られるようにして、己の声が他者と共振する。

否。もはや長々しい御託と説明など、かえつて彼女たちの心境に泥を塗る行為。

この場でのたった一つ真実は——

『彼女たちは楽しんでる』

——それだけだ。

そして、いつの間にか曲が終わっていた。

「すつごく、楽しかった!」

真姫と花陽が夢から覚めたような気分の中、凜が喝采を上げる。

「凜、音楽の授業やカラオケで誰かと一緒に歌うことあったけど、ここまで楽しかったの

初めて！」

「穂乃果も楽しかったよ！ それに三人で歌ったときよりも重みがあったような」

「これは本来合唱する曲ですし、人数が多いことで深みが増したのかもしれないね」

「こともいい感じだったと思うよ。新田君はどうだった？」

「そうだな……」

歌唱指導者である色明は少し頭の中で考察を纏め、彼女たちを総評する。

「まずはゲスト参戦の一年生たちだが」

「ぴえ!? 私たちもですか!？」

「眼鏡っこは綺麗な声。そのお友達も伸びのある元気のいい感じだったな」

「あ、ありがとうございます」

「やった！ かよちゃん褒められたよ！」

「西木野は流石と言ったところか。歌の方もキレイがある」

「まっ、当然よ」

素っ気無い返事だったが満更でもなさそうな真姫に苦笑してから、本命であるμ s

三人に判定を言い渡す。

「軽く言うとうと園田は周りを意識して声が小さい。高阪は英語の発音がなってなさ過ぎ

る。南はビブラートがまだまだ甘いな」

「……はい、気をつけます」

「全然軽くじゃないよ」

「お前たちはガチ指導だからな。甘口採点なんて一切しないぞ。だが」

そう言いながら、色明は片手に持っていた自分のスマホの画面を見せつけた。

「いい表情で歌っていた」

「撮ってたのですか!？」

いつの間にか撮影していた先程の光景が流れ出し、各々羞恥に顔色を変える。

「うわ。注意されたのに声はまだ小さいよ」

「凛なんかみんなと比べて音が外れてる」

「ちよつと、私まで映ってるじゃないですか。さっさと消してください」

「新田君の言ってたとおり、声が……。どうやったら旨くできるんだろ」

「指導されてから改めて客観的に自分たちの歌を聞いてみましたが、己の不甲斐無さを

痛感させられますね」

「でも、新田くんの言った通り、みんないい顔で歌ってるよ!」

五人のうち、穂乃果だけは動画見て柔和に微笑む。

穂乃果の言葉通り、映像の彼女たちは朗らかな笑顔で歌っていた。

「こーやって歌ってる姿を見ると成長しているのも分かるね。特に海未ちゃん」

「わ、私ですか？」

「海未ちゃんて学校とかでみんなと歌うときはいつも顔が強張ってたよね」

「そうなのですか？ 自分では良く分らないですが……」

「確かに穂乃果ちゃんの言うとおりに、海未ちゃんは緊張してるのか硬い表情をしてたな。お母さんが録画してくれた昔の音楽会のをよく見ているから分かるよ」

海未はよく顔に出るタイプであり、生真面目。昔から発表会などで失敗したら駄目だと緊張し過ぎしまい、思わず顔が力んでしまうのである。

日本舞踊の舞台では、その真剣な顔つきは様になるが、それ以外の場所ではどうも悪目立ちしてしまうのだ。

「ことり。何故貴方のお母様が自分の娘ではなく私を撮ってるのか気になりますし、頻繁に昔の映像を見返してるも意味がわかりません」

「それは置いといて」

「置かれてしまうのですか」

「そう思うと、この前のライブや最近の海未ちゃんは前よりも歌うときはリラックスしてる気がする」

「自分では分かりかねますが、私も変わったのでしょうかね」

「変わった」

海未の言葉にピクリと反応したのは凜だった。

「今も人前は苦手ですが、あのライブ以降ほんの少しだけですが吹っ切れました」

「吹っ切れた……」

「初めは無理だと思っていたアイカツにもより真摯になれましたし、やってみれば人間変わるものですね」

幼い頃から心身共に鍛えても、未だ意気地のない自分に嫌気を指すのは変わってない。

でも、そんな自分がこんな気持ちでアイカツできるのは、穂乃果がスクールアイドルをやらなにかと誘ってくれたからである。

そして歌うことがこんなに楽しいのは、あの日、色彩豊かな彼の歌を聞いたから。

「あの……先輩！」

そうやって、海未が思いふけていると、意外な声が彼女に飛び込んできた。

「なら凜も——私も、先輩のように変われますか？」

「凜ちゃん？」

突然問いかけをした凜に、幼馴染の花陽は戸惑う。

尋ねられた海未は少し驚きつつ、どう答えるべきか悩む。

凜の真剣な眼差しを改めて見たあと、彼女は最初に思い浮かんだ言葉を声に出した。

「答えかねますね。若輩者の私では、何を断言しても説得力はないでしょう」

「そう、ですか……」

「でも、行動しなければ何も変わりませんよ。これは真実です」

「!？」

月並みの台詞ですが、と恥かしそうに付けたし、海未はその瞳を凜に向けた。

「もしも貴女が何か迷っているのなら、まずは一步、進んでみてはどうでしょうか？」

「一步、進むですか？」

「それで転びそうなら、私が責任を持って支えます。先輩ですので、後輩の面倒は見ます

よ」

「な、なら——」

唇をかみ締めながら、震えた手をぎゅつと握る。

自分に視線が集まっている。逃げ出したくなつた。

だが、支えるといった言葉を信じ、凜は一步踏み出した。

「凜も、スクールアイドルをやっているんですか？」

「り、凜ちゃん!？」

これに一番驚いたのはやはり花陽だった。

自分がやれば一緒にやってくれるかと誘ったが、まさか凜自らスクールアイドルをや

りたいというとは思っても寄らなかつたのである。

「ごめんね、かよちん。驚かして」

戸惑う花陽に、凜は申し訳なきような笑みを向けた。

「凜、ずつとね、可愛いのに憧れてたの。でも、自分なんかじゃって思ってた。何度もかよちんがそんなことないって、言ってくれてたのに」

「凜ちゃん……」

もしも昼にことりの言葉がなければ、今も自分を卑下して彼女を傷つけていたかと思うと、凜は胸が苦しくなる。

苦しいのは嫌だ。だから、凜は悩み抜き、挑戦する道を選ぶ。

「そんな凜でも、アイドルをやれば、変われるかなって思ったの。だから！」

凜は振り返り様、そのまま s に向かって頭を下げる。

幼馴染である花陽は誘われていた。

真姫はわざわざ教室まで出向いて勧誘されていた。

しかし、凜には直接声がかかってない。

もしかしたら、断れたら？ そんな不安に押しつぶされながら、凜は己の渴望を声に出す。

「お願いします！ 私も s に入れてください！」

静寂に包まれた。

それが何秒だったのか、凜には分からない。

ただ、音楽室にある時計の針だけが聞こえていた。

まるで爆弾のカウントダウンのようで居心地が悪く、胃が痛みかけたとき、彼女の両肩に誰かが触れた。

「まったく、そんなに頭を下げてしまつては、本当に転びますよ」

そう言つた海未は、両肩を持ち上げることゝ凜に頭を上げさせ、彼女の瞳に優しい微笑みを映す。

「勿論。大歓迎です」

「凜ちゃん、これからよろしくね！」

「可愛い子が増えて、ことりも嬉しい」

「あ、ありがとうございます」

ことりや穂乃果にも歓迎され、感極まつた凜は思わず目が潤んでしまった。

「ぐす、凜ちゃん、よかつたね」

「かよちゃん。うん……………」

振り返ると、自分よりも涙ぐんだ花陽に凜は微笑みかける。

「まだ、実感ないけど、凜。スクールアイドルやれるみたい。だから、かよちゃんも——」

「待って、凜ちゃん！」

凜が何に言おうとしたか分かった花陽は彼女の言葉を止めた。

「かよちゃん？」

「今度は、私が。自分で言うから。誰かに誘われたからじゃなくて。誰かと一緒だからやるんじゃない。自分から、言うの……………」

「……………うん。わかった」

凜がそつと体を横に逸らすと、花陽がそこに一步前が出る。

μ、sの三人に凜。色明や真姫も見守る中、彼女は一度深呼吸をした。

目の前で大事な友達が、勇気を出して一步踏み出したのだ。

ならば自分も、逃げてばかりでは親友として恥かしい。

「私、小泉花陽、一年生です！ 背も小さくて、声も小さくて、人見知りで……………自分

だけでは中々動けない、駄目なところばかりです——」

言っていて、自分が情けなくなる。実際、声もどんどん小さくなっていた。

されど、決意の言葉は高らかに叫ぶ。

「けど、アイドルに対する気持ちは誰にも負けないです！ だから、私もμ、sに入れてください！」

「うん！」

花陽が頭を下げるより早く、さっと彼女の目の前に手が差し伸べれた。

見ると、いつの間にか近くに来ていたことが、慈しむような笑みを花陽に向けていた。

「こちらこそ、お願い。一緒に頑張ろう、花陽ちゃん！」

「は、はいっ！」

「やったね、かよちゃん！」

「これで、sが五人に」

「いえ、六人よ」

一気が増えたメンバーに喜んでいると、またも意外な声が聞こえてきた。

声の主は真姫である。

あまりにも唐突だったため面を食らった一同。皆が呆然として真姫を見ていると、彼女は不満そうに顔を歪める。

「なによ。アレだけ誘っておいて、メンバーが増えたら用済みなわけ？」

「そういうわけじゃないさ。けど、驚きは隠せないな」

真っ先に正気を取り戻した色明が、苦笑を浮かべつつ心中を露にする。

「あれだけ嫌がってたのに、どういう風の吹き回しだ？」

「他人と音楽するのも悪くない。そう思っただけよ」

ぶつきら棒に放った言葉は真姫の本心だ。

他人と音楽に触れるのが楽しかった。

それに――。

ちらりと、覗き見るように真姫は海未に視線を向けた。

忙しさを理由にして自分がやりたいこともできないのは癪だと、踏ん切りをつけたのである。

素直でない彼女は、絶対に口にするつもりはないと己に言い聞かせるが。

「で? どうなのよ? 今更駄目とか、そんなこと」

「真姫ちゃ――ん!」

「!?!」

がっばと穂乃果が飛び込むようにして、椅子に座る真姫に抱きついてきた。

「ちよつと、なに!?!」

「よかつた! 真姫ちゃんともアイカツやれるよ!」

「もう……っ!」

突然の衝撃と柔らかな温もりに心臓を高鳴らせながら、顔を真っ赤にする真姫。でも、ちゃんと歓迎されているようなので、心の隅でほつと、安心する。

「真姫ちゃん真姫ちゃん真姫ちゃん!」

「引っ付かないで！ 転げる！ もう、誰か笑ってないで助けなさいよ——！」
少女の叫びと笑い声が響く。

優美な旋律には程遠い騒音であるが、今しか聞けない青春の音であった。

11話・遭遇 アンノウマン

「はい。14時予約された新田様ですね。お待ちしておりました。23番です」

「どうも」

色明は店員から番号札を受け取ると、慣れた様子で先に進み、その後ろを海末、真姫、凧が続いた。

辿り着くと、そこは様々な機材が設置されてた部屋。

凧は「ふえく」と声を上げながら物珍しそうに辺りを見渡す。

「凧、変なところ触らないでよ。簡単に壊れはしなないと思うけど、機械つてデリケートなんだからね」

「流石の凧も怖いから触らないよ。ところで真姫ちゃんはスタジオ借りたことあるの？」

「私もわざわざスタジオ借りることはなかったわね。音を取るだけなら家でもできるし」

「ついこの前でただのクラスメートだった二人だが、既に名前を呼び合うくらい親しんでいた。」

海末は仲が睦ましい後輩たちに微笑みを浮かべつつ、自分も周りを見渡す。

彼女たちは色明に連れられて、音楽スタジオに訪れていた。

理由は曲をレコーディングする際、本格的な機材でやれば音質は段違いで良くなるという、色明の意見を採用した為だ。

プロシンガーである彼は音に拘っており、少しでも品質を高めたいとのこと。

これには真姫がすぐ賛同し、音楽担当の二人が言うならということでも、sの曲は機材が揃ったスタジオで撮ることにした。

無論、施設を借りるためには費用が掛かる。

言い出した色明が既に稼いでいたり、真姫の実家が裕福とはいえ頼ってばかりはいけない。かかった金額は全員で分担して、最低限の利用を心がけることにした。

今回は実際に収録するのではなく、色明がμsの一部に機器の使い方や注意事項の説明するためにやって来たのである。

「かなり広いですね。部屋が幾つもあるようですし。ここでならダンスは無理でも、防音されるので歌の練習はできそうです」

「元々、そういう場所だ」

海末の言葉を聞き、色明が説明し始めた。

「収録している間、別スペースで他の奴が練習。あるいは練習中、完成度が高くなつたと

感じたら即座に収録に取り掛かる。ここはそういう場所だ」

「なるほど。会員専用のプロ御用達だけではありませんね」

「そこまで大げさじゃないがな。プロの連中が多用してるのは事実だ」

色明が招いた音楽スタジオは紹介された会員限定の店である。

彼のようにプロの世界で活躍している人間が自練習を行ったり、プロダクションに所属済みでデビュー前のアーティストが音楽を磨く場所なのだ。

そのためプライバシー管理は徹底されており、利用中するアーティストのファンがやってきても門前払いされる。

紹介であれば、海未たちのような人間も利用することは可能だが、プロのアーティストが多くいるため、ある程度のマナーは守らなければならない。

「念のためにもう一度言っておくが、アーティストを見かけてもサインを強請ったり、邪魔をしないようにな。特にアイドルのことで興奮しそうな小泉には再度注意しとけよ」
『わかりました』

色明の言葉にしつかりと頷く一年生二人。

なお、不安に思われた残りの一年生の花陽がこの場にはいないのは、プロアイドルに遭遇しそうな場所から彼女を遠ざけた。

わけではなく、同じくこの場にはいないことりの手伝い。

既に、sは新曲を一つ完成させている。

色明から作詞と作曲は毎日やるようにと言われた海未と真姫は、互いに意見を交わしながら一つの曲を生み出した。

ちなみに、作曲作業を通して、真姫とは少し仲良くなれたと海未は密かに思っている。密かなのは、言ってしまうえば照れ隠しで否定しそうだからだ。

曲が完成させれば、次は衣装。

歌とダンスの練習の傍ら、衣装担当であることりは奮闘していた。

次の衣装は前よりも凝っているらしく、コンセプトも全員同じではないらしい。

だが、メンバーが二倍に増えたので、仕事量は以前よりも増大した。

そこで手先が器用な花陽がことりの手伝いをするようになる。ことりほど手芸には長けてないが、言われたとおり針に糸を通すことはできるいようだ。

よって、本日花陽はことりの家で彼女の手伝いをしている。

ちなみに、sのリーダーである穂乃果は実家の店番。是非もないね。

「凜。改めて聞くのも悪いと思ってるけど、ちゃんと覚えられる？ 機械の扱いが得意そうには見えないんだけど……」

「大丈夫にや、真姫ちゃん。ゲームの設置とかパソコンの設置の自分でしたことあるし」
「今の時代は簡単に接続できるけど」

「むう……。そんなこと言うんだったら、どっちが早く覚えるか勝負しようよ」
「ふーん。凧が知力で私に勝負？」

「凧を見くびっては困るよ。凧は自分が興味あることならすぐ覚えるにや！」

「分かったわ。なら、最後にテストして貰って、点差が低いほうが高いほうにジュースを奢るのはどう？」

「その勝負乗ったにや！」

「ふふ。勝負はいいですけど、ちゃんと三人で覚えましょうね。二度手間は新田さんにも迷惑ですから」

本当に仲良くなったなと感慨深い気持ちの中、海未が二人に軽く注意する。

すると真姫と凧がピクリと反応して、二人同時に海未をまじまじと見つめてきた。

「え？ な、なんですか？」

突然凝視されて海未は戸惑う。

凧と真姫は何処となく哀れんだ顔をしながら、口を開いた。

「言いくいんですけど、私は凧より海未先輩のほうが心配ですね」

「はっ。」

「凧も、海未先輩って機械苦手そうと思ってた」

「はあ!？」

予想外の言葉に海未は驚愕する。

どうやた後輩たちに機械音痴だと思われていたようだ。

「いや、別に悪い意味ではないですよ。ただ、先輩の家って古いですから、最新の機械とか触れる機会がなさそうだなって」

「た、確かに私の家は古くて、最新の機械もありませんけど、だからって……」

「ゲームとかするときは、戸惑いながら変なところ押してそうにや」

「へ、変な言いがかりはよしてください！（↑身に覚えがかなりある）」

「パソコンで軽いエラーが出ただけなのに、壊したと思っただけでかなり動揺しそう」

「そ、そんなことで動揺するわけじゃないじゃないですか！（↑めっちゃ動揺した）」

「ケータイなんかスマホが使えないからガラケー使っただけにや」

「ガラケーの何が悪いのですか!!（↑愛用してます）」

中学の入学祝で親から買ってもらったガラケーを使う海未だが、それは物を大事にしてるからであり、スマホが扱いきれないからガラケーにしていると思われるのは心外だった。

なお、以前にことりからスマートフォンを借りたとき、謝って操作して持ち主に謝った経験があるのは内緒である。

「あつ、本当にガラケーだったんですね。そういうえば、まだ海未先輩とは連絡先交換して

ないし、お願いできますか?」

「凜も!」

「ええ、もちろんいいですよ。って、誤魔化されてませんよ!! 貴方たちが私を機械音痴だと遠回しに言ったのは、誤魔化されてないですからねっ!」

『いえ、誤魔化すつもりはないです。事実みたいですし』

「少しは誤魔化してくださいよ! 新田さんも黙ってないで何か言ってください!」

「園田、無理に覚える必要ないからな」

「貴方も思ってたのですか!? うう、そんな優しき、いらなそうですっ!!!」

色明までに機械音痴だと思われていた海未はシヨックで叫んでしまった。

なお、ちゃんと防音してるので隣近所に迷惑はかかってないので安心してほしい。

それはともかく、まるで近頃の機械も扱えない老人のような扱い。確かに得意ではないが、酷い扱いを受ける云われないと彼女は憤慨した。

屈辱を受けた海未は、半泣きの眼でぎろりと三人を睨む。

「いいでしょう。先程真姫と凜が言っていた勝負に私も混ぜなさい!」

『え、それは——』

「ま・ぜ・な・さ・い! 一番点数が低かった人間が全員分のジュースを奢る! それで、いいですね!」

『はあ……』

「そして、新田さん！ 貴方には私が一番だった場合、個別で奢って貰いますからね！」
「え、なんで？」

「貴方も私を侮辱したからです！ そのつもりはなかったのでしょうけど、私がされたといったらされたんです！」

「うん、まあ。いいけどさ」

「では、早速ご教示をお願いしますっ！」

「ヒソヒソ……（もつと大人しい人だと思ってたけど、熱くなりやすいんだね）」

「ヒソヒソ……（ご実家で武道も習つてると聞いたし、それが関係してるんじゃない？）」

「そのの二人！ 私語は慎むように！ 覚えるというなら真面目にきなさい！」

『……はい（負けたくないなら自分だけ先に聞けばいいのに、真面目だなあ）』

▼ 「うっ、うっ………」

ガシャコンと、落ちてきたトマトジュースを取り出し、次はコーヒーを押す海未。

—— 結局、勉強の後でした勝負の結果は、海未の敗北だった。

前半のテスト。用語や知識点、注意点などは完全に覚えていた海未。

逆に凜などは所々抜けており、これは勝ったと思つた矢先である。

次の操作面で海未はやらかしたのだ。

見当違いの場所を押ししたり、メモリ上げすぎたりし、その失敗が後を崇つてミスを重ねてしまった。

三人の予想通り、海未は機械の扱いが苦手なのである。

といつても、少しだけだ。

説明書を読みながらや時間をかける。あるいは慣れたものなら普通に使えるが、手に触れなれていないものは戸惑い気味で操作するのだ。

原因は、これは壊れないでしょうか？ という心配性。

古風な家に生まれたゆえ、本人的に近未来的なものや、最新鋭の機械に少々畏縮してしまうわけだ。それが海未の機械苦手の起因であり、今回はそれが酷い結果に転んだのだ。

逆に凜は多少操作ミスはあれど、前半の部分を巻き返すほど正解を叩き出す。

結果、僅差で海未が最下位。一位は無論、真姫である。

だが、誰もそれで海未を機械音痴だと馬鹿にはしなかった。

むしろ、自分たちが彼女を馬鹿にしたことを反省し、お詫びでジュースを奢ろうとした。

海未には、その気遣いが苦しかった。

負けは負けである。傷口に塩を塗られた方が辛かっただろうが、あれだけ騒いで、自分から混じった勝負に負けてしまったことが恥かしかった。

敗北を認めた海未は申し訳なきような三人（勝負をしたのは真姫と凜だが、自分が一位になったら奢れと言ったので色明も）から飲みものを聞き出し、ノロノロとスタジオを出たのだった。

「はあ……………」

海未は四人分の飲み物を抱えながら、重い溜息を零す。

せつかく入ってきくれた後輩に、随分と情けない姿を見せてしまった。

おまけに気を使われてしまう始末。

もはや、先輩としての威厳はなくなっただろう。

——更には色明にも恥かしい姿を見せてしまった。

そう考えると、海未の気分が自分でも分からないほど落ちる。

どんな顔して、スタジオに戻ればいいのか。

悩みながら考えていると、反対側からヘッドフォンをつけたまま、手に持った楽譜に視線を落としている青年がやって来た。

——余所見とは危ないですね。

と、思いつつも集中してるのだろうと気遣い、海未は避けて通ろうする。

「ん？　なあ、おい！」

「……………」

「そのジューズ抱えてるお前だよ！」

「？」

突然、呼び止められて海未は振り返る。

見ると、楽譜を見て歩いてきた青年が、今は立ち止まってこちらを睨んでいた。

「てめえ、見かけない顔だな。何処の事務所のもんだ？」

いきなりなんなのだ、この失礼な男は？

それが海未の第一印象である。

アイドルをやっついそうな顔立ちの良さと細身のスタイル。街中で歩いていればさぞ人気だろう。だが、海未には魅力的に映らない。身近な異性と比較すると、青年は誠実に欠ける。

彼の乱暴な物言いに海未は腹を立てたが、ここは会員専用のスタジオだと思い出した。

通いなれた者ならば、見知らぬ人間を不審に思っても仕方ないかもしれない。

そうやって割り切り、堪えた海未は青年の質問に答えることにした。

「事務所には所属してません」

「はあ？　なんだ、アマかよ。誰の紹介でこのスタジオに来たんだ？」

馬鹿にした物言いの後に、更なる質問。

明らかに俺様タイプの青年である。

ガンガンいく姿勢に気に入る女性もいるだろうが、少なくとも礼儀を重んじる乙女の海未にはマイナス印象しかない。

「……………新田色明さんからですよ。今日は彼と一緒に来ました。もう、いいですか？」

さつさとこの青年から立ち去りたいので、誤魔化ずに答える。

すると、青年は目を見開いて驚いた。

「あん!?　新田さんの連れかよ！　なんだよ、あの人。まさか、スタジオに女を連れ込んでるのか!？」

「」

青年が何を勘違いしているのか、海未はすぐ理解した。

しかし、彼女が訂正するより早く、青年は捲くし立てる。

「なんだよ。音楽に対して真摯だと尊敬してけどさ、スタジオに女連れ込むなんてがっかりだぜ。見損なつたな」

「さつきからなんなのですか、貴方はっ!」

「!?」

勝手な想像で色目が眩されたことにより、海未の我慢が限界を超えた。

「新田さんは私たちにスタジオの使い方を教えに来てくれただけです！ 貴方のお子様みたいな妄想で、彼を愚弄しないでください！」

「お、お子様?!」

自分が勘違いしてしまったことに気づいた青年だったが、素直でないため矮小な意地を張り、言い返しにもならない言葉を吐き捨てる。

「そもそも、ここは会員限定とはいえ、見知らぬ人を見かけても、あのように失礼な尋ね方は言語道断です！ 謝ってくださいっ！」

「くっー！」

「うん、謝ったほうがいいと思うよ」

青年が苦渋で表情を歪ませると、別の場所から爽やかな声が聞こえた。

海未が目を向けると、騒ぎを聞いてやってたのか金髪の男が二人に近づいて来る。

「ひ、ヒロさん!?!」

青年はやつてきた男に面識があつたのか、ばつが悪そうな顔で驚いた。

「冬馬^{とうま}くん。途中から見てたけど、今のは全部、君が悪いよ。ほら、彼女に謝って」

「くっ………………。悪かったよ」

「……………」

知人にも諭されて観念した青年——冬馬は顔を向けて謝罪する。

ただ、それだけではまだ気がすまない海未は、彼をじつと睨んだままだ。

そんな彼女へとヒロと呼ばれた金髪がやんわりと話しかける。

「君もこれで許してあげて。これ以上騒ぐと俺以外にも目立つちやうだろうしさ」

「……………」

冬馬という青年にはまだ言い足りなかつたが、衆目に晒されることも望んでいない。

第三者から言われたこともあり、海未は渋々引き下がる。

「ほら、君はもう行つて。あとのフォローは俺がしとくから」

「わかりました。なんか、その、すみません……………」

「この借りは、うちとまたセッションしてくれたらいいさ」

「……………」

ヒロに頭を下げた冬馬は睨んだままの海未を見た後、そそくさと立ち去つた。

すると、残つたヒロが海未に人懐っこい笑みを向ける。

「ごめんね。彼、最近イライラしてたんだ。この時期つて、そんなにやる気もないのに音楽を始めたりする人たちとか、彼みたいないなアイドル見たさに入会したり忍び込んだりする人が増えてるんだよ。この前も、ここで言い寄られたみたいだし」

「はあ……」

「まあ、だからと言って、君につかかるのはダサいけどね。ははははは」

「……………」

「ははは、ははは……はあ。ええと、新田くんの連れなんだっけ？　彼、噂では女子高に通ってる聞いたけど、まさかクラスメートだったたり？」

「そうです」

誤魔化す必要はないので正直に答え、在らぬ誤解を生み出さないため海未は言葉を続ける。

「ですが、それは特別な事情のため。そして、あの人は不埒なことは何もしてませんよ」
「ああ、別に変な疑いなんて持つてないさ。俺のこのボーカルなんて、バンドと女子学校の教師兼業だしさ」

「それはまた、……変わったお話ですね。その……先程はありがとうございました」
会話している内に落ち着きを取り戻した海未は、礼を言った。

「貴方が間に入ってくれなかったら、まだ言い争いが続いていたと思います」

「いや、あれはもう君が言い負かす流れだったけどね。どっちかと言うと、俺は彼を助けた側かな」

「それでも、ありがとうございます。貴方のお陰で落ち着くことができました」

彼が何気ない会話をして宥めてなければ、海未はイライラしたままスタジオに戻っていただろう。

必ず、周りに心配される。それを回避できたので、海未は感謝の言葉を送った。

「君は——いい子だね」

一瞬驚いた後、ヒロはにつこりと笑った。

間近で見た海未は、感心する。

なるほど、改めてみれば美形の部類だ。バンドをしているようだが、ルックスだけでも人気があるだろう。明るく柔らかな姿勢で人の良さも理解できた。

「さて、もう少しと君とお話したくなったけど、王子様が来たみたいだし退散するよ」

「王子様？」

突然、訳の分からない言葉に海未は首を傾げたが、すぐ聞き慣れた声が耳に届いた。

「園田」

「あつ、新田さん」

振り向くと、色明がこちらにやって来た。

中々帰ってこない海未を心配して迎えに来たのである。

「誰かと話していたのか？」

「あれ？」

視線を戻すと、既にヒ口は背中を向けて歩いており、一度軽く手を振ってからそのまま去っていった。

「何かあったのか？」

「ちよつとしたことです。瑣末なことなので気にしないでください」

再び色明に振り向き、何でもないようにと説明する海未。

「そうか……。なら、戻るぞ。二人も心配している」

海未が何でもなさそう顔したため、色明はそれ以上問い詰めなかった。

そのまま二人は横並びで歩き、借りたスタジオに戻る。

広い場所とはいえ、数十秒もあるけば目的地に着いた。

「あの子」

しかし、あと数歩で扉前のところで、色明が海未に声を掛ける。

「？」

「俺は楽器の演奏、そこまで得意でもない。でもできないよりはマシだ」

いきなりの自虐にきよんとする海未だったが、続けた色明の言葉で意図を察した。

「だから、あれだけ使い方覚えていれば十分かと思うぞ」

「………………。それは、先程のことを励ましてるつもりですか？」

「一応」

「下手ですね」

くすりと海未が笑う。色明自身も自覚あつたのか、眉を寄せただけで何も言い返す、口を尖らせるだけだった。

「気を使わなくて大丈夫ですよ。恥かしい姿を見せたのは心狂いですが、過ぎたことを引きずっていいは前に進めませんかからね」

「なるほど……園田が落ち込んでいないならこの話は止めよう。からかうネタで掘り返すかもしれないけどな」

「意地悪ですね。その場合は、倍返しするので覚悟してください」
「肝に銘じるよ」

苦笑を浮かべる色明を見て、海未も安心する。

醜態を晒したことで、色明に気を使わせたことに引け目を感じていたが、その心配はもうしなくてよさそうだ。

今回のことを話の種にすると宣言したのはどうかと思うが、半分冗談だと思つて今は目を瞑ろう。

……、彼と話すのは何処か安心しますね。

立て続けに見知らぬ異性とやり取りで疲れたのか、ふつと海未はそのように想う。

そもそも、色明との交友も一ヶ月ほどしか経っていない。

どちらかといえば人見知りである自分が、異性と話して心臓を穏やかにしているのが不思議だった。

「ほら、早く中に入るぞ。あまりの時間で実際収録するんだからな」
「わかりました」

疑問は堰かされたことで、一旦忘れる。

彼女が同じ疑問を再び抱くのは、もう少し先の話だ。

12話・発生 It never rains but it pours

「ふええ……。前に来たのとき、そんなことがあったんですね」

「そうです。ですから花陽も気をつけてください」

「海未ちゃん、なんの話してるの？」

「前に穂乃果にも言った失礼な人の話ですよ」

「ああ、海未ちゃんがいきなり呼び止められたやつだね。まだ怒ってたんだ」

「当然です」

一週間後、再びスタジオへ訪れた μ s 一行と色明。

以前いなかった μ s のメンバーも揃っており、今回は曲の収録をする予定だ。

予約している時間より早く来たので、待合場の椅子に座って各々が自由に寛ぐ。

その中、海未は花陽に先週起こったトラブルを話していた。

最初は別の会話だったが、ここの話をしている内に、前回の出来事を愚痴ったのである。女性と怒りというものは一旦収まっても、後々から根強く煮え滾るので恐ろしい。

「海未先輩を呼び止めた人って、『とうま』と呼ばれてたんですね。もしかして、

Jupiterジュピターの天ヶ瀬冬馬あませとうまさんだったかも」

「Jupiter?」

「アイドルグループです。近頃テレビや雑誌ではあまり見かけませんが有名ですよ?」
「知りませんし、興味もありませんね」

「ははは……」

「……本当に難癖つけられたのがJupiterの冬馬なら不幸中の幸いだったな」

海末のキツイ物言いに花陽が乾いた笑みを浮かべていると、色明が会話に割って入る。

だが、視線は二人に向けておらず、声も何故か冷ややかなものだった。

「悪い噂はあまり聞かない。少なくとも、ああいう奴らよりかわな」

「? それはどういう——」

「おいおい! 女の中に男が一人混じっていると思ったが新田色明じゃないか!」

フロア全体に響くような迷惑極まる大声。

μsのメンバーたちはびつくと体を震わせ、色明は不快そうに舌打ちをする。

海末は何事かと視線を巡らせると、見るからにして柄の悪い男集団がこちらへやって来た。

揃いも揃って筋肉質な体にタトゥー。奇抜な髪型で獰猛で下品な顔つき。花陽やこ

とりは完全の怯えており、近くにいた凜や穂乃果の袖を掴んでいた。

男たちは海未たちの近く、正確には色明の傍までやって来て彼に話しかける。

「何処のハーレム野郎かと思つたが、男前な有名歌手様なら大勢の女を引き連れても納得だわな。ぎやはははは！」

明らかに馬鹿にした言葉と視線。

色明の侮辱に冬馬のときとは比べ物にもならない憤りを膨れ上がらせた海未は、椅子から立ち上がつて怒鳴ろうとした。

だが、さつと横から飛び出た色明の腕で静止させられる。

「これはこれはW^ザa^ンd^テe^ルn^グgの皆様、おはようございます」

代わりに色明が立ち上がると、丁寧に挨拶をした。

顔は営業スマイル。誰が見ても分かるほどの作り物の笑顔。それでも最低限の礼節は守っている。

Msのメンバーがハラハラ見守る中、色明が言葉が続けた。

「それと彼女たちは僕のクラスメートです。在らぬ誤解は止めてください」

「クラスメート？ そういえば女子高に通つたとか噂を聞いたな。あれマジか？」

「ええ。自分自身可笑しな話と思つてますが、事実ですね」

「ははは、マジかよ！ 男が女子高に通うつて、どんなハーレム！ いや、綺麗な顔して

るし、実は女の子だったのか？ ごめんね、色明ちゃん！」

周りの男たち——色明の言葉曰く、W a n d e r u n g と呼ばれた集団もゲラゲラと笑う。

ここまで来ると海未以外のムスメたちにも戸惑いや怯えより、怒りの感情が込み上がってきた。

だが、言われた色明は気にしていないようすで、以前と営業スマイル。

それが癪に障ったのか、最初に話しかけた男が詰らなさそうな顔を浮かべた。

「おいおい、何か反応しろよ。ビビッてはいないな。なら、舐めんのか？」

「そう言われましても、生憎と芸人ではないので。面白い反応はできませんよ」

「……………ガキが。本当につまらないな。まあ、いい——」

男は色明から視線を変えて、彼らを睨んでた海未を見て、にたりと微笑んだ。

「怖い顔するなよ、嬢ちゃん。ちよつとしたジョークさ。プロの間はこれが普通だぜ」

「それは面白くもない風習ですね」

「おお、怖い怖い。けど、あんたみたいな気が強い子は好きだぜ」

その男が腕を伸ばし、海未の体に触れようとした、その時である。

「はいはい、ちよーと待った！」

大声が再び聞こえてたと思った次の瞬間には、ばたばたとやって来た別の誰かが海未

と男の間に割って入った。

「なに君たち、子供にちよっかいかけてんだよ？ いい大人が見つとも無い」

「ちっ！ てめえはモナザンのヒロ！」

突然現れたヒロは男を睨む。

彼の仲間なのかヒロの後ろに二人の男が更にかけてつけ、Wanderungたちを警戒する。

「ほら、君らを使うスタジオ空いたらしいからさっさと行けよ。それとも、まだ回りに君らの素行を眺めさせて、悪い噂を広めたいのか？」

「糞が。喧嘩売ってんのか？」

「子供を虐める大人相手なら喜んで受けてやるぜ！」

その声はヒロの後ろに控えていた赤いモヒカンの男から出たものだった。

「やめろ、キング」

その男を諷めたのは、隣にいたシルクハットにアイシャドーを塗った男だった。

しかし、彼もまた目の前の蛮行に腹を立てているのか、Wanderungたちを睨んでる。

「先に手を出せば諸共だ。一撃は貰ってやって、警察を呼んだほうが賢いぞ」

「け、警察っ!？」

「なにビビツつてんだ！　まだ何もしてないだろ！」

警察の言葉で Wanderung の一人が動揺したが、色明に話しかけた男が押し潰すように怒鳴った。

彼はヒロたち三人を忌々しそうに睨むと、その場で唾を吐き捨てる。

「興ざめだ。行くぞ、お前ら！」

彼は仲間を引き連れ、乱暴に店員から番号札を奪うとそのまま去って行った。

完全に彼らの気配がなくなると、誰かが疲れたように溜息を吐く。

「いやいや、災難続きだったね」

するとヒロがにっこりと海末に微笑かける。

「あっ——。危ないところ、ありがとうございます」

海末が思い出したように立ち上がって礼を言うと、ヒロは苦笑して肩を竦めた。

「気にしないでくれ。むしろ、俺が止めたのは彼のほう」

「え？」

そのままヒロは色明に指を差すと、差された当人ははむつと顔を顰める。

「君が触られようとしたとき、相手を殴ろうとしてたよ」

「ヒロさん、別に殴るまではいきません。腕を握り潰そうとしただけです」

「ほら、物騒じゃないか」

けらけらと笑うヒロ。

仏頂面の色明だったが、そんな彼を海未がじーと見つめた。

改めて思い返せば、初っ端から色明らしからぬ態度だ海未は感じた。

彼女のイメージでは、相手が粗雑ならば強気な威勢で対処するのが色明だ。

大人しくしてたのは、周りに海未たちがいただろうか？

多分、きつとそうだと海未は判断する。

いざ彼女等が手を出されてかけたなら、我慢せずに手を出そうとしたのも彼らしい。

ヒロの言葉に対して、あの反応ならば真実だろう。

そう考えると、妙に嬉しい感情が海未の中で込み上げてくる。

男に守られたことに対する女ならではの優越感だろうか？ と彼女は不思議に思った。

「けど、間に割って入ってくれて、ありがとうございます」

「かまいやしないさ。喧嘩の仲裁は大人の役目。先週もその子との件もね」

ちらりとヒロが海未を覗き見ると、色明は得心した顔で頷く。

海未が冬馬に難癖をつけられたことをその日は知らなかったが、後日その詳細を海未の口から改めて聞いていたのだ。

「なるほど。先日、園田が絡まれたところに現れたのはヒロさんだったんですね。重ね重

ね、ありがとうございます」

「だから、礼に及ばないよ」

軽くウィンクして、ヒロはにっこり微笑む。

まさしく、余裕を持った大人な態度。それを見たμsたちは少し感動していた。

彼女たちは色明を男として評価しているが、ヒロもまた彼とは違った意味合いで評価を得る。少なくとも自分たちに絡んできたあの集団とは大違いだ。

「さて、冬馬くんはともかくWanderungの奴ら。結構他でも苦情出てるようだぜ」

Wanderungと呼ばれた集団が去った場所をヒロはちらりと見た。

「けど、今回のことでも利用できなくなるだろうさ。だから、まだ若くて未来がある君たちは今後ともここ使ってやってくれ。お得意様がないとお店も困るしな」

「わかりました」

「では、俺たちもスタジオ入りなんでこれで。じゃーね」

最後に言葉を残し、ヒロは後に控えていた二人と合流してそのまま去って行く。

「ふわあ〜！ 新田先輩、モアザンの人たちをお知り合いなんですね！」

で、彼らがいなくなった後、花陽が興奮したように叫んだ。

ついさつきまでは怯えいた彼女の元気な様子を見て、周りもようやく一息つく。

「かよちゃん、あの人たちが知ってるの?」

「当然だよ、凜ちゃん! アイドルを追う者は自然と音楽番組はチェックするし、それ以外のアーティストさんも知るよ。新田先輩もそれで知ってたし、さっきのモアザンも然りだよ!」

「ええと、結局モアザンってなんなの?」

「真姫ちゃん、モアザンっていうのはねモアザントウルーの略称で、あの人たちは人気ロックバンドなんだよ! ベースのシユトラさん、ドラムのキングさん、ギターのヒロさん! そして、あそこにはいなかったボーカルのナオさんは、なんとSoleilを初めとした人気アイドルを輩出しているスターライト学園の教師だという話もあるんだよ!」

「そう……………ヒソヒソ (花陽って、アイドルの話以外でも興奮するのね)」

「……………ヒソヒソ (凜はこっちのかよちゃんも好きにや。ちなみお米にも拘りあるよ)」

「……………ヒソヒソ (ああ、そういえばこの前、何杯もごはんを食べてたわね)」

そんな一年生たちの話を聞いていた海未は、前にヒロが言っていた仲間のボーカルが女子高の教師をしている話を思い出していた。

しかし、あのSoleilが通うスターライト学園の教師とは。

偶然とはいえ、彼女たちのライブを見た後に本人たちと遭遇したの思い返す。最近は

奇縁が多いと感じる海未だった。

「さて、俺たちはどうする?」

全員が落ち着きを取り戻したのを見計らい、色明がのように尋ねてきた。

「どうするとは?」

「そろそろ俺たちもスタジオ入りだけどき。運が悪ければまたあいつ等と遭遇する可能性があるぜ?」

「先程の不埒な輩たちですか……………」

「Wanderung。ハードコアな曲を売りにしている奴らだが、近頃素行の悪さが目立って業界でも毛嫌いされている連中さ」

「ええ……………。そんな人たち、早く解散しなよ」

「生憎とそれでも売れてるからな」

穂乃果が思わず出た不満を色明がやんわりと返す。

「で、あいつ等を避けるため、日を改める選択肢を俺は進言するのだが?」

「私は反対。なんでアイツらのせいでコッチが気を使わないといけないのよ」

真つ先に意見を述べたのは真姫である。

真姫にとって音楽は大切なものであり、最近では友人となった花陽と凜と過ごし時間が楽しいのだ。その両方を無礼な輩が原因で奪われるのは、彼女にとって苦渋である。

「凜は真姫ちゃん言葉も分かるけど、ちよつとだけ心配かな」

「ことりも。怖い人たちがいると思うと不安だな。新田くんの言うとおり、日を改めるとたほうがいいかも。今日はこのままみんなでお茶をするとかにしてね」

「逆に色明の意見に賛成したのは凜とことりだった。ことりの場合は代替案も出している。」

「ええ。穂乃果は楽しみしてたのにな」

「そうですね。私も、ここままと帰った方がちよつと残念です」

次に不満の声を上げたのは穂乃果と、意外にも先程一番怯えていた花陽だった。

「かよちゃん、大丈夫なの？」

「うん。怖いけど、みんながいるし」

「続行が3に、日を改めるのも3か。園田はどうする？」

色明の言葉で視線が海未に集まった。多数決で選ぶならば、彼女の答えで方針が決まる。

確かに色明たちの危惧は尤ものだ。

広いとはいえ、先程は人目につく場所だからこそ良かったものの、今度は以前の海未のように廊下で遭遇するかもしれない。

偶然がそう重なるとも思えないが、万が一で危険な目を誰かが遭うのは避けたい。

だが、心配すれば切がないのは確かだ。

それこそ、不審者に出会うかもしれないから家の外には出ないと言っているようなもの。

同じ空間ならば避けたいが、一応隔離された時間で過ごすならば遭遇しない確率のほうが高いだろう。

更に理屈を抜きにしても、このまま引き下がるのは海末の性に合わない。

真姫同様、あのような輩を気にして自分たちの行動を制限するのは癪に障るし、穂乃果同様、海末もこの日を楽しみにしていたのだ。

そもそも、日を改めるとしても、その日に色明が参加する保障もない。

前回と今回はいたが、仕事している色明が予定を変えるのは非常に難しいだろう。

一応、彼がいなくとも利用できるようにと、前回機材の使用方法を教えられた。

だが、いてくれたほうが海末には心強いのだ。

「そうですね。私はここまますたジオ入りする意見に賛成します。あんな輩に振り回されるのは新田さんも癪でしょう?」

「まあ、それはそうだな……………」

「念のために、彼らの利用時間をフロントに聞き、こちらと時間をずらしませう。トイレなどにも必ず二名以上で行けば、何かあったとき対処しやすいはずです」

「海未ちゃんがそう言うなら、ことりも大丈夫かな……………」

「凜も、そうだね。かよちゃんや真姫ちゃんが危なくなったら、凜が守ればいいし！」

「凜ちゃん……………」

「むう……………」(↑真姫ちゃん照れ照れカキクケコ)

「よおーし、じゃあ決定！ 嫌なことは歌って忘れよう！」

もはや行動が決まったと言わんばかりに、穂乃果が手を振り上げた。

「穂乃果、カラオケじゃないのですから真面目に歌ってくださいよ」

「……………」分かってるよ」

「一瞬、間がありましたね。一瞬、勘違いしてましたね」

「わざわざ言わないでよ〜！」

どつと、笑い出す少女たち。まるで溜まった鬱憤を吐き出すような声だった。

完全に陽気な態度になった彼女たちに、色明は仕方ないと吐息を漏らす。

「やれやれ……………」まっ、何かあれば守ってやるさ」

本人は誰にも聞こえないような色明の独り言。

それを偶然か、耳にしてしまった海未は妙に気恥ずかしい気分になったのである。



最初にトラブルはあったものの、収録自体は問題なく行えた。

前回のスタジオ来た三人は、勉強の後である程度新曲を取り終えていたので、今回は残りの三人の収録がメインである。

何度かリテイクはあったものの、時間までには予定した分の収録は無事終了し終えた。

「う〜ん。今日はいっぱい歌ったね」

疲労はためつつも、爽快な気分で穂乃果が背を伸ばす。

日が沈み、夜の街中をスタジオから出てきた μ sの六人は共に帰宅している。

色明の姿がないのはこの後に仕事があるため、一足先に別れたためだ。

忙しい中、頑張るなど尊敬しつつ、彼がいない帰り道に一抹の寂しさを感じる海未。

先程と一緒にまでいたゆえ心細いのか。それとも、スタジオ入りするまでのトラブルがあつたゆえ不安なのか。

念のためスタジオに出るときに確認したところ、例のWanderungたちは既に退室していた。待ち伏せもないようなので、一先ず安心する一同。

なお、助けくれたモナザントウルーはまだスタジオにいるようで、お礼のため残るといふ意見もあつたが、時間が遅いので後日改めてすることにした。

しかし、女子だけで夜の街中は聊か危ないことには変わりない。

男とである色明がいないため、帰宅途中何かあれば自分が頑張ろうと密かに心を奮い

立たせる海未だった。

「なにキョロキョロしてるの?」

周囲を警戒する海未だったが、そんな彼女を奇怪に思った穂乃果が話しかける。

「いえ。もしかしたら今朝のような輩がまだいるかと思いましたが、今は新田さんもいませんし、何かあれば私が守らなければ」

「もう、気にしすぎだよ。ところで、今回で新曲の収録は全部終わりだっけ?」

「……まだ少し収録するパートが残ってますよ。その後は編集作業が残ってます」

「ああ。なら新曲をお披露目するのはまだまだ先か」

「その分、前より良いものができるはずですよ。それに今回の経験を次に生かせば、次の新曲はもっと早くできるでしょうね」

残念そうに項垂れる穂乃果を、海未が優しく宥める。

何気ないことなのだが、少し誰かと会話したことで海未の緊張も僅かに解れた。それが穂乃果が狙ったこととは別にしてでも、流石は幼馴染である。

そうこしてる間に、一年生と別れる横断歩道の前まで辿り着いた。

「それじゃあ、私たちはこれで」

「ええ、また」

「先輩たちばいばい!」

「凜ちゃんばいばい！ 真姫ちゃんもばいばい！」

「もう、恥かしいから手を振らないでください！」

「三人とも気をつけてね」

一年生三人と別れると、残った海未たちは改めて信号が赤の横断歩道に目を向けた。

と、海未たちの傍にある道路から猛スピードで黒のワゴン車は走行し、ドリフトように左折すると速度を落とさず彼女たちの目の前を通り過ぎていった。

「――」

「うわ、すごいスピード」

「危ないねえ。あれ、海未ちゃんどうしたの？」

何故か海未の様子が可笑しいことに、ことりが気づく。

危険運転に腹を立てているかと思つたが、何やら彼女は汗を浮かべて硬直していた。

まさか、先程の車で驚いたのかと、ことりが再度尋ねる前に海未が動く。

「穂乃果、すみませんが私の荷物を家まで届けてください」

「え？」

答えも聞かず海未はその場で鞆を落とすと、そのまま走り去ってしまった。

突然のことに呆然とする残された二人。

しかし、海未が理由もなく突発的な行動をしないと解つた彼女たちはただならぬ事

態だと察した。

「海未ちゃん！ 何処行くの!? 穂乃果も一緒に！」

「私の勘違いかもしれないので、二人は一旦帰ってください！」

海未は走りながら後ろに向かって叫ぶ。

これが勘違いならば、取り越し苦労だと後で二人に呆れたり笑われるだけだ。

しかし、そうでなければ？

海未は長年武道で鍛えた動体視力で、先程通り過ぎたワゴン車の中を目撃した。

そこには見覚えるある顔が、同じく見覚えるある男たちに取り押さえられていたのである。



油断したと、彼は己の失態を嘆く。

まさかスタジオを出た途端、一人になったところを集団で襲われるとは思ってもいなかった。

抵抗はしたものの、背後からの一撃でよろめき、その隙を突かれて拘束された後、ガムテープで目隠しと口封じされ、現在は車に乗せられた。

下手な行動は逆に危害が及ぶと判断した彼は、一旦相手の言う通り大人しくする。

時間にして凡そ30分未滿。動かぬまま冷静に時間を数えていると、車が停止した。

「おら、動け！」

乱暴に殴打されるも、彼は文句を言わずに指示に従う。口が塞がれてるので、文句を言いたくとも言えないのだが。

足で砂利を感じつつ、彼は自分の攫った集団の云われたとおりに歩く。

「反転して、そのまましゃがめ」

彼は言葉通りに反転しながらしゃがむと、背中に硬いものを感じた。

パイプか何かだろうか。ガチャガチャと自分の両腕に何か嵌められたと思ったら、そこで目隠しと口封じが解かれた。

「いいさまだな。気分はどうだ、ヒロ？」

「最悪だよ」

目の前にはWanderungのメンバー。埃が浮かぶ薄暗い空間は、何処かの廃屋のようだ。

モアザントウルーのヒロは呆れたように彼らを睥睨する。

「で、男を攫って何が楽しいわけ？」

「俺たちもどうせなら女のほうが良かったさ。例えば新田色明が連れてた奴らとかな」「そう言いつつ、彼女たちを攫ってないとこだけは褒めてあげよう」

「ドス！」とヒロの顔が蹴られた。

口端が切れ、綺麗な顔に痣が生まれる。

「あいつ等はスタジオ出てからも警戒してたみたいだしな。女の悲鳴はよく響く。一人や二人ならともかく、それ以上は攫うのは一苦労だ。新田色明の報復も面倒だしな」

「おいおい、知ってるならその友達にもちよつかいかけるなよ。彼が結構危ないタイプって知ってるならさ」

「ゴス！ 再び危害を加えられるヒロ。」

今度は腹を蹴られて、その場で軽く反吐を零した。

「そういう奴を人前で弄るのが愉しいんだろうが。アレはガキだが馬鹿じゃない。保険がない限り、手を出してこないさ。お前が邪魔したがな」

「げほっ！ なに？ じゃあ、これはその報復？」

「それもあるが、前々からお前たちは気に入らなかつたのさ。調子に乗ったゲリラライブに、ボーカルは女子高の教師兼業。そんな奴らが同じ業界にいるのは目障りだ」

「嫉妬かよ、見つとも無い」

「ガス！ 三度目の危害。」

今度は横から蹴りが飛び込んできたが、ヒロの体は両手首が拘束されたことで横転することなく、むしろ拘束された手首が酷く痛んだ。

「とりあえず、適当にぼこった後、お前には色々してもらおう」

「なに？ お前らそんな趣味があるわけ？」

「俺たちの中じやいな。だが、知り合いに。お前は綺麗な顔だから受けるだろうよ」
「背筋がぞつとするな」

「その後は脅すか、葉漬けでバンド崩壊させるか。それは後で考えるにして、今は黙って
サンドバックを演じとけ」

男たちがヒロを取り囲む。

ヒロは次に来る暴力に耐えるため、ぎゅつと瞳を閉じた。

「やめなさい」

淑やかな声が——響いた。

この場に似合わない音に男たちはが一斉に振り向き、目を閉じていヒロも見開いてその光景を目の当たりにする。

広い廃屋の入り口。

少女は背中に月の光を浴びて、夜風に長い髪を揺らし手に持った得物を突き向ける。

握ったものが鉄パイプでなく一振りの刀ならばより映えただろうが、研ぎ澄まされた美しさに陰りはない。颯爽と現れた彼女に、その場にいた男たちの誰もが一瞬見惚れた。

「これ以上の狼藉、この私が許しません」

ただ静かに。

精悍な顔で、海未は男たちの前に立ちただかる。

13話・彼女のフイーリング

海未にとって運が良かったことが三つある。

まず一つ目。車を見つけたのが街中であつたこと。

物心ついた頃から武道で鍛えたとはいえ、海未は車に追いつけるほど超人でもない。それでも何とか車を追いかけたのは度重なる信号待ちがあつたからだ。

だが当然、停止させる信号が減ればすぐ距離は離れる。

気づけば海未は車を見失つていた。

どうすればいいかと悩んだ先、ふと辺りを見渡してみると見覚えのある風景だと気づく。

それが二つの目。地元民であるゆえの土地勘が彼女にはある。昔は冒険と称し幼馴染とここまで遠出したことは度々あつたのだ。

ならば次なる行動は、相手が行きそうな場所を予測すること。

無論、相手がこの場所を通り過ぎていれば無駄な行動だ。そうなれば彼女にできることなど、精々遠目から読み取つた車のナンバーを警察に通報するくらいである。

しかし、まだ確証はないため通報はしない。見間違いという可能性も彼女自身否定で

きないからだ。

海未を動かすのは直感。どの道、通報は最後取る手段なのである。

彼女は人気のない場所を思い出しながら歩き始めた。

正直、こういう事態でなければこの時間に一人で寄り付きたくはないが、嫌な予感と持ち前の心配性、正義感ゆえに海未は勢いを緩めない。

そして、最後の幸運。あるいは厄介事を見つけてしまった不幸か。海未は街中で目撃した車を発見したのだ。

場所は破棄された工場。錆びれた看板や進入防止の柵に、一切の機材が撤去されいるのがその証拠だろう。そんな場所に真新しい車があれば誰もが怪し目で見るに違いない。

海未は恐る恐る中へ進入すると、建物の中で物音が聞こえた。

自分自身の足音を騒音に紛らわさせて近づき、曇った窓からゆっくりと中の様子を覗く。

——見つけた。

そこにはスタジオで遭遇した Wanderung のメンバーと、拘束されたモナザントルウーのヒロがいる。

すぐさま海未はシャッター音を誤魔化すように携帯で写真を撮り、それを添付した

メールを事情を察する穂乃果とことりへ同時に送った。

二人同時なのは、どちらかがメールを受け取れなかったときの配慮だ。メールの内容は、ヒロが捕まってることと警察への通報。この場所も教え、念のために自分には連絡しないことの注意だ。

自分自身が通報しないのは電話したことで相手に気取られないようにするため。自分への連絡を避けたのも同じ理由である。

さて、警察が来るまで5分か。10分か。あるいはそれ以上か。

とにかく海未は警察が駆けつけて来るまでこの場で身を隠し、彼らが移動しないか見張るつもりである。

利己的判断ならばこのまま立ち去るべきだ。見張るにしても敷地外で車を見張つていれば十分かもしてない。仮に見つかつてしまえば、彼女もただでは済まないからだ。

しかし、誰かが傷つくことを黙って見過ごせる少女ならば、そもそも、こんな所には来なかつた。

「やめなさい——これ以上の狼藉、私が許しません」

ヒロが囲まれたことで、海未の我慢に限界が訪れる。

咄嗟に近くにあつた手頃な鉄パイプを拾い上げ、彼らの前に姿を現したのだ。

』

突然、自分たちの前に現れた海未にヒ口とWanderingたちが言葉を失う。

少なくとも十秒以上経過して「ぷっ」と誰かが噴出す。

「誰かと思えば新田色明が連れてた女の一人じゃないかっ！　なに、どうしてここに着たんたんだよ!？」

「街中で貴方たちが彼を車で連れ去つているところを見かけたので追いかけて来ました」

「それはご苦勞なこつた。信じられないがここにいる時点で本当のことなんだろうなっ」

男はにやりと嗤いながら振り返り、未だ呆然と海未を見つめるヒ口を見下ろす。

「どんな気分だよ？　助けた女に今度は助けに来てもらった感想は？　俺はダサくて自殺しそうな気分だと考えるが？」

「っ——逃げるんだ！　早く!！」

「誰が無視しろつて言った」

ヒ口を男が無造作に蹴る。

口から血反吐を吐いた彼を見て、海未が叫んだ。

「やめなさいと言つてるのです!！」

「——叫んでいるわりにはそこから動かないな」

男はヒロから視線を外すと、鉄パイプを構えたまま一步も動かない海未を興味深そうに眺めた。

「ビビッて動けない女ならわざわざ出てこないだろ。入り口から離れないのは、屋内に入ったことで俺たちに囲まれるのを避けるためか？」

「――」
「凶星か。行動は勇ましいが、隠し事は苦手のようだ」

中々の観察眼である。海末がすぐ顔に出るタイプなのは事実だが、相手の顔が解り難い場所で彼女の表情を読み取ったことは驚きだ。

先程から話している男はスタジオでも周りのメンバーに指示を出したり、海末が現れて真つ先に正気を取り戻したところを見ると Wanderung のリーダー格かもしれない。

「警察には連絡したか？」

「とつくの昔に」

海末の発言に Wanderung たちに動揺が走ったが、リーダーらしき男だけ冷静を保ったまま彼女を見据えている。

「なるほど。こうやってお喋りしているのも時間稼ぎか。アイツを捕まえろ」

最後の言葉と同時に彼以外の Wanderung たちが海末に襲い掛かってきた。

数は三人。まず最初に一人が海未を抑えようと両腕を掲げて突っ込んできたが、彼女は怖気もなく振り上げた鉄パイプを相手の顔面に叩きつける。

真つ直ぐ振り落とされたパイプは鼻先から直撃し、一撃で男に苦悶の声を上げさせる。骨が折れているかもしれないが、警察の言い訳は後で考えよう。

顔面も抑えて悶える男を尻目に、残った男二人が同時に海未へ襲い掛かった。

海未は前を向いたまま数歩後退すると、一瞬前に彼女がいた場所で二人の男が互いの両肩をぶつけ合う。

衝突によって動きが鈍った男たち。海未は振り落としていたパイプを斜め上に振り一人の顎を打ち上げた後、そのまま残りの男の脳天にパイプを振り落とす。

顎と脳天に打撃を受けた二人はそのまま仲良く意識を失い、地面にひれ伏した。

「この、あまがあああ!!」

そこで最初に海未から攻撃を受けた男が、鼻血を撒き散らしながら彼女に飛び込む。キラリと手元に光るのは何処からか取り出したナイフ。

だが、物心つくころから武道を習ってきた彼女は、今更刃物を向けられても一切恐れはしない。稽古では真剣を向けられたことも何度かあるのだ。

海未は突き刺そうとしてきた男の体をひらりとかわし、膝裏に一撃を与えてバランスを崩させ、二撃目は背面を叩き、駄目押しの三撃目は後頭部を薙ぎ払った。綺麗に三連

撃を受けた男は、鼻血をたらしまま横倒れで砂利に口づけ交わして動かなくなる。
「す、す……い……………」

一連の光景を眺めていたヒロは見惚れたように海未を熱い視線を向けた。

自分よりも一回り小さい少女が、映画のように次々と男たちを倒す様は圧倒の一言。
が、魅入つてた束の間。視界に黒い人影は横切る。

「っ、危ない！」

「!？」

三人を倒して一旦呼吸を落ち着かせていた海未が声に反応して振り向いた。

いつの間に距離をつめたのか、眼前にはWanderungのリーダーらしき男。

咄嗟に海未がパイプを横風ぎに振るう。それを男は右腕で難なく受け止め、残った左腕でパイプを掴み取った。

（いけません……………っ！）

このまま引き込まれると感じた海未はパイプをすぐに引き離し、できるだけ相手から距離を取るようにして後退した。

男は掴み取ったパイプを無造作にその場で捨てると、徒手空拳で構える海未を感心したように見つめてきた。

「こんな場所に一人で来たから予想はしたが、何かしらの習っているな。護身術という

よりも本格的なヤツをよ」

「……………そういう貴方こそ何か武道を？」

海未は冷や汗を浮かべながら問いかける。

実家が武道を教授しているゆえ、彼女は今まで何人も武道家を見てきた。

ゆえに喧嘩慣れしただけの人間とそうでない人間の区別はできる。目の前の男は後者だ。

タトウーに彩られた筋肉隆々。染められた髪は鬣の如く。野獸を感じさせる男の威勢に、海未は怖気ぬようと心を保った。

「なに。昔、ボクシングやレスリングを一通りな」

「なるほど。音楽ではなく、其方のほうを生業にしたらいかがですか？」

「それは新田色明に言ってる。酒で暴れたK-1選手を腕づくで黙らせたのかな。業界での武勇伝なんかアイツのほうが多いんだぜ？」

「——それは面白いことを聞きました。今度本人に詳しく聞きましょう」

「無理だな。お前は新田色明や友人。家族すら。もう、誰にも会えない」

警察が来る前に海未を無力化し、彼女とヒロを連れて仲間と共に此処から逃げるの男の算段だった。

警察にはナンバープレートも通報されているだろうが、車には偽造ナンバーを付けて

いる。仮に写真を取られていても、間近で撮られていなければ自分たちではないと強引でも誤魔化せるだろう。

本当に思惑通りできるのかと問われれば、男はできると断言する。

何故ならば、このようなことは何度もあつたことだ。

だから、彼らには黒い噂が耐えない。

ある日、彼らと競演したアイドルが失踪した。

彼らと揉めたバンドがいきなり解散した。

誰も彼らを疑った。

しかし、事実でも未だ咎められたことがないのは、ずっと世間を欺き続けてたからだ。

今回も男にとって刺激ある出来事ではない。

仲間の不甲斐なさには呆れるが、目の前の獲物を手に入れたら笑って許そう。それが

首領たる度量だ。

男が踏み込む姿勢に入ったの見計らい、海未は身構える。

技術は推し量れないが、体格は見る限り断然向こうのほうが上。長年の経験からで

も、総合的実力は男の方が上だろうと海未は判断する。

しかし、今から背中を向けて逃げたほうが危険だ。

海未にできることは防戦に集中し、警察が来るまで耐えることのみ！

「最後に聞くが、お前は新田色明のなんだ？」

「友人です」

「なるほど。つまらない答えたが、良い答えでもあるな」

にたりを男が笑った。

「初物か。場所を変えたら俺以外のことを全て忘れさせてやる」

男が地面を蹴り上げ、石礫が四散する。

下から潜りこむようなボディブロー。海未はそれを払いのけるのように腕を薙ぐ。男の拳は逸れたが重い一撃に受け流した腕が痛む。だが、苦痛に酔う暇など与えてくれない。次の瞬間にはストリートパンチが海未の眼前に迫っていた。海未は何とか残っていた掌で受け止める。

バツチイン！ と空気が割れたような音が夜の廃工場に響く。受けた掌から電撃のような痺れが体中に奔った。骨が軋む。受けた場所が火傷したように熱い。

だが、悲鳴は上げられない。涙を浮かべる余裕すらくれない。自分より体格のいい腕や足が休むことなく襲い掛かってくる。

さながら質量の嵐。一步間違えれば致命的な一撃によって全てが終わる。

海未は耐える。堪えろ。会話でも挟んでくれれば少しは休めるが、余計な時間は自分の命取りだと察しているため男の猛攻は止まらない。

辛い。体が痛むと同時に精神も磨耗する。

しかし、やり過ごせていると海未は心中で安心していた。

このままならば警察が来るまで持ちこたえられる！

——それが確信したとき、背中が壁にぶつかった。

男は無闇矢鱈に海未に攻撃をしかけたのではない。彼女を敷地を囲う壁にへと追い詰めるように仕掛けていたのだ。

海未が気づいたときには既に遅い。追い詰められたと解つたとき、一瞬手が止まつてしまったのだ。

その隙を待つていた男が見逃すわけなく、彼女の首を掴むように腕が伸びる。このままでは呼吸を止められて、苦しむ間もなく意識を奪われるのか。

そんな心配をするほど、男の腕がゆっくり見えた。が、それ以上に自身の体が動かない。

窮地によって感覚だけが研ぎ澄まされたのか。

ああ、それならば一掃のこと一思いにやってほしい。

一秒にも満たない時間を海未は数十秒、数分にも感じた。

男が口にした言葉を思い出す。

……もう、誰にも会えない。そう考えて、真つ先に思い浮かべた顔は——。

——横から現れた色明に男は殴り飛ばされた。

「人のダチを勝手にぼこつてんじゃねえぞ！」

突然の襲撃に男は抵抗もできず、左頬からめり込んだ拳は意識を消失させ、更には体自体も十メートル以上先まで吹き飛び、地面に転がった後、そのまま動かなくなる。

一撃。あれほど海未を苦しめた人間を不意打ちとはいえ、一撃で行動不能に追いやった。

呆気ない幕引きである。

一連の光景を間近で目撃した海未は、いきなり現れた色明へ驚く前に、酒で暴れたK
I 選手を腕ずくで黙らせたのは本当だったのだと、少し場違いな感想を抱く。

すると、倒れた男を睨んでいた色明が海未へ視線を変えた。

「うっ——」

眉間に皺を作つて睨んでくる色明に、海未は堪えれず怯む。

怒っている。

どうやって此処に現れたのか今の海未では想像できないが、厳しい顔つきを見ると無茶な行動をした自分に腹を立てている。海未はそう考えた。

「えつと……新田さん。どうして、ここに？」

「高阪と南からメールが来てな。二人同時に俺にも連絡するなんて相当焦ってたんだろ」

「そうですか……。不安にさせてしまいましたね」

「当たり前だろうがっ」

乱暴に色明は言葉を吐き捨てると、ドカドカと海未に近づく。

手を伸ばせば、簡単に相手へ触れる距離。耳をすませば、色明の乱れた呼吸が聞こえた。叱られると海未は身を縮まらせた。色明と壁に挟まれた状態なので逃げ場もない。

不意に、色明の腕が持ち上がる。

トン。

色明の手が海未の顔すぐ横を通り過ぎ、後ろの壁に——優しく、手が置かれた。

驚いた海未が顔上げると、壁に凭れながら見下ろしている色明の瞳と目が合った。

「アンタは本当に厄介ごとが多いな。でも——無事でよかった」

安堵に崩れた表情。消えてしまいそうな穏かな声。

壁と色明に挟まれた身動きできない狭い空間で、海未はぎゅつと胸が苦しくなる。

あれほど凄まじい力を見せ付けた彼を不安にさせてしまった。

それがとても申し訳なくて。でも、どこか嬉しくて。

海未は少し手を動かし、色明が着ている服の裾をそつと掴んだ。

「……………心配をかけて、すみません」

▼ 結局、警察が辿り着いたのは色明が現場にやってきてから数分後である。

Wanderingのメンバーは全員その場で逮捕。彼らには後ろ暗い噂があり、今回のことで徹底的に悪い物は叩き出されるだろう。

ヒロは保護された後、そのまま病院に輸送された。

外傷は酷いものだが、今後の音楽活動に支障はないこと。少なくとも救急車に運ばれる間際、海未の名前を聞き出して自分の連絡先を渡すくらいには元気だった。

色明が救急隊を急かさなければ、その場で口説き始めそうなくらい達者である。当の海未はあまり理解してなかったが。

海未は警察と共に心配でやってきた穂乃果とことりに泣きつかれた後、説教された。単独行動を取ったことも警察に説教され、事情徴収の後迎えに来た母親にも説教された。

説教続きで参つた彼女だったが、最後には勇敢なことはしたと母に褒められる。

色明といえば、どうやら仕事中に無理やり抜け出したようで、彼をここまで運んでき

た大人が警察に平謝りし、一旦仕事場に戻った後で警察に事情聴取に向かったそうだ。

その後も、彼のやって来た家族や事務所関係者に沢山のお小言を貰い、結局寝たのは日が変わってから。

翌日の朝連。そこで昨日ぶりに再会した海未と色明は、寝不足な相手を苦笑しながら互いに労った。

▼ 「ひゃあああ……。改めて聞くと昨日は大変だったんですね。海未先輩、車を追っかけちやんたんですね」

「そうだよ。残された私と穂乃果ちゃんは連絡が来るまで混乱してて、連絡が来たあとも大変だったんだから」

「お疲れ様です」

放課後の屋上にて、少しの暇を持て余した花陽がこつりに昨日の惨事を聞き返していた。

今朝にも大体の出来事は聞いてたが、聞けば聞くほど大事件である。

毎朝恒例の芸能界チェックで W a n d e r u n g が事件を起こしたのは知ってたが、そこに自分の先輩たちが関わっていたことに驚きは隠せない。

当の二人は無事であり、事件のことも寝不足以外に気にした様子なかったため話の

種にできるが、一步間違えば重い事態になっていただろう。

「けど、あれですね」

「うん？」

「つまり、海未先輩のピンチを新田先輩が助けたわけですよ？」

「そうだね」

「それは、ロマンスが始まりませんか？」

興奮した様子で瞳をキラキラとさせる花陽。

なるほど、さすがは年頃の女の子。

花陽はこの手の話が好きなようだ。ちなみに聞いていることりも大好きである。

「女の子の大ピンチを男の子が助けるなんて、まさに王道展開じゃないですか!?! 新田先輩もわざわざ仕事を抜け出してまで駆けつけたんですよね! 普通なら起きませんが、そんな普通に起きなかったことが普通に起きたら普通に気にしちゃうのが普通では?」

「かよちゃん、普通言いすぎにや」

二人の会話を聞いていた凜が呆れたよに呟いた。

「でも、凜ちゃん。そんなハプニングあればころつと云っちゃうかもだよ。海未先輩はスクールアイドルでお嬢様。新田先輩はプロの歌手。ばれたらスキヤンダル待ったな

しの秘密のラブストーリーが始まっちゃうかも！」

「漫画の読みすぎだよ。それに、二人とも普通だよ。ほら——」

ちらと視線を向けると、端の方でパソコンを見ている海未と色明がいる。

ただし、二人だけではなく他にも穂乃果と真姫がパソコンを見ており、共に難しい顔を浮かべていた。

四人は前回スタジオで収録した曲を編集集中である。

「穂乃果先輩のこのパート。改めて聞くと曲と少し噛み合わないわ」

「ええ、取り直し？」

「それも視野には入れますが、何度もスタジオに行ける余裕はありませんからね。できるだけ編集ソフトで誤魔化せないでしょうか？」

「編集ソフトでも限界がありますよ」

「ごめん……」

「穂乃果、謝らないでください。あの時はこれでOKしたのですから。未収録分のパートもありますし、そのときの取り直ししましょう」

「ああ、そのことなんだが。あのスタジオ、一年間ただで行けることになったぞ」

「え!? どういうこと新田くん？」

「昨日のこと、店側もあいつ等を招いたことで責任を感じたらしくくてな。昼過ぎに連絡

があつて、お詫びに年間パスを貰えるらしい。つまりスタジオ代は只だ」

「やったね、海未ちゃん！ 怪我の功名だよ！」

「どちらかと云えば不幸中の幸いでは？ どちらにせよ嬉しいことには変わりませんが」

「活動資金は平等に集めてるからな。だが無料で使えるからと言つて、何度も手間をかける時間は無駄だ。次のスタジオ入りでこの曲は完成させるぞ」

「そうですね」

「園田は確認中に違和感があれば歌詞を修正してみる手段も考えておけ。今の歌詞に文句があるわけじゃないが、歌う側がやりやすいフレーズに合わせてやるものアリだぞ」

「わかりました。では、早速ですが穂乃果。貴女のパートで歌い辛い場所は何処かありますか？」

「えーと」

黙々と作業を進めていく二人。

真剣に曲作りを取り組んでおり、そこに浮ついた光景は見られない。

「——真姫ちゃんと一緒に二人とも真面目してるよ。今朝も普通に会話してたし、特に意識とかしてないんじゃないかな？」

「ううーん、そうなのかな。確かに花陽の思い込み過ぎかも」

「花陽く。次は貴方の番よ」

「あつ、分かったよ真姫ちゃん。じゃあ、行ってきます」

ぱたぱたと真姫の傍に向かつていく花陽を見送りながら、凜はやれやれと溜息を吐く。

「かよちゃんは恋話とか好きだにや。自分もまだなのに。そんなかよちゃんも好きだけど」

「凜ちゃんはどうかなの？」

「うくん、よく解らないかな………。嫌いじゃないけど、あまり気にしてない。ことり先輩は？」

「私は恋愛のお話は大好きだよ。初恋はまだだけどね」

私はね——、と心の中で呟くことり。

ちらりと彼女は海未の様子を覗き見る。

また色明と話しているが内容も曲に関するものであり、熱い視線を送ってるわけでない。

幼馴染であることりから見ても、昨日の一件によって海未が色明を見る目が変わったとは思えないのだ。

(だって——、変わったのはもつと前からだもんね?)

本人は気づいているだろうか。偶に彼を目で追っているのを。

その回数が日に日に多くなっていることを。

ことりは恋とか愛とか大好きだ。

だけど、無粋なことほしくない。

少なくとも、まだ自覚していないだろう気持ちをも、本人の口から打ち明けられるまでは。

可愛い幼馴染を見守って楽しむだけに留めておくのだ。

14話・初会ガールと再会ガール

五月も後一週間足らずで終わる此の頃。

音乃木坂の屋上で流れていた曲のアウトロが終わり、真姫が停止ボタンをクリックした。

「——どう？ 私は悪くないと思うけど」

「いいと思う！」

「うん！ ことりも」

「うわあ、私の声が入ってる曲がほんとにできたよ！ これは何かの間違いでは!?!」

「かよちん、収録したんだから間違いないや。凛も同じ気持ちなんだけどね」

「私もいいと思いますね。新田さんはどうです?」

「現状ではベストを尽くせたと感じる出来だ」

「なら、OKだね!? やった——新曲完成だ!」

穂乃果が生まれた曲を祝うようにパチパチと拍手を奏でる。

続けて真姫以外の残りのメンバーも穂乃果に続き手を叩き、取り残された真姫も恥かしそうに小さな拍手をした。

「衣装もあと少しで仕上げられるし、これで新しいPVも作れるね」

「え？ そうなの？ なら、今日の練習は早めに終わらせてことりちゃんの衣装の仕上げを皆で手伝おう。速く新しいPVをアップしたいからね」

ことりから衣装作りの進行状況を聞いた穂乃果が提案した。

現在、スクールアイドルの公式ページに投稿している動画はファーストライブで撮ったものしかない。

ブログページで真姫たちの介入報告やみんなが撮った写真を添付してるものの、目新しい活動は最近してないのだ。

「手伝ってくれるの、穂乃果ちゃん？」

「ことりちゃんや花陽ちゃんばかり任せてたら悪いしね」

「花陽はそこまで衣装作りに貢献してませんけどね。ことりさんの手伝いで精一杯です」

「手伝いだけで十分だよ。私なんてまともに針に糸も通せないもん」

「……それでよく皆で衣装を仕上げようなんて言えましたね」

海末が呆れた視線を送ると、何故か穂乃果は自信に満ち溢れた笑みを浮かべる。

「大丈夫！ 縫えなくても応援はできるよ！」

「応援なら凜もできるにやあ！」

「いやいや、五月蠅くしたら二人の邪魔でしょう。手伝いは私と真姫でやりますから二人は大人しくしててください」

「私、裁縫できないんですけど……」

「こどりに花陽。私一人でも貴方たちの力になります」

「園田さんよお。最初から俺を戦力外で話を進めるのは感心しないな……」

意気込む海末に残されていた黒一点の色明が苦笑を浮かべる。

彼の発言にはその場の女子たちにとって意外だった。

「新田さん、裁縫できるのですか？」

「解れたものを直すくらいなら男でもできるさ。そのレベルで助力に足るかは別にしてな」

「うくん。残ってる作業は難しいところだからどうだろうなあ……」

「なら下手に手伝わないほうが良さそうだねえ……」

「新田くん、無理しない方がいいよ」

「そうですね、新田先輩も凜たちと応援するにや」

「最初から諦めてる二人が何故上から目線なのですか……」

「……………。うん！ 衣装は出来る人に任せて残りはP.Vのアイデアを出し合おう

！」

「無視ですか……。というか今日も練習はするのでしょうか？」

「あつ、そうだった」

「もお、穂乃果つたら……。まあ、逸る気持ちは理解できますが」

海末も速く自分も手掛けた作品をお披露目しなかった。

曲だけなら今からでも投稿できるが、折角ならば衣装と共に公開した方が見栄えがいい。

「明日は学校はお休みですし、今日アイデアを出して明日からでも取り掛かりたいものです」

「PVのために明日、ね。悪いが参加できないな」

「お仕事ですか？ 毎度のことならお勤めご苦労さまです」

明日は日曜日なのだが、色明が一般的な休日に仕事をしていても今更不思議ではない。

もつとも、誰も彼も休んでいたら全体の生活が不便になるだろう。

海末の実家で行う日舞も公演は祝日が多く、道場も土日にかけていることが多い。穂乃果の家である和菓子屋『穂むら』も前もって決められた定休日以外は営業している。生徒たちの授業がない日でも学校には教師たちが出勤するのだ。

しかし、それを踏まえても色明は多忙だろう。

本業によって疎かになった学業は時間を別の時間を作って補い、海未たちのアイカツまで助力しているのだ。彼の働きぶりは同じ年の中では確実に郡を抜いている。

だが、多忙という点であれば海未も同じだ。学業に家業。弓道部にスクールアイドルの二足草鞋。作詞の他にも練習メニューは彼女が担当している。

日々大変であるがそれでも彼女が全てをこなすのは、やるべきことを自分で選んだ事だからだ。最近では同じく多忙な色明に負けてられないと、切磋琢磨励んでいる。

「仕事、ねえ。……………参加できないのは別件だな」

海未の労いに対し、歯切れの悪い言葉を紡ぐ色明。

「?」何か別の御用事ですか?」

「あの、私も明日は参加できませんです」

海未が不思議そうに色明が尋ねた傍でそっと花陽が手を上げる。

「ああ、そういえば明日は見に行きたいアイドルのライブがあるって言ってたね」

花陽を補足するように凜がそんなことを言った。

なるほど。アイドル好きの花陽らしい用件だと誰もが納得するが、それを聞いた色明が何故か「嫌な予感がする」とでも言いたげな顔を浮かべる。

「へえ。アイドルのライブか。どんなグループ?」

「そ、それは——」

興味を持った穂乃果が尋ねると、花陽は一度色明をちらりと見てから口を開いた。

「346プロのシンデレラプロジェクトという最近できたアイドル企画がありました、

明日はその記念すべき第一陣デビューユニットたちのミニライブがあるんです」

「346プロというと、新田さんと同じ事務所ですね」

花陽が色明に一瞥したことに気づいた海未がそれが理由なのだろうと納得し、今度は色明の様子を見た。

すると先程よりも厳しい顔に彼女は首を傾げる。

まずいものでも食べたような形相。

同じ事務所の人間のライブを知り合いが見に行くことに抵抗でもあるのかと悩んでいると、「あの——」と花陽が声を出していることに気づく。

「——実は前々から気になることがあります。何も情報がないから単なる偶然かなって思ってたんですけど」

『?』

「……………」

「明日ライブするユニットの一つがLOVE LAIKAという二人組みのグループなんですけど、アナスタシアさんと共演される新田美波さんってもしかして——」

「はええ、アナスタシアさんて外人さんなのにあ？」

「違うわ、凜。花陽が言いたいことは——」

「新田美波さん？ 新田って——」

「まさか——」

それに気づいた少女たち（穂乃果・凜のぞく）は花陽から視線を変え、色明を見つめる。

集まる視線に観念した彼は、大きな溜息を吐き出した。

「小泉の予想どおりだよ。LOVE LAIKAの片割れは俺の姉だ」

「やっぱり！ これは特大情報です！」

「え!? 新田君のお姉さんアイドルなの!?!」

「穂乃果、いま気づいたのですか。正確には明日デビューをするんですけど……」

「それでもすごいよ！ 姉弟きょうだいで芸能人だなんて！」

「ふうん、この人がそうね。綺麗な人じゃない」

「真姫ちゃん検索したの？ あつ、本当だにや。でも、あまり似てないにや」

わいわいと騒ぐ少女たちだったが、色明は眉間に皺を寄せて厳格な姿勢をとる。

「……………言っておくが、姉は俺関係なしでアイドルになったんだ。コネでデビューしたとか思われないように姉弟のことはまだ伏せてるんだ。絶対、言いふらすなよ」

「びゃあ！ わ、解りました……………」

「新田さん、脅さないでください。花陽が怯えています」

「むう……………悪い」

「いえ……………私もはしやぎ過ぎました」

自身でも態度が悪いと察したのかすぐに謝る色明。

そんな彼を見ながら、仕方ない人だと海未は苦笑した。

色明に悪気がないのは解っている。姉に妙な偏見が付きまとわないか心配しているの
だろう。

熱くなるのは困ったものだが、いたいけもあると海未は好ましく思えた。

「それでは新田さんの用事というのはお姉さんが出られるライブを見に行くのですか」

「……………そうだよ。悪いか？」

「誰も悪いとは言ってませんよ。何故、拗ねてるのですか？」

「別に拗ねてねえよ」

「前にも言いましたが、家族思いでとても良いと思いますよ。むしろ、姉の晴れ舞台を無
下するほうが愚かだと私は思いますよ」

「………………違いがない」

海未がそこまで言って、ようやく普段の調子に戻る色明だったが。

「よし！　なら、私たちも新田君のお姉さんが出るライブを見に行こう！」
「はああああ!!」

穂乃果の発言で叫声を上げる羽目になった。

「いやいやいや、なんでお前たちも見に行くんだよ」

「興味が沸いたからだよ！　元々花陽ちゃんは行くつもりだったし、他のみんなはどう？」

「新田くんのお姉さんが着ている衣装と一緒に出演する
new generationニュージェネレーションズの衣装も間近で見たくなったから、ことりも行き
たいかな」

「かよちゃんが行くなら凜も行くにやあ。真姫ちゃんはどう？」

「まあ、PVの参考で見学に行くのも悪くはないわね」

「……そのライブは今からで入場チケットを購入できるのですか？」

「大丈夫です！　池袋のショッピングモールでやるイベントで、通行人が自由に観るところができるライブですよ！」

「なるほど……」

花陽の説明を聞き、路上ライブのようなものと海未は理解した。

「では、私も見てみたいですね」

「園田、お前もか……」

真姫の言うとおり次に手掛けるPVの参考のため見るのは有益だろう。

個人的にも色明の姉がどんな人か直接見てみたい好奇心が海未の中に芽生えていた。

「よし！ なら、明日は皆でライブだね！」

もはや結論は決まったとばかりに穂乃果が宣言する。

色明は反対の意見を出さず、代わりに肩を竦めた。

「拒む権利なんざ俺にはないけどな。二年生は前に見せたSoleilのライブと比べるなよ」

「新人とトップアイドルを見比べるような野暮なこととはしません」

海未のしつかりとした言葉を聞き、色明もようやく難色した顔を解す。

「それなら、俺から言うことはもう何もないさ」

「え？」

自身の不安が杞憂だったと色明が安心してしていると、花陽が驚いた顔で二年生たちを見た。

「せ、先輩たちSoleilのライブに行ったことあるんですか？」

花陽の反応は当然だろう。

Soleilとはトップアイドル星宮いちごが所属するアイドルグループだ。アイ

ドル好きな彼女が知らぬわけがない。

花陽はこれまで何度か So leil のライブ抽選に挑戦したが、その度に苦渋を味わっていた。

転売者を憎み、参加者には羨望と己の分まで応援を託し、涙で枕を濡らしたライブを目の前の人たちが参加していたことに驚愕する。

だが、彼女の驚愕はまだ終わらなかった。

「そうだよ。最近行つたんだ」

「さ、最近!? となると名古屋ドームの!?」

「うん。来れなくなつた新田くんの家族の代わりに連れてつて貰つたの」

「しかも奢りですか!?!」

「はい。アйкаツする上の参考としてみせてもらいました」

「な、なんてうらやま——」

「最後に偶然 So leil の人たちと廊下でばったり会つたのは驚いたね」

「ほおわ!? ライブ外であ、あああ、あっちゃつたのですか——!?!」

「新田さんとお知り合いだったようで。少しか話しました」

「ピヤアアア!!! オハナシチャッタノオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオ!?!」

絶叫しながら花陽が崩れ落ちた。

驚きながら彼女に駆け寄り寄る凜と真姫。心配そうに眺める二年生たち。

誰もが按ずる言葉を送るが、絶望に打ち震えている花陽には届かなかった。

落涙。ポタポタと、屋上に乙女の泪が零れ落ちる。

「なんで、なんで——」

彼女が此処まで取り乱すことは稀だ。幼馴染の凜ですやや引き気味である。真姫はオロオロしており、二年生たちは不味い事をしたのか困惑していた。

しかし、外界の様子など構ってられない。

抑えられない悲は。仕方なかったと割り切れない慟哭。

心を苦しめる嘆きを、花陽は高らかに木魂す。

「——なんで、もっと早く、私はスクールアイドルにならなかつたの!!!」

仮に。花陽が早期にμ sへ介入しても、色明も持っていたチケットが足りなかつたのだが。

▼ そんな事情など、滂沱の涙を流す彼女には無意味なことである。

μ s一行が見ることになったミニライブは某所の噴水広場で行われる。

池袋にあるその場所は、プラネタリウム、水族館、展望台などのレジャー施設とショッピングセンターが連なる超巨大商業施設の中にあつた。

平日でさえ人が多いこの場所は、休日だけあつて縦横無尽に多くの人間が往来している。

ミニライブが行われる噴水広場では日ごとに様々なイベントが執り行なわれており、巨大スクリーンと最新の音響によって舞台を盛り上げるのだ。

通行人の足を止めるには格別の空間であり、新人の初ライブではかなり優遇された場所である。

一行はライブ会場に向かう前に、池袋駅の東口から道路を挟んで向かいにある池袋東口交番近くで待ち合わせをすることにした。

直接現地集合の場合、人が多いため合流するのが面倒なためである。

駅周辺の待ち合わせスポットも人が多いため、目的地に近い側かつ駅から少し歩いた場所であり、交番近くならナンパなども避けられる。

待ち合わせ時間前に其処へ辿りついた海未とことりは、他に誰かいないか探し始めた。

なお、元々は穂乃果も二人と共に来る予定だったが、昨日の夜に連絡があり、二人だけで先やって来ている。

「ことりたちが一番乗りかな？」

「いえ、そうではないようですよ」

そう言うのと海未は迷いなく一人の人間に近づいた。

黒縁眼鏡に中折れハット。地味ではないが景色に溶け込みそうな風貌であり、間近で確認してようやくことりも誰なのか把握する。

「こんにちは、新田さん」

海未が人目を避けるため扮装した色明が驚いたように振り向いた。

「園田たちかっ……ういす」

「こんにちは、新田くん。——すごいね、海未ちゃん。こんな人が多いのに新田くんをすぐに見つけるなんて。ことりは全然気づかなかったのに」

ことりも挨拶してから海未を賞賛する。

何処となく表情がにまにまとしているのは気のせいだろうか。

「そうですか？ 偶々でしょう？」

「俺もびびったな。一応、これでも変装してるんだが」

「ああ、それで最初に驚いたのですね。まあ、変装は前にも見たことがありますし、ことりより先に気づいたのも席が隣だからでしょう」

「……………そうかももしれないね」

淡白な返しに、内心つまらないなあと思しながら、ことりは苦笑した。

此処で狼狽でもするなら心境の変化を察せれるのだが、其処まで到っていないようである。

変装している相手を人ごみから一瞬で見つけ出したのは隣の席ゆえ。

それは理由としては弱すぎるだろう。

まだ自覚症状はない。

それはそれで愉快だところりは気持ちを切り替え、話題を変えてみる。

「ところで新田くん、その紙袋に入ってるのは？」

「ああ、用事で来れなかった親に頼まれた差し入れと、花束………」

紙袋を掲げながら、照れ臭そうに色明は言った。

「目立つわけにはいかなからデカイの用意できなかつたけど、一応気持ち程度にはね」

「それはそれは！ きつとお姉さまも喜びますね！」

「だと、いいがね……」

「大丈夫です！ 花を貰って嫌な気分になる女の人はいませんから！」

それは状況と渡す人間によるのではというツツコミはいれず、まるで自分が花束を貰ったように感激する海未に、ことりはほそく笑む。

きつと、姉のために花を準備したのと、それに照れているのに心を打たれているのだ

ろう。

写真に撮りたい愛らしい顔だが今は我慢する。

本人が自覚するまでは余計なこととはせず、一挙一動を眺めるだけにすると決めたのだ。

しかし、こうも目の前で初々しい光景を見ると、それを肴に好物のチーズケーキでも食べたい気分のことりであった。

「でも、甘すぎるのも駄目だから渋めの紅茶も必要だね」

「なんのことですか？」

ことりの独り言に反応したのは、海未と色明ではなく、いつの間にかやって来た花陽である。

傍には凜と真姫もいた。

「あつ、かよちゃんたちだ！　こんにちは！　さつきのは別になんでもないよ。独り言」

「？　そうですか。えっと、こんにちはです」

「やはろーにゃ！」

「凜、何その挨拶？」

「昨日の夜テレビでやってたやつにゃ、真姫ちゃん」

「残るは高坂か……………」

「うわ！ 新田先輩いたの？ 気づかなかつたにや。なんで眼鏡してるの?！」

「変装でしょう。それよりも、てつきり穂乃果先輩は海未先輩たちと来ると思ってたんですけど……………。まさか、遅刻ですか?！」

「そうだな。それは俺も気になった」

「いえ、穂乃果は少し寄るところがありました。そろそろ来るはずなんですが——」

「みんな、やつほ——!!」

噂をすれば穂乃果が手を振りながら到着した。

だが、その後ろには別の少女が二人いる。少なくとも一年生組と色明は知らぬ顔だった。

「穂乃果さん、その子たちは?」

「うん、紹介するね!」

花陽が尋ねると、穂乃果は二人いる内の一人の背中に周り、その両肩に己の両手を置いた。

「この子は私の妹の雪穂!」

「ちよつと、お姉ちゃんいきなり引つ付かないで! えつと、はじめましての人ははじめまして。高阪雪穂です。姉がいつもお世話に——いい加減離れてよ、お姉ちゃん!」

ショートカットでしつかりとしてそうな少女、雪穂は抗議するが穂乃果は無視し紹介

を続ける。

「で、隣の子は雪穂の友達ありさの亜里沙ちゃん」

「どうも！ 亜里沙です！」

亜里沙という少女は丁寧にお辞儀した。

柔らかなようなセミロングの髪。言葉ははっきりしてるものの、瞳は青く、愛らしい人形のような顔立ちには日本ではなく異国の空気を出していた。

「亜里沙ちゃんはロシアと日本のクォーターなんだよ。で、今日は元々雪穂と一緒にアナスタシアさんを見に行く予定だったんだ」

「アナスタシア、さん？ 誰だっけ、かよちゃん」

「凜ちゃん……。アナスタシアさんは新田先輩のお姉さんである新田美波さんとユニットを組むロシアと日本のハーフさんだよ」

「そうそう！ 同じロシアの人がアイドルするから前から気になってたんだよね？」

「そうです！ そのことを昨日の夜、雪穂が穂乃果さんに話したそうで、そうしたら穂乃果さんが一緒に来ないかと誘われたわけですよ」

「すみません、いきなり……。ご迷惑なら私たちはこれで失礼しますので」

「ええ、何度も言っただけどいいよ気にしなくて。一緒に行こうよ！ 目的地は一緒なんだしさー」

「お姉ちゃんが気にしなくても、他の人が気にするでしょ！」

怒鳴る雪穂をぐわんぐわんと揺らしながら駄々を捏ねる穂乃果。

これではどつちが姉なのか解らない光景に周囲の人間は苦笑いを抑えられない。

「うーん、別に凜はかまわないけど」

「私も別にかまわないかな」

「……元々大勢だし、今更一人二人増えても同じよ」

突然の同行者に不満を出さない一年生たち。ここで難色を示すほど彼女たちの心は狭くないのだ。

「俺も構わないな——」

色明も特に反対意見も出さず同行を認める。

言葉を発したことで初めて彼の存在に気づいた雪穂と亜里沙は一瞬驚き、互いに目を合わせた。

「わあ、雪穂！ 新田色明さんだよ！ テレビで見たことある人だよ！」

「話では聞いてたけど本当に女子高に通って、しかもお姉ちゃんたちと友達なんだね」

「そうだよ、すごいでしょう？」

「なんで穂乃果が自慢をするのです……………」

「——ていうか、言いそびれたが」

何やらばつの悪そうな顔する色明。

何事かと海未が視線を向け、他の少女たちも彼に注目した。

「俺にもついてくるヤツが来るんだよ。ていうか、来た」

「やつほ——！ 皆さん、おそろいですか！」

はつきりとした声に全員が振り向くと、波のかかった髪で眼鏡をかける少女がいた。

何処となく、誰もが見覚えのある顔。

その正体逸早く気づいたのは花陽だった。

「き、き——」

「星空、小泉の口を抑えろ！」

刹那、花陽の異変に気づいた色明が凜に呼びかける。

「了解にやー！」

「もー！」

凜は即座に色明の言葉に従い、花陽の背に回って彼女の口を塞いだ。

海未は何事かと一瞬困惑するが、見に覚えのある顔に花陽の反応。

更には聞き覚えのある声で、新たに現れたのが誰なのか解った。

「霧矢あおい、さん」

「どうもどうも、ライブ以来だね。海未ちゃん」

Soleilのメンバー。スターライト学園意所属するプロのアイドルの霧矢あおいはウインクをした。

「覚えてくれたのですか……」

「そりゃあ勿論！ 色明の友達だし三人とも可愛い子ちゃんだしね」

人目を避けるように、目立たない格好をしているあおいは周りをゆつくり見渡す。

「穂乃果ちゃんにことりちゃんもお久しぶり〜」

「は、はい！ お久しぶりです」

「その節はどうも」

「いいよ、硬くならなくて。海末ちゃんはそういう子みたいだからいいけど、二人は同い年だし普通に話して欲しいなあ。今は私もオブだしね」

「えっと、わかりました——じゃなくて分かったよ、あおいちちゃん」

「うん、ありがとう穂乃果ちゃん。で、そのの貴女は真姫ちゃんで合ってる？」

「ヴェエ!?!」

まさか自分の名前を呼ばれるとは思わなかった真姫は変な声を出して驚いた。

「ど、どうして私の名前を!?!」

「そりゃあ、色明に聞いたからね」

「……………」

「睨むなよ。変なことは言つてないぞ」

「色明の言つてゐることは本当だよ？ 音楽の才能が凄いだつてね」

「ま、まあ、それなりに……」

「……へえ、そこで謙遜じゃなくて一応は認めるくらい自信があるわけだ。時間があれば貴女ともゆつくりお話ししたいわね。次は——其処の元氣そうで可愛い子は星空凜ちゃん！」

「は、はい！ で、でも凜は可愛くは——」

「？ なに言つてゐるの？ 可愛いじゃない。で、凜ちゃんに口を抑えられてゐるのは花陽ちゃんだよ。もう、落ち着けた？」

すると、凜に口を抑えられたまま花陽はこくこくと頷いた。

それを見た凜がもう大丈夫かな、と彼女を開放する。

途端、花陽はあおいに近づき、その両手を握り取つた。

「あの、あおいさん！」

「ひゃい!？」

突然掴まれたことで、先程まで周囲を戸惑わせてたあおいが逆に戸惑つてゐる。

そんな彼女にぐいつと近づき、花陽はだらしない顔を浮かべた。

「ファンです！ サインください！」

「え？ あ、うん。いいけど、何か書くものとかある？」

「はい！ 何時如何なる時でもアイドルに遭遇してもいいよう常備してます！」

あおいの手を離し、何処から取り出したのかささつと色紙とマジックを準備する花陽。

それを見たあおいは、ぷつと笑った。

「本当にアイドルが好きなんだね、花陽ちゃん」

「はい！ 大好物です！」

「ふふ、私と一緒にだね。じゃあ、貸して。さらさらくと、はい、これでいい？」

慣れた手で素早く色紙に描いたサインを受け取り、花陽の目は輝いた。

「ありがとうございます！ うわあ、思いがけない大収穫だよ」

「喜んでくれて嬉しいな。えっと、残りは……………」

あおいは雪穂と亜里沙に目を向けて、困った顔を浮かべる。

察した二人は自分たちから自己紹介をした。

「穂乃果の妹の雪穂です。で、こっちが私の友達のもの——」

「亜里沙です。今日はLOVE LAIKAを見たくて、皆さんとご一緒にさせてもらう

ことになりました」

「なるほど。なら、私も一緒にだね」

「えっと、あおいさんもLOVE LAIKAを見に？」

「一緒に出演するN^{ニージュエネ}Gもだけどね。新人だろうがアイドルの情報は常にチェック。何故なら私はアイドル博士だからね！」

「アイドル博士！」

「知ってるのかよちん!？」

「霧矢あおいさんが持つ異名の一つだよ！ プロアマ問わず、アイドルのことなら芸能界一詳しいとも言われてるんだよ。実際、クイズ番組でアイドルの問題は一度も間違ったことがないくらい凄いんだよ！」

「単なるアイドル好きなだけなんだけどね。もっとも、今回のミニライブは美波お姉ちゃんに会いたいからでもあるけどね」

「美波、お姉ちゃん？」

不思議そうにした花陽にあおいは説明する。

「もしかしたら花陽ちゃんなら知ってるかもしれないけど、私と色明は幼馴染で小学生まで一緒のお稽古してたんだ。で、色明のお姉さんである新田美波さんもそのお稽古をしててね、美波お姉ちゃんって呼ばせて貰ってるくらいお世話になったんだ」

「新田先輩とあおいさんが幼馴染で一緒のお稽古を習ってたのは知ってましたが、美波さんも同じ稽古を！ これは見過ごすことができない情報です！」

「という訳で、私もご同行するからよろしくね！」

「強引についてきたんだから、形でも了承の確認はしろよ……」

「私は勿論大歓迎ですよ！」

色明が呆れている中、花陽は興奮したように目を輝かせる。

「凜ちゃんも真姫ちゃんも大歓迎だよね？」

『え？』

「大・歓・迎・だ・よ・ね!？」

『はい、大歓迎』

「穂乃果も大歓迎だよ！ 一緒に行こう、あおいちゃん」

「ふふ、穂乃果ちゃんはすっかり打ち解けたみたいだね」

「そういうことりちゃんも仲良くしようよ」

「うん、改めてよろしくね。あおいちゃん」

「よろしく！ そつちの子達もお邪魔するね」

「お邪魔なんてそんな！ 私たちもお姉ちゃんについて行くだけです」

「うわあ、あおいさんも一緒に行くなんて！ 凄いね、雪穂」

「お前たち……、はしゃぐのはいいがささつと行くぞ」

時間が気になり初めた色明が、ぶっきらぼうに彼女たちへ忠告した。

そんな彼にあおいはにんまりと笑った。

「おやおや、両手に花どころか一面花畑なのに色明はお姉ちゃんが気になりますか」

「おう、そうだな」

「素直に認めちゃうんだね。照れ隠ししてもいいのに」

「そうしたらお前は付け上がるだろうが」

「その通りだねえ」

面白そうに笑うあおいに面白くなさそうに顔を顰める色明。

一見険悪に見えなくもないが、どちらも遠慮がないやり取り。

そんな二人の会話を、海未が黙って見つめている。

以前のライブでは意識しなかったが、幼い頃は同じ稽古事し、未だ連絡は取り合っているようなので二人の仲は深いと分かる。

不意に——心の中で暗雲が漂う。

だが、海未は己の心情に気づいていない。

「ていうか、お前らに付き合って見過ごすわけにはいかないし、俺は先に行くぞ」

「はいはい、そんなにツンケンしないでみんな行きましょう」

「そうだよ、新田くん！ 折角集まったんだし、みんなで行かないと。よし！ じゃあ、

出発！」

穂乃果の掛け声と共に、ぞろぞろと移動をし始める一同。

先頭で和気藹々と花陽や穂乃果と話しているあおいを見て、色明はやれやれと溜息を吐いた。

すると、自分をじつと見つめてきた海未に気づき、彼は思わず苦笑する。

「悪いな。急な同行者を追加してよ」

「いえ、穂乃果も雪穂たちを連れてきましたし、みんなも霧矢さんに喜んでいます」

「園田は歓迎してなさそうに見えるんだが……」

「え？」

言われて、海未は心外そうな顔を浮かべた。

「誰もそんな顔してません。貴方の気のせいじゃないですか？ 私が霧矢さんを拒絶す

る理由など思いつかないでしょう？」

「言われてみれば、そうだけだな……」

「まったく、失礼なことを言わないでください。貴方の謂れの無いことで霧矢さんの気分を悪くしたらどうするのです」

「そうだな。表面上平然としても傷つくだろうし、俺も変に気を使うのは止めよう。アイツも滅多にないオフだろうし、楽しい時間にしてやらないと」

慈しむように口端を緩める色明。

それを見た途端、海未は気分が悪くなり、自身で戸惑う。

「……………分かればいいのです」

「いや、待て。やっぱり機嫌が悪いだろ？ あおいのこと関係ないなら、単に体調が悪いのか？」

「……………そうかもしれません。今日は人が多いですし、少し人に酔ったのかもしれませんが」
「マジか」

心配する色明に気づき、彼女は狼狽した。

「はっ!? 気を使わなくて結構ですよ！ すぐ調子戻ると思いますし、それこそ私にも変に気を使うの駄目です。貴方もお休みなんですから、私なんかよりもお姉さんのことを考えてください」

「まあ、そのために今日は来たわけだしな」

「そうですよ……………」

「……………。向こうについたら少し休める場所でも探すか？」

「平気です。もうスッキリしました」

「回復するの早いなオタク!？」

先までテンションが低かった海未が急に快活になる様に戸惑う色明。

そんな二人の少し前を歩く雪穂が隣でふるふる震えていることを心配そうに見

つめる。

「あの、大丈夫ですか？　もしかして気分が？」

「だ、大丈夫だよ雪穂ちゃん。少し悶えただけ。むしろ気分はハイだよ！」

「は、はあ……」

類は友を呼ぶという言葉がある。

自分の姉もそうだが、その友達も少し人とは変わっているようだ。

15話・躍進 シンデレラ

346プロ主催シンデレラプロジェクトミニライブが行われる噴水広場では設営が完了されていた。

噴水広場と名だけあって水をモチーフにしたイルミネーション。月のモミュメント。演出を彩るスポットライトやスピーカーなどの大型機材。周りには進入防止のバリケードまで備えられている。

これから踊るアイドルにとって、煌びやかに飾られたこのステージはまさしく舞踏会場。魔法をかけてたシンデレラたちは不安と期待を胸に秘め、刻一刻と出番を待ち望んでいた。

既に人が疎らに集まっており、事情を知らない人間もこれから何か始まるのかと察する。ここは天井が吹きに抜けになっているため、ライブが始まれば上の階層にいる人間も注目するはずだ。

噴水広場へ他の者達と共にやって来た海未は、その様子に圧倒される。

「もう人がいますね。流石、大手によるイベントですか………」

当たり前なのだが、自分たちのライブとは規模が違う。

そもそもプロアイドルとスクールアイドルを比べること事態烏滸がましいのだが、一度自分たちでライブをしてみれば自然とその差に痛感させられた。

「事前に金と時間をかけて告知したんだ。これだけいてくれないと困るさ」

ほんの少し浅ましい顔をしていた海未に色明が声をかける。

僅かに声が上がっているのは、姉の晴れ舞台が盛況であることに喜んでいるのだらう。

「つまり自分たちのライブと比べるてとか、お門違いもいいところだ」

「お見通しでしたか……」

見抜かれたことを少し恥じらいながら苦笑する海未に、色明もまた苦笑を見せる。

「だいたい、この規模で新人の初ライブなんざ、かーなーり、恵まれているほうだぞ」

「そうだね。私は学校のイベント。色明は他のアーティストたちと一緒にしたよね」

色明が話していると、その隣にひよっこりあおいがやって来た。

「今回は二組だけどプロジェクトだけで言えば単独ライブ。それだけシンデレラプロジェクトは力を入れているってわけ。これはまさしく穩やかじゃないわね！」

「キッター——！ あおいさんの『穩やかじゃない』きたー！」

「え？　なんでかよちんそこで興奮したの？」

「あおいさんのと言えば『穏やかじゃない』が口癖！ 事あるごとに『穏やかじゃない』って言ってるんだよ」

「それって単なるキャラ作りじゃあ……」

花陽の解説に凜が微妙な顔をする。

ちなみに彼女も猫真似をするが、これは正真正銘口癖だ。

「ふふ、ご想像にお任せするわ」

「口癖をキャラ作りでわざと使い出しただけだろうが……」

あおいがわざとらしく意味深な笑みを浮かべる傍で色明が呆れる。

「ちよつとちよつと、乙女の秘密を勝手に喋るなんて駄目！ じゃなくても営業妨害！」

「へいへい俺が悪うございしましたから、ちつとは静かにしてくれませんかね」

頬を膨れさせたあおいを見て色明は益々渋い顔をした。

口悪いがお互い本気で喧嘩してるわけではなく、気心知れた仲ゆえの言い合いだと見れば誰もが分かる光景。

そんな二人の親しさを海未は間近で感じ取った。

以前の Soleil のライブ後で起こった偶然の出会いでは、色明とあおいの間には普通の友人程度の認識しかなかったが、一緒にいる光景を幾つも見ただけで、二人の間に根強い絆があるのだと解る。

昔、同じ稽古を習っていた。話を聞く限りでは、小学校から中学の途中までは一緒だったらしい。それから、こうやって同じイベントにやって来るほどには交友は続いていた。

そう考えると、海末の胸の中で暗雲が漂う。が、それを彼女自身気づいていない。

「俺とお前が周りにバレて騒ぎになつたら、そこそ今からやるライブの営業妨害だろうが。自重してくださいよ、プロアイドルさん」

「……わかつてるよ。私と色明は少し離れて見るから、他のみんなは今のうちに前のほうに行ったほうがいいわよ。ほら、もう最前列で待っている人たちもいるしね」

「お二人はいいのですか？」

「仕方ないだろ」

海末の問いかけに色明が溜息をこぼす。

「大人しくしても気づく奴は気づくからな。ライブの邪魔する前にとつとと離脱できるように、遠くから静かに眺めとくわけさ」

「そんな……折角来たのに。お花だって」

「花や差し入れは後で渡す予定。つまらない我侭で水を差すわけにはいかねえだろ」

「そういうこと。だから私たちは気にしないで」

「……そっか。なら、私たちが新田くんたちの分まで声援を送るよ！」

一瞬、微妙な空気が漂ったがそれを穂乃果が明るい声で打ち破った。

元気が彼女の取り得の一つ。陰鬱な空気もライブ前には相応しくないだろう。

穂乃果はそのまま妹の雪穂の腕をがっしりと掴む。

「雪穂！ 私たち高阪姉妹が新田くんたちの変わりに最前列で美波さんを応援するよ！」

「ちよつと、お姉ちゃん引つ張らないで！ ていうか、他にも共演者がいるんだからね！！」

「あつ！ 雪穂、待って！ 私も前に行く〜！」

騒ぎながらステージに近づく高阪姉妹を亜里沙が追い、それを見たあおいがくすりと笑った。

「ふふっ！ほんと、穂乃果ちゃんのああいう元気なところいちごに似てるね」

「そうか？」

あおいのその言葉を聞いた途端、色明は微妙な顔を浮かべる。

「そうよ。そう思わないの？」

「思えないな」

「ふくん。まつ、いいけど……」

「よ、よーし！ 私も穂乃果さんたちや他の人に遅れてはいけません！ 凜ちゃんも真

「姫ちゃんも前に行こう！」

「了解にやあ！」

「そんなに慌てなくてもまだ余裕があるわよ……」

花陽、凜、真姫の一年生たちもステージに近づいていく。

それを見送った海未はことりに話しかけた。

「あの、ことり……。私もここで残るのでみんなのことを頼んでよろしいですか？」

「海未ちゃん？」

「園田？」

彼女の言葉を聞いた色明は少し驚く。

言われたことりはというと、驚いてはいるが何故か口元が笑っていた。

そんな彼女の様子には気づかない海未はつらつらと言葉を紡いだ。

「新田さんたち二人だけよりも一般人が傍にいれば目立ちにくいと思いますので。ここ

からでも十分ステージの様子は見えますしね。私、弓道してるので目は良いですし、だ

から——」

「そっか！ うん！ 大丈夫！ みんなのことはことりに任せて！」

ことりはそう言つて親指を立てると、ステージ前にいる穂乃果たちの元へと向かう。

その後ろ姿を眺めた後で海未はくるりと色明たちに振り向く。

「……もしかして、お邪魔でしたか?」

「いや、園田の言うとおり傍にいてくれた方が助かるな。悪い例えになるが、多少なりとも隠れ蓑にはなる」

「そうですか……。別に隠れ蓑扱いでも気にしません。貴方のほうが遥かに大きいので隠すことはできませんが誤魔化す手伝いはできるでしょう」

色明の言葉を聞いた海未が安心してしていると、あおいがニヤニヤと笑っていることに気づいた。

「霧矢さん? あの、私何か可笑しなこと言いましたか?」

「うん? 全然! ただ海未ちゃんて可愛いなつて!」

「はあ……。何故いきなり褒められてたのは解りかねますがありがとうございます」

「それと、さつきも言ったけど私たちは同じ年なんだから普通に話してくれてもいいんだよ?」

「えつと、一応これが私の普段からの口調なのですけど……」

「え? そうなの? もしかして、海未ちゃんてお嬢様?」

「お嬢様と呼ばれるほど大層な家ではないですよ。家が道場をしてるので、昔から礼儀正しくあれと育てられた結果ですね」

「へえ、海未ちゃんの家って道場なんだ。となると——もしかしてあの園田道場? 日

本舞踊の他に武道も教えている？」

「そうですが、ご存知なのですか？」

「ご存知だよ！ だって習い事をいっぱいしてたときに其処も通ってたからね！」

「なら、お二人はうちで武道を習っていたのですか？」

意外な発言に海未が驚く。

色明とあおいは武道を共に習っていた話を聞いてたので、もしかして同門者だったのかと彼女は尋ねた。

「違う違う。私が園田道場で習ってたのは日本舞踊。色明と習っていた武道はちよつと変わったやつなの」

「そうなんですか……」

色明と同門ではないことに些か落胆しつつも納得する海未。そもそも同じ流派ならば生まれ育った場所なので動きを見ればすぐ気づくだろう。

「そういえば、前から気になっていたのですが新田さんたちが習っていた武道とはいったいどんなものですか？」

「その話はまた今度だ。始まるぞ」

色明の言葉と同時に周りの証明が落とされて、ステージに青いライトアップが灯された。

『はい！ 皆さん、こんにちは！ 346プロのシンデレラプロジェクト、その第一弾のファーストライブへようこそ！』

ステージ脇から司会進行の女性もやって来て、海未も急いで舞台上に視線をを向ける。

司会の女性は本日のユニット紹介をした後で注意事項を説明し、周りに問題ないかを見定めた。

特に騒がしい集団もないと確認すると彼女はすぐにステージから消える。

『——それではLOVE LAIKAの登場です！ どうぞ！』
代わりにやってきたのは白いドレスを纏う二人のアイドル。

片や、長い髪を翻し、大人の美しさと子供のような愛らしさを兼ね備えた女性、新田美波。

片や、アッシュグレーの短い髪と青い瞳で神秘的な爽やかさを持った少女、アナスタシア。

彼女のたちの名はLOVE LAIKA。二人の初ステージが刻下、始まる。

▼ 『初めまして——！』

『——LOVE LAIKAです！』

彼女たちは舞台上上がる前、とても不安だった。

大丈夫なのか。できるのか。お客さんは本当にいるのか。

それは海未たちも、sがファーストライブ開始前に抱いていたものと同じ。

そこにスクールアイドルやプロアイドルとの差は存在しない。ほとんどの人間が感じる等しき恐れだ。

だが、舞台へ上がる前に彼女たちはその憂慮を取り払う。

これも、sのファーストライブと同じ。自分は一人ではない。

傍には、一緒に立ち向かうパートナーがいる。

一人では抱えきれないものを二人で抱えて、彼女たちは眩しい笑顔を大衆に魅せた。

『聴いてください、私たちのデビュー曲——』

『——Memorics!』

[Music start——Memorics]

其れは綺麗で夢い愛の歌。

離れていった恋しい人を切なく思う言葉。遠き光を焦がれ、星のように眩く煌めく二

重奏。

白き二人のシンデレラは歌い、踊る。

ゆつくりと軽やかに。時には風を切るように。離れ、重なり合い、交差する。彼女たちの舞踏に魅了された人間が一人、また一人と増えて足を止める。

彼女たちの姿が見えなくとも、その歌声を耳にすれば魔法がかかったように音の先を求め、二人の女に心を奪われるのだ。

幻想的な時間は瞬間に終わり——、一曲限りの舞踏会が終わった。

『——ありがとうございます！』

照明が元に戻るとLOVE LAIKAの二人は頭を下げ、礼を言う。

それに答えるように観客が拍手を送った。ライブが始まる前より増えた人数。

上の階層も合わせれば百単位の見物者。

最前列でライブを眺めていた穂乃果たちは活気付いており、彼女たちの他にも歓声が静かに響いていた。

成功と言っている結果である。

美波とアナスタシアは涙を浮かべ、自分たちを称えてくれる人々へ手を振るった。

『спасибо!』

『ありがとうございます！』



その後で new generations も歌ったが、ライブが終わった後で、s
一行が盛り上がる話題はやはり一番の目的である LOVE LAIKA のことである。

「新田さんのお姉さま、綺麗でしたね……」

「うん！ 歌もすつごく良かった！ ことり、ファンになったよ！」

「アナスタシアちゃんも良かったよ！ あれで凜と同一年とか信じられないにや！」

「それに比べて次に出たユニットは駄目ね。変な顔で笑ってたし、踊りも所々ズレてたわ」

「駄目だよ真姫ちゃん、そんなこと言っちゃああ！ 最初のライブで緊張してたんだと思っし、完璧じゃないのも生ライブの醍醐味なんだよ！ 駄目なところも愛嬌だよ！」

「ご、ごめんなさい、花陽。失言だったわ……」

「そういえば亜里沙ちゃん、最後になんか叫んでなかった？」

『Я очень восхитённый Вами, выступлении
ми. Желаю Вам ещё больше успеха,』ですか？

「え？ 何語？」

「多分ロシア語だよ、お姉ちゃん。亜里沙はロシアのクォーターで説明したでしょう

……」

「ええと、日本語で言うと『あなたの活躍にとっても魅了されました。更なるご成功を

祈っています』という感じですよ」

「悪くないライブだったわ。LOVE LAIKAにニュージエネNG、早速新たなライバル登場かもー！」

「LOVE LAIKAは兎も角、あとはどうかねえ……」

「身内鼻根の言葉は聞きませーん。花陽ちゃんも言ったように悪口は駄目だよ」

「別に身内鼻根も悪口も言っただけどねえ。というか、俺はさっさとこれを届けに行くんだがお前たちはどうする？」

そう言っただけで色明は姉に届けるための花束と差し入れが入った袋を掲げた。

事前に自分がやって来ることをスタツフに了承してもらっているが、撤収作業もあるので早々に向かわないといけない。

「勿論、待ってますよ」

「あの、私は途中までついていったら駄目ですか？」

海未が言った傍で別の言葉が出てきた。花陽である。

「もしかしたら一目だけでも他のアイドルが拝めるかもしれないので……」

「私は最後までついてきたいな。美波お姉ちゃんと話したいし」

と、言ったのはあおいだった。

それを聞いた色明は眉間に皺を寄せて嫌そうな顔を浮かべる。

「小泉の途中までは構わないがあおいはどうなんだ？ 他の事務所のイベントだぞ？ 入れるか解らないぜ？」

「なら入れるようにお願いするわ。色明がね」

「何で俺がそんなことをしないとイケないんだよ。……一応、言ってみるが駄目なら諦めろよ」

「なら、折角だし私たちも途中までついてこようよ。穂乃果も他のアイドルが見られるなら見たいし」

「え？ 流石に大勢だと迷惑では？」

突然の穂乃果の言い分に戸惑う海未。

彼女も興味がないわけではないが、自分たちは色明を合わせて十人と大人数。大勢で押しかけて色明に迷惑がかかるのではと彼女は心配したが、当の色明は気にした様子ではなかった。

「別に関係者前の入り口までなら問題ないだろ。ていうか、マジで急がないとイケないから来たい奴は勝手についてこい。こっちだ」

「あ、待ってください」

結局、色明が歩き出すと全員が彼の後を追う。

一同は色明の先導により舞台裏までやって来る。スタッフばかりでアイドルらしい

人物見かけることはできず、花陽は少し残念そうにしていた。

到着とすぐ、色明は入り口前に待機していたスタッフに話しかける。

「すみません。新田美波の家族のものですが……」

「!? 新田色明さんですか!? おお、本物だ。ええと、話はプロデューサーから聞いてます。どうぞ、中にお入りください」

「ありがとうございます。お勤めご苦労様です」

「いえいえ、仕事です。ところで後ろの方々は?」

「ただの連れです。ここで待ちますので気にしないでください」

「え、ちよつと!? 私が入れるようにする交渉は!?!」

あおいが驚いた声を上げると、色明はあからさま舌打ちをした。

「ええと、一緒に中に入りたい人がいるんですけど駄目ですよ? 駄目ですか。そうですか。お手数かけます」

「待つて待つて! その人何も話してないよね! すみません。私、スターライト学園の霧矢あおいというんですけど」

「お前馬鹿! 何、勝手に名乗ってんだコラ! 名乗ったらややこしく——」

「え!?! あのアイドル博士でSoleilのメンバーでいけない警視総監に出ていて愛用ブランドはフューチャーリングガール! 穏やかじゃない!の霧矢あおいさんじゃあ

ないですかっ!!」

「詳しいな、アンタ! さてはコイツのファンか!」

「わーたーし、中にいるアイドルとお話したいんですけど駄目ですかー?」

「自分のファンだと解つた途端、下手な色仕掛け使いやがつたぞー!」

「ちちちち、ちよつとお待ちを! いいま確認を! 駄目でも裏手からなら誰にもばれずに」

「コラ、職権乱用すんなよ。上司にご意見飛ばすぞ」

「うーん。穂乃果ちゃん和海未ちゃんを見てるような気分」

『え? 何処が(ですか)!!?』

一連の流れを眺めていたことりの感想に穂乃果と海未が驚愕。

花陽はまだ周囲にアイドルがないか探しており、真姫は興味なさそうに髪をいじくり、雪穂は呆然として、凜と亜里沙はハンドスピナーで遊んでいた。

その時である。

「何かあったのですか?」

とても重い声が響いた。

「ひっ!」

小さな悲鳴は誰のものだったのか。

舞台裏の入り口からのそりと一人の男が現れた。

——でかい。

二メートルはあるガツシリとした体格。目はとても鋭く愛想の欠片も感じない。町を歩けば職務質問待ったなしの大柄な男である。突如として現れた巨漢にその場にはいた少女が怯えていた。

「あつ、お疲れ様です」

「新田色明さんですか……。お疲れ様です」

唯一動揺しなかった色明が挨拶すると、男も大きな体を傾けて丁寧な挨拶をした。

「い、色明あ。この人、知り合い？」

突然の巨漢に流石のあおいも恐れをなしており、震えた手で色明にしがみ付いている。

それを目撃した海未が形容し難い表情を浮かべていたが、誰もが巨漢に注目してため息づく人間はいなかった。

「シンデレラプロジェクトのプロデューサーだよ」

「プロデューサー？ 警備の人かと思った……」

「それでいったい何が？」

「俺と一緒に姉に会いたいと連れが言い出したので、大丈夫なのかと確認してたところ

です」

「かまいませんよ。どうぞお連れの皆様もお入りください」

即答だった。

プロデューサーはこの現場に置いての最高責任者。彼が了承したのならば止める人問いない。

「……わかりました。ありがとうございます」

「ただ、我々もあまり長くここにいませんのであまり時間は取れないことをご了承ください」

「はい、わかっています——じゃあ、行って来るわ」

「ええ。そこで待っていますね」

振り返った色明の言葉に海未が返答する。

「？ 彼女たちは入らないのですか？」

この場を離れようとしたが海未たちだったが、プロデューサーの呟きに思わず立ち止まる。

彼の言葉には色明も驚く。

「もしかして、あそこにいる子らも入っていないんですか？」

「？ ええ、勿論」

表情が一切変わっていないように見えるが、プロデューサーの内心は不思議そうにしていた。

彼は最初から海未たちも歓迎していたのである。

それを察した色明は神妙な顔つきで海未たちに目を向けた。

「お前らも入っていいらしいが、どうする?」

「入ります! 是非、入らせてもらいます!」

真つ先に反応したのはやはり花陽だった。

プロデューサーの申し出は彼女からすればまさに棚からぼたもち。アイドル好きの彼女が遠慮するわけでもないのである。

「なら、折角だし——」

そうなるところで引き下がるほうが返って迷惑だろう。

残りの者も同行することにした。彼女たちも興味がないわけではない。先程ステージで見たLOVE LAIKAと会ってみたいし、他のアイドルも見れるかもという期待が膨らむ。

「はい。では、こちらです。案内しましょう」

行動が決まり、プロデューサーの手引きによって建物内に入る一行。

「そういえば——皆様はライブをご覧になったのですか?」

色明とあおい以外が緊張な趣で移動中、プロデューサーが尋ねてきた。

「ええ。勿論ですよ」

答えたのは色明。

それを聞いたプロデューサーはしばらくの間の後、再び口を開く。

「——どう、でしたか？」

躊躇いがちの問いかけだった。

何故そのような声色なのかは想像付かないが、返答はすぐに訪れる。

『楽しかったですっ！』

その場にいた少女たち全員がはつきりと答えた。

彼女たちの言葉を聞いたプロデューサーは安心したように吐息を零す。

「……それは良かったです」

16話・跳躍には? A key is that unexpected girl.

「では、こちらになります。少々お待ちください」

346プロ所属シンデレラプロジェクトのプロデューサーは一行くを案内した楽屋のノックをした。

「失礼します。いま入ってもよろしいですか？」

「プロデューサーさん? はい、どうぞ」

扉の向こう側から声を確認してからプロデューサーは一度楽屋内に入る。

「お邪魔ます。是非、お二人にお会いしたいといった方々がいらつしやいましたので案内しました」

プロデューサーはそのまま廊下に出た後、変装を解いて待機していた色明に入室を促す。

彼は礼を言った後、紙袋から花束を二つ取り出して部屋の中に入室した。

「お疲れ様」

「いっくん!?! うわあ、もしかして見に来てくれたの!?!」

色明の姉であり先程ステージで歌を披露したLOVE LAIKAの一人、新田美波は既にステージドレスから私服に着替えて終わっており、弟の来訪に驚く。

「いっくんというのは家族間での愛称なのだろうと、廊下で様子を窺っている海未が微笑ましく思う。」

「美波、誰ですか？」

その傍で同じくLOVE LAIKAの一人であるアナスタシアが、仰天する相方と突然やって来た人間を交互に見ていた。

「話したと思うけど、この子は私の弟よ」

「オトウト？ Ой！ брат！ 前に言っていた歌手のー！」

「初めまして、ご紹介に預かりました歌手の弟です。まあ、俺のことはどうでもいい。今回の主役は二人だ。改めてライブお疲れ様。初ライブおめでとう」

にこやかに笑いながら色明は準備していた花束二つをそれぞれに手渡すと、彼女たちは花に溶け合うような朗らかな笑顔を浮かべる。

「ありがとう、いっくん！」

「спасибо！ ありがとう、いっくん！」

「残ったこの土産はうちの両親から。プロジェクトのみんなにお姉ちゃんから渡してくれるか？」

「わかったわ」

何気ない姉弟の会話だが、そこに予想外な言葉があった。

お姉ちゃん! 色明は姉を自然体でそのように呼んでいる。

これに音乃木坂メンバーは驚きだった。

今までの接した彼の雰囲気を考えれば、ぞんざいに姉貴。もしくは茶化してお姉さまなど言っているイメージだったのだが、思いがけない普通さに逆に衝撃を受けている。

海末の場合はなんだか可愛いと感じる始末だ。

自分たちやファン。そして旧知の間柄であるあおいとも違う雰囲気がとても新鮮だったようである。

「それでお姉ちゃんたちはこの後で打ち上げでもするのか? 一応、お母さんが家で料理を作ってるから少し余裕を残してほしいんだが」

「え、そうなの? 特にはそういう話は聞いてないけど、あったとしても今日はちゃんと帰って頂くわ。もしかして、いっくんも今日は家に帰るの?」

「まあ、お祝いだからな。アナスタシアさんもよかったら如何ですか?」

「いいのですか? 折角の家族団欒では?」

遠慮しようとするアナスタシアに色明は気にした様子なく頷いた。

「むしろ、うちの両親が是非招待するように言われましてね。姉の口からではなく、別の

人間から我が家の長女がいかにかアイカツに勤しんでいるか家族一同興味津々な訳でして」

「ええ!!? ち、ちよつと恥かしいんだけど?」

「わかりました。私で良ければお話しますね」

「あ、アーニヤちゃん? あまり、変なことは言わなくていいからね?」

「大丈夫です! 如何に美波がアイカツしているのか説明しますので心配しないでください!」

「うう、私が恥かしい思いをしそうなのは変わりないような……」

美波は困つたように口をもによもによさせていると、話題を逸らすように扉の向こう側からこちらを見ている団体に目を向けてる。

「そ、そういえばいっくん! さつきからコッチを見ているのは——」

「やつほ! 美波お姉ちゃん久しぶりだね!」

此処が出所だと見計らつたあおいが元氣な掛け声と共に美波のもとへやって来た。

「やつぱり、あおいちゃんだ! 久しぶりね。ライブ見に来てくれたの?」

「もちろん! 美波お姉ちゃんまで芸能界入りするんだから、その門出を見逃すわけにはいかないわ!」

「うふふ、ありがとう。なら、後ろの子達はもしかしてスターライトの?」

「違うよ、お姉ちゃん。あいつ等は俺の連れだ」

「いっくんの?」

「ほら、お前たちも入ったらどうだ?」

意外そうな顔浮かべる美波の傍で色明が海未たち呼びかけた。

彼女たちは少し躊躇いがち入室する。

「は、初めまして。クラスメートの園田海未と申します。弟様にはいつもご懇意していただいております。そしてこの度は初のご講演、真におめでとうございます!」

「海未ちゃん……なんだか仰々しいよう。あつ、私もクラスメートで高阪穂乃果です!」
「同じくクラスメートの南ことりです。よろしくお願いします」

「こ、後輩の小泉花陽と申します! LOVE LAIKさん、すつごくステージ良かったです!」

「星空凛です! かよちゃんと一緒に後輩です!」

「……同じく後輩の西木野真姫です。……ライブでは素敵な音楽を聞かせていただき、ありがとうございます!」

「えつと、高阪の妹の雪穂です。今日は姉たちと共にライブを見に来ました」

「雪穂の友達の亜里沙です!」

「あ、貴女は確か——」

最後の亜里沙が自己紹介し終えたところでアナスタシアが反応した。彼女は亜里沙を見ると嬉しそうに微笑む。

「ロシア語で声援をくれた人、ですね？」

「え!?! 聞いてくれたんですか!?! 覚えてくれてたんですか!?!」

「もちろん。綺麗なロシア語だったので、びっくりしました。そして、それ以上に嬉しかったです」

「うわあ、なんだか照れるなあ……」

「亜里沙はロシアのクォーターなんですよ。それでロシアハーフであるアナスタシアさんを見に今日はやって来たんです」

雪穂の説明を受けたアナスタシアは目を見開きながら顔を綻ばせた。

「Oh! そうだったのですか! 似たような境遇の人に見てもらって嬉しいです!

よかったら色々をお話を聞かせてください」

「え!?! ど、どうしよう雪穂?」

「好きに話したらいいんじゃない?」

「じ、じゃあ、アナスタシアさんはどうしてアイドルに——」

そうやって相方が会話を弾ませる横で、美波は自分の弟が連れてきた少女たちをまじまじと見つめる。

「いっくんのクラスメートと後輩……。同じ学校ということは女子高の?」

「ええ、そうです」

頷く海未を見て、美波は神妙な顔つきを浮かべた。

「話には聞いてたけど本当にいっくんは女子高に通ってるんだね。最初に話を聞いたときはびっくりしていっくんて実は妹だったのとか、でも一緒にお風呂に入ってたときは——」

「お姉ちゃん、小学校上がる前の話をついこの間のことのように話すのは止めてもらえませんかええ! ドン引きされてるんですけど!」

「あつ! ごめんね! つい、動揺しちゃって。えっと、見本生だったかしら? 私の弟が沢山の女の子とたちに男を教えるとか不思議な気分で」

「間違っちゃいないが誤解を生むような発言は止めていただきたいんですけど!」

「でも、お姉ちゃん心配で——」

「自分でも妙な話を引き受けたとは思いますが、少しは信頼してくれよ」

「けど——」

「お姉様、落ちついてください」

見かねた海未が口を挟む。

突然呼びかけられて驚いてる美波に海未はしっかりとした言葉を送った。

「確かに弟様が女子高に通うことは私たちも最初は戸惑いました。

ですか、実際彼が通うことで良かった部分があります。女の手では大変な力仕事を率先してやってくれますし、異性である彼を意識して身嗜みを正す生徒も増えてきました」

「ん？ どういうこと？」

「それはね……」

意味が解つてない一年生たちにことりがそつと説明をする。

「一年生の頃はそうじゃないけど、周りが女の子ばかりだと別に見られてもいいやつて気の抜く子が増えるんだよ。でも近くに男の子、しかも新田くんみたいなカッコいい人の前でそうするのは恥かしいから、だらしなくする子が減ったつてお話」

『なるほど』

納得する一年生一同。

そういうえば、一年生の教室にも色明が顔を出すのをしばし見かける。

自分たちに会うためだけだと思っていたが、彼なりに役目を全うするため他の学年も気にかけているかもしれないと一年生たちは考えた。

「見本生という制度に抵抗を感じる生徒もいなくはないでしょうが、彼を通して異性に忌避を抱くのを止める女性もいます。少なくとも、私は彼を信頼してます。

だからお姉様はご安心を。貴女の弟は信頼に足る人物なのですから」

「……そうね」

海末の言葉を聞いた美波は静かに頷いた。

「いっくんは自慢の弟だもの。なら、信じてあげないとね。でも、多分いっくんでも困るときはあるから、そのときは助けてくれるかな?」

「それこそ無論です。困っている人を助けるのに、理由なんて必要ないですよ」



その後、ほんの少ししてから廊下で待機していたプロデューサーにそろそろ移動と言
い渡されたため、一行はLOVE LAIKAの二人と別れる。

また、あおいはこの後仕事があるため離脱。

人気アイドの一人だけあって多忙であり、今日も無理して来たらしい。

残る少女たちを惜しみながら、彼女はまたねと去っていた。

色明は一日オフのようであり、夕方には実家に戻る予定。それまでは少女たちに付き
添うことにしたようだ

今はついなのでショッピングモールの中を満喫する一行。色んな物が溢れている
だけあって、ウインドショッピングだけでも少女たちには厭きさせない場所だった。

「そういえば、まだ礼を言っていなかったな」

「? 何がですか?」

急に色明に話しかけられた海未は歩きながら不思議そうにする。

「お姉ちゃんにフォローしてくれただろ?」

「ああ、さっきの——」

わざわざ礼を言うなんて律儀だと思いつつ、ふと海未は思い出した。

そういえば自分は彼を褒めちぎってなかったか?

嘘偽りはないのだが、改めて考えると彼女は急に恥かしくなってきた。

「え、えっと、あのときはああ言わないと収集つかないと思いましたが、だからと言って出鱈目を言ったわけではなくってですね」

「どうあれ」

しどろもどろ答える海未に色明はくすりと笑った。

些細な表情だったが、海未の心臓が一瞬高く跳ね上がる。

「嬉しかったよ。ありがとうさん」

「ど、どういたしまして……」

頭が熱くなった海未は、赤くなった顔を隠すように俯く。

馴染んだつもりではあったが、優しい顔を見せられると気恥ずかしい気持ちで一杯になる。

(もうすぐ二ヶ月に経つのに。まだまだ、異性には不慣れですか)

と、的外れな答えを胸に秘めた海未の隣で色明が表情を切り替えていた。

「だが、お姉ちゃんたちのライブを見たおかげで、sに足りないものが解ったな」

「μ、sに足りないもの? え、なにそれ?」

ことがスクールアイドルの内容だったゆえ、真っ先に穂乃果が反応する。

彼女が過剰にリアクションしたことで他の面子も色明に集中した。

「新人とはいえプロのアイドルと私たちスクールアイドルを比べるのはどうなんでしょうか」

「違うな」

「ちゃっかりLOVE LAIKAの二人からもサインを入手した花陽の疑問を色明が切り捨てる。」

「準備期間も含めても、お姉ちゃんたちがアイカツを始めたのは今年の春からだ。その際、パフォーマンスの向上以外にも仕事や色々してたから実際の練習期間はお前たちと大差ない」

「選材写真の撮影やプロモ映像の撮影。インタビューに番組の出演世に売り出したすためには技術を高める他にも様々な仕事を行わなければならない。それがアイカツなのだ。」

「宣伝規模は関係ない。個人の能力で不足しているものがあるんだよ。なんだと思う？」

「えーと、歌のとか？」

「なるほどね。西木野、お前は自分たちの歌と比べて差を感じたか？」

花陽の発言を聞いた色明が真姫に尋ねる。

すると彼女は悩む素振りも見せずに即答した。

「ないわね。自惚れているつもりはないけど、新田先輩のおかげで歌に関してはかなり力をつけているわ。なんなら同等以上で言ってもいいくらい」

「俺も同意見だな。付け加えるなら西木野の音楽に対する姿勢も影響してるぜ」

「それはどうも」

自分たちの歌は新人とはいえプロのアイドルに引けを取らない。

その豪語に他の *μ's* のメンバーは何も言い返せなかった。

音楽に関しては二人の領域。意見をする口はない持てないのだが、いきなり自分たちの歌を賞賛されても当人たちは実感が持てない。

替わりに、違う疑問をことりがぶつみる。

「なら、着ている衣装の問題？」

「——ミナミは自分ではあの衣装を作れないと思うのか？ 俺の感ではそうじゃないと

思うけどね」

「? ……………うーん」

悩むだすことり。すぐに否定しないあたり、自分でも可能性を感じてるかもしれない。

「まあ、ドレスに関しては素人なので口を挟めないが、俺が言いたいのはそこじゃない。誰か分からないか? LOVE LAIKA、そして new generation。この二つにあつて、s がないものは解るか?」

「色気?」

「しらん! が、それじゃない」

「資金力?」

「西木野、個人の能力だとい俺は言ったぞ」

「解った! ダンスにやあ!」

「…………当てずっぽうに聞こえたが、正解だ」

「やった!」

喜ぶ凜を他所に言われて納得した他のメンバーたち。

音楽に関してはプロの色明と真姫が引き伸ばしているが、踊りに関しては手探りでやっている状態だった。

振り付けも意見を出し合って作り上げてるが、それが素晴らしいものと断言は絶対出
来ない。

「すみません。私が力不足で」

「何故そこで園田が謝る。確かにお前は踊りの指導もしているがそれは園田が日本舞踊
をしているからだろ。本来は畑違いのことを無理やりしてもらってるんだ。気にした
なら謝るぞ」

「いえ、大丈夫です」

「けど、ダンスがまだまだだつて解つてもこれ以上どうすればいいの？ 学校には踊りを
教えてくれる先生なんていないよ」

ことりの疑問は尤もである。

足りないものが解つたところでそれが補えるかは別問題なのだ。

問題を浮き彫りにした色明も解決策は思いついてなかったため苦い顔で考え出した。

「流石にジョニー別府とはまでは言わないが、専門家に教えてもらうのが一番。だか

……」

「ジョニー別府?!」

「知ってるの、かよちゃん!」

「ジョニー別府といえればアイドル界でもダ超有名な人だよ! 数々の人気アイドルたちにダンス指導をしたことがあって、今はあおいさんも通っているスターライト学園の教師をしてるんだよ!」

「じゃあ、その人に頼めば」

「特別な理由がない限り、他校の生徒にわざわざ教えるわけないだろ。正式な部活ならばダンス講師を雇える糸口はあるが……」

「そういえば凜たち、実は非公式だったね」

「そうだね。あれ? 何か忘れているような」

「あ、あの!」

穂乃果が何かを考え出そうとした瞬間、それまで話を聞いていた亜里沙が声をかけていた。

「あつ、ごめんね、亜里沙ちゃん。雪穂もいるのに私たち勝手に話合っちゃって」

「いえ、それはいいんです。それよりも私、ダンスがすごく上手い人知ってます!」

その人は私のお姉ちゃん、しかも皆さんと同じ音乃木坂に通ってるので頼めばきっと引き受けてくれると思います!」

「え! それは本当ですか!?!」

「これなら、何とかなるかも!」

思いがけないところから出た僥倖に喜ぶ一同。

今日間近でプロのアイドルのライブを見たことにより向上心が高まっていたμ、s
たちは、次なる挑戦に思いを馳せた。

「それで、亜里沙ちゃんのお姉さんの名前は？」

「はい！」

穂乃果の問いかけに亜里沙は力になれて嬉しいのか、にっこりと答える。

「音乃木坂の生徒会長、絢瀬絵里です！」

一瞬、その場の空気が凍りついたかのように思えた。

絢瀬絵里。それはμ、sのメンバーや色明も知っていた。

当然が生徒会長だからなのだが。

彼女はμ、sのアイカツを、スクールアイドルを快く思っていない。

「お姉ちゃんはずごいんですよ！ 昔、バレエをやつててですね！ 賞を幾つも取つてたり！ 当時の動画もまだ残ってるんです！」

しかし、嬉しそうに姉の話をする亜里沙。彼女は姉のことが好きなのだろう。

そんな彼女の前では誰も何も言えなかった。

さて、どうしたものか。
μ s のアイカツ、どうなる？

17話・氷を溶かすスターソング

たった一つの照明の下で、白いドレスを着た少女が舞う。

一人踊るプリマドンナ。ここは彼女だけの高座。クラシックに合わせて緩やかに舞台を奔る。

美しきバレリーナは清流のように、時には疾風のように。円舞曲の中で少女は観客を魅了した。

一足、二足で端から端へ舞い踊り、一本の足を支えにして螺旋を描く。

一糸乱れぬ舞踏で微笑みは絶やさず、与えられた演目を着実にこなして行す。

ああ、なんてすばらしいのか。

バレエのことを何も知らない人間でも胸を焦がす感動は解るだろう。

曲が終わると同時に中央で少女が御辞儀をする。

彼女を称えるように万雷の拍手が響き渡った。

▼ 「すばらしい……」

賞賛は誰が言ったものか。

それは、その場にいた人間が皆、同じ気持ちである。

ここはμ、sのリーダーである高阪穂乃果の家、《穂むら》の居住スペースにある居間。μ、sのメンバーたちは一つのノートパソコンに注目している。

シンデレラプロジェクトのファーストライブを見終えた後、しばらくしてから仲間の色明と別れ、穂乃果の妹、雪穂の友人である亜里沙が言ったμ、sたちに足りない踊りの技術を持つ人材。そのバレエ動画を見ていたのだ。

件の人間は、亜里沙の姉であり、音乃木坂の生徒会長である絢瀬絵里だった。

彼女はμ、sのスクール活動に否定的であるため、あまり良い印象がない。

最初は怖いもの見たさが半分。そして無垢な笑顔で勧められた手前、全く考慮しないのも気が引けたから。とりあえず勧めるまま、彼女たちは教えられた動画を見ることにした。

なお、勧めた当人の亜里沙は自宅に帰っており、踊りの指導については相談してから決めるのでこの事は姉には話さないでほしいと念を押している。

少し残念そうな顔をしていたが、微笑んで納得したので彼女の口から絢瀬絵里に今回の件が伝わる可能性はないだろう。

そして、いざ亜里沙に教えられたサイトを調べて、目的の動画を見つけてそのまま見ると、全員が言葉を失った。

投稿日や若い顔立ちから数年前の舞台だろうが、誰もが心を揺さぶられていた。

海未たちもアイカツをしていてから踊りに関して何も学んで来なかつたわけではない。同じスクールアイドルやプロのアイドルのダンスを何十回も見て、それを参考にステップを真似たりもした。

ゆえに動画の幼き絢瀬絵里が踊ったものは感嘆せずにはいられない。

始まってからは誰もが刮目した。終わるまで言葉を失った。認めざる終えないその実力を。

こんな踊りができるならば、μ'sや他のスクールアイドル。一部のプロアイドルすらも絢瀬絵里にはお遊戯をしているようにしか見えないかもしれない。

それほど、圧倒されたのだ。

「本当に生徒会長、バレエをしてたんだ。しかも、すつごく上手いよ」

「信じがたいですが認めざる終えないですね」

穂乃果の呟きに海未が頷く。

踊りに違いはあれど日本舞踊という舞踏に携わる人間として。海未が一番絢瀬絵里の実力を感じている。

「偶々見かけたなら他人の空似だと片付けたかもしれませんが、当人の妹直々の推薦ですからね。ここまで来て疑うのは往生際が悪いでしょ」

「でも、だからってどうするんですか？」

やや不満げに口を出したのは真姫だった。

実は真姫もすぐ辞めてしまったがバレエの経験があり、動画で見た絢瀬絵里の実力は海未の次に解っている。

それでも彼女は難色を示したままだった。

「会長に踊りの経験があると解つても、だからと言って教えを請うのは話が別だと思いませんけど？」

「それは……」

「言つて素直に教えて貰えるとは思えない。仮に教えてもらつて、それを口実に潰されたら堪つたものじゃないわ」

「ええ、そこまでするか？」

何処までも厳しい意見に穂乃果は洩らせた。

「穂乃果は生徒会長に踊りを教えてもらうのは賛成なのですか？」

穂乃果の顔色を見てそう思った海未が尋ねると、穂乃果は少し悩んだ後でこくりと頷く。

「うん、そうだね。他に当てを探すよりも同じ学校の人の方が接し安いし。今更妥協なんてしたくないから、会長のように踊りが上手い人から教えてもらいたいと穂乃果は思

うよ」

「なら、反対一賛成一つてこと?」

真姫がそう確認すると穂乃果はすぐ首を横に振った。

「多数決で決めるつもりはないよ? 大事なことだし、全員が納得しないなら生徒会長にお願いはやめよう。折角、教えてくれた亜里沙ちゃんには悪いけどね」

「どのみち多数決で決めないにしろ他の人の意見も聞いてみませんか。私は駄目もとで頼んでみても良いと思いますが、ことりはどうです?」

「ことりも別に会長さんに頼んでみるのは賛成かな。実際に会長さんのダンスを見てみたいし」

海未が尋ねるところがそんなことを言った。

確かにあのダンスを間近で見たい気持ちは海未にもある。今はバレエを続けているかは知らないが、それでも自分たち以上のものが見れるかもしれない。

「生徒会長、ちよつと怖いですが私もダンス見てみたいですね」

「凜は楽しいのがいいんだけど、他の人が興味あるなら賛成にや。ちなみに新田先輩はなんて言ってるの?」

「先程メールが私の方になりましたが、彼も動画を見たようです。けど、教わるのはお前たちなのだから自分たちで決めろ、と」

「もつともな意見ね。というか、これなら反対は私だけじゃない。なら、私も別にいいわよ」

海末の言葉を聞いた真姫が納得がいかなそうな顔のままですう言った。

「いいの？ さつきも言ったように別に多数決で決めるわけじゃないし、真姫ちゃんが嫌なら」

心配そうに真姫を見つめる穂乃果だったが、彼女は口を尖らせたままはつきりと答える。

「私の我儘だけで全体の意見を捻じ曲げたほうが角が立つでしょう。もつとも、教わるにしろどうやって頼むんですか？」

「確かに、普通なら突っぱねられるだけだよね」

教わる方針で決まったのはいいが、今度はどうやって頼むか考える一同。

しかし、ただ一人だけ悩んでない人間がいた。

「大丈夫、私にいい考えがあるよ」

我らがμ'sのリーダー、高阪穂乃果である。

「穂乃果？ いい考えとはいったい？」

「まあ、明日の朝、私が頼んでみるから任せて！」

海末の質問には答えず妙に自信満々で穂乃果は豪語した。

度胸あるなど一年生が少し尊敬してる中、幼馴染二人は何も考えてなさそうと思つていたが水を差すので口には出さない。

結局、絢瀬絵里との交渉は穂乃果に一任することにした。



「では、朝の会議はこれで終了します。議題に対して各自放課後までに意見をまとめるようにお願いします」

『はい』

翌日、音ノ木坂学院の生徒会室。

そこには生徒会長である絢瀬絵里を始めとする、副会長の東條希。他役員も勢揃いしていた。

通常は放課後に会議をするのだが、このように議題に対して考えさせるためや連絡事項の伝達のため早朝に小時間執り行われることがある。

「それでは、解散」

時間にして三十分も満たない会議が終わると、各自教室に向かうために荷物をまとめる。

そこで生徒会室の扉がノックされた。

「? はい、どうぞ」

こんな早い時間から誰だと皆が疑問に思う中、一人の役員が声をかける。

次の瞬間、扉が吹き飛ばすように開かれた。

「生徒会長！ 私たちにダンスを教えてください！」

『(正面突破だどツ!?)』

一人で生徒会室に突撃した穂乃果に残りのμsのメンバーが廊下の片隅で愕然とする。

最初は同じ学年である海未やことりも付きそうつもりだったのが、穂乃果は一人で大丈夫だと言つて委ねた結果がこれだった。

一年生組は驚きのあまり口を開いたままであり、どうせ馬鹿正直に真つ向から頼むのだらうなと考えていた幼馴染組もこのような突貫するやり方とは想像しなかった。

(流石穂乃果ちゃん！ 私たちのできないことを平然とやってのける！)

(そこに痺れはしますが、憧れはできませんね)

(凜ちゃん真似したら駄目だよ)

(え？ 流石の凜もあんな風に突撃するなんて恥かしいからできないよ)

(どうかしらね……。凜ならやりそうだけど)

μsのメンバーが影で呆れたり不思議そうにする中、生徒会室の人間たちは突如現

れた穂乃果に鳩が豆鉄砲を食ったように驚いていた。

「……いきなり、なに？」

当初周りの役員たちと同様驚いていた絢瀬絵里は冷ややかな目を穂乃果に向ける。

射殺しそうな氷の視線だったが、穂乃果は全く怖気ずに笑顔のままだった。

「ですから、生徒会長にダンスを教えてもらいたくて頼みにきました！」

「……そういえば昨日は亜里沙に会ったようね。妹から私が昔、バレエをやっていたことでも聴いたのかしら？」

「はい、その通りです！」

聡明な絵里は何処から情報が漏れたのか察し。

「断るわ」

迷いなく断る。どのような流れで妹が自分のことを彼女に教えたか知らないが、だからと言って引き受けるかは別だ。

そもそも、絵里はスクールアイドルを快く思っていない。

過去、バレエに費やしていた彼女にはスクールアイドルなど遊びにしか見えなく、それで学校をアピールするなど幼稚な発想にしか見えないのだ。

どうにかして学校存続しようと奮闘している時に、無駄なことをしている暇はない。

「貴女たちに私が踊りを教えてどんなメリットがあるというの？」

「会長の言葉も尤もです」

だが、穂乃果も最初から引き受けるとは思っていなかった。

そして、彼女も伊達や酔狂でこの場に突撃したわけではない。

「だから聴いてください！ 私の歌を！」

「……………」はあ？」

思いがけない言葉に絵里の思考が一瞬停止した。

「カモン！ ヒムミトリオ！」

『あらほらさつさ！』

その合間に穂乃果がバツチンと指を鳴らすと、廊下から台車にスピーカーなどの音響機器を運んできたヒデコ。無線マイクを持ったフミコ。ただついてきたミカが現れる。

このクラスメート三人には昨晩予め打ち合わせしていたのだ。

「ち、ちよつと！ いきなり何を！ そもそも、歌なんて聴くつもりは——」

「まあまあ、えりち」

穂乃果がヒデコからマイクを受け取ったところでようやく回復した絵里だったが、行動を止める前に親友である東條希に宥められる。

「なんか面白そうやし、ちよつとくらいいいやん。授業までまだ時間もあるしな」

「希……………」

視線を巡らせると他の役員たちも穂乃果の行動に注目している。

観念した絵里は一先ず穂乃果の行動を見守ることにした。

これから穂乃果が歌う曲は、花陽が介入して勧めた練習曲の一つである。

準備は終え、ポップなメロディーがスピーカーから響き始めた。

【Music start——】

「なに、この曲？」

「ご存知ないのですか？」

聞き覚えのないイントロに絵里が眉間に皺を作っていると、役員の一人が信じられないように彼女を見た。

「この歌こそ代役からチャンスを掴み、スターの座を駆け上がった《超時空シンデレラ》ランカちゃんのデビューソングです！」

【星間飛行】

知らない曲だと思った瞬間、穂乃果の歌声を聞いた絵里が驚いたように彼女を見つめた。

言葉を失う。

音楽に疎って振り付けをしながら歌う穂乃果。

正直言って、踊りはファーストライブからほとんど成長していないように感じた。

だが、絵里が言葉を失ったのは呆れたわけではなく、穂乃果の歌声に惹かれたからである。

(この子、こんなに歌がうまかったかしら!?)

原曲が聴いたことない絵里でも穂乃果の歌が曲に沿ったものだと思える。一切ぶれない安定した声。音楽に関しては素人同然な絵里でも、ファーストライブから穂乃果が上達したことは解った。

しかし、技術だけの問題ではない。

意識せずにはいられなかった。ファーストライブのときは見定めるために眺めていたが、今は穂乃果から目が離せない。離したくなかった。

他の生徒会役員たも穂乃果に夢中になっており、副会長の東條希は含み笑いをして静かに見ている。

穂乃果がキラツ☆とアピールしたその時。

『ワアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

歓声が爆発した。

それは何処からか穂乃果の歌声に誘われてやってきた生徒たちである。

全校生徒まではいかないが、少なくとも両手では足りない数の人間が彼女の歌声に惹かれてやってきたのだった。

突然の声援に驚くも、絵里は穂乃果から目を離すことを止めない。

束の間のライブが終わりを向かえ、アウトロが流れ始めた。

「x o p o s h o ……」

「スピリチュアルやね」

「ヤックデカルチャー」

曲が終わるとそれぞれ溜息のように思いを呟く。

「ふう……。!? あわわ、いつの間にこんな人が!？」

歌い終わった穂乃果は夢中になって気づかなかった周りに人間に驚いている。

集まった人間は曲が終わっても解散することなく、穂乃果に視線を集中させていた。

「他の曲は歌わないですか？」

「次はホシキラがいいです！」

「いや、ここはオリジナルのSTART：DASHで！ 高阪先輩のソロでは是非に！」

「え、ええと……」

「はいはい、そこまでや」

周りからの要望に穂乃果が困っていると、希が手を叩きながら廊下に出た。

「穂乃果ちゃんゲリラライブはこれでお終い。みんなそろそろ教室に戻ったほうがええ

よ」

『ええええ!』

「でないよ、騒ぎを聞きつけた先生に皆まとめて怒られちゃうで」
『わかりました!』

不満を漏らした生徒たちは希の言葉を聞いて即座に撤収した。

穂乃果は去っていく生徒たちを見て安心しつつ、わざわざ見にくれたことへのお礼を言った後、事態を收拾してくれた希を見た。

「ありがとうございます、副会長」

「ええよ、別に。面白いもんも見せてもらったし。なつ、えりち?」

「え?」

いきなり呼びかけられた絵里は戸惑うが、じつと見つめてくる穂乃果に気づいてわざとらしく咳払いをする。

「まあ、確かに。歌はうまいと思ったわ」

「本当ですか!」

穂乃果は嬉しそうに微笑む。絵里に自分の歌を聞かせることが目的だったが、はつきりと褒められるとは思ひもしなかったのだ。

「新田君が貴女たちの手助けをしたのは聞いているけど、その上達は彼の仕業?」

「それもありませんが、音楽の才能がすごい一年生が新しくメンバーに入ってくれて。そ

の子と新田くんのお陰で日々歌を練習してます」

まさか自分のことを言われると思わなかった真姫は廊下の隅で凜に弄くられながら顔を赤くする。

「けど、まだまだです」

「まだまだ?」

絵里からすれば十分な歌唱力だと感じた。

プロの歌手が関わったとはいえ、一ヶ月ほどでここまで上手くなれば重畳だろうに満足していない穂乃果へ彼女は戸惑う。

「はい、まだまだです。学校を存続させるくらい注目を浴びるなら、これだけじゃ足りないんです。例えばSoleilぐらい歌もダンスも上手くないと!」

「Soleil、ですって?」

意外な目標を聞いて、絵里は更に戸惑った。

先程歌った曲は知らない彼女でも、Soleilの名前は知っている。

アイカツランキング一位、星宮いちごが所属するトップアイドルグループの一つ。彼女はスクールアイドルでありながら、プロの中でも更なる上の存在を目指しているようだ。

それが冗談ではなく、本気で語っているのだと穂乃果の目を見えれば理解できる。

「新田君の受け売りですけどね」

苦笑する穂乃果だったが、すぐに顔を引き締めた。

「けど、歌は新田ちゃんと真姫ちゃんがいれば大丈夫ですが、ダンスは今の私たちだけではこれ以上、上手くなるのは難しいです。だから、お願いします。会長の力を貸してください！」

そう言いながら穂乃果は頭を下げる。

「会長には何もメリツトがないかもしれませんが。満足にお礼もできないかもしれません。それでも、私たちには会長が必要なんです」

「……とりあえず、頭を上げてもらえるかしら？」

言われたとおり穂乃果が顔を上げてみると、困った様子で両腕を組んでいる絵里がいた。

「ダンスが上手い人なら、他にもいると思うけど？」

「会長の踊りを見て、会長がいいと思ったんです！」

「そう……」

瞳をとじた絵里はしばらく黙った後、ゆっくりと瞼を開いて穂乃果を見た。

しばらく、彼女は穂乃果と見つめあつた後、吐息のような溜息をする。

「いいわ。ダンスを教えてあげる」

その言葉と共に穂乃果は晴れたように笑い、廊下の片隅で見守っていたメンバーたちも驚き半分喜び半分で笑い合う。

絵里はスクールアイドルをまだ認めていない。しかし、穂乃果の歌の上達は確かなものだったので、その進歩に免じて協力する気にはなれたのだった。

どのみち、生徒会が学校存続問題で動くことを学園長から認められていないので、小さなことでも取れる手段はするつもりだったのである。

「貴女たちが努力しているのは確かなのようだし、私も助力することで学校存続に繋がるかもしれないなら引き受けましょう」

そのために、sを利用する。だが、利用するのはお互い様だ。

無駄だと解ればすぐに見切りをつけえればいいだけである。

「けど、やるからには私が許せる水準まで頑張ってもらおうよ。いい?」

「っ——はい!」

「そう、なら後はよろしくね」

「はい! ……ふえ? あと?」

「こ——う——さ——か」

どす黒い声が背中から聞こえ、恐る恐る穂乃果は振り向くと、其処には鬼の形相をした彼女の担任である青いジャージの女教師、山田博子がいた。

「ひっ！」

「廊下で騒いでいるやつがいると聞いたが、お前かあ？」

「えっと、これはその」

助けるを求めるように視線を巡らせるが、絵里を始めとする生徒会の人間は既に荷物を纏めて部屋から撤収しており、パフォーマンスに協力したヒフミトリオはいつの間にか機材を回収し、かなり先で台車を走らせている。

最後の頼みの綱であるμsの仲間を目を向けるが、廊下の隅で一年生組たちから合掌され、幼馴染二人からは声の無いエールを送られた。

「おい、なに黙ってるんだコラ！」

「ひいひい！ これには深い、深い事情がありました」

「言い訳は職員室で聞こうか。説教だ、説教」

「そ、そんな——っ!!」

かくして、仲間のため、学校のために孤立奮闘した少女は常識という罪によって裁かれたのである。

μsのアイカツはまだまだ続く！

18話・過去を穿つストレッチワード

穂乃果の奮闘と犠牲により絢瀬絵里からダンスの特訓を引き受けてもらったから、
たち。

早速、その日の放課後屋上にて彼女の指導を乞うのだったのだが。

「全然駄目じゃない！ よくこれでダンスをしようと思えたわね！」

少女たちを待ち構えていたのは冷罵の嵐だった。

「基礎ができてないから無駄ができるのよ！」

「少なくとも足を開いた状態でお腹を床につかせなさい。それを全員ができるように柔軟性を上げることは全てに繋がるわ！」

「ダンスで人を魅了したいのでしょうか！ これぐらいできて当然！」

「動きが鈍い！ 筋力トレーニングも一からやり直しなさい！」

始まってから終わらない叱責。

最初な静かな苦言だったのが、徐々に凍傷しそうな谤りに変貌した。

厳しい特訓は海末によって行われていたが、そのときよりも痛ましい顔を少女たちは浮かべる。

そもそも、海未が行ってきたのトレーニングは主に走り込みよる体力づくりが主であり、絵里が指導している柔軟やバランス感覚の特訓は今までしてこなかった。よって、不慣れな鍛錬に μ 、 s たちは疲労困憊する。

だが、こちらから頼んだ手前もあり、全員が懸命に黙々と励むのであった。
「もういいわ。今日はここまで」

『——ありがとうございます！』

そして、時間にして一時間弱。

絵里が告げた終了の声の後、 μ 、 s たちは揃って礼を言った。

なんとかこなせたと全員が内心安堵する中、絵里は彼女達を見据えている。

「この程度の基礎すら満足にできないなら、ダンスの上達はまだまだ先よ」

『!?!』

「わざわざ付き合っただけあげてるんだから、少しはマシになりなさい。それじゃあ」
そう言い捨て、絵里はそのまま屋上を去っていた。

彼女が消えた扉が閉じられたと同時に、我慢の限界に達した真姫が憤慨する。

「な、なんなのあの言い方!!」

「ま、真姫ちゃん聞こえるよ!」

「いいわよ聞こえて!」

宥めようとする花陽だったが真姫はかなり腹に立っていたのか、地団駄を踏むような勢いで吐き捨てた。

「確かに教えてもらうのはありがたいけど、何事も言い方でいうもんがあるでしょ!」

「確かに怖かったよね。柔軟するときもいきなりだったし。凜、体が裂けると思ったにゃ」

同意するように凜も激しく頷く。

柔軟を教える際、最初の実験台にされたのは凜であり、そのとき彼女は足を地面で広げたまま背中を押されて悲鳴を上げたのだ。

「こつりも腕が痛いよお」

逆にそつなく足を地面に広げたまま腹を地面につけたこつりは、筋力トレーニングで苦しい思いをした。

すると何か考えていた海未が申し訳なきような顔を浮かべる。

「すみません。私がつと確りとした特訓メニューを作ればこんな事には」

「え!? なんて海未ちゃんが謝るの!?!」

いきなり謝罪に穂乃果が驚き、他の人間も何事かと海未に視線を集中させた。

「今までの練習メニューを考えてたのは私です。今日、生徒会長に言われた内容も以前から組み込んでおけばこの様なことには……」

「なに言ってるの！ 海未ちゃんが考えてくれた特訓あったからこそ、生徒会長の特訓もみんなやり切れたんだよ！」

「穂乃果……」

「穂乃果さんの言うとおりです！ 海未先輩の特訓がなかったら、私途中で倒れちゃてたと思います！」

「花陽……」

穂乃果に続いて花陽に慰められる海未。

彼女は花陽をじつと見つめた後、ふと思いついたことを呟く。

「そういえば穂乃果やことりには『さん』付けなのに、私だけは『先輩』呼びなんですわね」

「ええええ!？」

「——なんでいきなりそんなことを言ったの?」

海未の突然の発言に花陽が驚き、くすりと笑ったことりが彼女に尋ねた。

「いえ、なんとなく」

「なんとなくって」

海未の発言に花陽以外が苦笑を浮かべた。

微妙な空気になったが、先程の剣呑なものよりもずつといいだろう。

「海未先輩って普段しつかりしてるのけど偶に抜けたこと言うのね」

「真姫ちゃん偶にじゃないよ。結構な頻度で言うよ」

「穂乃果、それはどういう意味ですか？」

「何で穂乃果だけ睨むの!？」

「あ、あの海未先輩だけじゃなく新田先輩も先輩って呼んでますよ？」

「かよちゃん、その話はもういいにやあ」

「え？」

「うふふ。さーと♪ 海未ちゃんのお陰でみんなの気分も変わったし、これからどうする？」

いつも通り賑やかになってきたが、見切りをつけてことりが切り出す。

下校時刻までまだ時間があり、絵里の指導が終わった今、残りの放課後はどう過ごすべきか考えなければならぬ。

「体力はまだあるけど、正直今は体を動かしたい気分ではないわね」

「なら、新曲の練習でもする？ 新田先輩も午後から学校に来てるんだよね？」

体をほぐしながら真姫がぼやくと、凜が歌の練習を提案した。

歌の練習は基本的に色明を交えて行っている。彼がいない日は真姫が代行して歌の指導をしているが、やはりプロである色明の方が質が上である。

そんな色明は午前中仕事で学校にはいなかったが、昼休みには授業に参加していた。

しかし、練習が始まってもし色明はこの場にはいない。例え、音楽に関係ない練習でもその場にいるのだが、今日はまだ姿を見せていなかった。

その事情を海未が説明する。

「確かに彼は学校に来てますが、今日は違う部活に顔を出すそうです」

「え？　なんで？」

不思議そうにする凜に海未は少し不服そうに説明を続けた。

「新田さんの見本生は異性に慣れてない女性の苦手意識を少しでもなくするのが主な役割です。最近私たちに掛かりきりのため、あまり他の生徒と関わってないから今日は色んな場所に顔出しする、だそうです……」

「ふええ。事情を知らないと色んな女の子に会ってるだけにしか見えないね」

「傍から見ればそうでしょうね」

凜の言葉を海未が同調するのは、理由があると頭では解っていても、単に他の女の子たちに会いたいだけではと何処かで邪推しているからだ。

色明は一見ふざけていそうでも真面目な性分なのは海未も知っている。

口では色んな女子に会えて楽しいとでも言いそうだが、本心では線引きをして職務に取り組んでいるだけだろう。

しかし、自分の知らないところで彼が女子に会っていると思うと海未は面白くなかつ

た。

実際やつてる事は『不特定の多数の女子に接触している』と、ふしだら行為にしか見えないので不快に感じてるのだと、自身で結論している。

そんな思いは色明に対して失礼だと理解しているの、海未は気持ちを切り替えるように話題を変えた。

「それよりも絵里先輩の指導が終わったので、今日はこの後、弓道部に寄らせてもらいます」

「ああ、そういうえば海未せ、ーさんは掛け持ちでしたね」

わざわざ言い直す花陽に海未はこくりと頷く。

近頃はアイカツによって弓道部が何かと疎かになっている。

今後絵里の指導や新曲PVのため更に時間は削られるだろうが、掛け持ちをすれば決めた以上、可能なかぎり弓道部にも力を入れたい海未だった。

「スクールアイドルと弓道。更に家の稽古もあって、本当に忙しいですね」
「目まぐるしい毎日ですが充実してますよ」

半分呆れて半分尊敬した真姫の言葉に、海未は辛勞を感じさせない微笑を見せる。

そんな彼女を苦なく言えるのは流石だなと、誰もが感心した。

「けど海未ちゃんも抜けるなら今日は新曲プロモのアイデアでも考えよつか。この前

は結局、生徒会長に踊りを教わることだけ決めて、肝心のPVは何も決めてなかったし」
「え？ それは逆に全員揃ったときの方が良くないかな？」

「私はかまいませんよ。こういうのものを考えるのは苦手ですし、後でどんなものも決まったら教えられたらそれで」

穂乃果の言葉に凜が首を傾げるが、すぐに海未が自分を抜いてやってくれても構わないと言う。

「うん、わかった。なら、後でどんなものか決まったか教えるね」

「はい、お願いします。それと真姫。私の代わりに脱線しないか見張ってくださいね」
「わかりました」

「なんで、そこで一年生の真姫ちゃんに後を頼むのかな？」

「では穂乃果。無駄話は一切せずに最後まで決めれますか？　ことりは穂乃果を甘やかさないでくれますか？」

『それは——』

「そこで見栄すら張ってくれないから、心配するのでしょうか」

曖昧な表情を浮かべる幼馴染たちに呆れながら、海未は弓道部に向かうためその場をあとにした。



μ s たちに指導を終えた絵里は、そのまま仕事のために生徒会室に向かうわけではなく、気分転換も兼ねて校内の見回りをしている。

このまま生徒会室に行けば副会長の東條希に根掘り葉掘り聞かれるだろう。時間を置いたところで問いかけられるのは変らないが、少し自分自身で己の気持ちを整理しておきたかった。

何故、自分は彼女たちのアイカツに付き合ったのか？

穂乃果の歌を聴いて可能性を感じたのは事実。

学校存続のための行動を学園長から制止されているため、気休めの手段として彼女たちに助力したのも事実。

全ては打算ゆえの行動。それ以上もそれ以下でもない。

では、何故、自分は親友に会うのを避けているのか？

見透かれそうだからと、そんな不安を抱くのだろうか？

そんな思いに耽りながら外を歩いてると、絵里は見覚えのある顔を見つけた。

「新田くん！ 今日に来てくれてありがとう！ よかったらまた遊びに来てね」

「それはどうも。時間があれば是非お邪魔させてもらおうよ」

「約束だよ！」

複数の女生徒たちに、この学園唯一の男子生徒、新田色明が気のいい返事をしている。

遠目から見れば、一人の男が沢山の女性にいい顔しているようにしか見えない。

最初、見本生の存在を聞かされたとき、絵里は何の冗談だと疑って、次に反対だと抗議した。

何故ならばここは女子高だ。男子など異物にしかならないだろう。

しかし、見本生の存在儀を全て（、）聞かされ、見本生になる人間を聞き、時間を経った今ではその存在にも肯定的だった。

絵里はその容貌ゆえ、異性に声をかけられる機会が多い。本人が望んだものではないが、そのお陰で相手が卑猥な目であるか否かは判断できた。

それゆえ解る。新田色明は少女たちを見ていない。

当然、物理的なものではなく、精神的なもの。

彼女たちの好意に気づきつつ、一定の距離を保って、それ以上近づこうともせず、相手が踏み込んできたらすぐに避けている。まさに芸能人が自分のファンに接しているようなものだ。

最初は異例の存在を監視する目的で新田色明の同行を見てきたが、彼がこの学園で心許しているのはアイカツを助力しているμ'sぐらいなものだろう。

他の女子は幾ら好意を向けられても、自分のファンと同列に扱っている。

見本生の役目を全うするため、異性が苦手そうな生徒に自ら干渉することはあつて

も、その生徒が彼に心許して勘違いをする前に距離をおいていた。

そんな結婚詐欺師でもなれそうな手腕に、善悪は別にして、流石は芸能人だと絵里は色明を認めている。

そんな彼が少女たちと別れると、自分を見ていた絵里に気づき、にこやかな笑みと共に彼女へ近づく。

「これは生徒会長様。校内の見回りですかい？」

「ええ、そうよ。例えばここが自分のハーレムだと勘違いした男子がセクハラでもしていないか確認するためにね」

絵里の皮肉に対し、色明は気にした様子も見せず、にやりと笑ったままだ。

「それはそれはご苦労様です。それで？ そんな輩は見つかりましたか？」

「生憎とまだ見つかってないわ。見つければすぐに通報してこの学園から追い出すのだから」

「当然な処置っすね。そんなときは遠慮なく言ってください。不埒なヤツを懲らしめるなら男手も必要でしょう。歌が本職ですが、これでも武道には心得があるんで」

「……そういえば、そんなことも言っていたわね。頼もしいのは結構だけど、暴力沙汰は起こさないでよ。処理が面倒だから」

「弱いもの虐めは趣味じゃないんでそこは安心してください。つと、冗談はここまでと

して、会長に聞きたいことがあるんですけど、お時間はまだいいですかい？」

「私は冗談を言ったつもりはないのだけど。いいわ、何が聞きたいの？ 予想はついでるけど」

少し空気が変わったが、絵里は何も言わず彼と話を続けた。

「予想どおりの質問だと思いますけど、*us* たちのダンス指導はどうなりました？」

「予想どおりの質問ね。どうもこうも、基礎すらできてないか暫らくはそこを矯正よ」

「予想どおりの答えすね。そりゃあ、一朝一夕で技術が上達する奴なんざ一握りの天才だけだ。ダンスのことは素人ですけど、精々しごいてください」

「素人、ね。……いい機会だからこの際聞けど、何でプロの貴方が彼女たちに協力しているの？」

度々学校を抜けるぐらいには忙しい身でしように」

絵里がそう尋ねると、再び色明の雰囲気が変わった。

軽口を言う姿勢ではなく、そこはかとなく優しげに彼は言葉を紡ぐ。

「これでも随分と自由な時間は作れてるんですけどね。質問の答えは、あいつ等の頑張りに応援したかったからですよ。無謀だとは今も思いますけど、真剣なら手伝ってあげてもいいじゃないですか」

「無駄になるかもしれないのに？ 幾ら彼女たちが頑張っても、それで学校が注目され

て、そのまま廃校がなくなる。そんな夢のような話を期待してるの？」

「例え学校を救えなくても、精一杯楽しみながら頑張った結果なら、それも一つの青春だと思えますね。意味があつたのかどうかは、それぞれが最後に受け止めればいい。仮に

——」
不意に色明は表情を消す。そして続きを言葉にした。

「それで終わるなら、その程度だつたつて反省して——そのまま付き合いを遠慮するだけすよ」

——」
突き放すような瞳に思わず絵里は息を呑む。

それでは、*Ms*が廃校阻止に失敗したことで絶望し、そのままイカツをやめれば、自分は彼女たちと今後関わるつもりはないと言つてるようなものではないか。

絵里が何か言える義理などないのだが、それは非情ではないかと言いかけたとき、色明の雰囲気再び変る。

何かを見つけたような顔した彼は、そのまま穏やかに笑う。

「まっ、その心配はあんまりしてないんですけどね」

「新田さん？」

そこで聞こえてきた声の主は、弓胴衣に身を包んで歩み寄ってくる海未であった。彼女は胴衣に着替えた後、道場の向かう途中色明の声が聞こえたため、思わず其方に足を向けたのである。

海未は色明を見つけると、一瞬間を綻ばせた後、傍にいる絵里を見て驚く。

「生徒会長？ いったい、なにを話して」

「いや、女生徒に破廉恥なことしてないか注意されただけさ」

「してたのですか!？」

「してない、してない。冤罪、冤罪。で、園田はこれから弓道部に？」

他の女生徒や絵里とは違う、気の許した顔を見せる色明に、まだ少し狼狽してる海未は頷いた。

「は、はい。最近は顔をあまり出してないので」

「スクールアイドルだって大変だっただろうに、頑張るなあ」

「どちらも好きでやっていることなので、疎かにしたくはありません」

「ふーん」

そう色明は口ずさんだ後、彼は閃いたように彼女へ質問してみる。

「けど、弓道は勝負事だろ？ 二足草鞋なら、他の奴らに差がついて負ける一方じゃないか」

「……弓は自己鍛錬でやっているのですが、確かに貴方の言うとおり誰かと競うこともありえます。練習量の差で他の方々に負けることもあるでしょう」

僅かに悔しそうな顔をしつつも、海未は力を込めて次の言葉を出した。

「ですが、結果が残せないからといって続けられない道理はありません。落ち込んで泣くこともあつても、それを糧にして前に進むだけです！」

それを聞いた色明は納得したような、もしくは安心したように苦笑する。

「うーん、暑苦しいほど糞真面目だな、ほんと」

「はあ!? な、なんですかいきなり！」

「褒めてるんだぞ？」

「そのようには聞こえませんでした！ 生徒会長もそう思いますよね？ あれ？」

他の意見も聞きだそうと、海未は傍にいないはずの絵里に話しかけようとしたが、つい先程までいたはずの姿は何処にも見当たらない。

「もう！ 貴方が変なことを言い出すから呆れて何処かに行つてしまわれたじゃないですか！」

「俺、変なこと言ったか？」

「言いました！ でないと無言でいなくなるわけないでしょ！」

「いや、それはどうかと」

「もういいです！ 私はこちらで！」

そう言つて立ち去ろうとした海未だったが、何故かその後ろを色明がついて来た。

「何故、一緒に来るのです？」

「そういえば弓道部に寄つたことが無かつたから、顔出しにね。これでも見本生の仕事」

「貴方が来たら騒ぐ子もいるでしょう。遠慮してください」

「たかが一人の人間に乱れるなら、心の鍛錬がまだまだだな」

「……はあ、仕方ないですね。見学するなら静かにしてくださいよ」

「おう、園田の弓を拝ましてもらうさ」

「つ——か、勝手にしてください！」



海未が色明にやきもきしている時、二人から無言で立ち去つた絵里は廊下を無言で歩く

まるで何かを踏みつけながら進む激しい足取り。誰かに見られていたら何事かと不振がられていただろう。幸いにもこの場所には絵里にしかいかないためその心配はない。

無人の廊下をひたすら歩いていると、突然絵里は立ち止まった。

そして、しばらくその場でじつと立ち止まっていると、いきなり近くにあつた扉に拳

を叩きつける。

手から痛みを感じながら、絵里は海未が言った先程の言葉を思い出していた。

——ですが、結果が残せないからといって続けない道理はありません。

——落ち込んで泣くこともあっても、それを糧にして前に進むだけです！

何処までも真つ直ぐな言葉。

それを聞いた途端、絵里は胸を抉られたように痛み、思わずその場から逃げ出していったのだ。

「結果が残せないからといって続けない道理はない、か」

自分の口からも同じ台詞を出し、絵里は自分で更に心を乱す。

海未が自分や色明に対して言った言葉は、偶々聞いていた絵里の過去に、深く踏み込んでいたのだった。

19話・不明ティアドロップ

絢瀬絵里がクラシックバレエを始めたのは何が影響だったか定かではない。

劇場でプリマドンナを見たときか。

尊敬する祖母の若い頃を残した、バレリーナの写真を見たときか。

それとも偶々興味を持ったのか。

あるいはそれらの全てか。

少なくとも物心ついたときには既に絵里はバレエに没頭していた。

長時間、アラバスクでいることは辛くなかった。

アントルシャ・カトル、チャイコのトゥールズアンレール。

次々と技法を覚えるのが楽しく、精度を高めれば嬉しかった。

そして、何よりも心躍るのは舞台。

特にヴァリアシオン——大きなステージを一人で踊れるときは高揚が病み付きになる。

初めてジゼル第一幕を踊りきったとき、最初の緊張が嘘ように消えさり、体全体が熱

いもので満たされた。その後の観客たちに送られた多くの拍手が、彼女にとっての褒美。

何より、傍から見ても絵里は逸材だった。

美しい容姿。そして恵まれた才能と絶え間ない研鑽。

彼女は様々なコンクールに次々と受賞した。その界限では知らぬものはいないほどの綺羅星と知れ渡る。

だが、ある時期から彼女の活躍は減衰していく。

コンクールで一番になることが少なくなった。

今まで銅賞止まりだった人間に金賞を奪われる回数が増え続けていく。

何処かの記者が面白半分で書いた記事に傷つきもした。

『かつての天才バレリーナ、現在は遊び呆けて金賞を逃す』

記事を書いた記者は侮辱されて激怒した彼女の家族により訴えられたが、噂の尾ひれは止まらない。

実際には絵里が遊ぶ時間を持つことは殆どなかった。

真面目に学業をこなしながら、空いた時間は全てバレエに費やす。周囲の人間もそれを理解し、彼女を応援した。

そんな、一つの大きな機会が訪れる。

『モスクワ国際バレエコンクール』

世界でも主要なバレエコンクールの一つであり、挑戦権を得た絵里は汚名返上のために挑んだ。

これまでの全てをぶつけて踊った結果、ファイナルラウンドまで進出する。

惜しくも受賞は逃す。コンクールで受賞をしなかったことは、これが初めてだった。

悔しい思いが溢れたが、若年層でここまで勝ちあがれたのも優秀な証拠。心機一転して彼女は次の道を選ぶ。

今度は個人で踊り続ける止めて、幾つかの劇団のオーディションを受けることにした。

天才と持て囃される自分ではなく、一からバレエを学ぼうと決心したのである。

——だが、彼女の悲劇はここからが本番だった。

なんと、絵里が申し込んだオーディションは全て不合格だったのである。

明らかに彼女よりも実力や実績が劣っている人間が合格する中、彼女だけは落とされ続けた。

ここまですると異様である。絵里の実力は折り紙つき。その結果に不審に思う人間は少なくなつた。

彼女がクォーターだから。あるいは過去の噂を気にして拒絶される。それとも実力

が高すぎるため受け入れてもらえなかった。彼女を妬んだ何者かの仕業など陰謀論すら上がる始末。

しかし、様々な憶測が飛び回ったが、最後に残ったのは結果だけ。

心機一転の決意すら何度も砕かれた絵里はもう踊れなくなつた。

バレエに挫折した。

それまでの人生のほとんどを捧げたものを失つた彼女は、学校も登校しなくなる。

家族が彼女を心配する中、丁度共働きの両親が父親の祖国である日本へ転勤することが決まり、いい機会だと鬱ぎ込んでいた絵里を連れ、親子共々日本へ移住した。

なお、彼女の妹である亜里沙は、幼い頃に環境が変わるのを避けてロシアの実家に残した。

日本に来てからの絵里はなんとか回復する。

学校にも通えるようになる。前々から父から日本語を教わっており、元来優秀ため問題なく勉学に励んでいた。

そんな彼女に両親は嬉しく思うも、同時に悲しくもあつた。

学校に通つてはいるものの、親しい友人はいないようだ。当然、バレエのことも話題には出さず、両親からも出さない。

家族間でのバレエの話題は精々、偶に会う妹の亜里沙が時折話す程度。心配をかけな

いようにと亜里沙には姉がバレエを辞めた経緯を教えてなかった。

物事を深く考える年頃になると、亜里沙は姉や両親に何があつたのかと尋ねるも毎度はぐらかされ、結局彼女も問いただすことは止める。

——月日は流れ、絵里は祖母が留学していた音乃木坂学園に入学した。

しばらくすると、気の合う友人もできたようで、前よりも明るくなつた彼女に両親はやつと安心する。堅苦しい印象が残っていたが、成長したゆえ幼さが抜けたのだろうと考えた。

絵里が進級した頃に両親は仕事でロシアに戻ることが決まつたが、折角馴染んでるので絵里を日本に残し、代わりにロシアから妹の亜里沙がやつてきた。

絵里は妹と二人暮らしを始めた当初苦労したものの一年もすると慣れる。

学校では生徒会長にも選ばれて、今度こそ順風満帆な青春を過ごせると思つた高校最後の年、音乃木坂学園の廃校問題が浮上した。

絵里がそれを知つたとき、抱いた感情は悲しみや落胆ではなく、怒りだった。

また自分から奪うのか。

ここは親友と出会えた場所だ。

他にも沢山の友人や思い出がある。大好きな祖母にとつても思い出の場所なのだ。

自分だけではない。歴史ある学校なら、それだけの数の人間が思い入れのある場所な

のだ。

父親の祖国ではあるが、それよりも祖母の思い出話を聞いて、日本に、音乃木坂学園に絵里は憧れていたのだ。両親の転勤がなくなるとも、音乃木坂学園へ留学しようかと悩むほどに。

だから、守らないと。

駄目だったと、今度こそ諦めたくない。

大事なものを、自らの手で守るのだ。

そのためならば、どんなこともする。誰かを利用してでも、絶対に。

▼

「今日はここまで」

絵里がダンス指導をして一週間が経過した。

基礎トレーニングも徐々に慣れ、メンバー全員のバランス感覚と柔軟性が飛躍的に延びている。

しかし、相変わらず同じことの繰り返しだった。

「あの会長、少しいいですか？」

声には出さないが一年生たちはそれに不満であり、このままでは不味いと判断した穂乃果が帰ろうとする絵里を呼び止める。

絵里は振り返ると静かな目で穂乃果を見つめた。残りのメンバーも穂乃果が何を話すのかと見守る。

「……何かしら?」

「会長の特訓には感謝してます。でも、そろそろ他のことも教えてほしいのですが……」

「基礎トレーニングは飽きたと?」

「飽きてないです、と言えば少し嘘になりますけど、基礎トレーニングも他にもステップとか振り付けとかダンスの指導も追加でして欲しくて……」

まだそのレベルではないと怒られたらどうしようと、内心ビビリまくりながら苦笑いを浮かべる穂乃果を前に絵里は僅かの間、考えた。

「……………そうね。トレーニングも全員がこなせるようになったし、ダンスレッスンも追加しましょう」

「いいんですか!?!」

進言した穂乃果も断れると思っていた手前、思わず確認してしまう。

絵里の言葉に、s全員が意外そうにしつつも顔が見る見るうちに明るくなった。

「ええ。私も次の段階に進むべきと思ってたしね。では、貴方たちの新曲を今此処で踊ってもらえるかしら?」

だが、絵里の一言で全員の顔が石のように固まる。

まさかいきなり踊れと言われるとは思ってもいなかたつたのだ。

戸惑つて動きを見せない彼女たちに、絵里は仕方ないと溜息をつきながら説明を始める。

「私ができるのはあくまでクラシックバレエであつて、アイドルが踊るようなダンスじゃない

なら、貴女たちのダンスを見た後、私が不出来な部分を指摘して改善する方法がよいと思つたのよ。それとも貴女たちはバレエをしながらアイドルの曲を歌うつもりだったのかしら?」

「それも面白そ——、いえ、違います。ああーと、では、踊りをみてください。みんなやるよー!」

海末に睨まれて愛想笑いを浮かべた後、穂乃果は気持ちを切り替えるように仲間たちへ呼びかける。

「やるのはいいけど、音はどうするの?」

「えつと、私が携帯に音楽を入れてからそれを流しながらしよかつた」

「本当は新田さんが持つてくるようなものがありますが、致し方ないですね」

真姫の問いに花陽が答え、海末が頷く。

音付きで練習する際は色明が持参する持ち運び用の音響機器で行っているが、ダンス

指導では必要ないと判断したためこの場にはない。

ちなみに、持ち主である色明もこの場にはおらず、彼は補習授業を受けていた。度々仕事で抜ける彼が授業に遅れないよう学校側の処置だ。

花陽がポリュームを上げて、安全な位置に携帯を置くと急いで定位置に向かう。

〔Music start———これからのSomeday〕

軽快なリズムに乗って踊りだすμsたち。

ダンスを見せるということだが歌もパート通り奏でていた。

この曲は海未と真姫が色明の助言を得て作り上げた音楽だ。プロお墨付きの一曲に仕上がった作品に相応しいようにと、少女たち歌う。

楽しげなメロディーの中で笑顔を振りまきながら少女たちは舞い、そんな彼女たちを絵里は静かに見つめる。

しばらく経って——曲が終わった。

μsたちは少し息を乱しながらもやり切った顔を皆が浮かべている。

自分たちでも絵里の指南により体を円滑に動かしていたと実感していた。

が、これならば文句ないだろうと全員が絵里に視線を向けると、能面のような表情に少女たちの高揚が止まる。

「駄目ね。これは人前で見せられるものではないわ」

『!?!』

「いったい何が駄目だと言うんですか!?!」

冷たい言葉へ真先に反感したのは真姫だった。

対して絵里は激高することもなく、淡々と説明する。

「言いたいところは沢山あるけど、所々リズムとずれているわ。振り付け自体も曲に合っていないと私ですら思う箇所がある」

「曖昧に言われても納得できるわけではないです」

「そう言う発言も見越して先程の歌っている間、私の携帯で撮影したわ」

「!?! いつの間に!?!」

これには全員が驚く。彼女たちはパフォーマン스에集中するあまり、絵里の行動に気づいてなかったのだ。

「画質はともかく、確認するだけならこれで十分。ほら、全員こちらにいらつしやい」

絵里の言葉に、sたちは彼女に近づく。文句を言っていた真姫も凜に一声かけられると渋々絵里の下へ向かった。

そして、絵里の携帯から先程の光景が流れる。

自分たちでも悪くないと客観的に見ても思ったが、彼女たちにこれを見せ付けた絵里は違った。

「ほら、ここ。南さんが音にズレたわ」

「うう……」

早速、ことりが駄目だしを食らう。

確かに指摘されみるとステップが僅かに遅れているのが理解できた。自分ではできていると思っていたので恥かしさと気落ちで俯くことり。

「大丈夫だよ、こことちちゃん。言われないと全然気にならない——」

「ここでは高阪さんが周りを気にして視線を泳がせているわ。周囲に気を配るのも結構だけど、第一に自分のダンスに集中しなさい」

「はわっ!」

今度はフオローしていた穂乃果が注意される。

それから次々と駄目だしを受け続けるメンバーたち。少なくとも一人あたり一、二個は注意を受けてしまった。

他にも要所で振り付けが音楽に合わないなどの指摘を受けて、動画が終わる頃にはμ's たちは全員が意気消沈している。

自分たちなりに上達したと思っていたが、こうも駄目だしを受け続けると自尊心が傷つくのも仕方ない。

「なに落ち込んでいるの? これは解り切った結果よ」

沈んでるメンバーたちに追い討ちをかけるように絵里が言葉をかける。

「貴方たちが学んだのは基礎の基礎。それだけで上達が出来たと思つたのならば、今すぐその勘違いを捨てなさい」

『……………』

「返事は？」

『!? ——はい!』

「結構。では、残りの時間は今のダンスで音が合わせられるように練習するわよ。ダンス事態の手直しは私がやるわ」

「ダンスの手直しまでやってくれるのですか？」

絵里の言葉に海未が思わず聞き返す。

他のメンバーもその発言には予想外だった。

引き受けてくれたとはいえダンス指導は乗り気ではないと思つていただけに、彼女の申し出は意外だったのである。

μ s たちの不思議そうな視線を感じ取つた絵里は、少し不機嫌そうに顔をすぼめた。

「なによ。不満を言い出したのは私なんだから改善案を提示するのは当たり前ですよ。それよりも早く位置につきなさい。できるまで何度も繰り返すんだから」

「うふふ、近頃は熱心やなあ」

「何よ、急に」

テキパキと絵里が仕事を行っている、不意に東條希が彼女へそんなことを言った。

絵里がダンスの手直しを言い出した翌日の放課後、生徒会室。他の役員たちはそれぞれ部活動や用事のため、この場には絵里と希の二人しかいない。

μ、sのダンス指導を請け負った絵里だが、当然生徒会長としての仕事も行っている。

今日は16時まで生徒会業務をした後で、μ、sの練習に向かう予定だった。

「生徒会にあの子たちのダンス練習。随分と充実した毎日やない?」

「必要だからやっているだけよ。この仕事も彼女たちに付き合ってるのも」

素っ気無く返事をする絵里だったが、希はゆっくりと微笑む。

「そう言ってるけど、最近のえりちは何処か楽しそうやで?」

「楽しそうですって?」

心外な言葉に思わず絵里は顰めた顔で希に向けた。

これで手元で留守だったならば文句を言えるが、彼女はちやつかりと視線は机の落として作業を行っている。

「前までピリピリしてながら仕事をしとったけど、今はとつてもリラックスしてるやん。お陰で他の役員の子らも怯えんですんでるわ」

「それではまるで、前まで怖がらせてたみたいじゃない」
「怖がらせてたで？」

「――」
すっぱりと言い返した希に絵里は逆に言い返せない。

思い当たる節がある。

廃校問題やそれに対する生徒会活動の抑制により自分は苛立ちを貯めていた。

周りに当り散らすような真似はしてないが、生徒会の空気を悪くしてないとは言い切れない。

「今度フォローしないと」

「そこまで気にせんでもええよ。頭がことある度に謝ってたら尊厳が揺らぐで？」

「自分に非を感じたら下の人間に対しても謝罪は必要よ。でなければ、相手が粗相を犯したときに注意しても、不満を募らせるだけだわ」

「おお。えりちは良い上司になるな」

「悪かったわね。今まで良い上司ではなくて」

拗ねたように口を尖らせながら絵里は視線を手元に戻し、仕事を再開する。

「前から良い上司やで？ スクールアイドルの手伝いしても生徒会の仕事は疎かにしてへんし、おまけに学業優秀の美人さん。いやあく、親友として鼻が高いわ」

「それはどうも……」

「話は戻るけど、近頃のえりちは本当に楽しそうや」

そう言いながら希は横にいる絵里を覗き見るも、彼女の手元は一切止まっていない。「気づいとる？ 前までスクールアイドルの話が出るたびに怖い顔したけど、今は自分から偶に話してて、そんなときの顔は笑ってるねんで？」

「……」

この間まで絵里はスクールアイドルは児童のようなものだど軽視していた。

だが、実際にμ、sの練習を目にしたことで、他に青春をささげているたち者たち同様、真剣に活動していることを理解したのだ。

少なくとも、彼女たちは、μ、sは本気だった。

辛辣な冷罵に耐えて、挫けることなく練習に励む。

そんな彼女に絵里が好感を持つようになったのは事実だった。

「……今更仲良くしろなんて言うつもり？」

「なんや。うちが言わんでも自分の気持ちに気づいとるやん」

「誰も仲良くしたいなんて言っていないでしょう。今のは貴女の希望を代弁しただけ」

あくまで絵里は冷淡に言葉を重ねる。

「私が彼女たちやスクールアイドルを認めてきているのは肯定するわ。けど、それでより深く踏み込むかは別の話」

「えりち……」

「所詮は互いを利用し合ってるだけの関係よ。彼女たちは私の技術が目的で、私は学校存続の保険として協力してるだけに過ぎない。必要以上に馴れ合いをする理由はないわ」

「豪い難儀なこと言うやん。そんなことを考えてる時点で意固地になってる証拠やで？」

「……最近の希はお節介が過ぎるわ」

そう言うのと絵里は手元に広げていた筆記用具や書類をまとめを片付け始めた。

希は絵里が話から逃げたとは言わない。時計を見れば、生徒会で作業してか随分と時間が経っている。

「練習に向かう時間やな。ほな、うちも」

「なんで希まで片付け始めるのよ？」

共に片付け始めた希へ絵里は怪訝そうな目を向けた。

「えりちもいなくなるなら、一人は寂しいしうちも今日は帰ろうかなって。勿論、今日の

分の仕事は片付けたで。なんならいま確認する？」

「いいえ、結構よ。明日他のと纏めて見るわ」

飄々しい態度は目立つが、希は生徒会の副会長として認められる能力はある。

話しながら平行していた仕事は、彼女の言葉どおりきっちり終わっているだろう。そもそも、ここで誤魔化す人間ならば絵里はとっくの昔に希を副会長から解任していた。仕事はまだあるのだが、今日の分が終わっていれば文句はない。

片づけを終えた絵里たちは生徒会室の戸締りをする、揃って同じ方角に進む。

すると、階段を上ろうとしたところで生徒会室でジャージに着替えていた絵里が振り返った。

「待ちなさい。何故、希も付いて来るの？」

眉間に皺を作りながら絵里は希に尋ねる。

絵里はこのまま、sが練習している屋上に向かうのだが、帰るはずの希は一階の玄関に向かうため階段を下りるはずだ。

「いや、折角やし、今日はえりちを交えたあの子達の練習を見ようかなって」

「何が折角なのよ」

「いいやん。別に今日が始めてやないやろ？」

希の言葉通り、絵里が、sたちに指導している光景を既に彼女は何度か目撃してい

る。

最初は何か故いるのかと咎めていた絵里だが、拒否する理由もなかったので放置していた。

だが、今日の絵里は何処か来てほしくなさそうに難しい顔を浮かべている。

おや？ と、それに気づいた希は悪戯な笑みを浮かべた。

「なんや。今日はうちが見たらやばいことでも仕出かすつもりやったん？」

「そんなことしないわよ！ ただ、今日はその——」

居心地を悪そうにしていた絵里だが、離れることない希の視線に観念し口を開く。

「私が考えたダンスを彼女たちに見せるから、それだけよ。別に疚しいことはしないわ」

「えりちが、ダンスを見せる？」

思わず聞き返した希は、次の瞬間、破顔した。

希は絵里がバレエをやっていたことはしっており、昔の動画も見たことがある。

だが、実際にこの目で彼女が踊っている姿は見たことがない。μ s たちの指導で軽い動作を見せることはあっても、本格的な踊りは見せなかった。

そんな彼女が自分が考えたダンスを人前で踊るらしい。

絵里がバレエを辞めた事情を知っていた希は、驚きと嬉しさが込み上げてきた。

「なるほど、それは絶対に見逃せへんな」

「やっぱりついて来るのね。いいわ、勝手にしなさい」

ここで拒絶しても最終的に言い包められるだけと判断した絵里は同行を許した。

絵里にとつても希が傍に居るのはありがたい。彼女は動悸を抑えて、一歩ずつ階段を上っていた。



「ご苦勞様です。と、おやまあ、今回は珍しいお客さんも来たもんすね」

絵里と希が屋上にたどり着くと、出迎えたのは女子高では異色の声。

扉付近の壁に背中を預けていた色明は、練習に夢中になっているが、sたちを眺めつつ、絵里の後ろにいた希を尻目にした。

「そんな君こそ此処にいるのは珍しいやん。歌のことしか興味あらへんと思っただけど、女の子の汗や運動で乱れた艶かしい姿に興奮するのん？」

「俺がそんな男ならばこんな場所にはいないすよ」

「健全な男やったらそれくらい普通やで。それとも君はそっちの趣味の人？」

「流石に男に惚れたことはないすよ」

「二人の会話は後でもらえるかしら？ 新田くん、いまだどういふ状況？」

「ご覧の通り会長さんに言われた練習を反復してるとこさ」

二人の戯言に構うつもりがなかった絵里が割り込むと色明は苦笑しながら答える。
「ほら、お前ら！ 会長様のご到着だ！」

『！ お疲れ様です！』

色明が手を叩いて呼びかけると、*μ* s たちは絵里たちの存在に気づく。

「お疲れ様」

「やほ、みんな励んどる？」

「あつ、副会長」

「この子のことは気にしないで。希も邪魔するようならすぐに帰って」

「はいはい、うちは隅っこで新田くんといちやいちやしとくよ」

「え？」

「海未ちゃん、絶対冗談だから気にしないの」

希の戯言で一瞬一部がざわついたが、絵里は自分に視線を向ける少女たちを確認する。

多少息は乱れているが、まだまだ動ける様子。ならばと、彼女は己が果たすべき役割をこなすことにした。

「早速だけど私が考えたダンスを見せるわ」

「もう考えてくれたんですか!？」

絵里の言葉に真先に驚いたのは真姫である。

「私が駄目だししたのだから改善案も早急に提示するのは当然よ」

貴女たちも速く新曲を披露したいでしょうし、という言葉を自分しか聞こえないような声で続けると、絵里は気持ちを切り替えるようにワザとらしく咳払いする。

「では、早速音を頂戴。もしも不満を感じたのなら終わった後で聞き受けるわ。あと何度も見せるつもりはないから誰か録画してもらえら」

「なら、花陽が携帯で録画を」

「じゃあ、えくと、音、曲、音楽は〜」

「俺のプレイヤーで流すからお前たちは見る準備をしろ」

オロオロする穂乃果を尻目に色明は自分の足元に置いたあつた音楽プレイヤーに手を伸ばす。昔ならばラジカセだが、今は持ち運びのためスマートフォンや小型専用機器が主流だが、自分の耳だけではなく周囲に良音を響かせる音楽機器は今でも存在するのだ。

「準備はいいですか？」

曲を選択して後は再生ボタンだけの色明が絵里に確認した。

既にμs たちののはこれから踊る彼女のためにスペースを空けて座っており、端で神妙な顔つきになった希が見守っている。

絵里は深呼吸をした。

人前で踊るのはいつたい何年ぶりだろうか。奇妙な成り行きで他人に踊りを教え、これから自分自身が考案したダンスを披露する。

告白するなら、不安はあった。教えることはできたが、今の自分が人前で踊れるのかと。

そんな自ら抱えた重圧を危惧していた彼女だったが、自然と心は動く。

「……いいわ、始めて」

——音楽が流れた。

先日、聞いてから家で何度も聞き返したメロデー。

イントロと同時に絵里の四肢は戸惑い無く動き出した。

楽しい曲と共に一人踊る少女。不安や間違い、戸惑いを抱えても未来を目指す音

楽。絵里はそれをフェスティバルで踊るように愉快に軽快にステップを踏む。

学ぶ為に真剣に見ていたμsたちだったが、すぐに緊張した顔を緩ませる。

離れた場所で見ている色明も感心したように頷き、初めて見る親友の姿に希は色んな感情を込み上げさせた。

この場にいる誰もが楽しい気持ちにさせるダンス。誰もが自然と笑顔を浮かべた。

それは当事者である絵里でもある。

金色の髪を靡かせ、眩しい微笑と共にその場にいる者たちを感動させたのだ。

アウトロが終了すると同時にピタリと絵里の動きが止まる。

次の瞬間、彼女のダンスに魅入られたものたちの拍手が屋上に響く。

「わあ、会長すごいです！」

穂乃果の歓声が聞こえ、ようやく絵里は終わったと実感した。

「私たちが考えたものとは比べ物にもならないダンスでした。お見事です！」

「流石やん、えりち」

「会長さん、マジで一級品のダンスだったな」

次に海未、希、色明が賛辞を贈る。

親友である希からも嬉しいかったが、実家が日本舞踊で人を感動させる海未やプロの色明からのお墨付きは絵里に自信を持たせた。

他のメンバーたちも概ね好評だったようで彼女は一先ず安心する。

「楽しそうできとりも一緒に踊りたい気持ちになったよ」

「花陽も同感です！ プロのダンスにだって負けないクオリティでした！」

「ふん。まあ、悪くなかったわね」

「真姫ちゃん、素直じゃないにや。あんだけ夢中になって見てたのに」

「な、なに人の顔覗き見てるのよ！ 今度はあれを私たちが踊れるようにならないとい

けないんだから、しつかり見ときなさいよね！」

「西木野さんの言うとおりよ。褒めてくれるのは嬉しいけど、これを貴女達ができるようにならないけば意味がないわ」

絵里はそう言いながら興奮状態の彼女たちを落ち着かせようとした。

「ほら、今から順に振り付けを教えるから静かに——」

「ちよ!? えりち、どないしたん!？」

「?」

突然、希から飛び上がるような声により会話が中断させる。

何事かと問いたただけそうとしたとき、絵里は頬に熱いものを感じた。

「あれ?」

涙だった。絵里は泣いていた。

目にゴミでも入ったのかと指先で瞼に触れるも、違和感も痛みも感じない。

μ s たちや色明も涙を流し続ける彼女に戸惑うが、一番戸惑ってるのは本人だった。

「——ごめんなさい。目にゴミが入ったようだから、少し抜けるわ」

「あつ、会長!」

溢れる涙を抑えきれない絵里は屋上から出て行き、すぐさまその後を希が追う。

残されたが、s たちは思うわぬ事態に混乱していた。

「会長、いきなりどうしたんだろう？」

「目にゴミが入った、は嘘よね。痛がってなかったし」

「私たちも様子を見に行く？」

「やめとけ」

その提案を却下したのは色明だった。

「一人で泣いてるなら兎も角、副会長がついてるなら大丈夫だろ。大して事情も知らない俺らが行っても藪蛇を突くだけなのは目に見えてるぜ」

「……新田さんの言うとおりですね」

海末も絵里のことは気がかりだったが、彼女のことをよく知らない自分たちが向かって何もできない可能性の方が高い。色明の言葉通り、ここは気心も知っているであろう希に任せるべきだ。

「目にゴミが本当に入っただけかもしれないし、会長たちが帰ってくるまで花陽が撮影したのを見て練習をしましょう」

「そうだね。海末ちゃんの言うとおり、私たちは今できることをしよっか」

海末の仕切りに賛同し、彼女たちは練習を再開した。

——結局、その日は絵里は戻ってこなかった。

——そして、翌日も彼女は屋上に姿をやって来なかった。

20話・責任デザイナー

絢瀬絵里がμ、sの練習に姿を見せなくなつてから数日が経過した。

今では彼女が改案した振り付けも、μ、sたちは形にしている。

そもそも、絵里が考えた振り付けは一から作り出したものではなく、最初にメンバーで考えていたダンスを改良したもの。

そのゆえ、μ、sたちが覚えるのはすぐだった。

しかし、手掛けた絵里に見てもらつてないので、どうも彼女たちは満足できない。

せめて、自分たちのダンスが上手くできてるか確認してもらおうと何度か足を運ぶも、三年の教室や生徒会室前まで来ては東條希に門前払いを受け続けていた。

「ごめんな。まだ、顔を出せれるようやあらへんねん」

「そうですか……」

生徒会室の前で希に謝れ、顔を曇らせる海未。傍には穂乃果、ことりもいる。

全員で尋ねても迷惑だと二年生たちが毎回窺っているが、今回も絵里に会うことは叶わないようである。

「まあ、そのうち自分の方から顔出すやろ」

鎮痛な面持ちの三人に対し、彼女たちの前に立つ希は気楽そうであった。

「何度も言うけど後輩たちの前で突然泣いたのが恥かしかったから逃げとるだけやねん」

あの日、絵里が涙を流した理由をまだ知らない海未たちであるが、いきなり泣き出して立ち去れば、顔を出しづらいことは理解できる。

「じれったいようやったらうちが連れて行くし、それまで待つてもらえへんか？」
「わかりました」

希の言葉にことりが返事をする。彼女は柔和に微笑んだ。

「ほな、まだ懲りずに来てくれると嬉しいよ。えりちに毎度帰ってもらってと頼まれるけど、もう来るなどは言つてへんからな」

「解りました。また懲りずにやってきます！」

最後に力強く穂乃果が頷くと、三人は希に手を振られながらその場を去った。

彼女たちを見送った希はそのまま生徒会室で戻ると、奥の椅子に座りながら仏頂面で睨む絵里に出迎えられた。

「誰が恥かしいから逃げてるよ」

「事実やん」

むっすりと絵里に対し、希はくつくつと笑う。

「ダンスを褒められたのが嬉しくて泣いたとか、確かに恥かしくて言えへんな」
「……………」

絵里は希の言葉を否定せず、ぼつが悪そうに顔を逸らした。

それは、あの日、突然立ち去った自分を追いかけてくれた希に思わず吐露してしまった。絵里の本音だった。

ダンスが始まるまで絵里は不安だった。

自分から手直しすると言ったのに、不評を買ったらどうしようかと。

そもそも、人前で本当に踊れるのか？

バレエを辞めてから人前で踊ったことはない。μ s たちに指導はしていたが、自分から踊りを見せたことは一度もなかった。

不安す。バレエとは違うとはいえ、誰かに自分の踊りを見せることは数年ぶりである。

バレエは最後、認められなかった。精一杯頑張っても切り捨てられた。

また同じようなことがあったらと、恐れを抱えて絵里はあの日踊ったのだ。

しかし、その懸念は踊るときには既に消えていた。

ダンスを一人で手直しているときに予感していた感覚。それが実感へと変わる。

——ああ、やっぱり、踊るのは楽しい。

バレエとは違う。だが、踊る心地よさを思い出した。その後で送られた拍手と声援が、とても嬉しかった。

幼い頃に聞いた万雷の拍手と比べればささやかだが、彼女の心を満たすには十分すぎる報酬だったのだ。我知れず落涙するほどに。

長い付き合いで絵里がバレエを辞めた事情を少しは知っていた希は、自分の感情を露にした彼女に「良かったね」と言つて、優しく抱き締めた。

だが、問題はその後。現在進行形で残る課題を希が容赦なく小突く。

「散々今まで威張りした手前、自分が褒められたくらいで泣いてもうたら、そりやあ顔も出しずらいわ」

「ぐううー！」

「でも、気になってしたあらへん。やりたいんやろ、スクールアイドル？」

「誰も、やりたいなんて言つてないわ」

希の言葉に対し、絵里は力が入ってない声で否定した。

それでは、逆に認めているようだと解つてしまう態度だ。

希はやれやれと歎息する。

「なら、あの子らに見つからんよう練習を見てるのは何でや？」

「あ、あの子達が私が考えたダンスを真面目にやってるか確認するためよ……」

「そんなら堂々したらええやん」

「……………」。仮に私がスクールアイドルをあの子達としたいとして——」

「別にあの子らと一緒にには、うち一言も言っへんけどな」

「余計なことはいいの！」

茶々を入れる希に一睨みした後、絵里は叫ぶ。

「兎に角、私がスクールアイドルをやりたいとしても、どうすればいいのよ！ それこそ会わせる顔がないじゃない！」

先の希が言った言葉を少し借りるならば、絵里は散々彼女達を否定し続けていた。スクールアイドルそのものを軽視していたのだ。

そんな自分がスクールアイドルをやりたいなど、恥さらしで言えない。

そうやって思い悩む絵里の内心を把握している希は、ワザと呆れた顔で見つめた。

「既に皆の前で泣いた時点で威厳もないんやろ。うじうじするなら行動したらどうなん。認められなくても理事長に何度も掛け合った生徒会長様は何処に行ったんや？」

「そ、それとこれとは話が違いわ！」

「どこがやねん。最初は廃校問題の解決手段の一つとしてあの子らに協力したんやろ？」

「そうよ。私はあの子達を利用したのに、今更——」

「利用はお互い様やん。あの子らも最初はえりちの技術しか見てへんかった。でも、今は私は違うと思うよ。えりちと同じでな」

「希……」

「きつと受け入れてくれる。えりちが本格的に μ sに加わることでえりちも楽しいし、 μ sが更に有名なれば音乃木坂の知名度が上がって一石三鳥、ぼろ儲けや」

ついでにうちの目下面倒事が減って一石四鳥、と心の中で呟いた希はくしゃりと笑って絵里の出方を窺う。

「私が入れたところで知名度が上がるのかしら?」

「気にすんのそこかい! ていうか、このロシアナルシスト。自分の容姿に自覚ある癖に妙なところでは謙遜やな。外国の細胞はその外見だけかいな」

「え? 私、いま馬鹿にされた?」

「馬鹿にしてへん。呆れてるんや」

「ちよ、ちよつといきなり怒らないでよ……」

「えりち、怒ってへんよ。ガチで怯えんでよ。全国共通のツツコミやん。もう、さつきまでのシリアスムードがえりちのせいでポンコツ空間に置換されたやんか——」

「ポンコツ空間? ふざけた感じになったてことかしら? それは希に原因があるんじゃないかしら?」

「その真面目な分析はいらへんねん。言い返すかボケてや。それぐらい解つてよ。うちら何年コンビしとると思つとる?」

「少なくとも生徒会長と副会長のコンビは一年経つてないわよ」

「そりやあそうや。どうも、ありがとうございました。つて、お客さんいないのに漫才してるときやないねん」

「勝手にししたのは希よ」

「でも、これで気は解れたやろ?」

「いや、全然」

「即当かい! やれやれ、所詮うちは道化師。えりちを愉快的気分にかけてそのままスクールアイドルさせるには力不足やったね」

「何を言つてるのか解らないけど、気遣つてくれるのは嬉しいわよ」

「お、おう……そないか……」

「……ちよつと、変な反応しないでよ、こつちまで照れるじゃない」

頬を赤くする希に釣られて、絵里も赤くする。

第三者がいれば、いけない現場かと勘違いしそうだ。

気恥ずかしい空気になったが、陰鬱か気分からの切り替えには丁度いいだろう。

見計らった希は歎息すると、自身の荷物も手に持った。

「さてと、えりちのお喋りはここまでにして、そろそろ神社のバイトに行くわ」
「ああ、そういえば今日はバイトだったわね」

希はこの近辺にある神社、神田明神にて巫女のバイトを週に数度している。

彼女は一人暮らしであり、両親は共に長年転勤の繰り返し。仕送りは十分にあるのだが、お小遣い稼ぎと趣味を兼ね備えて神社で働いていた。

希は神秘的なものを好む。趣味は占いは当たると評判。神社で働いてる理由は靈妙な空気が体に馴染むからだ。

ちなみに、希のバイト先である神社は、sの早朝練習が行われる場所として利用されてたりする。

「ほな、今日も覗くんなら見つからんようにしいなあ」

「だ、誰も覗きなんか——」

絵里の言い訳を最後まで聞かず、希は生徒会室の扉をばたりと閉めた。

扉の向こう側で文句が聞こえてくるが、彼女は無視して歩き出す。

難儀な親友に彼女は苦笑を浮かべずはいられない。

仮に、希がスクールアイドルを絵里がやりたがっていると、sに伝えれば、彼女たちは喜んで絵里を誘うだろう。

時と場合ならそれも手だが、希はそうするつもりはなかった。

彼女は予感している。

▼ 自分が動かなくても、運命は動き出すと。

流石に新曲を発表した方がいい。

μ, sのスクールアイドルランキングは一年生が介入した頃に上がったきり、大して順位は変動していない。

むしろ、大きな目で見れば徐々に順位は下降している。

当然の結果だ。

目新しいものが何も無ければ、根強い固定ファンでもないかぎり興味は遠ざかるばかりだろう。

前々から解っていた事実。だからこそその新曲なのだ。

今回は色明の指導より歌唱力が飛躍的に伸び、踊りも絵里に寄って鍛え上げられた。衣装の方もクオリティが上がっている。

発表すれば間違いなく、以前とは比べものにならないほど注目を浴びるだろう。

しかし、その新曲も暖めるだけでは意味がない。誰かに届けてこそその曲。

最後の後押し、μ, sは絵里に自分たちの踊りを確認してほしかった。

だが、沈んでいく順位を上げさせるため、彼女たちは新曲を発表することに決めた。

PVのイメージも場所も既に決めてある。撮影する日取りも決めた。必要な機材は色明が準備し、撮影する際には穂乃果たちのクラスメートのヒフミトリ才が毎度ながら協力してくれる。

後は撮影日までに意見を詰め合わせ、ダンスの復習を繰り返すのみ。集中しなければならぬ。

けれども——彼女たちは皆、時折、浮かない表情を見せていた。

▼
トント、的に矢が当たる。

弓道部に顔を出していた海未は残心を終えた後、次の矢を構える。

一節——足踏み。二節——胴造り。三節——弓構え。

四節、打起し。五節、引分け。六節、会。

七節、離れ——弦から弾き出された矢が風を切り裂き、刺さる。

今度は的から大きく外れた場所だった。

海未は残心し、己の集中力を嘆く。

彼女の弓は最近、本調子とはいえなかった。

原因は明白。未だ姿を見せない絢瀬絵里が気がかりだからだ。

他のメンバーも同様であり、話題を出すこともなくなつたが、全員があの日見たの涙

の理由を知りたかった。

暖めていた新曲を発表すると決めたが、憂いが残った状態で撮影するのが億劫だった。

幸いにも、音楽が始まれば振り付けも問題なくできるので、撮影時も問題はないだろうと色明が見立っている。

PV撮影が終了すれば、すぐにでも新曲が発表できる。

少し前ならば待ち遠しいと、撮影日に期待と興奮が高まつただろうが、μ、sは今、一人の少女によって、暗い影を落としていた。

弓道部で弓を稽古した海未は残った放課後をμ、sに費やすため、アイカツ用の練習着に着替えた後、屋上に向かう。

海未の顔は憂鬱に染まっていた。

幼い頃から武道の稽古をして心身共に鍛えているが、弓道部で満足な射しゃができない自分を未熟と罵る。

これでは色明がPV撮影は大丈夫と言ったが、本番に失敗しないかと今から心配だ。そうやって落ち込んでいた心を無理やり持ち上げて、奮い立たせる。

絵里のことも希を伝にすれば撮影したPVを見てもらえるかもしれない。

そして、それが切っ掛けになるかもしれないのだ。

いつまでも沈んだ顔では駄目だと気合を入れ直す。

他のメンバーも同じ気持ちなはず。だからこそ、暗い気持ちを引き摺つてもなお、撮影日直前まで準備を怠っていない。

今頃はパートごとの振り付けを確認しているはずだ。自分も急がなければと、海未は足の動きを早める。

と、階段を上った次の踊り場で色明を見つけた。

鼓動が一瞬強くなったが、何故か屈んで上の様子を窺っている姿に疑念を抱く。

海未が何をしているのかと声を出して尋ねる前に、色明が彼女に気づいた。

色明は唇に自身の人差し指を当てながら、無言で手招きをする。

海未は不思議に思いながらも、物音を立てずに彼の傍に歩み寄った。

「何をしているのですか?」

静寂を欲していると察した海未は、小声で色明に尋ねる。

自分より頭一つほど高い顔は、視線で上を見るようにと彼女を促す。

海未も壁に隠れて上の階層を覗くと、屋上に繋がる扉の覗き窓を眺める絵里を見つけた。

思わず声が出かけた自らの口を、海未は慌てて抑えた。

色明がわざわざ隠れて絵里の様子を窺っているのは、声をかければ彼女が逃げ出して

しまうかと考えたからだろう。逃げない可能性は、自分たちを避けているため少ない。沈黙を心がけた海未は、色明と共に絵里の様子見する。

穂乃果たちがサボってるか休憩してなければ、屋上では振り付けの練習が行われているはずだ。海未たちがいる場所からでは屋上の様子は解らないが、絵里には見えてい

は。絵里は扉の窓を見つめるながら、時折、納得するように頷く。

遠くの的を射抜く海未の瞳は大まかな表情なら把握できた。

少なくとも嫌悪の視線は感じない。

遠くの景色を眺めているような青い瞳。

気づけば、絵里が覗いている扉の窓から夕焼けの光が差し込む。

海未が弓道部を出た頃はまだ空が青かったので、それなりの時間が経った証拠だ。

ふと、海未はその光景が懐かしさを感じたが、潮時だと思つた絵里が視線を窓から外し、階段を降りだした。

このままでは海未たちと絵里が遭遇してしまう。

お互いに覗き見していたことが発覚すれば気まずい所の話でないだろう。

海未が慌ててその場を離れようとした。だが既に色明が彼女の腕を掴み、静かか足取りで階段を降りている。

そのまま下の階の廊下に降り立つと、二人は階段側から見えない壁に隠れた。こつこつと足音が近づき、しばらくすると遠ざかる。

どうやら、絵里は海未たちの存在には気づかず、そのまま去ったようだ。

海未が疲れた吐息をすると、自分の腕を掴んだままの色明の手に気づく。

「おっと、悪い」

「いえ——会長、練習を見てくれましたね」

色明が手を離すと、彼が握っていた場所に触れながら海未は呟いた。

「少なくとも、もう関わりたくないとは思っていないようで安心しました」

そう言いながら、静かに微笑む海未。

彼女が一番恐れていたことが、絵里が海未たちのことを嫌っていることだ。

目の前で見た涙と最近遠ざけているだけでそう結論するのは早いかもしれないが、絵里が自身の踊りを海未たちに見せた時間で、触れられたくない出来事があつたかもしれない。

少女とはデリケートな存在だ。それを配慮するのは同じ少女として当然である。

また、嫌っているなら遠ざけることはしても、態々様子見に来る必要は無いだろう。

自分たちに少なくとも興味が残っている。それが解つただけでも収穫である。

「…………お前たちは優しいな」

海未がそんなことを考えていると、傍にいた色明が徐にそんなことを言い出した。

「え？ どうしたのですかいきなり？」

思わぬ些事に海未が戸惑っていると、色明は静かな目で彼女を見下ろす。

「会長が今やっていることはお前たちに混乱招き、一度引き受けたことも投げ出している無責任な行動だ」

「な——」

色明の失言に一瞬、海未は言葉を失う。

だが、彼女が何かを言い返すよりも速く、色明は困ったように苦笑を浮かべる。

「そんな風に怒ってもいいのに、誰一人として会長を責めず、全員が心配している。甘い、優しいことだ」

労わるように紡いだ言葉に、直前にあつた憤りを海未は失くしてしまふ。

そんな顔で言われたら何も言えないではないですか——。

ほんの少し不満を抱きつつ、海未は色明の話を静かに聞いた。

「プロはどんな状態でも目の前の仕事をやらなければならぬ。言い訳して、仕事をしなければ大勢の人間に迷惑がかかるからな」

色明は歌手として仕事をしているが、それは彼一人の力だけで完遂されるものではない。

CDを作るならば、曲作りや広報活動他に動く人間が複数いる。一つの番組に出るならば、自分の他にも何十の人間がその場において仕事をやり遂げようとする。

中学の頃からデビューしていた色明は、担った責任の重さを前々から理解しているのだ。

「お前たちはプロじゃないが、それでも、やるべきことは理解していた。会長の行動に戸惑いつつも、自分たちがするべきこととしている。だからこそ、俺は新曲のプロモ撮影しても大丈夫だと判断した」

色明は、sに絵里がいなくても大丈夫だと思っている。

確かに、彼女の技術がなくなるのは痛手だが、仕事を投げ出すくらいの人間ならば他を探したほうがマシだと考えていた。

色明は善良であるが、何処までも許せるほど温情ではない。

彼は気に入った人間ならば幾らでも尽くすが、気に入らない相手には容赦ない性質。

今後の、sの活動に支障が出るくらいならば、彼女たちに疎まれる手段も厭わないつもりだった。

しかし、それを決めるのは自分ではない。

これは彼女たちのアイドル活動。

「けど、仕事前に心配事はないことに越したことはないよな」

だから、彼がすべきことは初めから決まっている。

「やってみろよ。園田が本当に今やってみたいこと」

「私の、本当に今、やってみたいこと」

『やるべき』ことは現状新曲の発表だ。けど、それと同時に『やりたい』ことをやったら駄目なわけじゃねえ」

「新田さん……」

「ほら、今、お前の心の中で思うことはなんだ？ 会長に踊りを確認してほしいのか？」

会長が泣いた理由を聞きたいのか？」

「それは——」

海未は考える。確かに、色明が言ったことは前々から願っていたことだ。

しかし、夕焼けに染まる絵里の横顔を眺めて、思い返したことがあった。

同じく夕暮れに染まった場所で、一人物陰に隠れた。

すぐ傍にあった光景が気になって、ずっと眺めていた。

けれど結局、自分では足を踏み出せず、最後は——。

「——わかりました。私が今したいことを」

胸の奥で宿った懐旧の念を両手でそっと抑えて、海未は静かに頷く。

「けれど、他のみんなは賛同してくれるでしょうか？」

「大丈夫だろ。揃って同じ心配をする似た者同士だ。園田が考えていること、とつくの昔に他の連中も考えていたかもしれないねえ。仮に反対されたら俺が最初に味方になつてやる」

「ふふふ、それなら安心ですね」

ワザとらしい気障な態度をした色明に海未は柔らかく微笑む。

お陰で微かな緊張も解れた。これならば、すぐに他のメンバーに相談できそうだ。

「それでは、早速ですが皆に話したいことがあるので屋上に行きましょう」

「了解」

そうして海未は色明と屋上に向かい、扉を開けた瞬間そこにいた仲間たちに話しかけた。

「皆さん、遅れてすみません。それと急ですがお話したいことが——」



日曜日の早朝、絵里は希に呼び出されて学校に向かっていた。

何も早急に生徒会の仕事で片付けたい案件があるらしい。

詳しくは到着してから話すということ。

正直言つて、怪しい。

休日に生徒会の仕事をするのは珍しくもない。急ぎの仕事が突然出来ることもあ

る。文面での説明が面倒で直接会ってから内容を話すのも良くある話だ。

けれども、タイミングと相手が怪しい。

相手は自分の親友であるが、だからこそ彼女の怪しさは理解している。

偶然にしてしては出来すぎるほど占いが当たり、何を考えているか解らない仕草が目立つ。そして、策謀家。絵里が彼女に謀れた回数は数え切れない。

もつとも、それで酷い目ばかりにあつていたら親友など思いはしないが、それでも驚かせられるのは殆どだ。

このタイミングならば、もしかしたら業を煮やした希が生徒会にて、sたちと自分を引き合わせる魂胆なのでないかと、そう疑うのは自然な流れだ。

だからこそ、絵里は向かう必要がある。

本当に生徒会の仕事かもしれないし、μ sたちの遭遇ならば決着をつけなければならぬ。

騙されたとしても、そこにμ sたちがいてくれた方が絵里にはある意味幸い。

ここ最近、彼女たちが自分を尋ねない。

自分が拒絶してどの口がと自覚しつつも、絵里は彼女たちが遠ざかるのを恐れている。

風の噂や様子も見限る限り、近々新曲を発表するらしい。それに集中したいため、関わ

り合いを避ける人間を切り捨てるのは当然の判断だ。

そう考えると自業自得であるが、落ち込む絵里だった。

だが、しばらく引き摺つたため、今更自分から話題に踏み込む勇氣も持てない。

情けないと自虐するが、どうしようもない。

所詮、自分はこんな人間だ。普段は冷淡を装つても、性根は矮小で脆弱な小心者。

豪胆な人間ならばこんなことにはならなかつたし、バレエも辞めてなかつただろう。

(昔は賢くて可愛いエリーチカと呼ばれてたけど、これではポンコツエリーチカね)

そうやって、自分を追い詰めていると家に帰りたくなつてきたが、せめて生徒会長の仕事は果たさなければならぬと義務感で校門をくぐつた。

既に、s たちに踊りを指導することを引き受けて何が義務感だと、誰かが罵倒しそ
うである。しなくても、絵里自身がしていた。

せめて、山積みの仕事があれば忙しきで暗い気持ちも誤魔化されるのにと、絵里は辿りついた生徒会室の扉を開く。

「おはよう、えりちー！」

生徒会室には既に到着していた希がいた。

彼女は机の上で何かの計算をしている最中であり、傍には見慣れない紙袋があつた。

希の荷物だろうか？ 他に人の姿はなく、μ、s との引き合わせはないのだと悟つた

絵里は内心落ち込みつつも顔には出すまいと心がけた。

「おはよう、希。それで急な仕事ってなに？」

「実はちよつと月曜日に使う資料で計算が合わないところがあったんよ。うち一人でもできるけど、二人なら昼までに終わるし一緒に手直ししてくれへんか？ どのみち会長のえちりの確認いるし」

「……まあ、いいけど」

思っていたよりも小さな仕事で肩透かしを食らったが、仮に希が一人で手直したものがまた計算が狂っていた場合、その支障は月曜日の会議に響く。

希は要領もいいし、仕事も速い。だが、必ずしもミスがないわけではない。

二人でやったほうが効率がいいのも確かなので、希の要請は妥当だった。

しかし、解せない部分がある。

「けど、それなら態々こんな早朝に呼び出す必要がなかったじゃない。手元に資料があるなら私か貴女の家でやってもよかったんじゃないかしら？」

「わざと作った仕事やからな。ここでやらないと意味ないんよ」

「はっ。」

希の意味不明な言葉に、絵里の思考が僅かに停止した。

面白がるように微笑んだ希は、傍にあつた紙袋を取り立ち上がって絵里に近づく。

「仕事がないのに仕事があるって呼び出したら騙したことになるやん。だから、わざわざ本場に仕事を作って、本命は別な訳やで。ほら、うち何も騙してへん」

「の、希。貴女は何を——」

「ほな、これを受け取つてな」

そのまま希は狼狽する絵里へ押し付けるように手に持っていた紙袋を渡した。

流されるまま受け取った絵里は、恐る恐る紙袋から中身を取り出した。

「なに、これ？」

「プレゼントや」

紙袋の中身は——服だった。

折りたたまれた状態でも解る。

フリルつきのノースリーブシャツ。ワインレッドのベストに、赤いリボンがついた小

さなシルクハット。

街に出かけるための服でもなく、家で過ごすための服でもない。

そう、それはまるで、ステージでも踊るような華美な衣装だった。

「あの子らからの、な」

「!？」

希がウインクをして絵里の背後を指差す。

それに釣られた絵里が振り返ると、いつの間にか現れた六人の少女たちに気づいた。

「貴女たちは——」

「会長、久しぶりですね」

驚く絵里になつこりと笑いかけたのは穂乃果だった。

「どうです？　ことりちゃんがデザインして私たち皆で作った会長の服ですよ」

「わ、私の？」

「はい！　私たちに踊りを教えてくれたお礼です」

きつぱりとそう言ったのは海未である。

「寸法の方はご安心を。副会長から聞いてますから」

「どうですか？　ことりが考えたお洋服？」

次に絵里に話しかけたのはことりだった。

「え、えつと……………」

「もしかして、気に入らなかったですかあ？」

「!?　いえ、そんなことはないわ！」

「なら、よかったです♪」

潤んだ瞳に焦った絵里が咄嗟にそう言うのと、一瞬前の悲しそうな顔が嘘だったように満面の笑みを見せた。ことりちゃん、流石である。

「で、でも、いきなり可愛い衣装を渡されても使い道に困りますよね。勿論、好きに使ってくれてもかまいませんが、ね？　ま、真姫ちゃん」

「そ、そうね、花陽。どうせなら有効活用した方が経済的よね。例えば、それ着て踊っちゃうとか？」

「二人とも白々過ぎるにや」

『凜（ちゃん）!?!』

しどろもどろの会話に思わず凜が突っ込むと、真姫と花陽が顔を真っ赤にして叫んだ。

それがとても愉快で、真先に穂乃果が笑い、次に希がくすりと笑う。

微笑みは伝播し、続々と楽しげな声が増え、部屋が一気に少女たちの笑い声に包まれた。

「あ、貴女たち、どういうつもり？」

「解りませんか？」

唯一、笑わずに呆然としていた絵里を、余程可笑しかったのか目じりあつた涙を拭いて、海未がまっすぐと見つめた。

「私たちは会長を、一緒にスクールアイドルをやらないかと誘いに来たのです」

「!？」

それを聞いた絵里はすぐさま後ろにいた希を睨む。

「言つとくけど、うちからは何も言つてへんよ」

しかし、絵里が問いただすより速く、希が微笑んだまま言った。

「この子たちは自分らから、えりちをスクールアイドルに誘いにきたんよ」

「会長を踊りと初めて見たとき、私、感動しました」

その言葉を発したのは穂乃果だった。

絵里は改めて振り返り、μ'sたちを見る。

先程、発言した穂乃果は真剣な表情で絵里を見つめていた。

否、彼女だけではない。六人の少女全員が同じ目をしている。

「初めてているのは動画じゃなくて、目の前で実際に見せてくれたあの時です。」

あの日、あの屋上で、自分たちが考えたもの以上のものを見せてくれて、凄いなって

思いました！ 私もこんなふうに踊りたいと！

けど、それ以上に、会長と一緒に踊つてみたいと思つたんです！ この人と踊れたら

絶対に見たことない景色が見えると、本気で思えました！ 他の皆も同じ気持ちです

！

「っ……………」

「でも、その後で会長がいなくなつて、会おうと思つても会つてくれなくて、そんな時、

海未ちゃんが教えてくれたんです」

今度は自分の番。そう思い、海未が一步前に踏み出す。

「少し前に、会長が私たちの練習を眺めているのを偶然見かけました」
「!？」

「失礼ながら、声をかけたらいなくなってしまうそうだったので、そのまま私は会長の様子を窺ったのです。……これからは単なる私の憶測です」

そう憶測で何も根拠がない、でも海未は言わなければならなかった。

いや、言いたかったのだ。

「勘違いならば会長だけではく、期待させた仲間にも弁解の余地ありません。けど、私は貴女の目を見て思ったのです」

一緒にやりたいのではない、かと。

「だから勝負に出ました。私たちの思いだけで無理強いはしたくない。けれど、貴女の心の中に僅かでもそんな気持ちがあるならば、その服を着てみてはくれませんか？」

「わ、私は……」

絵里は顔を歪ませながら、ぼろりと涙を流した。

「貴方達を、軽蔑してた。スクールアイドルのことも馬鹿にしてたわ。それなのに、私は

貴女たちに迷惑をかけた。そんな私で、本当にいいの？」

「会長たるものが、問いに対して問いで返すのは良くありません。良いから、私たちはここにいるんです。ほら、今度こそ、次は貴女が答える番ですよ。」

「……本当の気持ちを、私たちにどうか教えてください」

「あ、う」

優しく、見つめる瞳。

絵里はすぐに答えることができなかった。それまでの葛藤が、彼女の喉を詰まらせる。

けれど、その場にいた少女たちは急かさず、静かに彼女の言葉を待った。

決意は本人にしか出せない。だから、少女たちはいつまでも見守る。一人の少女の声を。

何度目かの轉りの後、搾り出すように絵里は言った。

「私も、スクールアイドルをしたい……!」

一度言うのと止まらなかつた。絵里は受け取った衣装を抱きしめて、涙を流して叫ぶ。

「私も! スクールアイドルをしたい! 貴女たちと一緒に!」

「会長!」

最早我慢の必要はないと、泣き出した絵里を抱きしめるために穂乃果が動く。海未が

そこで新たな声が聞こえた。

声の主は、物陰から成り行きも見守っていた色明だった。

彼が登場すると、絵里は異性に泣いてる姿を見られるのに抵抗があるのか、慌てて姿勢を正そうとする。

「PVだけならパートごとの録音でいいですし、最新の機器で誤魔化せます。もつとも、生音でも人前で聞かされるよう、これから鍛えるんで覚悟してくださいね」

そんな彼女の様子を見て見ぬ振りをしているのか、色明はそのまま話を続けた。

「撮影に関しては、会長は振り付けを考案した本人だから問題ないでしょう。即興で合わせれるぐらいの技量はみんな期待してますしね」

「そんな、いきなり言われても」

「ここから、やり初めから泣き言を言ってどないすんねん」

「いたー！」

急な展開についていけない絵里の背中を希がバシリと叩く。

「ほら、生徒会の仕事はうちがやるから。今日のえりちはアイカツに集中し」

「希……………。まったく、仕方ないわね！」

そう言って、絵里は力強く笑うのであった。



「しかし、今更だがどうして会長さんがスクールアイドルをやりたいと思ったんだ？」
色明が問いかけるのは、出番待ちで待機している海未だった。

二人の目と鼻の先では、飾り付けした廊下で真姫と踊る絵里がいる。

彼女は合わせるのが初めてとは思えないほど、他のメンバーとの動きに合わせて、楽しそうに笑っていた。

「大したことじゃないですよ」

出番まで衣装を見られるのが恥かしい海未はタオルケットを羽織ながら、色明の質問に答える。

「昔を、思い出したんですよ」

「昔？」

「私と穂乃果、ことりは生まれる前からの知り合いなんですけど、ちゃんと知り合ったのは幼稚園くらいの頃なんですよ。」

きつと、その前にも親たちが昔からの友人なので顔合わせはあったのでしようが、記憶に残っているのはその頃から——

「そりゃあ、赤子の頃の記憶が残っている方が珍しいだろうよ」

「ですね。話が戻りますが、その頃の私は引っ込み思案で、今もどちらかと言えばそうですけど、その頃はもつと酷かったです。自分から誰かに話しかけることなんて、とて

もできませんでした。

そして、ある日、公園で遊ぶ穂乃果とことりを木に隠れて眺めていた。本当は自分も一緒に遊びたいのに」

思い返したのは夕暮れの記憶。

どういう経緯でその場にいたのかは思い出せないが、その時の自分は楽しそうに遊ぶ穂乃果とことりが羨ましかった。

けど、臆病な幼い頃の彼女は自分からでは、混ぜてと言えなかつたのだ。

「そんなとき、穂乃果が私に話しかけてくれたんです。突然のことで私は怯えてしまいました。穂乃果は笑顔で私を誘ってくれたのです」

「高阪らしいな」

「私もそう思います」

今でも変わらない親友に一瞥し、海未は続きを語る。

「それをあの日、会長を見たときに思い出して、その時の自分のようだと思い、今度は自分が誰かに手を差し伸べられたらと思った次第です。」

ね？ 大したことではないでしょう」

「……………、お前がそう思うならそうなのだろうな」

「はい、それだけのことです」

これでこの話は終わりだと思った矢先、色明ぼつりと呟いた。

「——けど、俺はそれを尊いと思うよ」

思わず、海未は傍にいろ色明を見上げる。

色明は平然とした顔で撮影を眺めており、先程の言葉は彼にとって大したことではなかったのだろう。

しかし、海未にとっては気恥ずかしさと嬉しさがこみ上げてる言葉だった。

「そう、ですか……………」

彼女は熱くなつた顔を隠すように俯く。

まったく、この人は簡単にそういうことを何故言えるのかと、僅かに腹も立てた。

「おーい、海未ちゃん。次、海未ちゃんの番だよ！」

「あつ！ 解りました！」

そこで穂乃果が彼女に呼びかけたので、海未が羽織っていたタオルケットを脱ぐと、それを色明が摘み取った。

「ほら、出番だ。行って来い」

「！ はい、行ってきます！」

21話：二人のペールタイム

「うわあああああ！」

「………凜ちゃん。神社なんだから静かにしないと駄目だよ」

「ごめん、かちゃん。でもでも、これ見てよー」

新たなメンバー絢瀬絵里を加えたμ sたちは、早朝練習のため地元の神社に来ていた。

神社での朝練は主に体力作り。境内であるため、音を出す練習は一切せず、階段の上り下りや筋力トレーニングを行っている。

だが、彼女たちは全員集まっておらず、まだ練習も行っていない。

残りの穂乃果とことりが来るまで、準備運動も済ました凜が暇を持て余し、共用のノートパソコンを覗くと、驚きの声を上げたわけだ。

そんな彼女に促され、花陽もパソコンの画面を覗く。

開いていたスクールアイドルの公式ページには、このように映し出されていた。

μ s (ミュージズ)

→UP! RANK 060

「Congratulations! (V、)」

「おお。また、上がってるね!」

凜ほど大きな声はださなかったが、花陽も映し出された情報に驚き、そして喜ぶ。

「まったく、何度も飽きずに見えるわね。ここに来る前にも見たでしょう」

興奮している二人に目を向けながら、真姫は興味なさそうに髪を弄んでいた。

なんてことはない。凜や花陽とお話したいのに、二人ともパソコンに夢中で拗ねているだけだ。

「新曲を上げてからドンドン順位が上がってるにや」

「ほらほら、真姫ちゃん。これプロが作った曲じゃないんですか? て言われてるよ」

「失礼ね。真正正銘、この私が作ったに決まってるじゃない」

言葉では嫌味が効いているもの、微妙に口端は緩んでおり、満更でもなさそうだ

μ'sは新曲を上げて以来、スクールアイドル内での順位を瞬く間に伸ばしている。

絵里の介入により、彼女の歌を入れるため発表が予定より遅れたが、その分想定以上の成果を得た。

ほんの少し前までは三桁だった順位はすぐに二桁になり、今でも日毎に地位を上げている。

この飛躍は当人たちが一番驚いているが、上昇自体は当然の結果だ。

そもそも、三人だったときと比べて、七人になって上げた動画は全てのレベルが違う。歌を色明や真姫によつて磨かれ、踊りも絵里により鍛え上げられた。時間があつた分、ことりが作つた衣装もクオリティが上がっており、演出も前より派手。目立たないわけがない。

そして、この急上昇は新曲の力だけではなかつた。

「絵里先輩が加わつたことで女性ファンがかなり増えましたね」

手持ち無沙汰にしていた海末もパソコンを覗き、詳細な数字を確認する。

他のメンバーも粒ぞろいだか、絵里は異国の血が混ざつてゐるあつて毛色が違う。

前々から解つていたことだが、彼女はそこにいるだけで人を惹きつけるのだ。異性が魅了されるのは無論のこと。同姓も嫉妬するよりも先に憧れの目で彼女に魅入る。コメントでも新しく入つた絵里のコメントが一番多い。

「流石ですね。背も高いし、足も長いですもんね。まさに女の子の理想つて感じですよ。海末の言葉に花陽が頷き、自然と周囲の視線が絵里に集まる。

改めて見ても、メリハリがある体型。締まっているところは締まっており、出るところは出ている。

花陽の言うように、乙女にとつての理想な体だつた。

「うん！ 何よりおっぱいが大きいじゃあ！」

「ちよつと！ やめてよ！」

凜の無遠慮な言葉に絵里は胸を腕で隠した。

腕に抱えられることで逆に豊満な乳房が強調される。思わず海未はなだらかな自分の胸と比べて、人知れず溜息を零した。

絵里は顔を真つ赤にしながら、不満そうな顔でちらりとある者を見る。

「彼がいるんだし、そういう話題はちよつと」

「別に意識してませんよ」

毎度の事ながら、少女たちに紛れる唯一の男性、色明は特に気にした様子がない。

彼も絵里は魅力的な女性だと思いが、だからと言って不躰な態度は一切見せなかつた。

元々、姉の教育や、芸能活動で麗しい異性に耐性がある。そうでなければ、見本生という特殊な立場を任せられないだろう。

「けど、アイドルやるんならそれぐらい軽く流さなければ駄目すよ」

「そうなの？」

「他のメンバーにもいえることだが、注目が上がった分、色んな人間の目に止まる。エロイ目で見る野郎なんざ数えるのが馬鹿馬鹿しいほど増えるでしょうね」

絵里が途端嫌そうな顔を浮かべ、他の少女たちも顔を曇らせる。

アイドルなのでそういう目で見られることは承知の上だが、不快であることには変わらない。

そんな彼女たちに色明は現実を語る。

「どんな奴でも嫌な顔せず、涼しい顔で流す。それが世渡りつてもんですよ。一々目くじら立てた方がやり辛い。絵里先輩だつて覚えがあるでしょう?」

「返す言葉もないわね」

会長である立場なので、人に注意することは当然ある。

だが、相手の顔色を全く窺わずに我を通せば、他から反感を得るのだ。

よつて、絶対に通さなければならぬ筋以外は、ある程度受け流すこそ処世術の基本である。

「特にアイドルは人気があつてこそ。一部の馬鹿共のせいで自分まで泥に飛び込むのは、それこそ馬鹿馬鹿しい」

「つまり君は嫌な目で見られても我慢しろと言いたいのか?」

「なわけねえでしょう」

絵里の言葉に色明は一蹴した。

その反応を見て絵里は一瞬驚きつつも、すぐ嬉しそうに顔を緩める。

「あら? さっきの言葉とは違うわね」

「何でも許せつてわけじゃないですよ。流せないほど我慢するくらいなら、相応の制裁が必要ですよ」

「例えば？」

「当然、通報するか近くの人間に助けを求める。世の中、女性に格好をつけたいフェニミストだらけですからね。綺麗な女性を救つてヒーロー気取りたい男は幾らでもいるさ」

「へえ……。なら、君もその一人かしら？」

「か弱い女の子を見過ごすようなら、俺はとつくに姉か武道を覚えてくれた師匠に制裁されてます」

実際、彼は街中で自分のファンが絡まれたら助けたし、海末の窮地を救つたこともある。

女を守る男という点は、合格といえるだろう。

色明が其処まで言うと、絵里は安心したように微笑む。

「なら、私たちがいつか握手会でもするときは、君にボディガードでもやつてもらおうかしら。アイドルがそういうイベントするとき、そういう人は必ずいるものでしょ？」

「ご使命とあれば何なりと。お姫様たちを守るのは騎士の務めです」

「X O P O ！ 頼りにしてるわ、色明」

色明の芝居がかった言葉に、絵里は満足そうな笑みを見せる。

「そうやって二人が会話している間に一年生三人組が集まり、なにやらヒソヒソと会話していた。」

「先輩たち、いつの間にか仲が良くなってるね」

「遅れて入った絵里先輩のために新田先輩が歌の個人レッスンしてるから、それでじゃない？」

素材がいいからと言っても、絵里がμ'sに最近介入したの事実である。

ダンステクニクはともかく、歌唱力に関しては色明や真姫によって鍛え上げられた他のメンバーたちに劣っていた。

そのため、絵里が他のメンバー同等になるまでの間、色明が彼女の個人指導しているのだ。

「しかし、美男美女だから絵になるにやあ」

ふと、凜がそんなことを呟いた。

彼女の言葉どおり、二人のツーショットは見栄えが良い。

前述どおり、絵里は人目を惹きつける美貌も持っており、色明もルックスが高い。宛ら雑誌のページを飾っているか、あるいはドラマのワンシーンのような見栄えの良さだ。

「こうやって二人を見ると、噂されるのも仕方ないね」

『噂?』

聞き覚えのない言葉に凜と真姫が疑問符を浮かべたので花陽は教える。

「真姫ちゃんの言ったように、新田先輩が絵里先輩に歌の練習をしてるけど絵里先輩熱心だから、空いた時間はよく新田先輩を尋ねてるみたい。それで二人を見かける子が増えてるんだよね。」

更に最近、絵里先輩の態度が前よりも柔らかくなったから、二人は付き合ってるのではないかと噂されてるんだよ」

「初耳だわ」

「凜も。かよちゃん、そういう話相変わらず好きだにやあ」

なお、絵里の態度が柔らかくなったのは悩みを吹っ切り、スクールアイドルを楽しくでるからだ。

以前の彼女は鬼気迫るものがあり、近寄りがたいイメージがあつたが、それが払拭され、自ずと笑顔が増えている。

最近雰囲気が変わつた少女の傍に異性の影があれば、そのような憶測が生まれるのは自然だ。

そもそも、絵里自身元々目立つし、唯一男子生徒の色明も当然目立つ。

更には生徒総数が少ないだけあって、疑惑の流布は早く広がる。田舎で噂が流れるのが早いと同じ原理だ。むしろ、凜と真姫が知らなかったほうが珍しいくらいである。

当然、一年生の会話を傍聞きしている海未もその噂は知っていた。

全ては妄想の産物だと思っっている海未だが、親しげな色明と絵里を見ると心の中がもやもやした。

(いつの間にか、お互いに名前で呼び合ってますね)

絵里の呼称に関しては、全員が会長から『絵里先輩』に変わったので、色明が合わせただからだ。

色明を名前で呼び捨てしているのも、彼女は μ sのメンバーを名前で呼び始めたので、それに合わせただけである。

なお、色明は絵里が μ sを遠ざけていたとき、責任放棄と不満を抱いてたようだが、既にそれは彼女が介入時に謝罪したことで解消されていた。

あとは二人きりの歌唱特訓で親睦を深めたわけだ。二人とも歩み寄る精神を持ち合わせているため、蟠りをなくのは必然である。

ただし、あくまで友人レベルまでであり、噂にされるような男女関係はない。

そのはずだと思いつつ、互いに気安そうにしている二人を見ると、海未は妙に落ち着かなかった。

未だ色恋に疎い彼女は、ただ黙って眺めることしかできない。

「おはよう、みんな！ お待たせ！」

「おはよう♪」

丁度そこで穂乃果がことりと共に走ってやってきて、色明と絵里の会話も中断された。

そこにほつとししつ、海未は幼馴染二人を出迎える。

「おはようございます、穂乃果、ことり」

「うん！ 海未ちゃんおはよう！」

「おはよう♪」

「すみませんね、ことり。穂乃果の迎えを貴女だけに任せて」

「全然いいよ。練習メニューを考えてくれてる海未ちゃんまで遅刻したら、みんな困っちゃうもんね」

「待つて待つて、二人とも。私、少し寝過ぎたけど遅刻してないよ、ほら、時間時間」

そうやって携帯の時間を見せてくれる穂乃果へ、海未は呆れたような溜息を見せた。

「滅茶苦茶ギリギリじゃないですか。もう、いいですから準備運動して早速練習しますよ」

「いや、その前に少し待つて」

「なんですか？ 走ってきたから少し休みたいのですか？」

「それもあるんだけど、みんなに話したいことがあって」

「話したいこと？」

みんなという言葉で全員の意識が穂乃果に集中する。

余程の吉報なのか彼女は嬉々とした笑顔であり、全員に聞こえるよう大きな声で叫ぶ。

「みんな、聞いて！」

「穂乃果。神社なんですから、もう少し静かに」

「ぎ、ごめん」

海末に注意された穂乃果は、出足を挫かれながらも笑顔を再び作り、今度は近所迷惑にならない程度で言った。

「みんな！ 実は次の日曜日、ライブすることが決まりました！」

『ライブ？』

「そう！ ライブだよ！ 実はうちの卸先の人が今度の日曜日にミニライブしないか誘ってくれたの」

「随分と急な話ね……」

いきなりの報告に絵里が呆然としている。他のメンバーも似たような反応だった。

「場所はデパートの屋上なんだけど、ヒーローショーする前の時間に歌ってくれないかって」

穂乃果の家は老舗の和菓子屋である。作った菓子は自分たちで売る他にも、別の小売店で委託販売も行っているのだ。

今回はその取引先から声が掛かった次第である。

「なるほど、本命はそのヒーローショーで、お前たちは前座。そしてヒーローショー前の客寄せか」

「まさにそうなんだけどね。でも、わざわざ私たちを選んでくれたのは変わらないよ」
察した色明の言葉を否定せず、穂乃果はやる気に満ちた表情を崩さない。

「折角、人前で歌える機会を貰えたんだし、チャンスだと思ってすぐOKしたんだ。で、どうかな?」

「どうかなって。もう穂乃果が了承したなら、やるしかないじゃないですか……」

また海未は呆れたように溜息をするが、今度はすぐに笑顔を浮かべた。

「穂乃果の言うとおり、人前で歌える機会を頂けたのは光栄です。謹んでお受けしましょう」

「そうね。自分たちでライブしたいと思ったたら色々と手間だし、ここはご好意に甘えましょう」

海未に続き、絵里がそういうと突然のライブに戸惑っていた他のメンバーたちも徐々にやる気が始まった。

「人前で歌うのはファーストライブ以来だけど、ことりも頑張ります!」

「そ、そうですね。撮影じゃないなくてライブなんだがからお客さんがいますよね。うう、どうしよう」

「花陽、始まる前から緊張しないの。決まったことなんだから、どーんと構えてなさい」
「真姫ちゃんは緊張しないの」

「別に。人前で歌うことは初めてでも、音楽を披露することは初めてじゃないわ」

「さすが、真姫ちゃん。心強い!」

「デパートの屋上かあ。新田先輩のお姉さんたちが歌ったような場所かな?」

「凛ちゃんの期待を裏切るようで悪いけど、あそこまで凄い場所じゃないよ」

凛の言葉を聞いた穂乃果は思わず苦笑を浮かべる。

色明の姉、新田美波とアナスタシアらが歌ったイベント会場は、殆どがプロが主催する本格的な舞台だ。比べること事態、おこがましい。

「そうだ! なら、今日の放課後は皆でライブをするデパートの屋上に行ってみようよ。下見と挨拶も兼ねてさ」

「そうですね。穂乃果のいうとおり、挨拶と歌う場所の確認は必要です。挨拶も礼儀と

して当然ですが、当日行って不足の事態があつてもいいように」

海末の言葉の後で反対意見は出なく、放課後の予定が決まった。

「よし、今日の放課後は皆でお出かけだ——」

「なら、その分、朝は放課後をする分の練習が必要ですね。いつもより三倍のメニューをしましょう」

「——」

「ほら、やりますよ穂乃果。早くしないと学校に遅れます」

「はい……」

遅れてでもやる気なのかとは言わず、朝からテンションMAXだった穂乃果はここでテンションDOWN。

彼女は気落ちした心でいつもの三倍メニューをした後、疲れて授業中に寝てしまい、何度も怒られるのであった。

▼

穂乃果が通算七回授業中に叱咤された学業が終わると、μsたちは彼女の案内でライプを行うデパートに向かった。

その場所は秋葉原から駅数個分のところにあるが、そこまで遠出でもない。

なお、この場に色明はない。いつも通り、彼は仕事である。

しかし、ライブ当日は来れるようなので、後日、自分だけで現地確認をするようだ。

μ s 一行は彼女らを誘ってくれたイベント責任者に挨拶すると、その足で自分たちがライブする屋上に向かった。

「おお！ 小さい遊園地があるにやあ」

幾つかの売店に飲食スペースのテラス。一角には幼い子供用の遊具が沢山あり、反対側にはライブを行うであろうイベントステージ。典型的なデパートの屋上といえる場所だ。

「懐かしいにや。昔はよくあの動く動物で遊んだよね」

「そうだね。すぐにお金がなくなるから勿体無いつてお母さんに怒られたっけ」

硬貨を入れて動く、小さな乗り物を眺めながら幼い頃の思い出に花を咲かせる凜と花陽。

その傍では海未は辺りを見渡していた。

「このデパートには初めて来ましたが、平日でも人が多いですね」

「そうだね。駅から近いし、大きいからかな？」

海未の言葉に、ことりが同意する。

来る途中でも、建物の中には様々な小売店があった。以前、LOVE LAIKARAのライブで向かった超巨大商業施設ほどにないにしろ、見て回れるほどの物に溢れ、人

も賑わっている。

「これなら休日はずいぞう人が多いでしょうね……」

実はデパートの屋上ならそこまで人はいないだろうと高を括っていた海未。

だが、実際に現場を目の当たりすると、想像以上の人だかりで焦りだした。

ファーストライブは自分が通う学校だったが、慣れ親しんでない場所で人に見られると思うと、足が震えそうである。

そんな幼馴染に気づいている穂乃果とことりだが、身を按じたりはしなかった。

いざというときは海未は人前で芸を披露できる。そうでなければスクールアイドルを始める以前から、実家で日本舞踊の舞台に立てれないだろう。

勿論、一度只を捏ねだしたら一苦労するのだが、自分から泣き言を言わない内は大丈夫だろうと、幼馴染たちは見守るのであった。

「うーん」

「どうしたんですか?」

なにやら悩ましい顔を絵里がしてたため、真姫が何事かと尋ねる。

「ちよつと確認したいことが。穂乃果、あそこが私たちが踊るステージで間違いないのよね?」

「ええ、そうですよ」

「なら少しステージの上に登ってみるわ。管理の人からは許可もらってるしね」
「あつ、なら私たちも。みんな、行こう」

何かステージに気になる絵里に続き、他のメンバーたちもステージに向かう。

全員がステージに上がったところで、やっぱりと絵里が納得したように頷いた。

「少し小さいわね」

「……絵里先輩。使わせてもらえるんだから文句は——」

「ごめんなさい。別に悪口を言うつもりはなかったのよ。ただ七人で踊るにはステージの横幅が足りないと思ってね」

「言われてみれば……」

確かに今立っているステージは、学校にある講堂のステージやダンスの練習をしている屋上に比べて狭かった。

それに気づいた他の少女たちも、絵里が何を気にしているか察する。

「これだと、普通に踊ったらぶつかってしまいうわね」

「なら、振り付けをステージに合わせて身振りを小さくします?」

「——、いえ、それは止めたほうがいいわ」

真姫の提案を絵里は少し考えてから却下した。

「お客さんの中には私たちを知っている人もいるかもしれないし、どうせならライブの

告知もしたいわ。そうやって集まった人が、PVよりも小さな動きをしている私たちを見たらどう思うかしら？」

「手を抜いてるように見られる、かも？」

花陽の言葉に絵里が頷く。

「そうよ。少なくとも、この前公開した新曲を七人でするは避けたほうがいい」

「なら、全部カバーで披露しますか？」

自分たちの曲が踊れないなら、他の曲をやるしかない。

μ's たちは技術向上のため、プロの曲も練習している。商業目的でなければ、披露することは問題はなかった。

「いいえ。全部の必要でないわ。そもそも、私たちが持っている曲は二つ。貰った時間を考慮すると、あと一曲分は何かしらカバーをするしかない」

そう言いながら絵里は自分の頭の中にあるライブスケジュールを説明する。

「今考えたのは、最初はスタダを二年生の三人で。次にこれSomeを私と一年生の四人。最後に振り付けが小さい有名曲を七人でカバーしようと思うの。」

私たちに興味ない人たちでも、最後が知っている曲ならば耳を傾けてくれるわ。それなら客寄せとしての役目も十分果たせるはずよ」

『おおー！』

即座に代案を出した絵里にメンバーたちは感服した。

ちなみに、スタダは『STARTR:DASH!!』。これSomeは『これからのSome day』の略称だ。

ファーストライブで行った二年生が『STARTR:DASH!!』披露できるのは当然として、他の四人が『これからのSome day』を担当するならば問題ない。

追加メンバーたちも『STARTR:DASH!!』は練習しているが、完成度は自分たちが最初に覚えた『これからのSome day』のほうが高いからだ。

振り付けが小さいカバー曲にすることで、七人揃ってステージに立てても問題なく、主催者側の集客も考慮しているいい案である。

「さすが絵里先輩！　すぐそうやって思いつくなんて、凄いですね！」

「ほ、穂乃果さん。そんなに褒めても何も出ないわよ。これぐらい誰でも思いつくわ」
素直に賞讃する穂乃果に顔を赤くして照れる絵里。

四月頃に対立していたとは思えない光景だった。

「けど、一年生には四人編成の振り付けを覚えてもらうわ。大丈夫？」

「覚えてるって言っても、少し立ち位置を修正する程度ですよね？　問題ありません」

「凜も大丈夫です」

「わ、私も頑張ります」

その他にも何か気をつけなければならないものがあるか確認し、その日は帰宅する。

翌日から彼女たちはライブ中心の練習を行い、宣伝もスクールアイドル公式HPのマイページで告知。学校内には花陽の手描きポスター。街中でも軽くチラシ配りをした。

既に衣装も持ち込んでおり、前日にはデパートが開店する前の早朝にリハーサルも行っている。まさに準備万端の状態。

そうこうしている内に、μ'sたちはセカンドライブの日を迎えたのであった。

▼ 「流星に速く来すぎましたかね」

一人で前入りした海未は割り振られた控え室の時計を見た。

時刻は十時四十五分。

集合時間はお昼過ぎの十三時であり、ライブ開始時刻は十四時である。

最初は穂乃果、ことりと来る予定の海未だったが、昨晩に興奮して眠れなかった穂乃果がまだ就寝中だったため、ことりに任せて彼女一人で向かった訳だ。

最初は海未も穂乃果を待とうと思ったのだが、ある人物がかなり早く来るようだったので一足先に向かったのである。

「おはようございます——って、園田？ もう来てたのか」

扉を開けたのは、伊達眼鏡をかけた色明だ。頭には帽子を被っており、軽めの変装だ

が注視しなければ誰なのか把握することは難しい。

もつとも、顔見知りである海未にこの変装はしていないようなものだったので、特に気にすることなく挨拶をする。

「今来たところですよ。新田さん、おはようございます」

海未が軽く挨拶をすると、色明は少し驚いた顔で彼女を見つめていた。

「随分と早い到着だな」

「新田さんが早めに到着するとお聞きしましたので」

色明はライブが行われるデパートの下見をするつもりだったのだが、多忙だったため、結局訪れることはできなかった。

よって、色明は当日道に迷わないように早めに来たわけだ。

彼は仕事で様々な場所に赴くことが多いため、行ったことがない場所へ向かう際には、今回のように余裕をもって行動するのが習慣付いている。

しかし、彼に合わせて海未も早く理由が色明には理解できなかった。

「なんで俺に合わせて来たんだ？俺が言うのはなんだが、前入りにするには早くないか？」

「歌う私たちよりも貴方が先に到着しているのは気が引けるので」

そう言った海未の言葉に色明は得心しながら、ばつの悪そうな顔をする。

「ああ、気をつかわせたか？」

「いいえ。私が勝手に来ただけです。貴方こそお気遣いなく」

やんわりと微笑みながら、海未は手荷物をテーブルに下ろす。

「本当は穂乃果やことりも一緒に来て、昼食を此処で取る予定でしたけど……。穂乃果が寝坊してしまったので、私だけでもとやって来た次第です」

「――、高阪寝坊してるのか？」

「集合時間には十分間に合いますよ。念のために、ことりが迎えに行ってますしね」

「なら、大丈夫そうだな」

寝坊という単語を聴いて顰めた顔を緩ませる色明。

高阪穂乃果が寝坊する様子は頭の中で簡単に想像できるが、引き受けた張本人が寝坊で遅刻するなど洒落にならない。

「さて、早めの集合したのはいいもの。時間が余っているのは事実だな」

「そうですね。しかし、準備するのは流石に早すぎますし、他の皆を気長に待つことにします」

「待つのはいいが、園田。飯はどうした？」

「朝ごはんですか？ 当然、朝家に出る前に食べてきましたよ」

「それって何時くらい？」

「今日はいつも通り朝稽古を済ましてからです。八時前には終わっていたかと」
海未の話を聞いていた色明は、彼女に感心した眼差しを向ける。

「健康的で何よりだ。ちなみに俺は寝起きに飲料ゼリーをぶち込んだ程度だ」

「お忙しい中、お時間を作るのは難しいかもしれませんが、ちゃんと食べたほうがいいですよ」

「出来る限りそうあるよう心がけているさ。今日は朝に足りなかった分を、今から補おうを思っている。少し早いが昼飯だな」

「なるほど、それはいい考えです。開店したてならば飲食店に人も少ないでしょうし、ライブまでゆっくりしててください」

「園田も一緒にどうだ？」

「——え？ わ、私もですか？」

一瞬、理解するのに時間か掛かった。

色明から昼飯の誘いに、海未は戸惑う。

提案は普通だ。

ライブがあるので量は控えめにするが、早めに昼食を済ましておば本番に響かないだろう。

だが、海未は色明と二人きりだと思った途端、顔の熱が上がった。

別に色明が嫌なわけではないのが、海未は家族を別にして、異性と二人つきりで食事をする機会は一度もなかった。

それを意識すると、彼女は緊張して思わず口籠る。そんな海未に、色明が苦笑を浮かべた。

「無理に付き合う必要はないぜ。一人で行くから、他の奴ら来るまでゆっくりしな」「え？ あつ、ちよつと待っててくださいい！」

そのまま立ち去ろうとした色明の袖を慌てて、海未は掴み取る。

「私も行きます！ 是非、ご一緒させてくださいい！」

「気を使う必要はないぞ？」

急に意気込んできた海未に戸惑う色明がそう言うと、彼女は首を横に振った。

「気なんて使つてません。むしろ折角のお誘いを断るような真似をするほうが気を使います」

「そうか。なら、一緒に行くか」

可笑しかったのは見て取れたが、色明は追求することはせず、改めて彼女を誘った。そう言うと、海未は安心したように微笑む。

「はい！ では、参りましょう！」

▼ 開店して時間も経っていないが、休日だけあって既に店内には沢山の客をお目にする
ことができる。都内で駅から近く、それなりに大ききならば集客はむしろ当然だ。

それでも、海未たちが歩く飲食店が建ち並んだフードコーナーには人影がまだ少ない。
い。

昼にはまだ早い時間であり、此処に来る客の殆どは遅めの朝食、あるいは海未たちの
ように早めの昼食だった。

二、三時間すれば買い物や映画などを終えた人間によってここも人口密度が増す。そ
うなれば入店し易い場所も限られてくが、逆に言えば、今はどこも空いているため、ゆっ
たりと選べるのだ。

海未と色明はゆったりとフードコーナーを一周した後、ランチメニューが豊富な洋食
店に入った。

「しかし、意外だな。園田のことだから和食でなければいけないと思っていた」

案内された席に座り、注文後、色明は向かい合わせで座る海未にそんなことを言う。

人が少ない店内とはいえ、色明は変装の眼鏡を取っていない。流石に帽子は外してい
るが、普段とは違う彼の顔を正面から見る海未はどこか新鮮な気分だった。

二人がここを選んだ理由は、一度この店を通りかかったときにショーウインドに並ぶ

ランチメニューを色明が見た途端、「美味そう」と呟いていたのを海未が覚えており、一周した後、何処にしたいか彼が相談すると、「貴方が一番気になっていたお店に行きましよう」と言われたからだ。男を立てる慎ましい女性の見本である。

色明としては自分が気になっていた店だったので無論異論はなかったのだが、入った後で海未の好みに合わなかったのではないかと慮ったのである。

「それでもありませんよ。家ではほぼ和食ですが、穂乃果たちの付き合いなどで外食し、口に馴染みがないわけでもありません」

「南は如何にも洋食という雰囲気だな。高阪は——家が和菓子屋らしいが、それにしては和菓子を食べているところは見たこともない」

「実家だからこそ、物珍しくも感じないのでしよう。餡子飽きたというのは、随分前から穂乃果の口癖でして、ご両親は困った顔をしています」

「ふーん」

「けど、別に穂むら——穂乃果の実家が営んでいる店の名前ですが、それを疎んでるわけでもありません。店の手伝いは確りしますし、実家の味にも誇りを持っています。ただ、好きだからと言って毎日食べても飽きないわけではないようですね」

「そこは同じ生まれが飲食店の子じゃなければ理解もできんだろうな。そういう園田も家では和食を出されるから、洋食の方が好みなのかい？」

「いえ。どちらかと聞かれれば和食の方が好きですよ。そもそも、食たべ物ぶつに関しては苦手なものはありませんがね」

「おー、流石名家のお嬢様。弱点など作らない方針ですかい」

「そういう訳では……。私だって苦手なはあります」

「ほう。それはなんだ？」

「……笑いませんか？」

ちよつと恥かしそうに尋ねる海未に、色明の加虐心が煽られたがそこは芸能生活で養われたポーカフフェイスで隠す。

「笑わねえよ。人間苦手なもん一つや二つはあるだろさ。俺も食べ物の好き嫌いで話すなら、イクラが苦手だね」

「イクラですか？」

「あのプチプチ潰れるのが気味悪い。我慢して食うときはしばしばあるが、可能な限り避ける」

顰め面をしながら語るので本当に苦手なのだろう。

そんな様子に海未は納得したように頷く。

「なるほど。イクラが苦手と言う人から良く聞く話ですね」

「それで、オタクはどうなんだい？俺は話たんだから、教えないのはフェアじゃないだ

ろ？」

「別に隠したいわけじゃないですが、その、炭酸が苦手なんです」

「炭酸？」

「ビリビリしたのが、どうも……。アレを平気で飲まれているのが方々が未だに信じられませんか」

恥かしそうに口先を揺らす海未を眺めながら、色明は彼女に話しかけた。

「あの喉越しがいいんだろ。なるほど、オタクには文字通り刺激が強すぎるわけね」

「そうなんですよ——って、ちよつと、何で笑ってるんですかっ？」

「おつと、隠せなかつたようだ。すまねえ」

ワザとらしく色明は口元を手で覆い隠すも、その隙間から口角が上がっているのが解る。

「妙に可愛らしく白状するもんだらか、つい微笑ましくてね」

「か!? い、いきなり何を——」

可愛らしく、という単語を聞いた途端、海未は顔を真っ赤にさせた。

いつものことだが、何故彼はこうもお世辞をサラリと言えるのだろうか。芸能界で鍛え上げられてたリップサービスだとは解っていても、海未は毎度どきまきしている。

そんな様子の子の海未に益々色明の胸を擦らせたが、これ以上からかっても機嫌を損ねる

のは明白なので、引き際は見極める。

「悪いな。笑わないと言ったのに笑っちゃまってよ。詫びとしてここは俺が奢らせてもらうよ」

「え？ 別にそこまでしていただくとも」

「女の願いを無下にしたんだ。むしろここは、食事一つで清算しようという魂胆に腹を立てるべきじゃねえの？」

やんわりと言った色明に海未が言い返そうとしたところで、丁度注文していた料理が届く。

食事が並べられている間に会話を続ける気もなく、店員が去った後、十分な間を空けられた彼女は拗ねたようにぼそりと呟いた。

「……私は少しからかわれた位で横暴な要求をする女ではありません」

「そんな優しい園田海未に乾杯。続きまして、いただきますっ」と

色明は林檎ジュースが注がれた海未のグラスを、自身が注文したオレンジジュースが入ったグラスで鳴らしたあと、両手を重ね合わせた。

そして、何かを待っているかのように海未を見つめてきたので、察した彼女は仕方なく自分も手を合わせる。

「いただきます」

彼女がそう言うのと満足したように、色明は食事を始めた。

なんとマイペースな人なんだろうと、海未は呆れる。

身近なところで穂乃果も我が道を突き進んでいるが、色明も似たようなタイプなのかもしれない。

料理が届くまでの束の間、海未の感情は色明の言動で多く揺れ動いた。

平穩。羞恥。感心。驚き。憤り。呆れ。一緒にいると心が波が一定ではない。

そんなところも穂乃果に似ていると海未は感じ入る。

しかし、悪い気分ではない。むしろ好ましく、充実した時間だ。

考えてみれば、海未が色明と腰を据えて、何気ない時間を過ごすのは初めてである。

二人きりになったことは今まで何度もあったが、それはほんの僅かな間であったり、音楽に付いて学ぶ時、スクールアイドル活動を通してのことが主だ。

彼と出会ってそろそろ三ヶ月にもなるが、アイカツとは関係ない時間で、このような落ち着いて共に過ごしたことはない。

改めて思うと、海未は色明のことをよく知らない。

有名な歌手なのは知っているが、彼女が知っていることなど彼のファンならば全部知っているだろうし、ネットで調べれば簡単なプロフィールも解る。海未が見かけたサイトの中には、色明の食べ物に関する好みは乗っていなかったが、コアなファンなら

誰でも知っていそうな内容だ。

彼が特殊な事情で女子高の音乃木坂に通っていることは前から公表しており、最近デビューした新田美波とは兄妹関係も今は公表している。人気アイドルグループ、Soileilの霧矢あおいと幼馴染であることも知る人は知っている情報だ。

だから、少しだけ嬉しいのだ。

彼は歌手だ。稀に歌番組以外でもメデイアに映されるが彼が食事している姿など、何人のファンが知っているのだろうか。

これが俳優やアイドルならばバラエティー番組でお目にする機会は幾らでもありそうだが、音楽のみを生業とする彼の日常的光景はファンの間でも珍しいはずだ。

よって、海未はちよつと得した気分になる。

食事は綺麗な様だ。茶化した態度が目立つが、礼儀は重んじているので想定範囲内。しかし、予想と観察は違うのである。

美味しそうに食べている。この店の味に満足しているようで何よりだ。

なるほど、彼はあのように食事をするのだな。

本当に些細なことだが、その積み重ねこそが相手の理解に繋がる。

色明は忙しい身であり、今も食事が済めば控え室に戻らなければならぬが、こうやってまた、今度もはもつとゆつくり出来る時間に食事を共にしたいと思う。

また何気ない会話をすれば、知らないことも増えるに違いない。

そこで海未は思い出したように自分も食事を始める。

一口入れた、コンソメスープの淡い味はとても美味しかった。

▼ 「おはよう——あら？二人で来たの？」

食事を終えた海未と色明が控え室に戻ると、其処には絵里が到着した。

二人を見て少し驚いている彼女に海未が説明する。

「おはようございます、絵里先輩。そして二人で来たのではなく、ここには一度は別々で。そこから早めの昼食を一緒に行っていただけですよ」

「あら、そうなの」

「ふふくん。つまり海未ちゃんと新田くんはデートしてたわけやな」

納得した絵里の横で、何故かいた東條希が面白そうに声をかけてきた。

デートと言われた瞬間、海未は瞬間沸騰でもしたかのように顔を熱くさせる。

「で、デートなんて何を言ってるんですか!?! とうか、何故希先輩までいるんですか!?!」

「そりゃあ、えりちの晴れ舞台やからな。面白そうやったし着いてきてん」

狼狽している海未を見て楽しんでる希の前に、さっと色明が出てきた。

「おはようございます、先輩方。ちなみに東條先輩。男女が食事しただけでデートと揄するなんて、子供ばいから今後は止めた方がいいですよ」

「まだピチピチの高校生、十分に子供やから茶目っ気ぐらい見逃してえな」

「もうすぐ大人でしょうに」

「彼の言うとおりよ、希。冗談を言っているいい相手も見極めなさい。ほら、貴女があんなこと言うから、海未さん顔を赤くしたまま様子可哀しくなっているじゃない」

海未は顔を赤らめたまま、ぶつぶつと小声で「——あれはただの食事だった。けど二人きりで若い男女が食事をしたのは事実で、逢引に捕らえられても——」と自問自答を繰り返している。

そんな様子を見て、希は満足そうに頷いた。

「ちゃんと、言う相手は選んでるで、えりち。ご覧の通り、面白い反応をしているからな。大抵は軽く流されてお終いや」

「相変わらず性質が悪いわね。——ところで海未さん。色明とは別々に来たようだけど、此処には貴女一人だけ？　いつもの幼馴染二人は？」

親友に冷ややかな視線を送った後、動揺している海未を見かねた絵里は別の話題で意識を逸らそうとする。

目論見は成功し、絵里が声をかけると海未は「はっ！」と我に返って、質問に答えた。

「穂乃果とことりはもうすぐ後に。本当は一緒に来る予定だったんですけど、穂乃果が寝坊して」

「あら、そうなの。大丈夫？」

「大丈夫です。ことりも一緒ですし、待ち合わせ時間には十分間に合い——」

そこで、海未の携帯が鳴り響いた。

彼女は咄嗟にポケットから取り出して、相手を見ると件のことりからだった。

「おっと、噂をすればことりからです。失礼、出ますね」

「ええ、どうぞ」

海未は会話の途中であつた絵里に一言断りを入れてから、鳴り響く電話の受信ボタンを押した。

「はい、もしもし、ことり？ —— ええ、私はデパートに。新田さんや絵里先輩もい

ます。おや、穂乃果だけではなく、一年生たちと一緒に秋葉の駅にいるのですか」

聞こえてくる会話の断片から、偶然なのか、ことりと穂乃果は一年生メンバーと駅にいるらしい。

都会の電車本数は多いので、今が駅にいるのならば待ち合わせ時間には十分間に合う。

穂乃果が寝坊したという発言で少しだけ心配した絵里だったが、これなら大丈夫だと

安心しかけたとき、不穏な気配を感じ取る。

「——え？————そうですか。——はい。——はい。わかりました。では、進展あれば、連絡を。気をつけて来てくださいいね」

そうやって、電話を切った海未の顔は、深刻を物語っていた。

「何かあったの？」

「実は——」

絵里が静かに尋ねると、海未は不安そうな声で答える。

「何処かの路線で事故があつたらしく、ことりたちが乗ろうとした電車が運転見合わせのよう。他の方法で来るそうですが、最悪、本番に間に合うかどうか今は解らない、だそうです」